

はぎ じょう せき そと ほり ち く
萩 城 跡 (外 堀 地 区) Ⅲ

2006

財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、山口県の委託を受けて財団法人山口県ひとづくり財団が実施した、都市計画街路今魚店金谷線緊急地方道路整備工事に伴う萩城跡（外堀地区）の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する萩市は毛利の城下町として、また明治維新発祥の地として全国的にも知られ、江戸時代の地図を持って歩くことができる市内には往時のようすを今に伝える史跡や建造物が数多く残っています。このような歴史豊かな町並みで行われた発掘調査では、萩城外堀とその堀端に作られた町屋跡が掘り出され、陶磁器をはじめ人々の暮らしぶりをしめす数十万点に及ぶ多くの生活道具が出土しました。軍事上大切な防御施設であるべき外堀に町屋が進出して成立した本遺跡は、全国的に見てもまれな遺跡といえます。また、県内における江戸時代遺跡の本格的な調査でもあり、毛利の城下町の歴史に新たな１ページを書き加えるものとして注目されます。

このような調査記録を収録した本書が、学術研究のみでなく、文化財への理解や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

最後に、平成９年に始まった発掘調査も本報告書の刊行をもって無事終了する運びとなりました。調査の実施にあたって長年ご協力いただきました関係各位ならびに地域の皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人山口県ひとづくり財団
理事長 村岡 正義

例 言

- 1 本書は、山口県萩市南片河町に所在する萩城跡（外堀地区）の発掘調査報告書である。
- 2 本書は平成11年度調査および平成16年度調査のうち5-中区、6・7地区、6・7-南端区の調査についてまとめた報告書である。
- 3 平成11年度調査は都市計画街路今魚店金谷線地方特定道路整備工事に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け、実施したものである。また、平成16年度調査は都市計画街路今魚店金谷線緊急地方道路整備工事に伴い、財団法人山口県人づくり財団が山口県の委託を受け、実施したものである。
- 4 出土遺物については、土坑を中心とする遺構内出土の遺物を中心に掲載する。あわせて、「萩城跡（外堀地区）Ⅰ」において掲載することのできなかった遺構外出土遺物の内、焼土層出土遺物を中心に代表的な遺物について別に章を設けて掲載した。
- 5 調査組織は次のとおりである。

調査主体

平成11年度 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター

平成16年度 財団法人山口県人づくり財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当

平成11年度 指導主事 谷口哲一 井川隆司 網本徳文 吉武裕文 内山雅司

調査研究員 小南裕一

平成16年度 文化財専門員 岩崎仁志 井川隆司 内富徳哉 龍山幸雄 河崎浩司

報告書作成担当

平成17年度 文化財専門員 井川隆司 龍山幸雄 河崎浩司 竹内 靖

調査員 山本寛子

- 6 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口県萩土木建築事務所、萩市教育委員会並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 7 本書の第1、3、43、192、193、196図は萩市提供の地図を複製加工して使用したものである。
- 8 本書の第194図は柏本朝子氏の文献調査の成果をもとに萩博物館が作成した図を複製して使用したものである。
- 9 本書に掲載した絵図は次のとおりである。また掲載した絵図の写真は萩博物館提供のものを使用した。
「慶安5(1652)年絵図」(部分) 山口県文書館蔵
「天和元~2(1681~1682)年絵図」(部分) 羽仁家蔵(萩博物館保管)
「寛保2(1742)年絵図」(部分) 萩博物館蔵
- 10 本書に使用した方位は、国土座標(第3座標系)で示し、標高は海拔標高(m)である。
- 11 本書に使用した土色、遺物の色調は下記に準拠した。
農林水産省農林水産技術会議事務局(監修)『新版標準土色帖』1998
- 12 図版中の遺物番号は実測図、表の遺物番号と対応する。

- 13 遺物実測図中の網かけ部分は特に注記のない限り青磁釉を示す。その他挿図中に使用した網かけ、パターン、トーン部分についてはその都度注記した。
- 14 出土陶磁器の時期については、九州近世陶磁学会による「九州陶磁の編年」および江戸遺跡研究会による「陶磁器編年表」を参考にした。
- 15 本書に使用した遺構略号は次のとおりである。
SK：土坑 SB：建物跡 SP：柱穴 SX：不明遺構・瓦囲い遺構・石囲い遺構など
SE：井戸
- 16 出土人骨については、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）に鑑定を依頼し、その成果を付編として掲載した。
- 17 自然遺物の内、貝類については堀成大氏（萩博物館）、獣骨類については沖田絵麻氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に同定をお願いした。
- 18 出土陶磁器の内、在地の磁器窯製品である「小畑焼」について、柏本朝子氏に文献からのアプローチをお願いし、玉稿を賜った。
- 19 赤間硯の原料石材について今岡照喜氏（山口大学理学部教授）に分析を依頼し、その成果を付編として掲載した。
- 20 出土石製品については、表面観察による石材鑑定を亀谷 敦氏（山口県立博物館）をお願いした。
- 21 出土遺物の内、墨書あるいは刻書のあるものの判読については吉積久年（山口県教育庁）、樋口尚樹（萩博物館副館長）両氏をお願いした。
- 22 輸入陶磁器については、鑑定を上田秀夫氏（山口県立萩美術館・浦上記念館副館長）をお願いした。
- 23 調査区検出の礎石立ち建物遺構の上屋構造について宮本雅明氏（九州大学大学院教授）の御指導を得た。
- 24 その他下記の方々から御教示、御指導を得た。記して謝意を表します。

（順不同、敬称略）

橋崎彰一 渡辺 誠 藤澤良祐 中野晴久 市田京子 白取幸子 赤松和佳 伊藤 健
岡 佳子 小川 望 柏本秋生 角谷江津子 日下正剛 佐藤浩司 高橋健太郎 中野高久
能芝 勉 畑中英二 平田博之 渡辺晴香 伊藤清久 劉 新園 楊 冠富 宋 小凡
新庄貞嗣 藤田洪太郎

- 25 本書に掲載した遺構図面・写真、遺物実測図は調査担当者・報告書作成担当者が分担し、本文原稿については報告書作成担当者が分担して執筆し、編集を井川が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
1	位置と環境	1
2	萩城外堀の歴史	4
II	調査の経緯と概要	5
III	調査の成果	9
1	遺構	9
(1)	平成11年度の調査	9
(2)	平成16年度の調査	30
(3)	まとめ	58
2	遺物	61
(1)	陶磁器・土器・土製品	61
(2)	石製品	154
(3)	木製品	160
(4)	金属製品	166
(5)	出土銭貨	170
(6)	ガラス製品	176
(7)	骨角・貝製品	177
(8)	自然遺物	178
(9)	まとめ	179
IV	1地区～3地区出土遺物（遺構外出土遺物）	181
(1)	陶磁器・土器・土製品	181
(2)	石製品	232
(3)	金属製品	236
(4)	豆板銀	236
(5)	骨角・ガラス製品	241
V	総括	243
付編		253
1	萩城跡（外堀地区）出土の中世・近世人骨	253
2	小畑焼の開窯と萩藩の関わりについて	275
3	分析（1）萩城跡（外堀地区）における寄生虫卵および花粉分析	283
4	分析（2）萩城跡（外堀地区）出土ガラス製品の材質分析	292
5	分析（3）萩城跡（外堀地区）出土赤色物質の調査	305
6	分析（4）赤間硯の原料石材分析	313

挿 図 日 次

第 1 図	遺体の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図	絵園に見る外堀幅の変遷	3
第 3 図	溝谷高岡園	6
第 4 図	5-中区遺構配置図①	11・12
第 5 図	5-中区遺構配置図②	11・12
第 6 図	5-中区遺構配置図③	13・14
第 7 図	5-中-A区東西断面様式図	13・14
第 8 図	5-中-C-F区東西断面様式図	13・14
第 9 図	5-中-F-H区東西断面様式図	13・14
第 10 図	5-中区土層断面図	15・16
第 11 図	5-中区石瓦実測図	17・18
第 12 図	5-中区井戸実測図	20
第 13 図	5-中区かまど実測図	21
第 14 図	5-中区襖衣堀納遺構実測図	22
第 15 図	5-中区土坑実測図①	24
第 16 図	5-中区土坑実測図②	25
第 17 図	5-中区埋裏遺構実測図①	26
第 18 図	5-中区埋裏遺構実測図②	27
第 19 図	5-中区 ST118 実測図	28
第 20 図	5-中-C区養生土層出土状況実測図	29
第 21 図	6・7地区遺構配置図①	31・32
第 22 図	6・7地区遺構配置図②	33・34
第 23 図	6・7地区遺構配置図③	35・36
第 24 図	6地区土層断面図	37・38
第 25 図	7地区・7-南地区土層断面図	37・38
第 26 図	6地区石瓦実測図①	39・40
第 27 図	6地区石瓦実測図②	41・42
第 28 図	6地区礎石状遺構実測図	41・42
第 29 図	6地区井戸実測図	41・42
第 30 図	6地区建物跡実測図	43・44
第 31 図	6地区断面様式図①	45
第 32 図	6地区断面様式図②	46
第 33 図	6地区土坑実測図	49
第 34 図	6地区かまど実測図	50
第 35 図	6地区襖衣堀納遺構実測図①	51
第 36 図	6地区襖衣堀納遺構実測図②	52
第 37 図	6地区埋裏遺構実測図①	53
第 38 図	6地区埋裏遺構実測図②	54
第 39 図	6地区用途不明遺構実測図①	54
第 40 図	6地区用途不明遺構実測図②	55
第 41 図	6地区用途不明遺構実測図③	56
第 42 図	7地区遺構実測図	56
第 43 図	5-中、6・7地区町割推定図	59
第 44 図	絵園に見る外堀南端部の変化	60
第 45 図	5-中区 SK45出土遺物①	62
第 46 図	5-中区 SK45出土遺物②	63
第 47 図	5-中区 SK82出土遺物①	65
第 48 図	5-中区 SK82出土遺物②	66
第 49 図	5-中区 SK82出土遺物③	67
第 50 図	5-中区 SK89出土遺物	68
第 51 図	5-中区 SK87出土遺物①	69
第 52 図	5-中区 SK87出土遺物②	70
第 53 図	5-中区 SK87出土遺物③	71
第 54 図	5-中区 SK97出土遺物	73
第 55 図	5-中区 SK100出土遺物	74

第 56 頁	5	中区 SK102 出土遺物①	75
第 57 頁	5	5-1 中区 SK102 出土遺物②	76
第 58 頁	5	中区 SK104 出土遺物	77
第 59 頁	5	中区 SK86 出土遺物	77
第 60 頁	5	5-1 中区集石 58 出土遺物	77
第 61 頁	5	5-1 中にかまど 31 出土遺物	77
第 62 頁	5	5-1 中区胎衣型納容器①	82
第 63 頁	5	5-1 中区胎衣型納容器②	83
第 64 頁	5	中区埋藏 85 内出土遺物	85
第 65 頁	5	中区埋藏①	86
第 66 頁	5	5-1 中区埋藏②	87
第 67 頁	5	中 F 区建物跡地層内出土遺物	89
第 68 頁	5	5-1 中-E 区建物跡地層直下の出土遺物	89
第 69 頁	5	5-1 中-A ~ H 区域上層直上の出土遺物	90
第 70 頁	5	5-1 中-A ~ H 区域上層内出土遺物①	90
第 71 頁	5	5-1 中-A ~ H 区域上層内出土遺物②	91
第 72 頁	5	5-1 中-A ~ H 区域上層直下の出土遺物	91
第 73 頁	5	中区その他の出土遺物① (ST118)	92
第 74 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物② (弥生 I 層)	92
第 75 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物③	94
第 76 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物④	95
第 77 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物⑤	96
第 78 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物⑥	97
第 79 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物⑦	98
第 80 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物⑧	99
第 81 頁	5	5-1 中区その他の出土遺物⑨	100
第 82 頁	6	6 地区 SE156 出土遺物	105
第 83 頁	6	6 地区 SK170・SK171 出土遺物	105
第 84 頁	6	6 地区 SK169 上層出土遺物	106
第 85 頁	6	6 地区 SK169 下層出土遺物	107
第 86 頁	6	6 地区 SK159・SK160 出土遺物	107
第 87 頁	6	6 地区 SK121 出土遺物	108
第 88 頁	6	6 地区 SK107 出土遺物	109
第 89 頁	6	6 地区 SK151 出土遺物	110
第 90 頁	6	6 地区 SK166 出土遺物	110
第 91 頁	6	6 地区 SK137 出土遺物	111
第 92 頁	7	7 地区 SK154 出土遺物	111
第 93 頁	6	6 地区 SX 出土遺物①	112
第 94 頁	6	6 地区 SX 出土遺物②	113
第 95 頁	6	6-1 B 区礎石棟出時出土遺物	114
第 96 頁	6	6 地区胎衣型納容器出土遺物①	117
第 97 頁	6	6 地区胎衣型納容器出土遺物②	118
第 98 頁	6	6 地区胎衣型納容器出土遺物③	119
第 99 頁	6	6 地区胎衣型納容器出土遺物④	120
第 100 頁	6	6・7 地区埋藏・埋鉢①	122
第 101 頁	6	6・7 地区埋藏・埋鉢②	123
第 102 頁	6	6・7 地区埋藏内出土遺物	123
第 103 頁	6	6-B 区 SB189 直上整地層出土遺物①	125
第 104 頁	6	6-E 区 SB189 直上整地層出土遺物②	126
第 105 頁	6	6-F 区 SB189 直上整地層出土遺物③	127
第 106 頁	6	6-E 区 SB189 直上整地層出土遺物④	128
第 107 頁	6	6-B 区 SB189 直上整地層出土遺物⑤	129
第 108 頁	6	6-E 区 SB189 直上整地層出土遺物⑥	130
第 109 頁	6	6 地区木器包含層出土遺物①	131
第 110 頁	6	6 地区木器包含層出土遺物②	132
第 111 頁	6	6 地区木器包含層出土遺物③	133
第 112 頁	7	7 地区木器包含層出土遺物	134

第 113 区	7地区十層所南検出時出土遺物	135
第 114 区	6-B-C区石列47・48以西2面検出時出土遺物①	136
第 115 区	6-B-C区石列47・48以西2面検出時出土遺物②	137
第 116 区	6-B-C区石列47・48以西2面検出時出土遺物③	138
第 117 区	6・7地区その他の出土遺物①(中世以前)	139
第 118 区	6・7地区その他の出土遺物②	140
第 119 区	6・7地区その他の出土遺物③	141
第 120 区	6・7地区その他の出土遺物④	142
第 121 区	6・7地区その他の出土遺物⑤	144
第 122 区	6・7地区その他の出土遺物⑥	145
第 123 区	6・7地区その他の出土遺物⑦	146
第 124 区	6・7地区その他の出土遺物⑧	148
第 125 区	5-中区石製品	155
第 126 区	6・7地区石製品①	156
第 127 区	6・7地区石製品②	157
第 128 区	6・7地区石製品③	158
第 129 区	6・7地区木製品①	161
第 130 区	6・7地区木製品②	162
第 131 区	6・7地区木製品③	163
第 132 区	6・7地区木製品④	164
第 133 区	5-中区銅管	166
第 134 区	5-中区金属製品	166
第 135 区	6地区煉管	167
第 136 区	6地区金銅製品	167
第 137 区	出土銭組成	170
第 138 区	各年度遺構別別出土銭組成	171
第 139 区	5-中区豆板銀	171
第 140 区	6・7地区出土銭の分布	172
第 141 区	5-中区出土銭	173
第 142 区	6・7地区出土銭	174
第 143 区	5-中区ガラス製品	176
第 144 区	6地区ガラス製品	176
第 145 区	5-中区骨角・貝製品	177
第 146 区	6・7地区骨角・貝製品	177
第 147 区	1.利家引き札	179
第 148 区	2-A-B区第2焼十層内・直下の出土遺物①	182
第 149 区	2-A-B区第2焼十層内・直下の出土遺物②	183
第 150 区	2-A-B区第2焼十層内・直下の出土遺物③	184
第 151 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物①	185
第 152 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物②	186
第 153 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物③	188
第 154 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物④	189
第 155 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑤	190
第 156 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑥	191
第 157 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑦	192
第 158 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑧	193
第 159 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑨	195
第 160 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑩	196
第 161 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑪	197
第 162 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑫	198
第 163 区	2-A-B区第1焼十層以下第2焼十層までの出土遺物⑬	199
第 164 区	3地区焼1層出土遺物①	201
第 165 区	3地区焼十層出土遺物②	202
第 166 区	3地区焼十層出土遺物③	203
第 167 区	3地区焼十層出土遺物④	204
第 168 区	3地区焼十層出土遺物⑤	205
第 169 区	3地区焼十層出土遺物⑥	206

第 170 図	3 地区焼土層出土遺物⑦	208
第 171 図	3 地区焼土層出土遺物⑧	209
第 172 図	3 地区焼土層出土遺物⑨	210
第 173 図	3 地区焼土層出土遺物⑩	211
第 174 図	3 地区焼土層出土遺物⑪	212
第 175 図	1 地区その他の出土遺物①	214
第 176 図	1 地区その他の出土遺物②	215
第 177 図	1 地区その他の出土遺物③	216
第 178 図	3 地区その他の出土遺物①	217
第 179 図	3 地区その他の出土遺物②	218
第 180 図	1 地区瓦①	220
第 181 図	1 地区瓦②	221
第 182 図	2 地区瓦	222
第 183 図	3 地区瓦	223
第 184 図	1 地区石製品	232
第 185 図	2 地区石製品	233
第 186 図	3 地区石製品	234
第 187 図	1～3 地区金属製品①	237
第 188 図	1～3 地区金属製品②	238
第 189 図	1～3 地区金属製品③	239
第 190 図	1～3 地区豆板銀	239
第 191 図	1～3 地区管角・ガラス製品	242
第 192 図	町制推定図①	245・246
第 193 図	町制推定図②	247・248
第 194 図	市片河町埋立図	249
第 195 図	市片河町埋立復元想像図 (CG)	249
第 196 図	遺物出土地点一覽	251・252
第 197 図	遺跡の位置	251
第 198 図	人骨の残存図	257
第 199 図	上股管 (萩城跡 ST-118)	273
第 200 図	頭蓋上面 (萩城跡 ST-118)	273
第 201 図	萩城跡 Y-2 (乳児)	274
第 202 図	下股管 (萩城跡 ST-118)	274
第 203 図	近世露跡分布図	275
第 204 図	里山会所平面図	278
第 205 図	市小畑町国産方会所図	278
第 206 図	舟丘山窯跡・西山窯跡出土遺物実測図	280
第 207 図	小畑焼実測図	281
第 208 図	小畑茶碗屋	282
第 209 図	花符ダイヤグラム (7 地区木器包含限)	290
第 210 図	顕微鏡写真 (寄生虫卵および花符)	291
第 211 図	①遺物 No. 1141 のガラス	298
第 212 図	②遺物 No. 1143 のガラス	299
第 213 図	③遺物 No. 1142 のガラス	300
第 214 図	④遺物 No. 1147 のガラス	301
第 215 図	⑤遺物 No. 1148 のガラス	302
第 216 図	⑥遺物 No. 1146 のガラス	303
第 217 図	⑦遺物 No. 1144 のガラス	304
第 218 図	試料と比較試料	307
第 219 図	試料の断面および拡大写真	308
第 220 図	試料 No. 1 の元素サイクル	309
第 221 図	試料 No. 2 の吸収スペクトル	310
第 222 図	箱根紅の吸収スペクトル	311
第 223 図	箱花乾燥物の吸収スペクトル	312
第 224 図	石材採集地点	316
第 225 図	石材採集地点 (山口・福岡県部分)	316

表 目 次

表 1	穀粒間一覽	58
表 2	5-1 中区陶磁器・土器・土製品一覽①	78
表 3	5-2 中区陶衣磁器等一覽	83
表 4	5-1 中区遺棄内出土遺物一覽	87
表 5	5-2 中区埋藏遺物出土遺物一覽	88
表 6	5-1 中区陶磁器・土器・土製品一覽②	102
表 7	6・7 地区陶磁器・土器・土製品一覽①	114
表 8	6 地区陶衣埋藏遺物出土遺物一覽	120
表 9	6・7 地区埋藏・埋跡遺物出土遺物一覽	123
表 10	6・7 地区埋藏内出土遺物一覽	123
表 11	6・7 地区陶磁器・土器・土製品一覽③	149
表 12	石製品一覽	150
表 13	6・7 地区下駄一覽	164
表 14	6・7 地区漆履一覽	165
表 15	6・7 地区器木製品一覽	165
表 16	その他の木製品一覽	165
表 17	銅管一覽	168
表 18	その他の金属製品一覽	169
表 19	出土鏡内訳	170
表 20	豆板銀一覽	175
表 21	出土鏡一覽	175
表 22	ガラス製品一覽	176
表 23	骨角・貝製品一覽	178
表 24	1-3 地区陶磁器・土器・土製品一覽	224
表 25	1-3 地区石製品一覽	235
表 26	1-3 地区金属製品一覽	240
表 27	1-3 地区豆板銀一覽	241
表 28	1-3 地区骨角・ガラス製品一覽	241
表 29	穀粒間一覽	241
表 30	資料数	255
表 31	出土人骨一覽	255
表 32	年齢区分	255
表 33	上腕骨計測値	263
表 34	人頭骨計測値	264
表 35	脛骨	265
表 36	推定身長値	265
表 37	上腕骨計測値	266
表 38	頭頂径 (萩城跡 ST-118)	267
表 39	下顎骨 (萩城跡 ST-118)	267
表 40	上腕骨 (萩城跡 ST-118)	268
表 41	腕骨 (萩城跡 ST-118)	268
表 42	尺骨 (萩城跡 ST-118)	269
表 43	大趾骨 (萩城跡 ST-118)	269
表 44	脛骨 (萩城跡 ST-118)	270
表 45	腓骨 (萩城跡 ST-118)	270
表 46	中央部の北 (萩城跡 ST-118)	271
表 47	形態小変異 (萩城跡 ST-118)	271
表 48	鎖骨 (萩城跡 Y-2)	272
表 49	上腕骨 (萩城跡 Y-2)	272
表 50	腕骨 (萩城跡 Y-2)	272
表 51	尺骨 (萩城跡 Y-2)	272
表 52	分析試料一覽	283
表 53	寄生虫卵分析結果	284
表 54	花粉分析結果	289
表 55	分析試料一覽	292
表 56	分析結果一覽 (質量比)	294
表 57	風化土・破断面分析結果の一例 (⑤No.1148)	295
表 58	調査試料	305
表 59	No.1 の蛍光 X 線分析結果	306
表 60	分析試料一覽	314
表 61	視原材料の科学分析結果	315

图 版 日 次

图版 1	调查区全景		
图版 2	5 中区全景および周辺	5 中区全景	
图版 3	5-中-D-F区石垣3および要込め	5-中-C-F区2面	
图版 4	5-中-C区2面	5-中-D区2面	
图版 5	5-中-E区2面	5-中-F区2面	
图版 6	5-中-A区石垣1・29・93	5-中-A-B区3面	
图版 7	5-中-H区4向	5-中-E区地山砂層傾斜状況	
图版 8	5 中 F区 ST118人骨出土状況	5 中 C区弥生土器出土状況	
图版 9	5-中-B区石垣2	5-中-A区石垣99基底部	5-中-B区石垣63
	5 中 B区石垣84	5 中 H区石垣116	5 中 H区石垣116
	5-中-F区石垣13・130	5-中-F区石垣3以东土層断面	
图版 10	5-中-E区 SE11	5-中-F区 SE17	5-中-F区 SE17周辺
	5-中-E区かまど40	5-中-F区かまど31	5-中-E区脱衣埴納遺構19
	5-中-E区脱衣埴納遺構19・壘築26	5-中-E区脱衣埴納遺構34	
图版 11	5-中-E区脱衣埴納遺構46	5-中-E区脱衣埴納遺構36	
	5 中 C区脱衣埴納遺構39	5 中 F区脱衣埴納遺構30	
	5 中 E区 SK45	5 中 C区 SK82	5 中 B区 SK87・89
	5-中-D区 SK96		
图版 12	5 中 B区 SK97	5 中 H区 SK100	5 中 F区 SK104
	5-中-E区 SK86・集石101	5-中-C区壘築4	5-中-D区壘築8
	5-中-D区埋壳9	5-中-F区埋壳16	
图版 13	5 中 F区壘築12・18	5 中 E区壘築26	5 中 D区壘築28
	5 中 E区壘築35	5 中 D区壘築41	5 中 C区壘築44
	5-中-C区壘築52	5-中-G区壘築60	
图版 14	5 中 A区壘築81	5 中 H区壘築85内遺物出土状況	
	5-中-H区壘築86	5-中-H区壘築85・集石58	
图版 15	6・7地区全景	6-A~G区	
图版 16	6-L~O区、6-南端区、7地区、7-南端区	6-A~B区 SB190	
图版 17	6-A~B区3面	6-A~D区3面	
图版 18	6-C区1~2向	6-D区1~2向	
图版 19	6 E区 SH189	6 E区3向	
图版 20	6-G区2面	6-G区3面	
图版 21	6-H区2面	6-I区2面	
图版 22	6 I区以北2面	6 I区3面	
图版 23	7地区1面	7地区2面	
图版 24	6-E区礎石87	6-E区礎石88	6-E区礎石89
	6 E区石垣118	6 G区礎石状遺構22	6 G区墨書石(墨書批人)
图版 25	6-I区 SE55	6-D区 SE97	6-G区 SE124
	6-C区 SE156	6 I区 SF165	6 J区かまど59
	6 E区かまど144	6 G区脱衣埴納遺構1・2・3・4	
图版 26	6-G区脱衣埴納遺構2	6-G区脱衣埴納遺構5	6-N区脱衣埴納遺構10
	6-N区脱衣埴納遺構12	6-J区脱衣埴納遺構14	6-K区脱衣埴納遺構13
	6-C区脱衣埴納遺構16	6-C区脱衣埴納遺構17	
图版 27	6-G区脱衣埴納遺構8・9	6-D区脱衣埴納遺構37	
	6-I区脱衣埴納遺構60	6-G区脱衣埴納遺構67	6-F区脱衣埴納遺構81
	6-L区埋壳14	6-C区脱衣埴納遺構75	6-F区脱衣埴納遺構117
图版 28	6-F区脱衣埴納遺構158	6-G区脱衣埴納遺構187	
	6 A区脱衣埴納遺構125	6 B~C区 SK107	6 B~C区 SK169・170・171
	6-C区 SK151	6-D区 SK121	6-F区 SK159・160
图版 29	6-D区 SK127	6-I区埋壳106	6-I区埋壳6
	6-D区埋壳39	6-D区埋壳104	6-E区埋壳81
	6-E区埋壳105		
图版 30	6 E区壘築157	6 G区 SX78・135	6 G区 SX136・137
	6-G区埋壳15	6-D区 SX103	6-I区 SX138
	6-C区乳见人骨出土状況		
图版 31	7地区壘築149	7地区かまど11	7地区 SK154
	7地区土層断面		
	6-南端区石垣133	7-南端区土層断面	

図版 32	5	中区 SK45出土遺物①		
図版 33	5-1	中区 SK45出土遺物②	5-1	中区 SK82出土遺物①
図版 34	5	中区 SK82出土遺物②		
図版 35	5	中区 SK82出土遺物③	5	中区 SK89出土遺物①
図版 36	5-1	中区 SK89出土遺物②	5-1	中区 SK87出土遺物①
図版 37	5	中区 SK87出土遺物②		
図版 38	5-1	中区 SK87出土遺物③		
図版 39	5-1	中区 SK87出土遺物④	5-1	中区 SK97出土遺物①
図版 40	5	中区 SK97出土遺物②	5	中区 SK100出土遺物
図版 41	5	中区 SK102出土遺物①		
図版 42	5-1	中区 SK102出土遺物②	5-1	中区 SK104出土遺物
図版 43	5	中区集石58出土遺物	5	中区かまど31出土遺物
図版 44	5-1	中区建物敷地層内出土遺物	5-1	中区建物敷地層直下の出土遺物
図版 45	5-1	中-A～H区焼土層内出土遺物②	5-1	中-A～H区焼土層直下の出土遺物①
図版 46	5-1	中-A～H区焼土層直下の出土遺物②	5-1	中区その他の出土遺物①(ST118)
図版 47	5	中区その他の出土遺物③	5-1	中区その他の出土遺物③
図版 48	5-1	中区その他の出土遺物④		
図版 49	5-1	中区その他の出土遺物⑤		
図版 50	5	中区その他の出土遺物⑥		
図版 51	5-1	中区その他の出土遺物⑦		
図版 52	5-1	中区陶衣埴輪容器	5-1	中区埴輪①
図版 53	5	中区埴輪②		
図版 54	5	中区埴輪③		
図版 55	6	地区 SK156出土遺物	6	地区 SK170出土遺物
図版 56	6	地区 SK169上層出土遺物①	6	地区 SK169下層出土遺物
図版 57	6	地区 SK169上層出土遺物②	6	地区 SK159出土遺物
図版 58	6	地区 SK107出土遺物①	6	地区 SK151出土遺物①
図版 59	6	地区 SK151出土遺物②	6	地区 SK166出土遺物
図版 60	6	地区 SK154出土遺物①	6	地区 SK127出土遺物
図版 61	6-1	地区 SB189出土遺物	6・7	地区埋地内出土遺物
図版 62	6-1	地区 SB189直上整地層出土遺物①		
図版 63	6-1	地区 SB189直上整地層出土遺物②		
図版 64	6-1	地区 SB189直上整地層出土遺物③		
図版 65	6-1	地区 SB189直上整地層出土遺物④	6	地区木器包含層出土遺物①
図版 66	6	地区木器包含層出土遺物②		
図版 67	6	地区木器包含層出土遺物③	7	地区木器包含層出土遺物①
図版 68	7	地区木器包含層出土遺物②	7	地区土層断面検出時出土遺物①
図版 69	7	地区土層断面検出時出土遺物②		
図版 70	6-1	地区石垣47・48以西2面検出時出土遺物①		
図版 71	6-1	地区石垣47・48以西2面検出時出土遺物②		
図版 72	6・7	地区その他の出土遺物①(中世以前)	6・7	地区その他の出土遺物①
図版 73	6・7	地区その他の出土遺物②(中世以前)	6・7	地区その他の出土遺物②
図版 74	6・7	地区その他の出土遺物③		
図版 75	6・7	地区その他の出土遺物④		
図版 76	6・7	地区その他の出土遺物⑤		
図版 77	6・7	地区その他の出土遺物⑥		
図版 78	6・7	地区その他の出土遺物⑦		
図版 79	6	地区陶衣埴輪遺物出土遺物①		
図版 80	6	地区陶衣埴輪遺物出土遺物②		

図版 81	6地区船衣瀬船遺構出土遺物③	6・7地区畑菜・栗鉢①
図版 82	6・7地区黒壳・埴鉢②	
図版 83	5中、6・7地区石製品①	
図版 84	5中、6・7地区石製品②	
図版 85	5-中、6・7地区石製品③	
図版 86	5-中、6・7地区石製品④	
図版 87	5-中、6・7地区木製品①	
図版 88	5-中、6・7地区木製品②	
図版 89	5-中、6・7地区木製品③	
図版 90	5中、6地区金属製品①	
図版 91	5-中、6地区金属製品②	5-中区豆板鏡
図版 92	5中、6地区ガラス製品	5中、6・7地区骨角・貝製品
図版 93	6地区自然遺物	
図版 94	2-A-B区第2坑1層内・直下の出土遺物①	
図版 95	2-A-B区第2坑十層内・直下の出土遺物②	
図版 96	2-A-B区第2坑1層内・直下の出土遺物③ 2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物④	
図版 97	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑤	
図版 98	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑥	
図版 99	2-A-B区第1坑1層以下第2坑1層までの出土遺物⑦	
図版 100	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑧	
図版 101	2-A-B区第1坑1層以下第2坑1層までの出土遺物⑨	
図版 102	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑩	
図版 103	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑪	
図版 104	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑫	
図版 105	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑬	
図版 106	2-A-B区第1坑十層以下第2坑十層までの出土遺物⑭	
図版 107	2-A-B区第1坑1層以下第2坑1層までの出土遺物⑮ 3地区焼十層出土遺物①	
図版 108	3地区焼十層出土遺物②	
図版 109	3地区焼1層出土遺物③	
図版 110	3地区焼十層出土遺物④	
図版 111	3地区焼十層出土遺物⑤	
図版 112	3地区焼1層出土遺物⑥	
図版 113	3地区焼1層出土遺物⑦	
図版 114	3地区焼十層出土遺物⑧	
図版 115	3地区焼1層出土遺物⑨	
図版 116	3地区焼十層出土遺物⑩	
図版 117	1地区その他の出土遺物①	
図版 118	1地区その他の出土遺物②	
図版 119	1地区その他の出土遺物③	3地区その他の出土遺物①
図版 120	3地区その他の出土遺物②	
図版 121	3地区その他の出土遺物③	1地区瓦①
図版 122	1地区瓦②	2地区瓦①
図版 123	2地区瓦②	3地区瓦
図版 124	1-3地区石製品①	
図版 125	1-3地区石製品②	
図版 126	1-3地区金属製品①	
図版 127	1-3地区金属製品②	
図版 128	1-3地区金属製品③	
図版 129	1-3地区金属製品④	
図版 130	1-3地区豆板鏡	
図版 131	1-3地区骨角・ガラス製品	

I 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

萩市は山口県の北中央部に位置し、北を日本海、他の三方を標高400m級の山々に囲まれている。県下第2の河川である阿武川は北流し、河口付近で松本川、橋本川に分流しながら日本海に至る。これら2本の川にはさまれて広がる萩三角州に市街地が展開している。面積は約15km²、平均高度2mの三角州は萩低地とも呼ばれ、海に沿って広がる砂堆は幅0.7km、東西の長さ4.5kmに及ぶ。

弥生時代中期の遺構と推定される霧口遺跡（第1図中28）付近から、魚網に使用した土鍬が出土していることから、この頃までは阿武川河口付近の大部分は入江であったとみられる。一方で、平成11年度調査で発見された弥生時代中期の土器（本文P.28,92）から、当時すでに河口部の砂堆も生活範囲の一部であったことが確認された。低地を取り囲む山麓の緩斜面に分布している原始・古代の遺跡は、現在の中津江、沖原周辺に集中しているが、考古学的調査がなされていないため時期や遺跡の性格は不明である。霧口遺跡で採集された弥生時代中期の壺型土器は、今のところ当地における人々の生活の開始と、弥生時代の生活拠点が丘陵上にあったことを示すものである。

前小畑の長浜山古墳（第1図中16）の被葬者は、古墳時代前半期におけるこの地域の首長と考えられる。古代では「延喜式」に古代の駅として樺東の中津江に比定される「垣田」の駅名がみられることから、中津江から前小畑にかけての一角が古代における中心地であったことがうかがえる。

入江であった阿武川河口は次第に三角州を形成していった。そこでは、平安時代から牛牧が行われ、やがて中央の有力者に寄進され、その所領となった。また南北朝時代の記録に「河島庄」の名がみえることからこの時代には河口一帯は荘園として開発が進展し、村落が形成されていったとみられる。

大内氏支配のもとで実際にこの地を治めたのは益田氏と吉見氏である。大内氏滅亡後、戦国時代には阿武郡は吉見氏の所領となった。低地周辺にある山城はこのころの戦乱を物語るものである。

沿岸砂堆にある古萩地区は標高が5～8mと周囲に比べ高いため、中期、吉見氏支配の頃よりいち早く開発が行われ、寺院や集落が営まれたとみられる。そのことをうかがわせる遺構として、平成11年度調査において成人人骨を伴う中世土器（本文P.28）が検出されている。

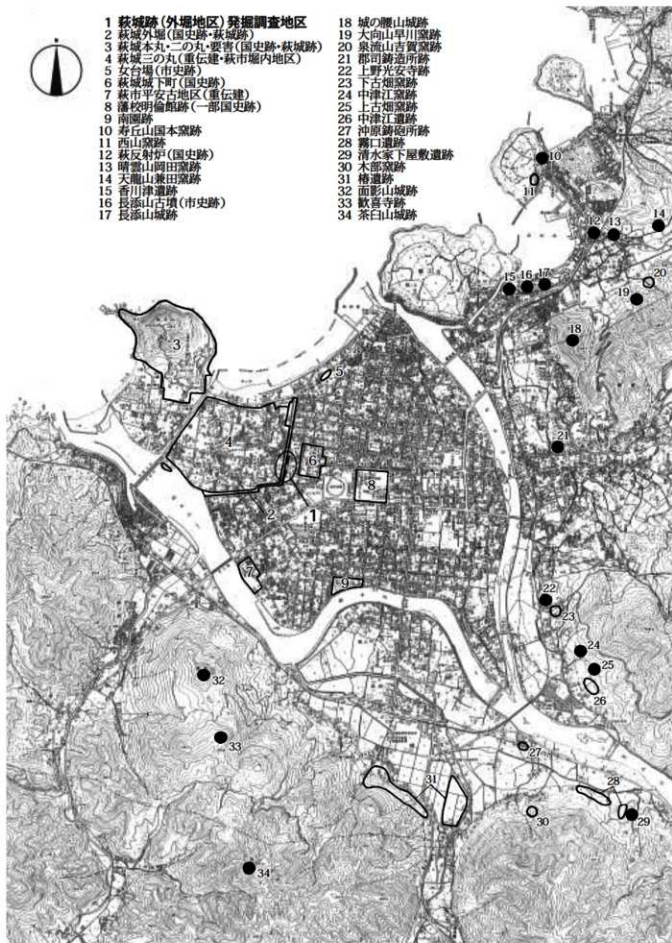
関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏は周防・長門の二国に滅封後、阿武川河口の三角北西部にある指月山を中心として居城と城下町を建設することとした。この建設の際、それまで阿武川東岸の一部の地名であった「萩」の地名が、三角州全域を指すものになった。慶長9（1604）年、毛利輝元萩入府後、萩城建設が始まり、4年後の慶長13（1608）年に完成する。

萩城は平山城の形態をとって築かれており、指月山の頂には詰丸（軍事施設）、山麓から三角州にかけて本丸（藩主の居館や政庁）、二の丸、三の丸が築かれた。城は内、中、外3つの堀を擁し、「堀内」と呼ばれた重臣たちの居住区である二の丸と城下町を分ける外堀が大きな区切りであった。二の丸と城下町の往来は北から「北の惣門」、「中の惣門」、「平安古の惣門」が担い、特に中の惣門は、藩主が参勤交代の際に三田尻へ向かう「御成道」（第2図赤線部分）の要衝でもあった。

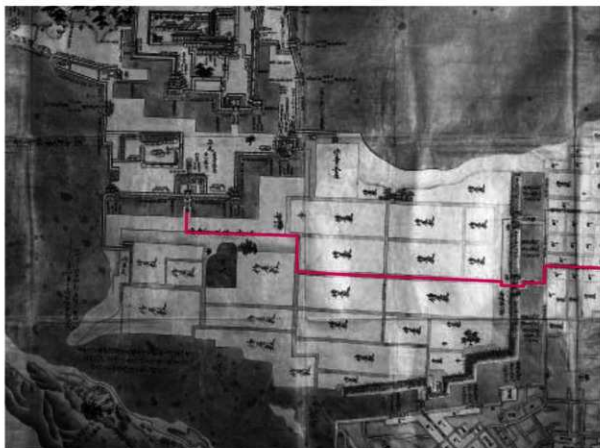
築城と並行して、城下町建設が行われた。町並みの概要は築城後半世紀を経た「慶安5（1652）年絵図」（第2図上）に示されているが、その後拡大し享保年間には町数30に及ぶ城下町の一応の完成をみる。



- 1 萩城跡(外堀地区)発掘調査地区
- 2 萩城外堀(国史跡・萩城跡)
- 3 萩城本丸・二の丸・要害(国史跡・萩城跡)
- 4 萩城三の丸(重伝建・萩市堀内地区)
- 5 女台場(市史跡)
- 6 萩城下町(国史跡)
- 7 萩市平安古地区(重伝建)
- 8 藩校明倫館跡(一部国史跡)
- 9 南園跡
- 10 寿丘山国本竈跡
- 11 西山竈跡
- 12 萩反射炉(国史跡)
- 13 晴嵐山岡田竈跡
- 14 天龍山兼田竈跡
- 15 香川津遺跡
- 16 長添山古墳(市史跡)
- 17 長添山城跡
- 18 城の麓山城跡
- 19 大向山早川竈跡
- 20 泉流山古賀竈跡
- 21 郡司跡遺所跡
- 22 上野光安寺跡
- 23 下古畑竈跡
- 24 中津江竈跡
- 25 上古畑竈跡
- 26 中津江遺跡
- 27 沖原跡安所跡
- 28 霧口遺跡
- 29 清水家下屋敷遺跡
- 30 木部竈跡
- 31 椿遺跡
- 32 面影山城跡
- 33 數喜寺跡
- 34 茶臼山城跡



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)



慶安 5 (1652) 年萩城下絵図(部分) (山口県文書館蔵)



寛保 2 (1742) 年萩城下絵図(部分) (萩博物館蔵)

第 2 図 絵図に見る外堀幅の変遷

2 萩城外堀の歴史

萩城の外堀が完成したのは元和8（1622）年である。「柿並年表」（毛利家文庫）によると「阿武川を浚渫し、萩城三郭の東面に溝池をうがつ」とある。「慶安5（1652）年絵図」（山口県文書館蔵）（第2回上）によると外堀の規模は、幅20間、深さ1丈5尺、水深は東側で3尺、南側で6～7尺であり、外堀の三の丸側には外堀掘削時の土砂によって高さ3間の土塁が築かれている。この絵図に描かれた外堀は、完成当初の様子をとどめていとみられ、堀端の町屋は認められない。しかし一方で、「片側御堀幅拾四間有之、堀の端家無之、元和八町家出来」（烏田智庵「萩古実未定之覚」）、「元和八年、片側懸作初町二成ル」（『柿並年表』（毛利家文庫）とある。このことから、外堀完成当初すでに町屋が存在していたことになり、絵図と文献では矛盾が生じるが、「懸作」という堀の法面から床を堀側に張り出させた建築工法から初期の町屋は堀幅を上砂で狭めるものではなかったと考えられる。

「萩古実未定之覚」では「片側御堀幅拾四間有之、堀の端家無之、元和八家出来、其後元文四年山内縫殿当職之時、堀を八間にして石垣出来」とあり、元文4（1739）年に堀幅が8間となる石垣を造る前の堀幅は14間であったことがうかがえる。「寛保2（1742）年絵図」（第2回下）（萩博物館蔵）によると、外堀の南北方向部分の東岸に沿って町屋が存在し、そこには「北片河町」「南片河町」の名がみとれる。

「片河」の名の由来について、『古老物語』に「片河町は御堀の上に懸作り仰せ付けられ、其節は一方は堀にて、片輪計り町に仕りこれ有る故にいふ。後懸作り仰せ付けられ、両町に相成り候由に候」とあり、道に対して片側のみ町屋が形成されたことにあることがわかる。

元来防衛施設である外堀端に町屋が作られ始めるのは、人口増加に伴う新地の必要性と土砂の堆積があったためとみられる。洪水や下水の流入による土砂の堆積のために外堀が埋まり、船の通行に支障をきたしたため、萩藩は三度にわたり幕府に外堀の浚渫を申請し、三度目にしてようやく許可を得た。浚渫された土砂によって外堀の南北方向部分の東端を埋め立て石垣を築く。これにより外堀の幅は8間となり、埋め戻された土地上に町屋が拡張された。さらに北、中の惣門に通じる道の両脇にあった町屋（釣道町）を解体し、新たに塙を築き枡形に構築することで惣門の軍事機能を一層強化した。一方で土砂堆積の抜本的解決を図るために外堀を北に伸ばし日本海に貫通させるとともに、石垣を築き補強することにより、都市、軍事機能の強化が図られた。

このように、外堀の堀幅は20間から14間、さらには8間へと推移した。その背景には外堀への町屋の進出・拡張、防災策が深くかかわっている。

外堀はこの18世紀中頃の整備事業によってその様相を大きく変えた後、幕末までその景観が変わることは無かったことがLH後期の絵図でみとれる。明治時代以後さらに堀幅は狭められて、現在の景観を呈するにいたっている。

参考文献

- 1) 萩市史編纂委員会 「萩市史」 1983
- 2) 竹内理之（編） 角川日本地名大辞典 35 山口県 角川書店 1988
- 3) 財団法人山口県教育財団 山口県歴史文化財センター 「萩城跡（外堀地区）Ⅰ・Ⅱ」 2002・2004
- 4) 樋口尚樹「萩城跡外堀文獻調査報告」萩城跡外堀調査報告書、萩市教育委員会 1988

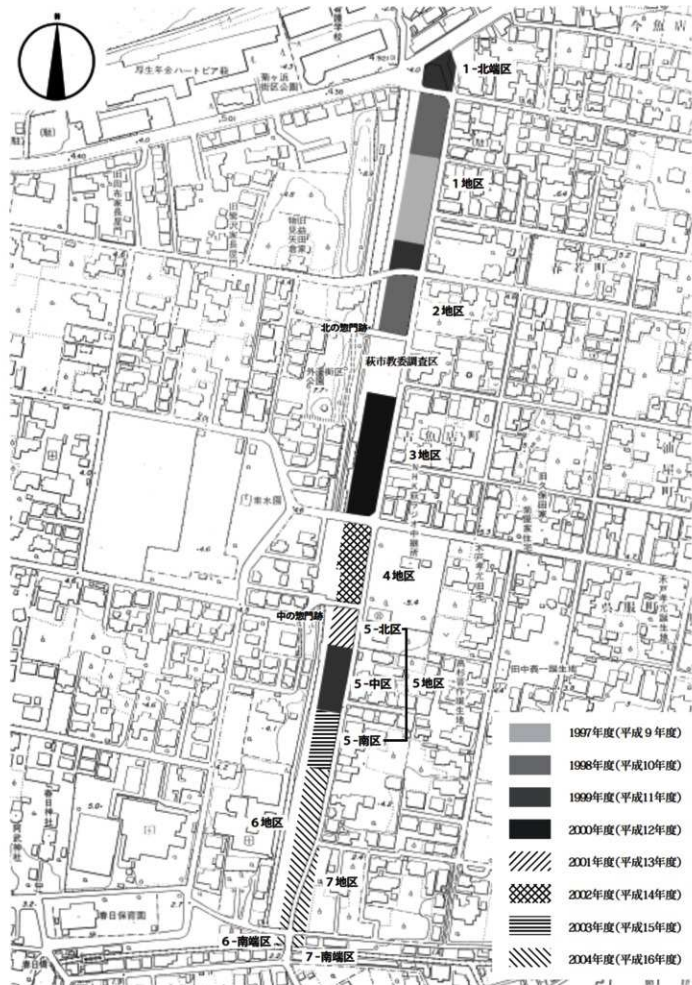
Ⅱ 調査の経緯と概要

昭和45年、調査対象地区の東側に沿って走る市道片河瀬は、都市計画道路事業に伴い路線拡張が決定された。昭和58年には歴史的地区環境整備街路事業が発足し、都市計画街路今魚店金谷線整備計画は昭和60年の事業計画の検討によって、「歴史的町並みと調和した道路舗装」など外堀一帯の歴史的景観を生かした街路整備として提起された。ところで外堀は江戸時代に堀幅が20間から14間、そして8間へと推移したといわれていたが、その詳細は不明であった。そこで外堀の変遷や構造を明らかにすることが整備事業にとって重要であるとの見解が示され、萩市教育委員会が昭和61、62年に当該地区の発掘調査を、昭和62年に関連文獻調査を実施し、その成果を昭和63年『萩城跡外堀地区調査報告書』（萩市教育委員会）としてまとめている。このような調査結果をもとに建設省（現国土交通省）と文化庁との協議に基づいて、外堀変遷の最終段階である堀幅8間時の景観を反映した道路および外堀の整備事業が実施されることとなった。これによって街路と史跡萩城外堀との境界線が、堀幅8間時の石垣が埋存している推定線から裏込めとして1～2mの幅を持たせた位置に設定された。以後、街路側を建設省、外堀側を文化庁によって用地取得し事業展開がなされてきた。平成元年に境界線より外堀側の地域が「史跡萩城跡」として追加指定されている。

用地取得が予定地の北側から進められ土地公有化がなされる中、具体的な整備事業計画が進展していった。それに伴い、部分的なトレンチ調査であった昭和61、62年発掘調査の成果だけでなく、遺跡の詳細なデータの必要性が高まってきた。そこで遺跡の時期や構造を明らかにする目的で、萩市教育委員会は平成7年度から発掘調査を開始した。調査地点は8間石垣を含めた史跡地内と街路部分である。平成8年度はさらに街路部分のうち、北の惣門跡より南側の地区を実施した。これにより外堀内に町屋遺構が良好に埋存していることが明らかとなった。そこで平成8年より歴史的地区環境整備街路事業の事業主体となった山口県、萩市等の関係機関が今後の事業計画を協議した結果、街路部分は事前の発掘調査による記録保存が必要であり、発掘調査を山口県教育財団（現山口県ひとづくり財団）山口県歴史文化財センターに委託することとなった。また、史跡地内については萩市教育委員会が継続して実施することとなった。これにより平成9年度より山口県歴史文化財センターによる街路部分の発掘調査が開始された。

調査対象地区が南北に約700mと細長く、北片河町、南片河町の2つの町内にわたっていることから、調査区に地区名を設定した。便宜上、調査区を東西に走る道路（北の惣門、中の惣門の通りと近代に取り付けられた道路）によって区分し、北から1地区、2地区と呼称した（第3図）。すなわち、椋原町筋の小道から北の惣門までの範囲は春若町筋の道路を基準にして、それより北側を1地区、南側を2地区とした。また、北の惣門から中の惣門までの範囲は「赤水園」につながる道路を基準にして、それより北側を3地区、南側を4地区とした。中の惣門から新堀川までの範囲は分断する道路がないため、ほぼ中間点で分割し北側を5地区、南側を6地区とした。また、6地区では市道片河瀬が緩やかに外堀側に屈曲するため道路東側も調査対象となり、ここを7地区とした。さらにこの6、7地区のうち、新堀筋と新堀川にはさまれた部分を6-南端区、7-南端区とした。ここは、面積が狭いうえに道路と川にはさまれているため、トレンチ調査で終わらざるをえなかった。

平成9年度から平成12年度までの4年間で1、2、3地区の5,800㎡を調査し、その成果を平成13



第3図 調査範囲図(1/3,000)

年度末に発行した『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』として報告した。ただし、平成11年度に土地取得状況の都合で調査した5地区中区（以後5-中区と表記）については掲載していない。さらに平成13年度から平成15年度までの3年間で4、5地区（5-中区を除く）の2,600㎡を調査し、その成果を平成15年度末に発行した『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』として報告した。よって本報告書は平成11年度に調査した5-中区1,000㎡と平成16年度に調査した6、7地区2,500㎡の成果をまとめたものである。また、本報告書が最終報告となるので、『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』で掲載できなかった1、2、3地区の遺構外出土遺物のうち、焼土層からの出土遺物を中心にできるかぎり掲載することとした。

平成11年度は、5月7日から5地区（以後5-中区と表記する）を1地区と並行して調査を進めた。1地区同様4つの遺構面に分けられる。また各々の区画で整地状況や堀割への張り出し状況が違う点もこれまでの調査区とよく似た点である。

調査区は北から5-中-A区、5-中-B区とし、南端はH区である。調査はC区以南から進め、町屋の中心時間となる2面の検出を行った。この面からは町屋の敷地割りや、建物の礎石、土坑（ゴミ穴）、井戸、埋炭、脆衣埋納遺構などが検出された。町屋の施設がほぼ検出された段階で写真測量を実施し、遺構の図化を行った。外堀掘削当初の法面傾斜をそのまま利用して石垣を構築し、その高低差を埋めることなく町屋の構築がなされ、その後大きな変更もなく踏襲されてきたことが明らかになった。その後部分的にトレンチを設定し、3面、4面の確認を行った。また並行してA、B区の掘り下げを進めた。B区では昭和61年の萩市教育委員会による調査トレンチを確認し、これを手がかりに調査を進めた。他地区では見られない大型の石材を使用した建物石垣を検出し、5-北区に続くことから中の惣門付近の他地区とは違う特殊性をうかがい知る遺構となった（報告書Ⅱで報告済み）。また、C区、F区の現道側砂層中からは、弥生時代中期土器や、人骨を伴う中世墓が出し、城下町建設以前の萩低地内の歴史に新たな資料が加わるようになった。さらに外堀掘削当初の地形を色濃く残していることが幸いし、今まで防災上不可能であった、萩市調査区内の堀幅8周時のものと想定できる石垣部分と土層断面によるすりあわせが初めてできたことも新たな成果であった。

全地区において遺構の検出や3・4面の確認作業が終わった段階で、空中写真撮影を実施し、部分的に残った遺構の実測を終え、現地調査を平成12年2月15日に完了した。

平成16年度は、事業予定地の最南部を調査した。この地区は外堀南端にあたる。試掘調査の後、機械による表土除去を行い、2ないし3面存在する近世以降の生活面について人力で検出・掘削を行った。各面の遺構については、写真撮影・実測を行った後、土層から下層へと掘り下げた。町屋の構築状況は、5地区同様外堀掘削当初の法面傾斜をそのまま利用したもので、堀幅を8間に整備して以後大きく変更されることなく幕末を迎えたことがわかる。各層の掘り下げの際、石垣等の構築物の除去が必要な場合には、その都度機械を利用した。調査区は南北に走る片戸筋と東西に走る新堀筋の2本の道路によって6地区、6-南端区、7地区、7-南端区に4つに分けられ、各区で遺構の存否・粗密に違いが見られた。6地区北半では過去7年間の調査と同様の近世町屋遺構が確認された。特にD・E区にみられる大型建物に伴う礎石群及び堀側に位置する蔵と見られる建物基礎の痕跡は、ある程度の財力を有する商家の存在を示唆するものである。6地区南半では2面以下に敷地を区画する石垣や石列を検出することはできず、幕末期以前には町屋が存在していない可能性が高いことが判明し

た。また、7地区では道路に伴うものと考えられる厚い整地層が検出され、6地区南半及び7地区の下層には木筒等の遺物を含む有機物層が確認された。特に7地区出土の木筒には「松坂塚」の墨書が確認され、文献からのみ知られていた「松坂塚」の存在と活躍時期が考古学的に裏付けられる資料となった。また、6地区南半と7地区の遺構の変遷は絵図の表現の変遷とはほぼ合致することが確認できた。調査期間は平成16年5月10日から17年3月9日までである。

調査の方法と報告書での表記

調査における方法と、それに関して本報告書における表記方法を以下に示す。

- ・ 各地区で検出された遺構面はそれぞれ上面から1面、2面と設定した。なお各地区で検出した遺構面の時期が異なる場合があり、他地区と遺構面名が同じでも時期が同じとは限らない。
- ・ 検出された町屋敷地の区画を小区名として設定した。小区はアルファベット大文字を使用し、先に設定した大地区名と併せて、5-中区A区、6地区A区（以後5-中-A区、6-A区と表記）と呼称する。なお、各区の遺構に伴わない遺物（整地層内出土など）はこの小区と出土面を基準に取り上げをしている。また、5-中区SE11は5-中-SE11、6地区SX66は6-SX66のように略して表記する。
- ・ 敷地区画の全体像が判明するのは基本的に2面検出時である。そのため区画名は2面検出時に設定してきた。また、上層の1面と敷地範囲が変わらない例がほとんどであることや1面の遺構説明に区画名があったほうが明確に記載できることから、2面で設定した区画名を1面でも踏襲して記述している。しかし、出土遺物の取り上げや整理の段階で早めに区画を設定しなければならない場合や2面以下の町屋遺構が存在しない場合もあり、1面検出時に区画を設定した地区や小区を設定していない地区もある。
- ・ 検出された遺構の番号は、調査地区に、SK 1、石垣2、SE 3といったように全ての遺構に連番号を用いる。また、同一地区で調査年度が異なる場合は開始する番号を変更している。平成11年度の5-中区は1～、平成13年度の5-北区は201～、平成15年度の5-南区は301～とした。
- ・ 検出された遺構に「石垣」、「石列」という遺構名を用いている。「石垣」とは石材を2、3段以上積み上げて構築したもので、土留めや建物の基礎として機能したものをいうこととする。これに対して「石列」は基本的に石材を1段ほど石の面を一定方向に合わせて直線的に置いたもので、敷地内や敷地境の区画、礎石や基礎などに用いられたものである。ただし、複数段以上積み上げたものを全て石垣だと厳密に区別しておらず、石材の大きさ、遺構の配列や機能を考慮して各年度の調査担当者が呼称を決めている。

参考文献

- 1) 財団法人山門県教育財団 山門県埋蔵文化財センター 『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』2002
- 2) 財団法人山門県教育財団 山門県埋蔵文化財センター 『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』2004

Ⅲ 調査の成果

1 遺構

(1) 平成11年度の調査

5-1中區（第4～20図 図版2～14）

5-1中區は、5地区の中間部に位置し、平成13年度調査区の5-1北区と平成15年度調査区の5-1南区に南北境界を接している（第3図参照）。なお、5-1北区と5-1南区については『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』において報告済みである。5-1中-1C区以南は現道路に並行して南北に走る石垣3があり、この石垣以東は現道路とほぼ同じ高さを保ち、以西（堀側）は石垣3の基底面の高さから緩やかに傾斜して堀へ続く。遺構面は、大きく4面に分けられることがわかった。以下各遺構面の概略を述べる。

1面（第4図）

表土や近・現代家屋の基礎やコンクリート壁を除去した時点で検出された遺構面を1面とした。整地層に含まれる遺物から判断して、時期は幕末から明治にかけてとした。調査区は前述のとおり同時に構築されたと思われる石垣2・3によって石垣裏手の一段高い整地部分と表の低い部分に区切られる。

A、B区については、現地表面から約50cm下げた段階で石垣2の上端面を検出し1面としたが、近代の擾乱を受け、遺構は検出できなかった。

C区以南については、現道路に並行してF区まで石垣3がのびる。F区以南は崩落して原状をとどめないが、石垣は5-1南区から6地区にかけて途中石段を伴いながら続く。C区に埋蔵2基、D区に埋蔵2基と廃棄土塊であるSK45、F区に埋蔵2基、G区に井戸などが検出された。いずれも石垣3以西の低い部分に集中する。町屋の屋敷境を示すような石列など、この面の全体像がつかめる遺構は認められなかった。

2面（第5図 図版3～5）

後述する3面とともに5-1中區における町屋の中心的な遺構面である。堀が8間に改修される前後の時期と想定する3面の町屋区画を踏襲する形で遺構が検出されたC区以南については、2面と3面のレベル差がなく、また、上面の擾乱を受けるなどで複雑に交錯しているために遺構を明確に分けることが困難であった。そのため1面から掘り下げる過程で検出された遺構を2面としている。時期決定する資料に乏しいが、検出面出土遺物から18世紀後半から19世紀前半の遺構面と思われる。調査区全体を特徴づける石垣2、石垣3が構築されたのもこの時期とした。

石垣2（第11図 図版4・9）は、面を南に向けて東西方向に積まれた石垣でB、C区を分ける。調査区を越えて堀側にのびるので全長は把握できていない。高さは東端で1.4mを測り、堀側に緩やかに傾斜して西端で2.8mを測る。面を簡単にハツった玄武岩質安山岩の乱積みで、3面時の地形を大きく改変することなく構築され、基底部や裏込めに割栗石も入らない簡単な構築がなされている。所々に垂直に目地が入ることから当初から上端がそろっていたわけではなく、堀側へ向けて幾度かの嵩上げが行われたことが見てとれる。

石垣3（第11図 図版3～5）は地表面から50cm掘り込んだところで上端を検出した。その北端を石垣2の東端にそろえ、面を西に向けて南北方向に積まれた石垣である。F区からH区までは崩

落して原状をとどめないが、現道路から5mの幅を保ちつつそのまま5-南区を貫き、6地区の石垣43につながる。石垣3の基底部は、3面の町屋遺構に関連すると想定している花崗岩自然石の石列120（第11図網かけ部分 図版3・5・7・9）上に据えられ、石列120が根固めの役割をしている。高さは平均して1.8mを測る。使用されている石材は、概ね石垣2と同様に面に簡単にハツった玄武岩質安山岩であるが、1段目には大振りな花崗岩を根石や役石として使用している。また、D区からE区については同じくやや大振りな花崗岩がかなり上段まで使用されている。これら花崗岩の石垣への使用は、これまでの調査成果から玄武岩質安山岩が多用される時期より古いことから、3面に伴う現道路側遺構の石材をそのまま利用した可能性がある。

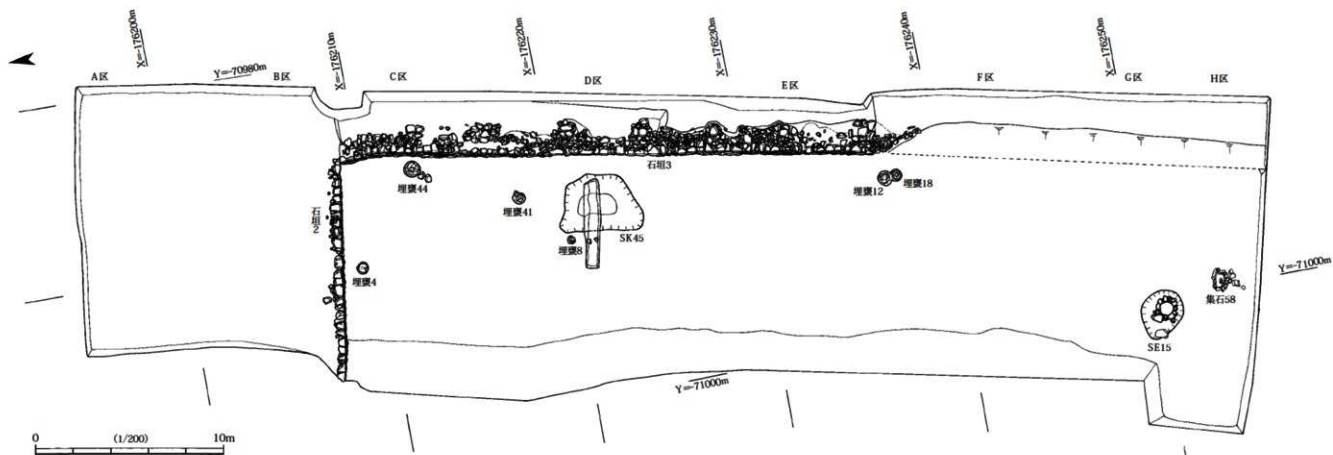
石垣3以東の高い部分にトレンチを設定して遺構を検出中、ほぼ等間隔に並ぶ大型の礎石列を検出した（図版3）。C区からE区にかけて、石垣3の面石から1.2m現道路より4mの間隔で南北方向に7基並ぶ。いずれも花崗岩の自然石で、径が70cmを測る大振りな石である。礎石の下部には石垣3の裏込めと根固めを兼ねるように割栗石が詰められている。これら礎石群は、石垣3以西に検出された2面に関連する石列や礎石と東西方向でほぼ軸がそろうことから（第5図）、礎石、石垣3、石垣3以西の2面関連遺構は一連の遺構としてとらえるのが妥当である。検出された遺構は石垣、石列、礎石、集石など建物に伴う遺構の他、井戸、土坑、埋甕、かまど、脱衣埴輪遺構がある。

F区（図版5）は、南は石列77および20によって境をなし、北は石列73および23によって区画される敷地（間口110.6m）である。石垣3が崩落して現道路側の状況がわからないが、おそらくE区までのような礎石があり、石垣3以東と以西は連続きであったであろう。この時点で露出している石列120と13については3面以下の関連遺構と思われる。2面段階でもそのまま礎石などとして踏襲されたのであろう（図版7）。石列13・76・73および76・73の西端を結ぶ石列で区切られた一画は、土間である。中央や東よりには焚き口を西に開くかまど31が据えられている。この地覆石と思われる石列には幅90cmの出入り口が付き、SK104を伴う裏庭に出る。その南には便所遺構の埋甕16、上屋構造が推定できるSE17が付く。石列76以南は座敷部分が想定され、この区画は18世紀後半以降の片河町における町屋構造を良好に残している。

E区（図版5）は、石列73と石列42・39によって区切られる敷地（間口10.4m）である。石垣3奥に検出した礎石と同じく花崗岩自然石の大きな礎石が使用された建物であったことがわかる。石列33までが座敷部分と思われ、石列32までの縁側部分が付く。北西隅に埋甕27・35という2連の便所遺構と西端にSE11を伴う。SE11は掘形周辺に方形に礎石が配置されていた形跡があるので、上屋構造を持つ外井戸の可能性が高い。

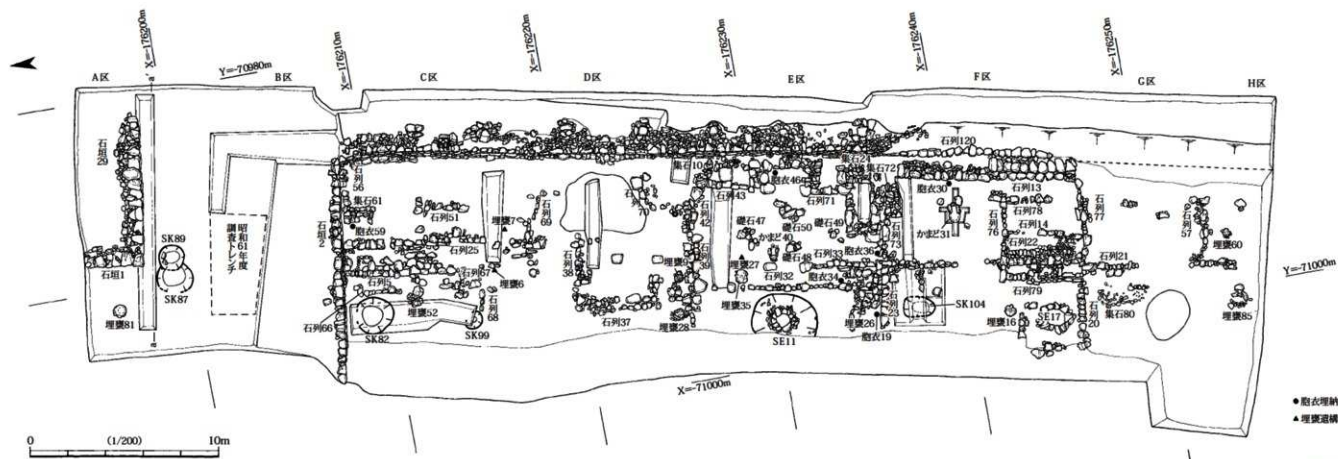
この区画の特徴として脱衣埴輪遺構が集中することがあげられる。礎石の規模などと考え合わせて、この遺構面の中心的建物が想定される。また、隣接するD区石列38までの建物（図版4）は礎石の配置などから考えてE区と一連の建物遺構の可能性が高い。

C区（図版4）は、石列68と石列56で区画される敷地（間口7.2m）である。石列5で区切られる座敷部分の西に、便所遺構の埋甕52とSK82を伴う。井戸を伴わないのか、調査区のさらに西側に位置して存在するのかわからない。以上2面に関連する各区画の概略を述べてきたが、前述のとおり2面・3面のレベル差があまりないことと、時期を決定づける良好な一括出土物に乏しいため、C



第4图 5—中区遺構配置図①

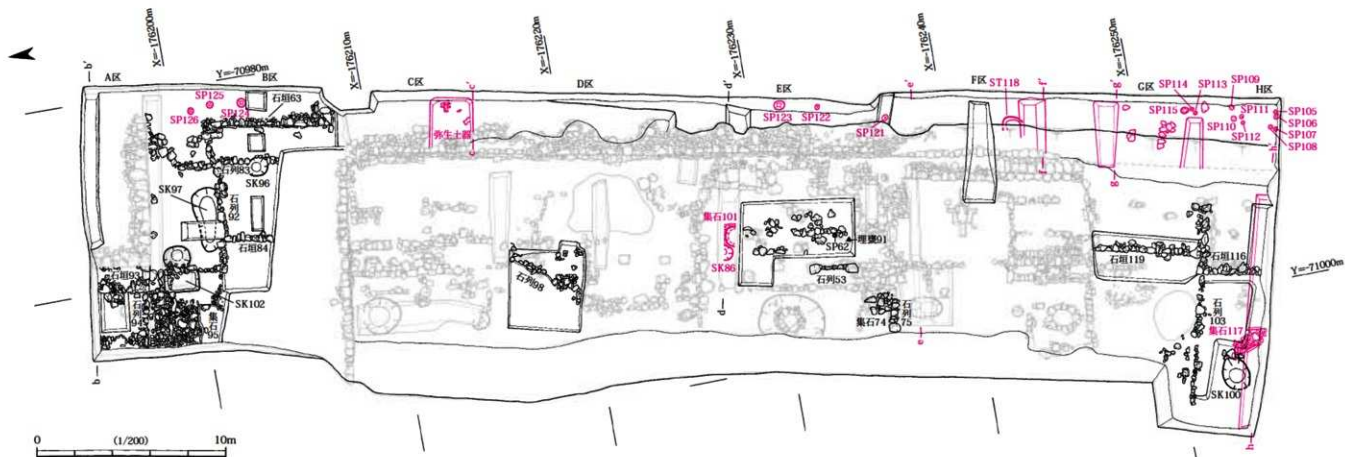
1面



第5图 5—中区遺構配置図②

2面

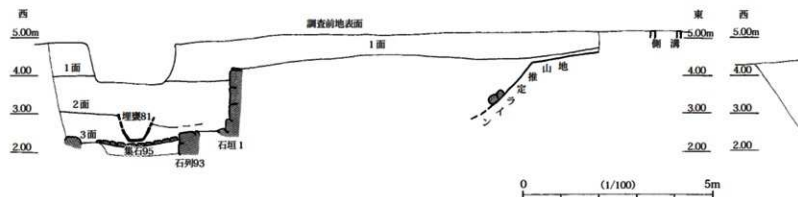
● 陪衣埋納遺構
▲ 埋藏遺構



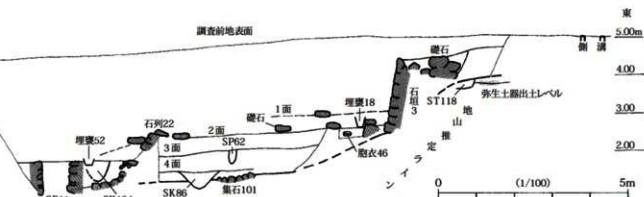
第6图 5-中区遺構配置図③

3面・4面

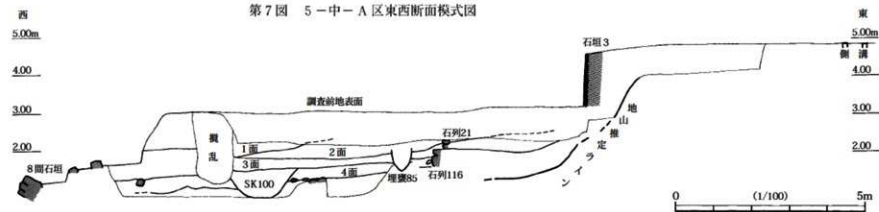
赤…4面遺構
▲埋藏遺構



第7图 5-中-A区東西断面模式図



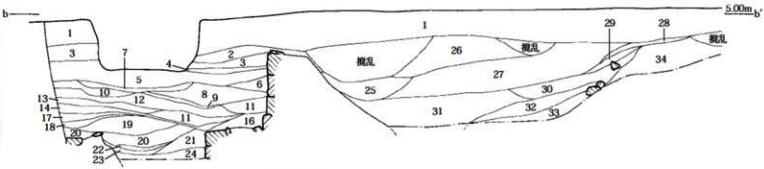
第8图 5-中-C~F区東西断面模式図



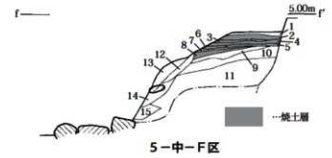
第9图 5-中-F~H区東西断面模式図

- 1 近-现代地槽
- 2 灰黄色
- 3 粉砂
- 4 粉砂质粉砂
- 5 粉砂质粉砂
- 6 灰黄色
- 7 粉砂-粉砂质粉砂
- 8 粉砂质粉砂
- 9 粉砂质粉砂
- 10 灰黄色粉砂
- 11 粉砂质粉砂
- 12 粉砂质粉砂
- 13 灰黄色粉砂
- 14 粉砂质粉砂
- 15 粉砂质粉砂
- 16 粉砂质粉砂
- 17 灰黄色粉砂

- 18 灰黄色粉砂
- 19 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 20 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 21 褐色粉砂
- 22 粉砂质粉砂
- 23 粉砂质粉砂
- 24 粉砂质粉砂
- 25 灰黄色粉砂
- 26 灰黄色粉砂
- 27 灰白色粉砂质土
- 28 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 29 粉砂质粉砂
- 30 粉砂质粉砂
- 31 粉砂质粉砂
- 32 粉砂质粉砂
- 33 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 34 粉砂



5-中-A区



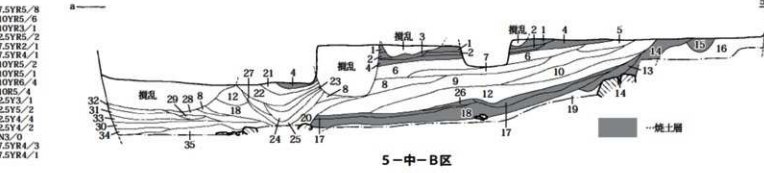
5-中-F区

- 1 褐色粉砂
- 2 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 3 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 4 粉砂质粉砂
- 5 粉砂质粉砂
- 6 粉砂质粉砂
- 7 粉砂质粉砂
- 8 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 9 粉砂质粉砂
- 10 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 11 粉砂质粉砂
- 12 粉砂质粉砂
- 13 粉砂质粉砂
- 14 粉砂质粉砂
- 15 褐色粉砂

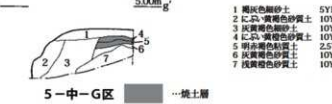
- 5YR4/1
- 10YR7/3
- 2.5YR5/6
- 10YR5/2
- 5YR6/8
- 10YR7/6
- 2.5YR5/4
- 10YR7/3
- 2.5YR4/4
- 10YR5/6
- 7.5YR6/8
- 2.5YR5/6
- 7.5YR4/6

- 1 明褐色粘质土
- 2 暗褐色粘质土
- 3 暗褐色粘质土
- 4 暗褐色粘质土
- 5 暗褐色粘质土
- 6 暗褐色粘质土
- 7 暗褐色粘质土
- 8 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 9 粉砂质粉砂
- 10 粉砂质粉砂
- 11 粉砂质粉砂
- 12 粉砂质粉砂
- 13 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 14 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 15 粉砂质粉砂
- 16 粉砂质粉砂
- 17 粉砂质粉砂
- 18 粉砂质粉砂

- 19 明褐色粘质土
- 20 暗褐色粘质土
- 21 暗褐色粘质土
- 22 暗褐色粘质土
- 23 暗褐色粘质土
- 24 粉砂质粉砂
- 25 粉砂质粉砂
- 26 粉砂质粉砂
- 27 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 28 粉砂质粉砂
- 29 粉砂质粉砂
- 30 粉砂质粉砂
- 31 粉砂质粉砂
- 32 粉砂质粉砂
- 33 粉砂质粉砂
- 34 粉砂质粉砂



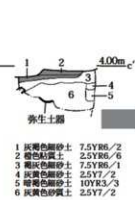
5-中-B区



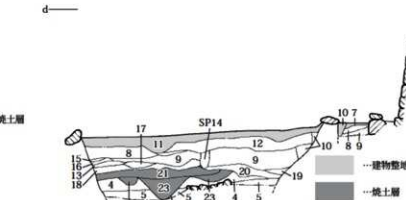
5-中-G区

- 1 褐色粘质土
- 2 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 3 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 4 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 5 粉砂质粉砂
- 6 粉砂质粉砂
- 7 粉砂质粉砂

- 5YR4/1
- 10YR4/2
- 10YR4/2
- 10YR7/3
- 2.5YR5/6
- 10YR5/2
- 10YR8/3



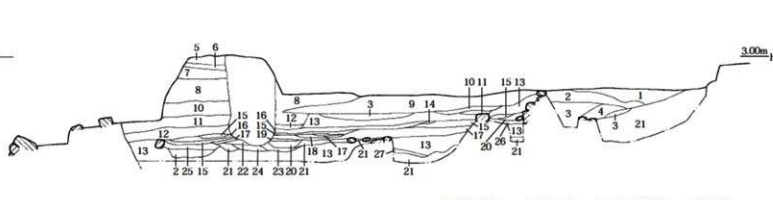
5-中-C区



5-中-E区

- 1 褐色粉砂
- 2 明褐色粘质土
- 3 灰黄色粉砂
- 4 粉砂质粉砂
- 5 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 6 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 7 粉砂质粉砂
- 8 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 9 明褐色粘质土
- 10 粉砂质粉砂
- 11 暗褐色粘质土
- 12 粘土-褐色粉砂质粉砂

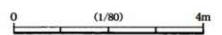
- 13 褐色粉砂
- 14 褐色粉砂
- 15 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 16 明褐色粘质土
- 17 粉砂质粉砂
- 18 粉砂质粉砂
- 19 粉砂质粉砂
- 20 暗褐色粘质土
- 21 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 22 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 23 黑色土



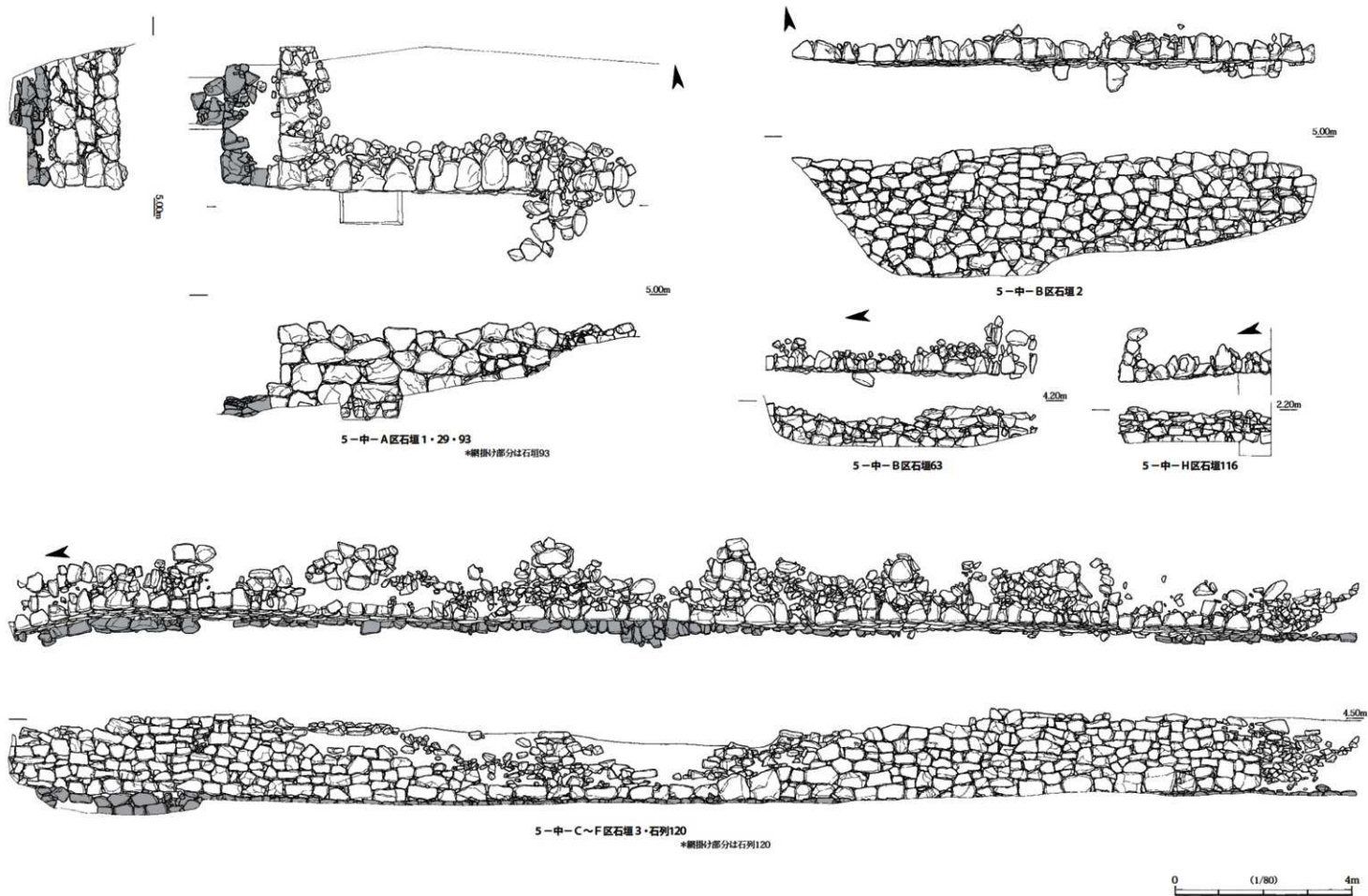
5-中-H区

- 1 灰褐色粘质土
- 2 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 3 暗褐色粘质土
- 4 粉砂质粉砂
- 5 灰褐色粘质土
- 6 暗褐色粘质土
- 7 暗褐色粘质土
- 8 暗褐色粘质土
- 9 灰黄色粉砂
- 10 粉砂质粉砂
- 11 粉砂质粉砂
- 12 灰黄色粉砂
- 13 灰黄色粉砂
- 14 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 15 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 16 灰白色粉砂
- 17 粉砂质粉砂
- 18 灰白色粉砂
- 19 暗褐色粘质土
- 20 暗褐色粘质土
- 21 灰黄色粉砂
- 22 粉砂质粉砂
- 23 粘土-褐色粉砂质粉砂
- 24 粉砂质粉砂
- 25 灰褐色粘质土
- 26 灰褐色粘质土
- 27 粘土-褐色粉砂质粉砂

- 7.5YR5/2
- 5YR6/3
- 2.5YR4
- 7.5YR7/4
- 7.5YR7/4
- 7.5YR4/2
- 10YR5/1
- 2.5Y6/1
- 10YR5/1
- 10YR5/2
- 5Y6/1
- 2.5Y6/2
- 10YR6/2
- 10YR6/3
- 10YR7/4
- 2.5Y7/1
- 10YR7/2
- 10YR7/2
- 2.5Y7/2
- 5Y7/2
- 2.5Y7/3
- 2.5Y7/1
- 10YR6/2
- 7.5YR6/2
- 10YR7/3



第10图 5-中区土层断面图



第11图 5-中区石垣实测图

区、D区北半部、F区に関しては3面の可能性も捨てきれない。

3面（第5～9図 図版2・6～7）

石垣2・3は、歴史的街路整備事業に伴う「アドバイザー会議」の答申により、保存し、街路整備の中で活用できないか、その可能性を探ることになった。したがって除去して掘り下げることができなくなったため、石垣3が崩落しているG、H区、石垣2以北のA、B区を中心に掘り下げ、石垣3以东についてはトレンチ調査で下層遺構および外堀掘削当初の傾斜面を探ることにした。

A区において検出された石垣1・29とB区の石垣83の基底面およびその周辺に検出した遺構群を3面とした（図版6）。この時期は、「萩城跡（外堀地区）Ⅱ」において報告された5-北区における4面に相当する。ただし、B区現道路より検出した石垣63とその基底部に付随して並ぶ礎石（図版9）については、初期町屋遺構である「懸作り」構造に関連した遺構で4面の遺構である（5-北区5面相当）。また、石垣2・3が構築される2面までの間にSK89・87、埋蔵81が置かれた時期があった（5-北区3面相当）。時期は北区の面設定およびSK出土遺物から17世紀末～18世紀半ばとかなり時期幅がある。この時期は文献上で堀を浅渡し、堀幅を14間（約28m）から8間（約16m）に整備する時期に当たる。また、延宝6（1678）年の大火で片河一帯が延焼した時期の後でもある。それまでの外堀の景観が大きく変わった時期であり、2面とともに町屋の中心時期である。検出遺構は、石垣、石列の他、埋蔵、土坑、集石遺構などがある。

A区の石垣1・29（第11図 図版6）は5-北区報告によってその全貌が明らかにされている。重複するようになるが、この時期を通じて区画を特徴づける遺構であるので簡単にふれる。

石垣29は、現道路から堀へ向けてのびる石垣で、堀側約12m地点で北へ折れて石垣1になる。石垣1の基底部にはそこから1.2m堀側へ張り出して大走り状の石垣93が張り付く。石垣1・29・93は外堀傾斜面に同時に構築されている。構築時期は4面のうち、延宝の大火の後ぐらいであろう。堀側で高さ2.5mを測り、石材は幅1m高さ70cmもあるような大型の花崗岩の自然石もしくは粗製石を用い、表込めや根固めの割栗石が入念に入る。これまでの調査区の石垣の積み方とは明らかに違う本格的な石垣遺構である。中の惣門に近い位置であることから藩が構築に関与したか、石垣93の堀側、集石95の下層には、5-北区で報告された「井筒屋市郎兵衛」の黒苦木桶出土した木器溜まりがあることから、片河町を代表するような富裕層の屋敷区画が推定される。石垣2・3と共に保存の対象になった。

B区堀側、石垣84（図版6・9）は花崗岩主体の野面石を4段程度積み上げたもので、基底部は石1個分堀側に張り出させて補強してある。上端レベルでC区石列25と同等、南北方向に軸もそうることから両者は石垣2によって分断されているが、同時期の遺構と考えられる。この石垣84は、昭和61年度に萩市教育委員会が調査した際の「Cトレンチ」において確認されていた石垣である。

B区には石垣84の東側に84と平行に走る石垣83・63（第11図 図版9）がある。石垣83は、C区以南の石列120と同等の遺構である。84と同じく石垣2によって分断されている。この83は北端で弧をえがき、石垣29に張り付くことから石垣1・29・93・83・石列120は外堀が8間に整備される直前時期の外堀景観を示している。さらに東側にある石垣63は前述のとおり初期町屋構造を示す遺構と考えられる。町屋が外堀の傾斜に沿って高低差を石垣によって調整しつつ堀側へ拡張していく様が見て

とれる。

5-G、H区では、石垣116と119、石列103、SK100などが検出された（第11図 図版7・9）。両者は一直線上には並ばず、一部コの字状に構築されていることからそれぞれの敷地ごとで作られた石垣であることを示す。また、石列103からこの時期にすでに敷地の区画が堀割にかなり伸びていたことがわかる。時期は8間に整備される時期よりも古く、17世紀末～18世紀前半と思われる。

H区では、今回調査で初めて萩市側調査の8間石垣とされてきた石垣との関連が土層断面で確認できた（第10図）。

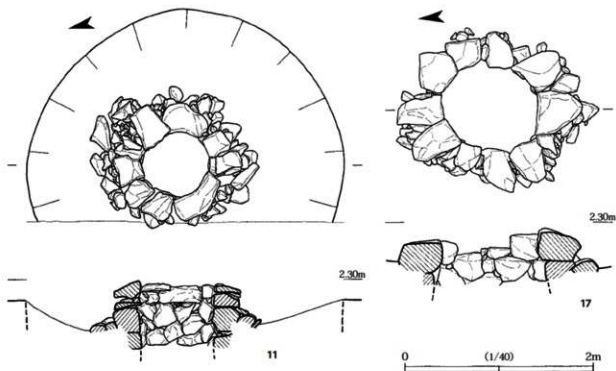
4面（第6～9図 図版7・8）

B区で確認された石垣63とその基底部に並ぶ礎石群の面を4面とした。4面関連の遺構はいずれも外堀掘削当初の地山砂堆上に構築されている。

E区トレンチ内の集石101直上層とSK86埋土は焼土である。堀割の低地で検出した数少ない4面関連遺構であるが、トレンチ内であるので、周辺の確認ができなかった。

石垣3以東の地山砂堆上に掘り込まれた柱穴群を検出した。ピット内からの遺物はないが、焼土化した壁土などが認められた。この焼土は直下に赤変を認めないため、火災処理土とするのが妥当である。

これらの遺構は初期町屋「懸作り」構造にかかわる遺構と思われる。今までの調査においても1地区F～I区の4面、3地区K区～M区の石垣150～153、A～E区の石垣164～169、4地区E～F区の石垣100、5-北-Y区石列263など同様の遺構が検出されている。いずれも焼土層直下であるか、地山砂層直上にある遺構である。4面（5-北区の5面）成立の上限は正確には言えないが出土遺物から17世紀前半から半ば、下限は少なくとも延宝6（1678）年を下らない。これは文献や絵図の表現がほぼ正確であることを証明している。以下、遺構別にその概要を述べる。



第12図 5-中区井戸実測図

井戸（第12図 図版10）

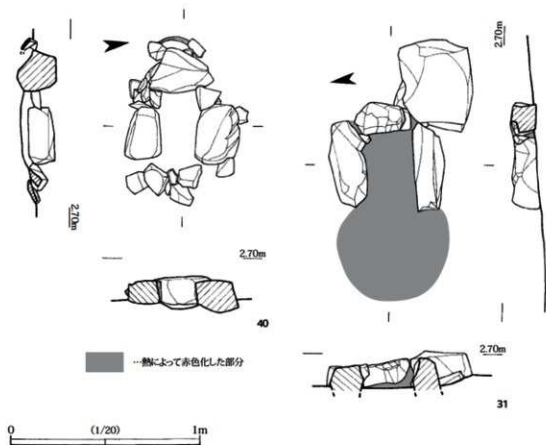
井戸は計3基検出した。SE15は1面、SE11・17は2面の遺構である。なお、15は調査前から表出しており、現代まで使われていた。SE11・17はいずれも石組みの井戸である。作業の安全上、底部まで確認できず、実測も上部のみにとどめた。

SE11は、Eの西端で検出された玄武岩質安山岩の石組み井戸で、井戸側は検出面で径64cmを測る。円形の掘形を持ち、平面プラン径は、3.6mで井戸はやや北に寄る。掘形周辺に方形状に礎石が配置されていた形跡があるので、上屋構造を持つ外井戸の可能性が高い。SE17はF区で検出された玄武岩質安山岩の石組み井戸で、井戸側は検出面で径1.1mを測る。掘形は周辺に埋甕26や石列20が検出されたため不明である。周囲に礎石や石列、便所と思われる埋甕が検出されたので井戸の上屋、施設の位置関係などが推定できる。

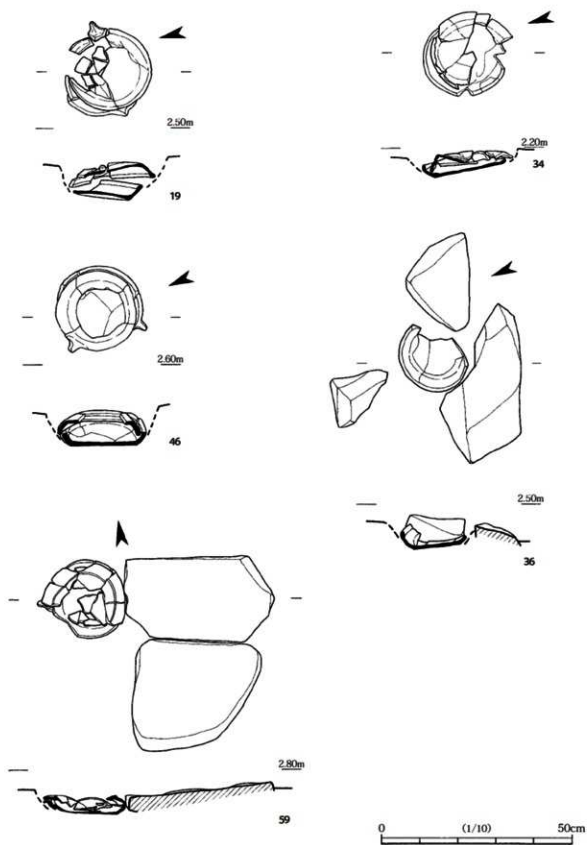
5-中区の特徴として、従来現道路よりに検出されてきた井戸側に花崗岩を使用した小振りな井戸が未検出である。こういう井戸は3面以下で見られる古い井戸に多いが、ここでは皆無であった。次に屋敷区画に比して井戸の数が少ない点があげられる。今までの調査で、井戸は各区画に1基以上検出されるのが普通であるが、8区画に対して3基は著しく少ないといえる。前述したようにE区以北の区画の井戸はもっと堀側に寄っているために調査区外になってしまっている可能性もある。

かまど（第13図 図版10）

かまどは2基検出した。いずれも2面に関連する遺構である。また、基礎構造である石組みのみ残り、壁体および竈口などは残っていない。かまど40はE区で検出された。焚き口を東に向け、石を「コ」



第13図 5-中区かまど実測図



第14图 5—中区胞衣埋納遺構実測図

の字形に配し、円形の燃焼室を持ったかまどであったと推定できるが石組みを残すのみであった。

かまど31はF区で検出されたかまどで同じく竈体や竈口は残存しない。焚き口を西に向け土間と推定できる区画中央やや東寄りに掘えられている。燃焼室床面は熱により著しく赤化している。建物内部のかまど配置を知る良好な遺構となった。

胞衣埋納遺構（第14図 図版10・11）

胞衣埋納遺構は、計6基検出した。「胞衣埋納」は胎児を包んでいた膜や胎盤（「胞衣」）を容器に入れて地中に納め、子供の健康や幸福を願う習俗で、萩地域では昭和30年代までこの習俗が残っていたという。

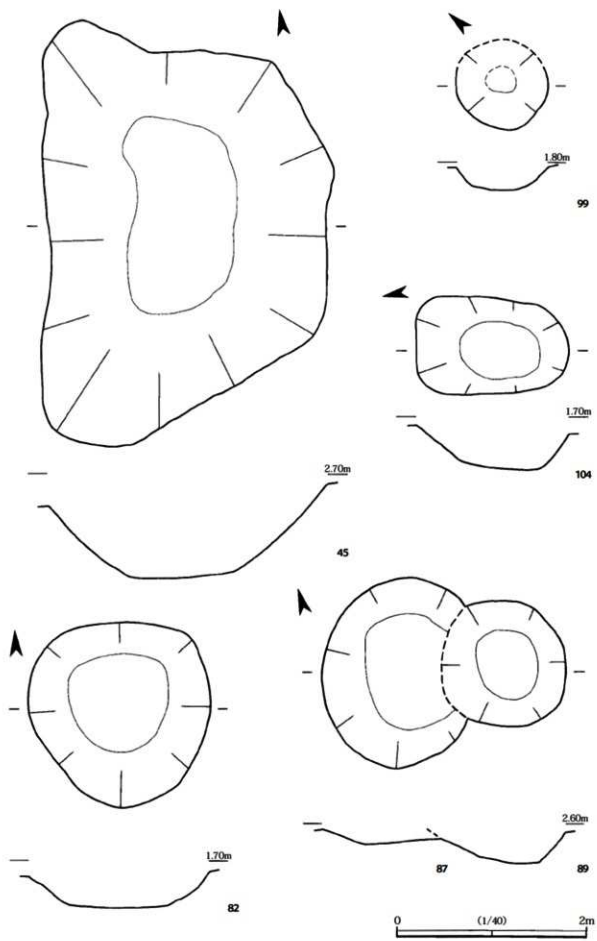
埋納容器は、いずれも外面に短い把手のついた径21cmにおさまる防府市佐野産の上節質焙烙で、火にかけて使用した形跡のあるものがないことから、この習俗のためのこの地域における専用容器であると思われる。この焙烙を上下合わせ11にして埋納する。位置は、建物遺構の石列や礎石付近に集中する傾向があるが、30のようにかまどの近くの例もある。整地面を浅く掘り込んで埋納されたと思われるが、埋納坑は検出できなかった。6基はいずれも2面で検出され、内5基がE、F区に集中する。こうした面や区画による偏りはこの遺跡共通の傾向である。

土坑（第15・16図 図版11・12）

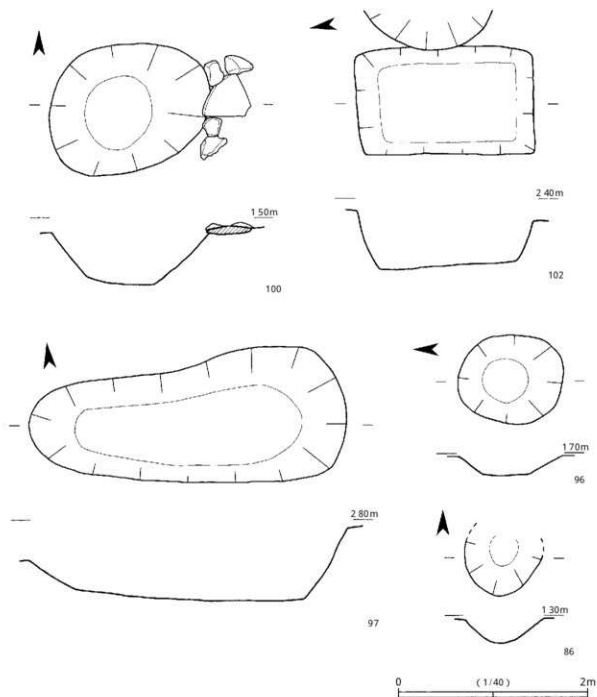
土坑は、11基検出した。1面で1基、2面で5基、3面で4基、4面で1基である。いわゆるゴミ穴で面別の多寡は町屋の盛衰を表しているといえる。

SK45はD区石垣3直下に検出した土坑で、長軸1.5m、短軸3.0m、深さ1.0mを測る廃棄土坑である。中から19世紀半ばの肥前磁器を中心に、かなりの量の陶磁器が廃棄されていた。一部近代に入るものも含まれていることから、石垣2・3が構築されて以後堀側へ敷地を伸ばす小改変は行われるもの、嵩上げのような大きな改変はされないままきたことを裏づける遺構である。SK82はC区西端に検出した。径1.9m、深さ0.4mを測る廃棄土坑である。京都深草産の花焼壺室の身（遺物No.68）をはじめ、18世紀前半から18世紀半ばの肥前磁器や在地の陶器を中心にした遺物を含む。京都深草で生産された「花焼壺」の容器には蓋に銘が入るが、これまでこれら蓋の出土例はあったが、身の出土例はなかった。底部に方形の穿孔があるので、使用後に植木鉢に転用されてはいるもののほぼ完形である。「深草四郎左衛門」銘の蓋が付くタイプと思われる。これら遺物の様相は2面の設定時期よりやや古く、前述のとおりこの区画を3面の遺構と考えた理由の一つとなっている。SK87・89は、B区で検出した土坑で、A区石垣29の直下に位置する。径2.0m、深さ0.3mのSK87を径1.3m、深さ0.4mのSK89が切っている。F側にSK102という方形の土坑がある。これら3つの土坑に含まれていた遺物には時期差はあまり見られない。大坂堺産の「御壺塩師堺伊織」銘の入る焼壺室をはじめとして17世紀末から18世紀初めに取まる肥前陶磁器などが主体である。

SK97はB区石列92直下に検出した土坑で、長軸3.3m、短軸1.4m、深さ0.8mを測る不定型土坑である。出土遺物は17世紀末から18世紀初頭にかけてのものが多い。このようなことからB区北半部分は周囲より1段低く、その後石垣2によって埋められる間に、幾度かの小改変を受けながら嵩上げされていったことがわかる。そしてそれらの改変は、延宝6（1678）年の大火以後、元文4（1739）年に堀幅が8間に改修されるまでの間であったであろうことが推定される。

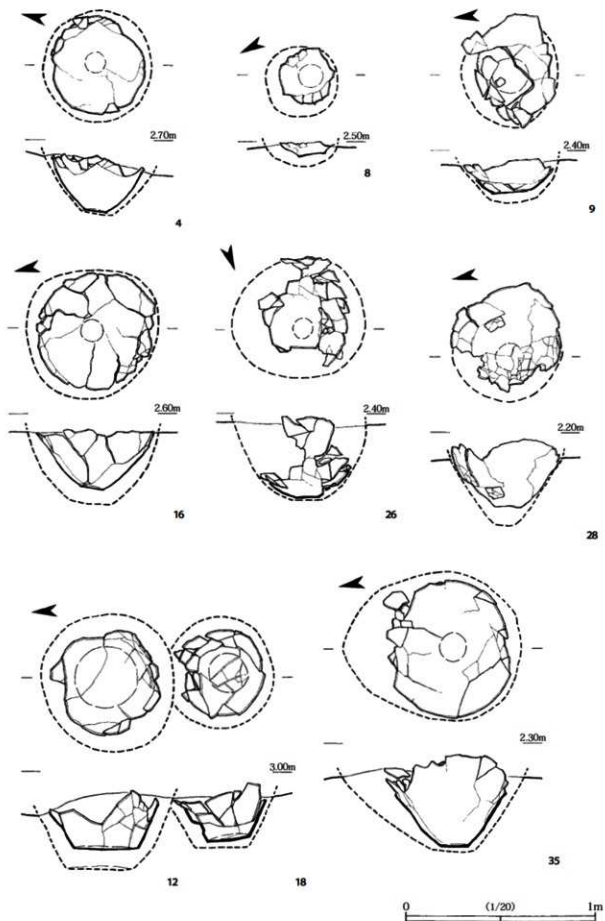


第15图 5-中区土坑实测图①

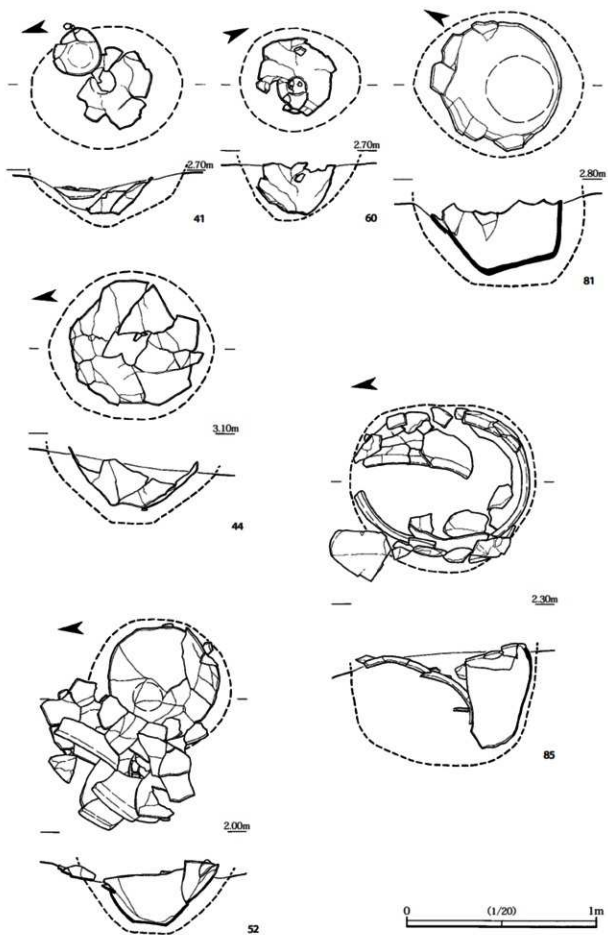


第16図 5-中区土坑実測図②

SK100は、H区堀側に検出した土坑で、径1.6m、深さ0.7mを測る。石垣116・119などと共に3面遺構を形作る。遺物は比較的少ないが、18世紀前半が中心で、3面の時期決定をする根拠とした。SK104は、F区堀側に検出した土坑で、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.5mを測る。F区2面の建物遺構の裏庭部分にあたり、埋塞や井戸とセットで建物配置を推定する良好な遺構である。SK86はE区集石101のすぐ西に検出した土坑である。3面下層遺構を確認するトレンチ内に検出され、上層を家の焼土と思われる焼土が覆い、砂層を掘り込んでいることから、石垣3以西における最下層遺構と思われる。遺物は数少ないが、肥前磁器を含まず、砂目のはいる肥前陶器、釉濁が上野高取系のものに似る陶器など他の土坑出土遺物と異なる様相を呈する。



第17图 5—中区埋瓮道槽实例测图①



第18图 5—中区埋瓮道构实测图②

埋甕 (第17・18図 図版12~14)

埋甕は19基検出した。1面6基、2面12基、3面1基である。その内1面検出の埋甕は石垣3直下もしくは付近に集中し、2面以下検出の埋甕は土坑や井戸のある敷地西側に集まる傾向がある。石垣2以北の区画については、埋甕81のみの検出であった。いずれの場合も上半部は欠損しているか壊された状態で検出された。内部に銭貨を伴うものもある。祭祀にともなうものか遺棄されたものかは不明である。多くの場合防府市佐野産の土師質大甕が使用され、内部に石灰分が付着していることから便槽として埋置されたものであることがわかる。この佐野産土師質大甕は埋甕以外の用途では検出されていない。便槽以外では使用されないものなのであろう。A区埋甕81、E区埋甕12・18は陶器の甕である。81・12が備前、18が肥前産の甕である。内部に石灰分などの付着がないことから、水甕のような便槽以外の使用が考えられる。

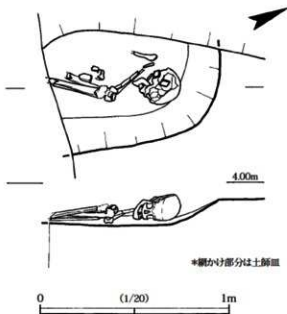
H区2面で検出した埋甕85は佐野産の土師質大甕である。検出時径0.8mを測る。廃絶時の状況をよく残した遺構である。埋甕内部に18世紀半ばから後半にかけての肥前磁器をはじめとする陶磁器類を伴っている。

近世以前の遺構 (第19・20図 図版8)

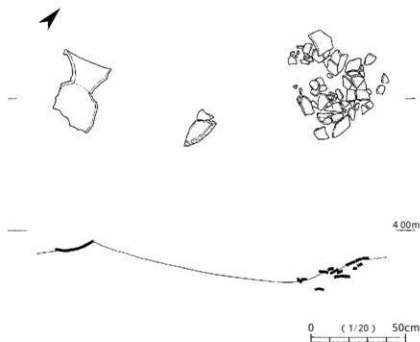
石垣3の東側、砂層中から人骨をとまなう中世土壙墓と弥生土器が散在する地点を検出した。墓は外堀の基盤層である砂層の上面から検出され、外堀または町屋形成時の石垣によって一部攪乱を受けている。弥生土器が散在するレベルはこの砂層中であり、中世以前に形成された砂層を遺構面とする。これまでも中世以前の遺物が出土したことはあるが、いずれも単体で検出されており、今回のようにまとまった遺構として検出された例はない。また、橋本川、松本川に挟まれた萩デルタ地内における江戸時代以前の遺構・遺物の発見もこれが最初であり、当地域の歴史を考える上で貴重な資料となった。

ST118はF区石垣3裏の砂層上面で検出された。4面以下の遺構で、外堀掘削時または石垣構築時に攪乱を受け、1/2しか残存していない。そのため墓壙の平面形や規模、標石などの上部構造は不明である。墓壙の深さは16cm。壙内には人骨の一部が検出された。人骨は、頭蓋、上腕骨、尺骨、肩胛骨、指の骨、左大腿骨、頸骨、腓骨が認められた。骨の表面は脆く、遺存状態はあまりよくない。埋葬姿勢は頭蓋や下肢骨の位置から、仰臥屈肢葬であろう。頭位は北で、頭面を東に向かせ、右側頭部に中世の土師甕を置いていた。指や上腕骨、尺骨から腕を顔の近くに置いた姿勢と見られる。性別は男性である。(付編1参照)

B、C区石垣63以東の砂層中から弥生土器の



第19図 5—中区 ST118実測図



第20図 5-1-C区弥生土器出土状況実測図

壺、高坏などが出土した。このうちB区は数点の出土であるが、C区からは壺（遺物No.318）がほぼまとまった状態で出土した。破片の端部の磨滅が見られないことから流れ込みとは考えにくく、この状態で遺棄されたものと思われる。I緑部が下方に折れ曲がる垂下I緑で、くびれた頸部にはシャープな断面三角突帯が4条貼りつく弥生時代中期の壺である。この地点の現道路を挟んだ東側一帯に弥生時代の遺構が埋存する可能性を小唆している。

参考文献

- 萩市史編纂委員会『萩市史』1983
- 萩市教育委員会『萩城跡外堀調査報告書』1988
- 財団法人山口県教育財団 山口県歴史文化財センター『萩城跡（外堀地区）I』2002
- 財団法人山口県教育財団 山口県歴史文化財センター『萩城跡（外堀地区）II』2001
- 田端実夫『石垣：ものと人間の文化史15』法政大学出版局 1975
- 北垣聡一郎『石垣昔話：ものと人間の文化史38』法政大学出版局 1987
- 江戸陶磁十器精究グループ『江戸出土陶磁器・土器の諸問題II』1996
- 関西近世考古学研究会『焼塚の辰：もの始まり場』2000
- 江戸遺跡研究会『図説江戸考古学研究事典』柏書房 2001

(2) 平成16年度の調査

A G地区(第21~41図 図版15~22・24~30)

6地区は外堀の南端部にあたる。調査前の地表は現道路とほぼ同じ高さで、南側が徐々に下がり、新堀川へと続く。南北の高低差は約2.5mである。D区はコンクリートブロック壁に囲まれた敷地で周囲より2~3m低く、近・現代の攪乱を大きく受けている。これを挟むようにA~C区、E区以南が埋め立てられ宅地化されていた。G区以南は道路が外堀側に緩やかに屈曲しており、調査対象範囲は最南のO区では幅5m程度となる。トレンチ調査により、近・現代の整地層が表土として約50cm堆積しており、その下に江戸時代の遺構面があることが判明した。

以下、各遺構面の概略を述べる。

1面(第21図)

表土や近・現代家屋の基礎などを除去した時点で検出された遺構面を1面とした。幕末~明治期の生活面ではほぼ全域に遺構が広がるが、A~D区は明治以降の宅地化によって攪乱を受けており、町屋群の全容を確認することはできなかった。

A~D区では現道路と平行な石垣3を検出した。これは5地区の石垣3とはほぼ同一直線上に位置するもので、一部には近・現代のコンクリートブロック壁が貼り付いていた。これに伴う裏込め土は遺物をほとんど含まないが、下段に小さな土坑2基が検出され、広東碗等の遺物も出土した。B、C、D区にはそれぞれ1基ずつ円形井戸が存在する。これらは宅地化による埋め立て直前まで使用されていたと考えられる。C区で胎衣埋納遺構2基、D区で埋塞遺構2基を検出したが、敷地を区画する明確な石垣・石列は確認できなかった。

E区は石垣33~35・62により高上げされた凹型のテラス状の敷地である。これらの石垣検出時に客土層から大量の遺物が出土し、その中には幕末期の萩ガラスとみられる製品も含まれていた。

F、G区は石列32以东が建物の範囲と考えられる。建物の西から井戸2基、埋塞遺構1基を検出した。G区には胎衣埋納遺構12基が集中する。

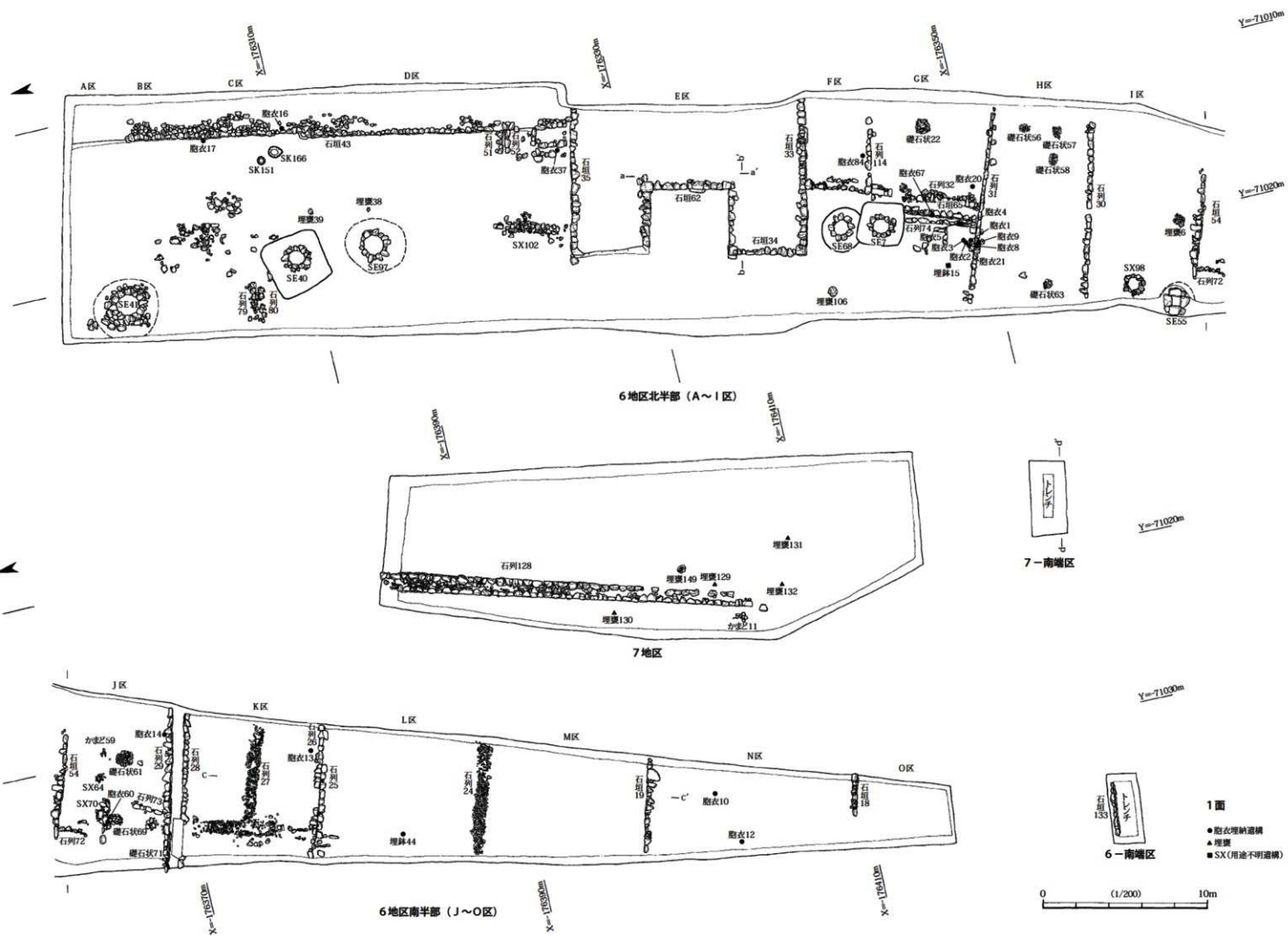
G区以南では敷地を区画する東西方向の石垣・石列の幅が少なくなる。これは区界となる石垣・石列が道路に直交するため、道路の屈曲に伴うものである。すなわち1面段階の道路は現在と同様に屈曲していたことを示している。

2面(第22図 図版15・16・18~22)

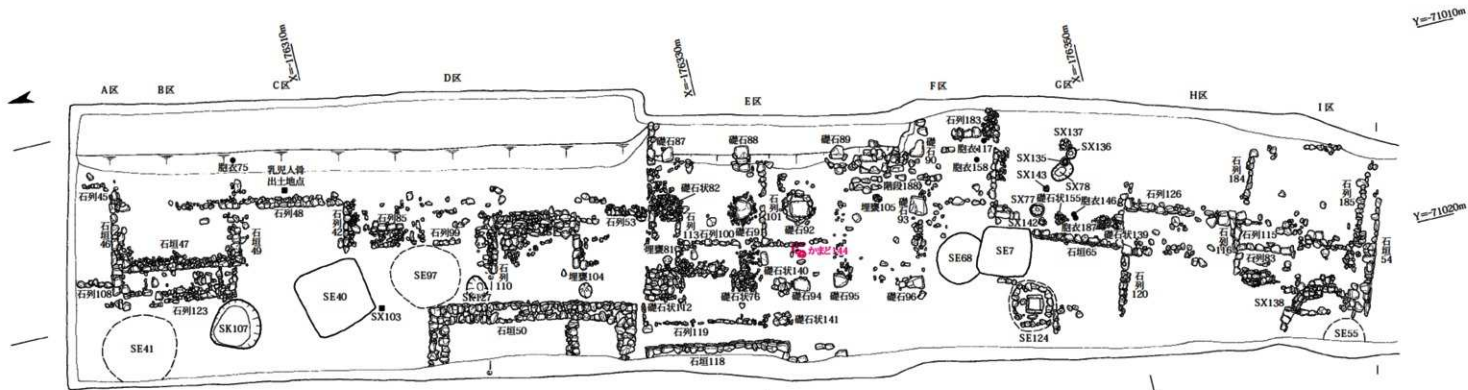
1面の遺構をすべて除去して検出した遺構面を2面とした。18世紀後半から19世紀前半にかけての生活面である。町屋はA~I区のみが存在し、J区以南では外堀の埋め立ては行われているものの生活の痕跡はみられない。

A~I区は東西方向の石垣・石列によって敷地の区画が明らかとなる。11区画に2~7間(約4.0~14.0m)の間口をもつ大小の町屋が存在したと推定される。各区には南北方向の石垣・石列も存在するが同一直線上に並ぶものではない。これらは外堀への傾斜に対して土留めのために構築されたもので、町屋の所有者が各々で堀を埋め立てて進出したことを示す。

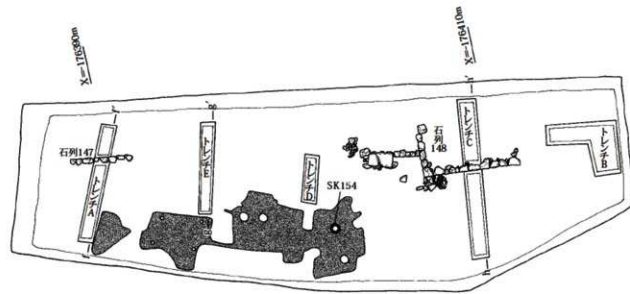
B、E、I区では建物跡が良好な形で確認された。B区SB190はコの字形の石垣上に構築された建物で差し掛け状の部分が付設する。建物の扉側には廃棄土坑も検出された。E区SB189は大型礎石



第21图 6・7地区遺構配置図①

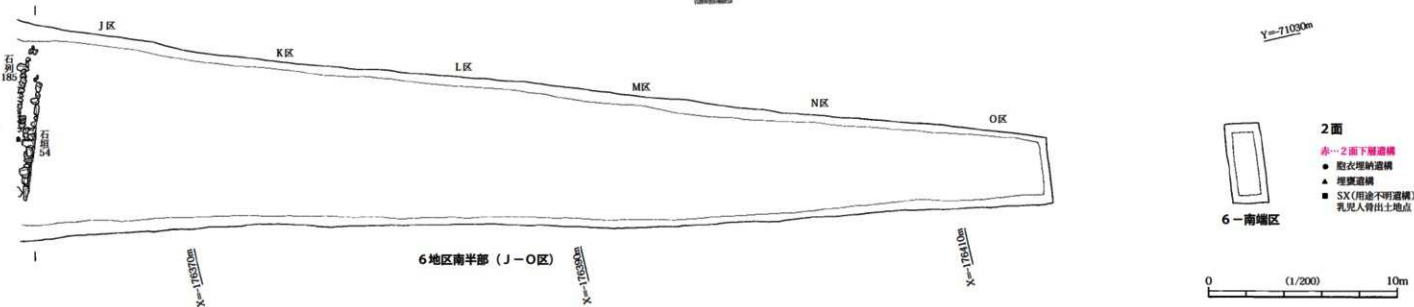


6地区北半部 (A-I区)



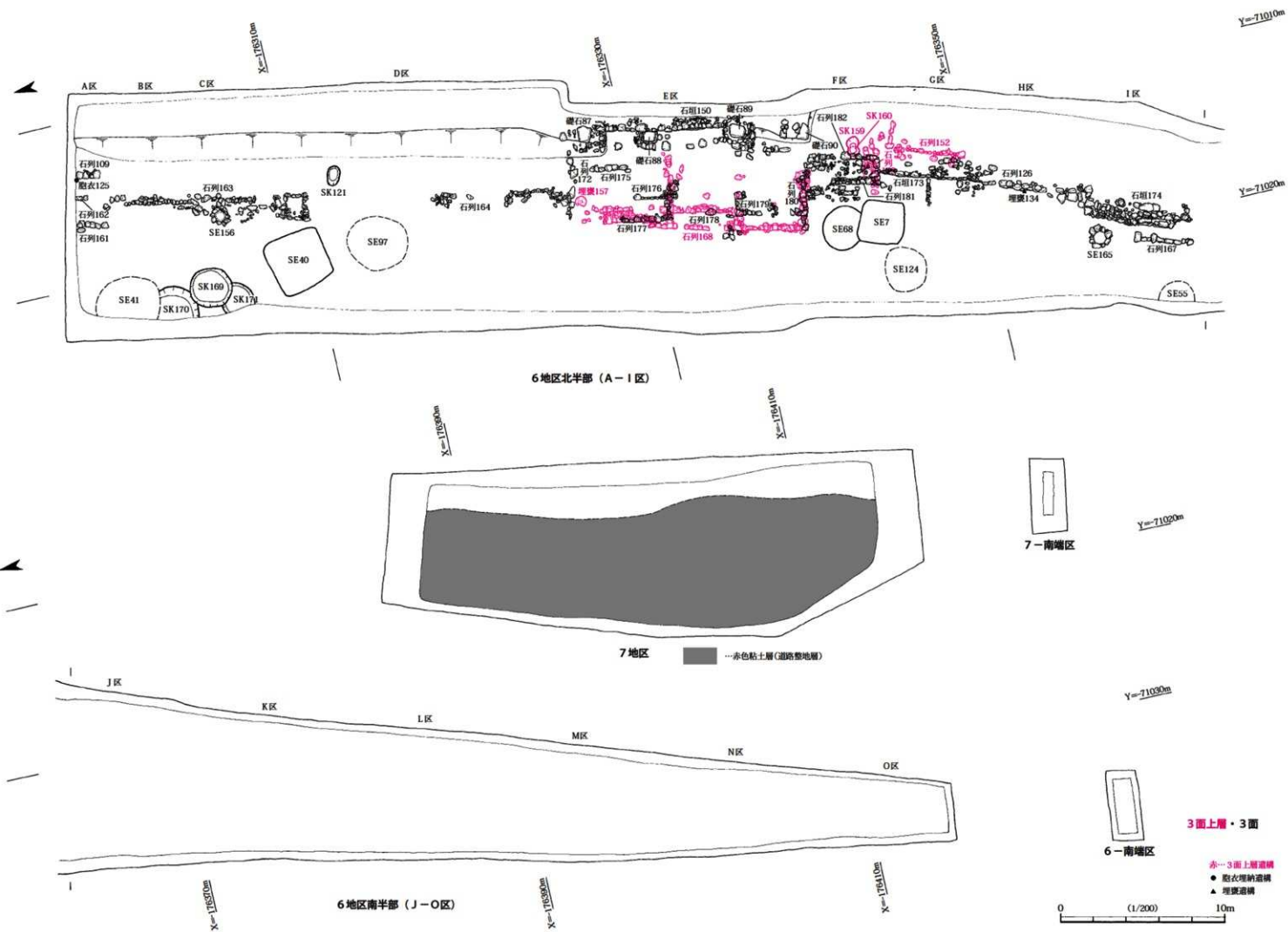
7-南端区

7地区
●...礫を含む暗オリーブ灰色敷地層

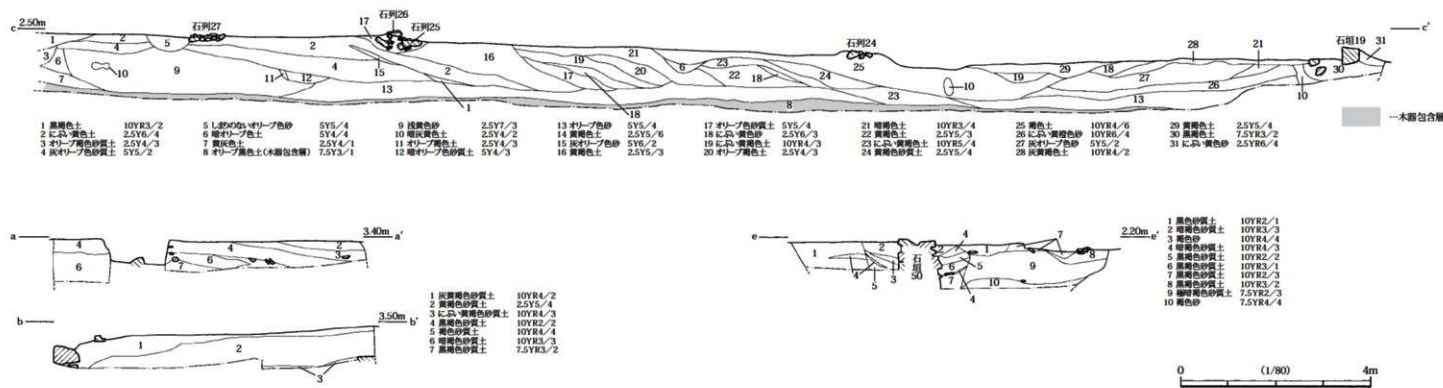


6地区南半部 (J-O区)

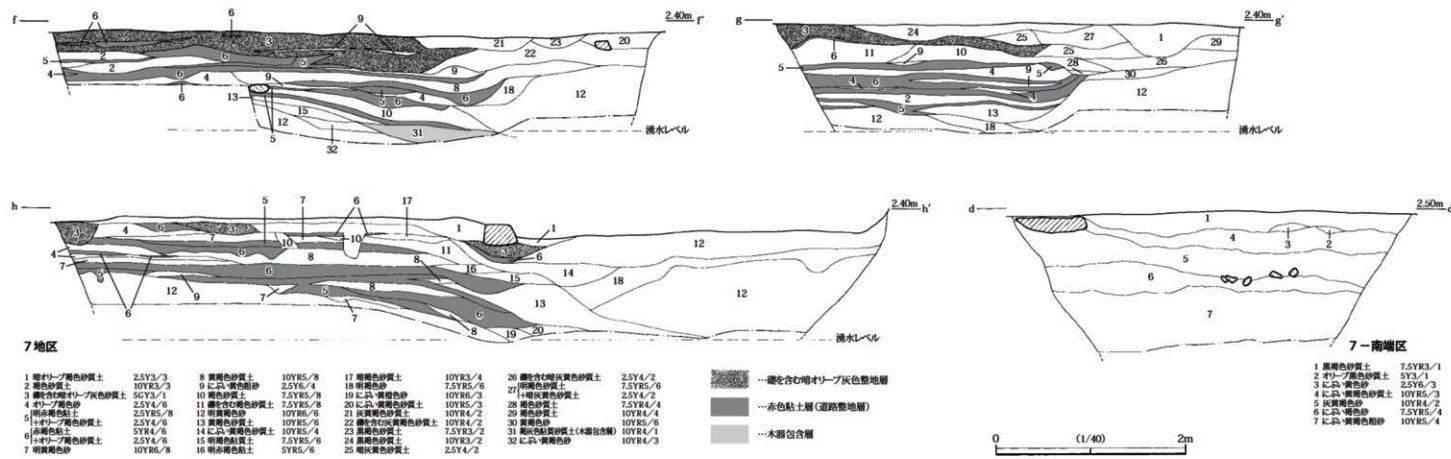
6-南端区



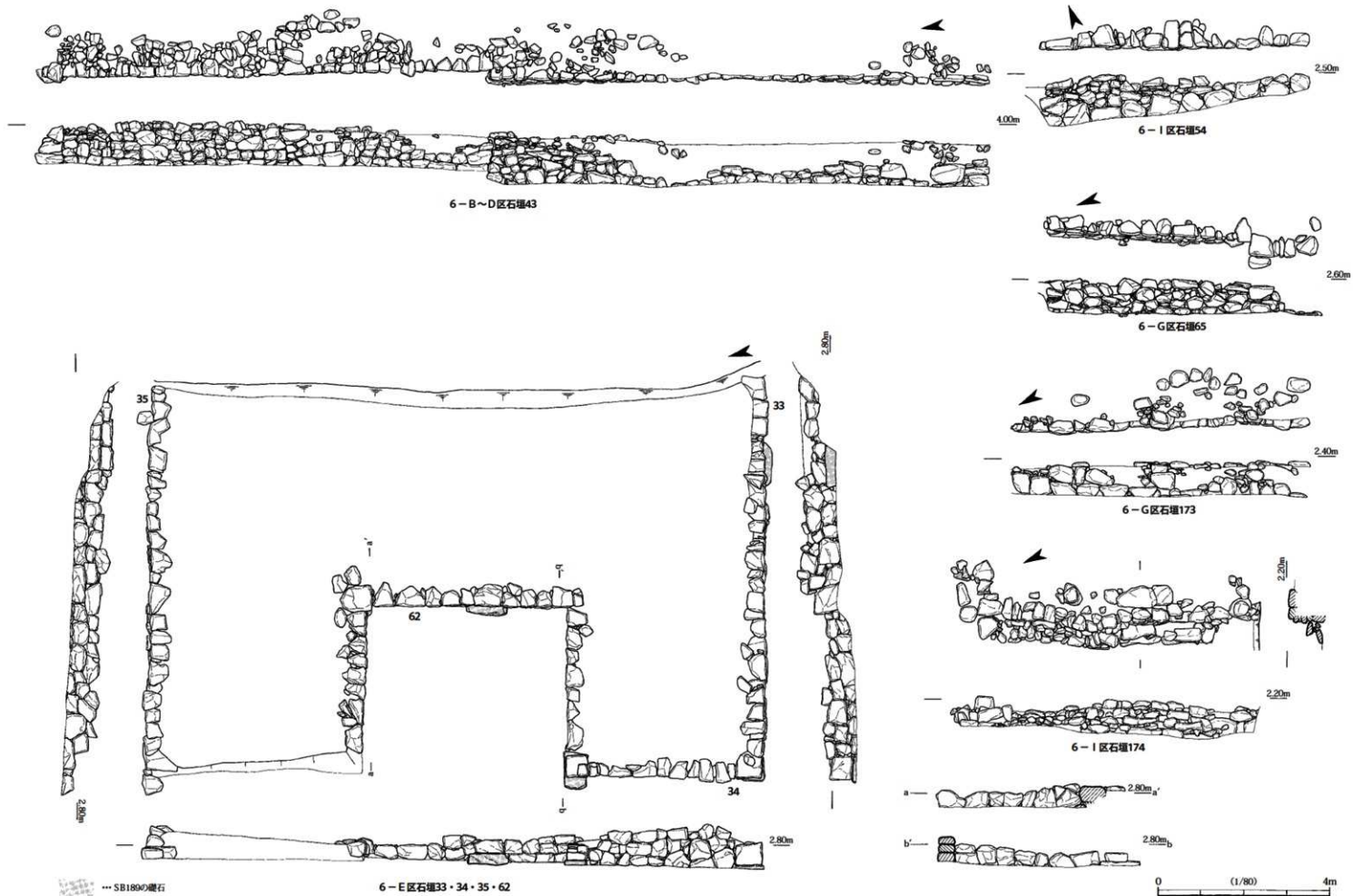
第23図 6・7地区遺構配置図③



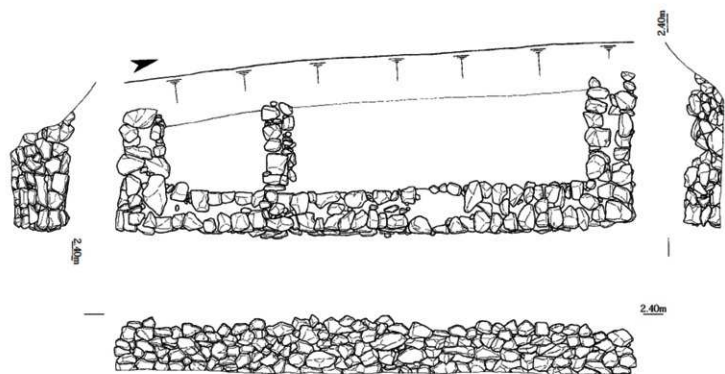
第24図 6地区土層断面図



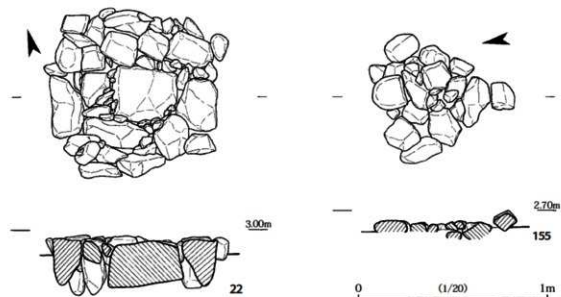
第25図 7地区・7-Nanboku地区土層断面図



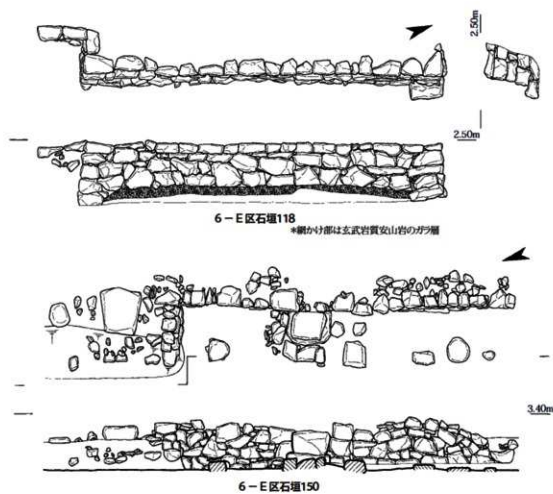
第26图 6地区石垣实测图①



6-D区石垣50



第28図 6地区礎石状遺構実測図



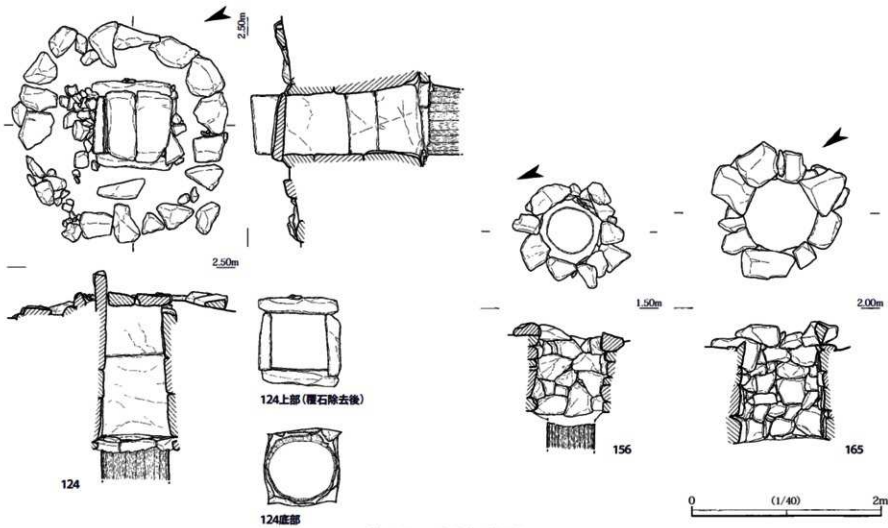
6-E区石垣118

*網かけ部は玄武岩質魚山岩のガサ層

6-E区石垣150

0 (1/80) 4m

第27図 6地区石垣実測図②



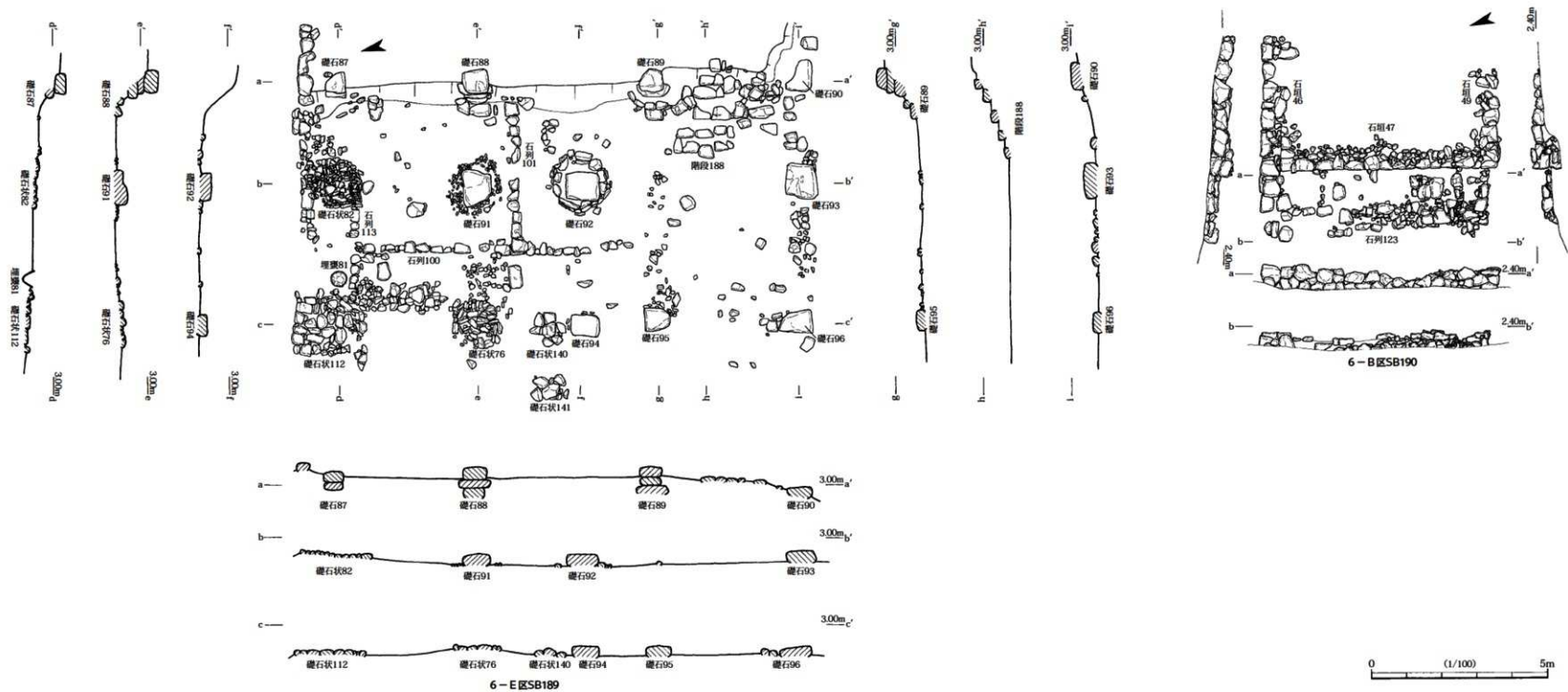
124上部(覆石除去後)

124底部

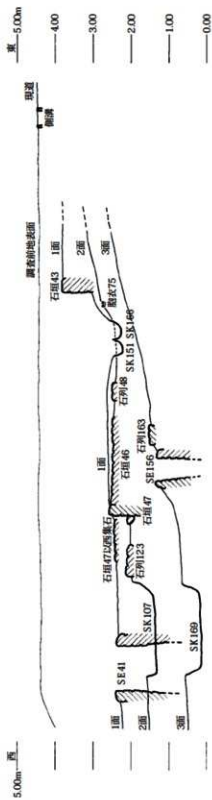
156

165

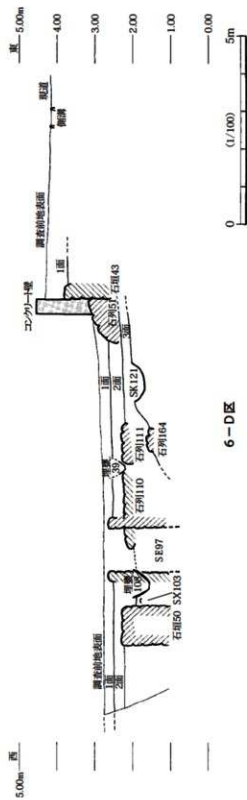
第29図 6地区井戸実測図



第30图 6地区建物跡実測图

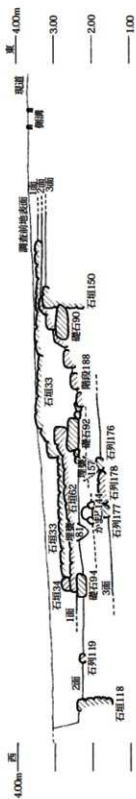


6-B・C区

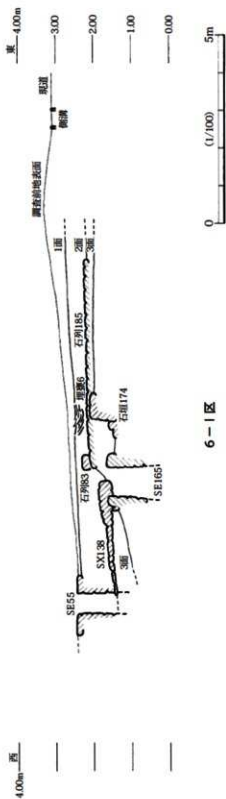


6-D区

第31図 6地区断面模式図①



6-E区



6-I区

第32图 6地区断面模式图②

を用いた高床建物で、階段・洞を伴う。礎石の規模から瓦葺きの大規模建物が推定されるが、建物躯体に伴う大量の瓦をどう処理したのかは不明である。周辺に廃棄や転用の痕跡はみられない。I区はこの時期に存在した外堀最南端の建物である。石垣54により嵩上げされた敷地に建てられたもので、排水施設と考えられる SX138を伴う。(第31・32図)

D、E区では上蔵の基礎とみられる地下に埋設された石垣が検出された。2面検出時の出土遺物から考えてもE区が6地区における富裕層の居住地であった可能性が高い。

J-O区では南に傾斜した土層が確認され、堀の埋め立てが北から徐々に進んだ様子が判明した。なお、M区の一部に逆に傾斜した土層も確認されており、部分的に堀の浚渫上を南から埋めた可能性もある。(第24図)

3面 (第23図 図版17・19・20・22)

2面の遺構をすべて除去して検出した遺構面を3面とした。17世紀後半から18世紀前半にかけての生活面とみられる。遺構の広がりや2面とはほぼ同様であるが、南半では外堀の埋め立ては行われていない。堀の覆みであったと考えられ、漆椀・下駄・木筒等の遺物を含む有機物層(以後木器包含層と表記)が確認された。

A～D区では上留めと考えられる南北方向の石列、隠衣埋納遺構1基、井戸1基、土坑4基を検出した。E～I区は最も残存状況が良く、初期町屋の建物構造である「悪作り」に関わる石垣や礎石、間仕切りや土留めの石列、埋蔵遺構2基、井戸1基、土坑2基が検出された。E区礎石87～90は積み増しされ、2面SB189、1面石垣33～35・62へと長期にわたり建物基礎として機能してきたものである。また、E～G区ではわずかなレベル差で軸の異なる石列が検出されたことから、建物の改装が行われたことが推測できる。

この時期の町屋の家屋部分はA～D区では石列163・164以東、E区では石列177・179以東(後に石列168まで進出)、F区では石列181以東、G～I区では石垣173・石列126・石垣174以東と推定される。E区以外では同時期の5～南区の家屋部分より3～4m東側になる。これは外堀南端である6地区では海拔高度が低いため町屋の進出が他地区より遅れたこと、町屋の所有者が各々で堀を埋め立てて進出したことを示しており、絵図の変遷とも合致する。

調査の最後にC区を東西に横断するトレンチを掘り込み、外堀東岸の地砂傾斜面とみられる約30°の傾斜をもつ灰白色砂州を確認した。

以下、遺構別にその概要を述べる。

建物跡および石垣 (第26・27・30図 図版16・19・20・22・24)

B区SB190は石垣上に構築された蔵のような建物で2面に属する。北面は石垣46、西面は石垣47、南面は石垣49となる。東はB～C区にまたがる石列48以西の範囲とみられるが、この石列はB区においては北半が残存していない。堀側には石垣47に平行な石列123があり、差し掛け状に張り出していた部分があったと考えられる。建物の規模は間口6.6m、奥行き3.2m、差し掛け状の部分は幅6.4m、奥行き1.4mを測る。

E区SB189は大型礎石を用いた高床建物で2面に属する。10基の礎石と3基の礎石状遺構が南北3列、東西5列に整然と並び、間仕切りの石列113・100・101が縦横に走る。建物の北西端には厨とみ

られる埋窓81が埋置される。道路側に並ぶ礎石87～89は2～4段積み上げられ、下段に降りるための階段188が付設する。これらの礎石の下部は礎石90とともに3面段階から設置されていたと考えられる。87～90以外の礎石や礎石状遺構については大きなレベル差は見られない。礎石状遺構140・141は配置や規模から考えて、この建物に付設する何らかの施設に関するものであろう。建物の規模は両口13.5m、奥行き7.0mで6地区最大である。

1面に属する石垣43・33～35・62は玄武岩質安山岩を主体とする。石垣43はB～D区にまたがる全長27mを超えるものであるが、高さは最大でも1.2m程度で石材も大きくない。E区石垣33～35・62はSB189の大型礎石90・96・95・92に積み増して構築されたもので、凹型のテラス状に70～90cm嵩上げされている。

1区石垣51・G区石垣65は2面に属するが、1面段階でも石列として区界や上留めの役割を果たしていたと考えられる。玄武岩質安山岩と花崗岩を併用しているが、花崗岩を主体とする。

2面に属するD区石垣50・E区石垣118は玄武岩質安山岩を主体とする。石垣50は内外両側に面をそらえた長軸11m、幅1mのもの、石垣118は上端が水平に整えられた長さ8mのものである。両者とも基底部は遺構面より1m以上深く、地下に埋設された土蔵基礎と推定されるが、調査対象範囲の両端に位置しているため全容を確認することはできなかった。

3面に属する石垣150・173・174は花崗岩を主体とする。E区石垣150は礎石87～89の下段に沿って南北に走り、高さは1m程度である。G区石垣173は石垣65を除去後に検出したもの、1区石垣174は石列83の下層に位置するもので、いずれもII区石列126と同一直線上に並ぶ。これらの石垣は外堀掘削当初の法面傾斜を利用して構築されたと推定され、土留めと同時に外堀地区の初期町屋にみられる「懸作り」に関わるものと考えられる。

礎石・礎石状遺構（第28図 図版24）

礎石には墨線や数字の墨書が認められることがある。G区で検出された礎石に「++」・「+」の墨書が確認された。「++」は数字の20、「+」は墨線が礎石中央で直交するもので、綿密な設計に基づいて建物の造営を行うため、柱の位置を指示したものと考えられる。残念ながら、これらの礎石は原位置を留めておらず建物の痕跡は不明である。

礎石状遺構はE区SB189に含まれる大型のものを除いて10基検出した。分布状況はG区3基、H区4基、J区3基である。G区礎石状遺構22は1面に属する。自然石を組み合わせた1辺90cm程度の正方形の石組で、中央に40cm大の石を配して水平な面を構成する。石材は玄武岩質安山岩が主体である。これ以外の礎石状遺構は全て50～70cmと小型で中央部にも特に大きな石はみられない。G区2面に属する礎石状遺構155のような不整形のものも多い。

井戸（第29図 図版25）

円形井戸7基、方形井戸2基を検出した。このうちには調査前から地表に出ていたもの（SE55）や塩化ビニルパイプを用いた廃棄祭祀が行われ、現代まで利用されていたことがわかるもの（SE7）も含まれる。これらの新しい井戸を構築する石材は玄武岩質安山岩が主体である。

計9基のなかに墜体の積み増しが明確に確認できるものはない。円形の掘形が確認されたものが1基（SE68）、方形の掘形が確認されたものが2基（SE7・40）ある。本遺跡は遺構面が基本的に砂

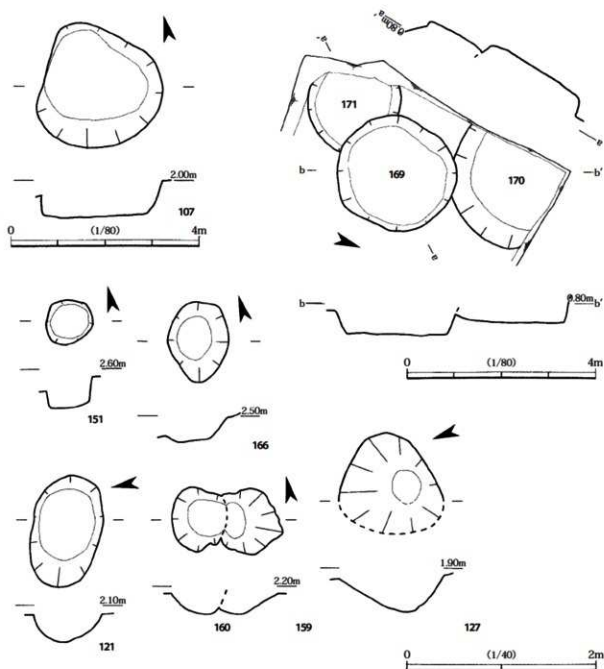
層であり、石組井戸は崩落の危険をはらむ。そのため、基底部の調査は壁体の安定したものに限られる。ここでは2面・3面に属する井戸について述べる。

G区SE124は2面に属し、玄武岩質安山岩を板状に加工した切石を組み合わせた方形井戸である。壁面と同じ石材で蓋をした状態で検出された。蓋に使用された石材には方形に組むための柄状の加工痕もあった。深さは2.5mを超え、井戸底には水溜として木桶が据えられている。周囲には円形に石が埋置され、他の井戸とは異なる様相を呈する。

C区SE156・I区SE165は3面に属する井戸である。この時期の井戸の石材は花崗岩が主体となる。両者とも深さは1.5m程度で、SE156は井戸底に水溜として木桶が据えられていた。

土坑（第33図 図版28・29）

土坑はB～D区に多く、計10基検出した。B区SK107は2面に属し、SB190の裏庭に位置する直



第33図 6地区土坑実測図

径2.5mの円形土坑である。17世紀後半～18世紀の肥前磁器など多くの遺物が出土した。この直下には3面に属するSK169があり、南北に隣接するSK171・170を切る。SK169はSK107とはほぼ同じ形・大きさであり、同一遺構の上層・下層の可能性もある。SK170・171は調査対象範囲の西端に位置しているため完掘できなかったが、いずれも直径2～3mの円形と推定される。SK169は多くの遺物を含み、萩・須佐の陶器、肥前磁器に加え、漆碗などの木製品も出土した。SK170・171からの出土遺物は少ない。

C区の道路側に位置するSK151・166は1面に属する小型土坑である。SK151は直径50cmの円形、SK166は長径80cm、短径60cmの楕円形、いずれも深さ25cm程度であるが、土師器・瓦質土器・陶磁器などの遺物を含む。

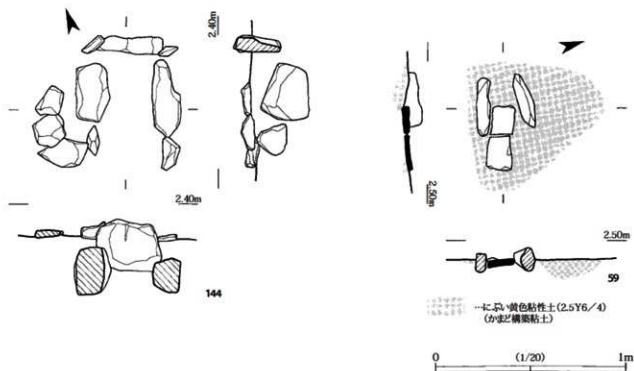
D区の外堀側に位置するSK127は2面に属し、直径110cmの円形である。D区の道路側に位置するSK121は3面に属し、長径120cm、短径70cmの楕円形である。この2つの土坑からは京・信楽の陶器などが出土した。

F区の3面上層にはSK160がSK159を切る形で、直径60cmを測る円形土坑が隣接して存在するが、出土遺物は少ない。

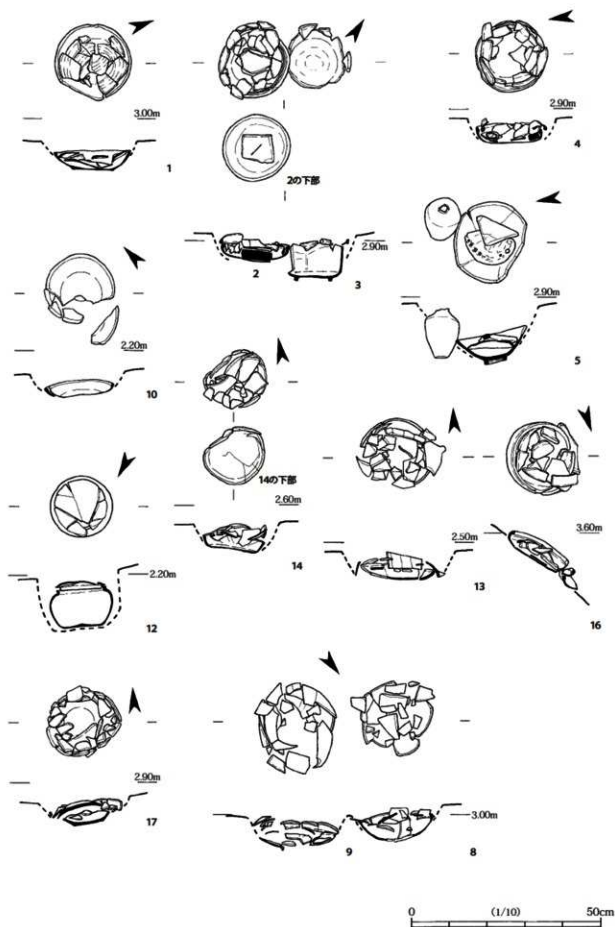
今回検出された土坑には、1地区の調査で見られたような共同廃棄土坑を想定させる大型のものはない。SK107・169を除き、継続して使用された可能性も低い。いずれも各町屋において短期に使用された廃棄土坑と推定される。

かまど (第34図 図版25)

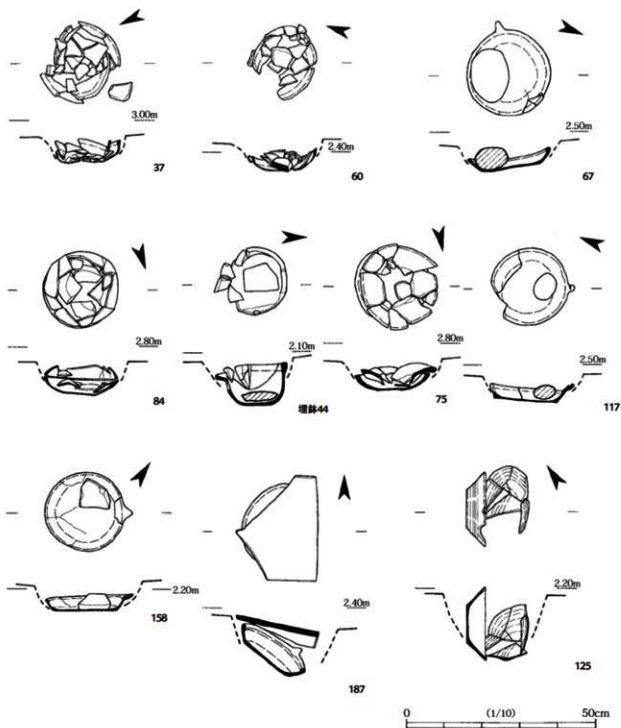
小型のかまどを2基検出した。いずれもコの字形に配した石組を中心として円形の燃焼室が構築さ



第34図 6地区かまど実測図



第35図 6地区胞衣埋納遺構実測図①



第36図 6地区胞衣埋納遺構実測図②

れたものと考えられるが、壁体や竈口を残すものはない。J区かまど59は1面に属する。石組は側面の一部のみ残存しており、幅は15cm前後、床面には平瓦を敷く。焚き口は東側に開く。石組周囲から北側にかけてかまど構築土とみられる黄色粘質土が残存する。E区かまど144は2面石列100の直下に位置する。石組は奥行き60cm、幅25cmで、焚き口は南側に開く。石組の一部は失われているが、周囲はよく焼け締まっている。

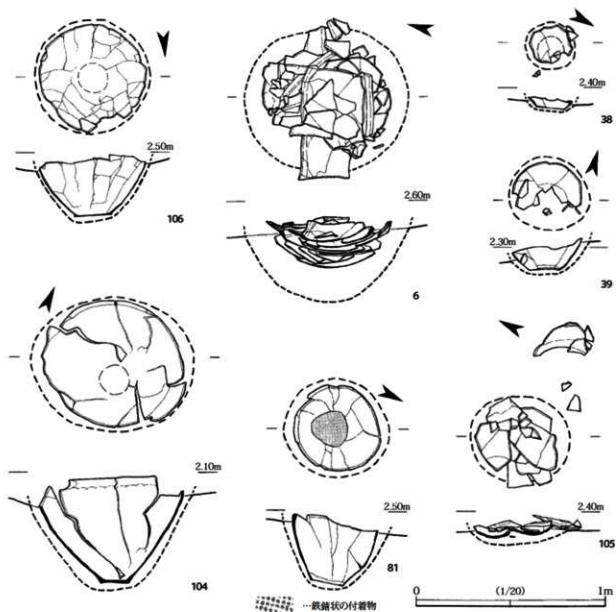
胞衣埋納遺構 (第35・36図 図版25～28)

胞衣埋納遺構は計26基検出した。分布状況は12基がG区に集中し、出土層位は20基が1面である。埋納位置は建物遺構と思われる石列や礎石付近に集中する傾向がみられ、家屋の床下や軒下のような

場所に該当する。整地面を浅く掘り込んで埋納したと考えられるが、埋納坑が検出できたものは胎衣埋納遺構12のみである。

胎衣埋納容器は土師器の焙烙2点を合わせ口にするもの（胎衣埋納遺構2・4・9・13・14・16・37・60）が最も多い。次いで土師器の鉢2点を合わせ口にするもの（胎衣埋納遺構1・8・17・75・84）も多く出土した。土師器の蓋付きの壺を使用したもの（胎衣埋納遺構12）、土師器の焙烙に平瓦で蓋をしたもの（胎衣埋納遺構187）、土師器の鉢を使用したもの（埋鉢44）、陶器の鉢を使用したもの（胎衣埋納遺構3・5）もあった。土師器の皿2点を合わせ口にするもの（胎衣埋納遺構125）は今までの出土傾向から古いタイプと判断できる。

胎衣埋納遺構が標識等を伴うことはなく、発見時に上部容器を損壊する例も多い。上部容器を確認できなかったもの（胎衣埋納遺構3・5・67・117・158・埋鉢44）については埋置の状況や納入物から胎衣埋納遺構と判断した。攪乱を受け、原位置を留めていないもの（胎衣埋納遺構16・187・125）については容器の特色から胎衣埋納遺構と判断した。



第37図 6地区埋亮遺構実測図①

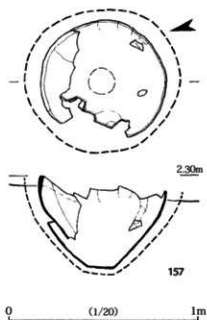
胞衣埋納遺構は納入物が残存しないものが大半であるが、祭祀儀礼の産石とみられる円礫を入れたもの（胞衣埋納遺構67・117）、産石と同様の意味を持つとみられる角礫や瓦片を入れたもの（胞衣埋納遺構2・4・5・埋鉢44）、クローワビの貝殻をかぶせるように入れたもの（胞衣埋納遺構5）、白磁瓶を添えたもの（胞衣埋納遺構5）も確認された。なお、胞衣埋納遺構2の瓦片には縫い針がのせられており、女兒の成長を折るものと推測される。本遺跡の胞衣埋納遺構では性別が推定できる初めての例である。

胞衣埋納容器と判断した焙烙の中に煤の付着がみられるもの（胞衣埋納遺構158）がある。通常は胞衣埋納容器には未使用品を用いるが、4地区において調理に使用したものを上部容器として転用した例がある。ただし、下部容器への転用例はなく、今後の検証が必要であろう。

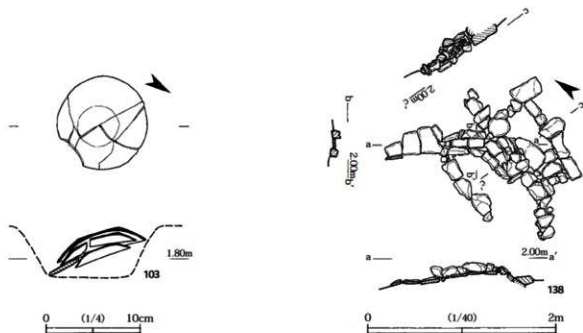
埋燹遺構（第37・38図 図版29・30）

埋燹遺構は計10基検出した。埋燹106・6・38・39は全て土師器で1面に属する。F区埋燹106はSE68の堀側に埋置されており、I区埋燹6は意図的に破砕し埋めたものである。いずれも内面に石灰分の付着がみられることから便槽として使用された可能性が高い。D区埋燹38・39は明治以降の宅地化によって攪乱を受けており底部のみ検出された。それぞれSE97・40の東に隣接して埋設されており、この時期のD区に複数の町屋が存在した可能性がある。

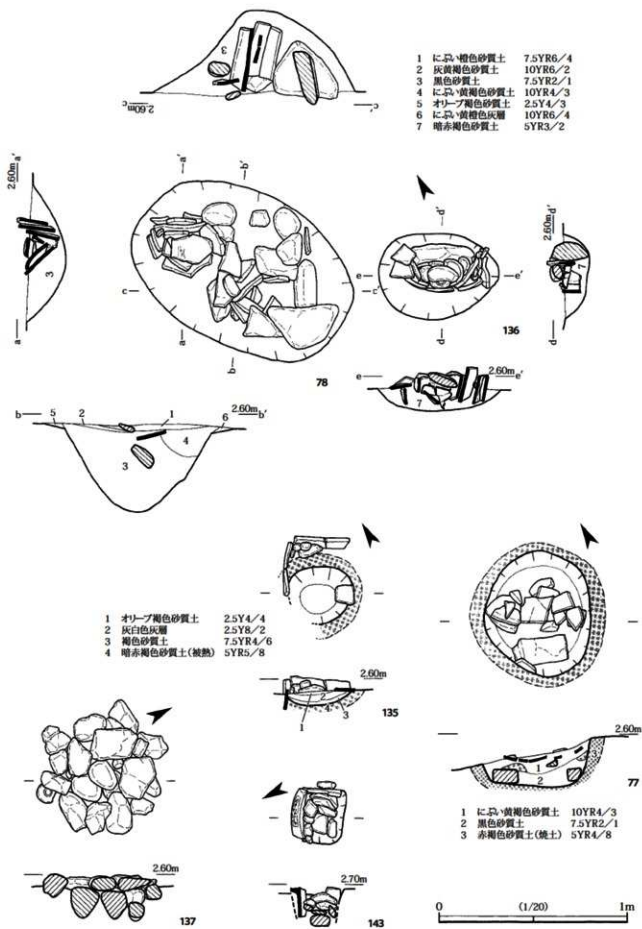
埋燹104・81・105は2面に属する。D区埋燹104は土師器で、石垣50の東に埋設されていた。屋外



第38図 6地区埋燹遺構実測図②



第39図 6地区用途不明遺構実測図①



第40図 6地区用途不明遺構実測図②

の便所遺構と考えられる。E区埋甕81は土師器で、SB189の間仕切りの石列を伴う。内面に石灰分が付着しており、屋内の便所遺構と考えられる。E区埋甕105は陶器で、破碎された状態で検出された。用途は不明である。

E区埋甕157は土師器で3面に属する。内部から陶器碗が出土した。用途は不明である。

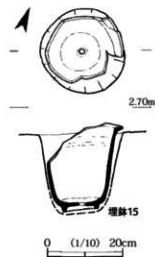
その他の遺構 (第39~41図 図版30)

用途不明遺構としたものは18基あるが、ここでは2面に属するものについて述べる。D区SX103は土師器皿3点を伏せて重ねたもので、上から直径10cm、8.5cm、6.5cmと大きさが異なる。地鎮祭祀に関するものと推定される。I区SX138は建物から少し離れて堀側位置する。長方形の石組から湾曲しながら北西に傾斜した水路の様相を呈する。水路の壁面と床部は玄武岩質安山岩を板状に加工した切石で組まれており、洗い場を備えた排水施設のようなものと考えられる。

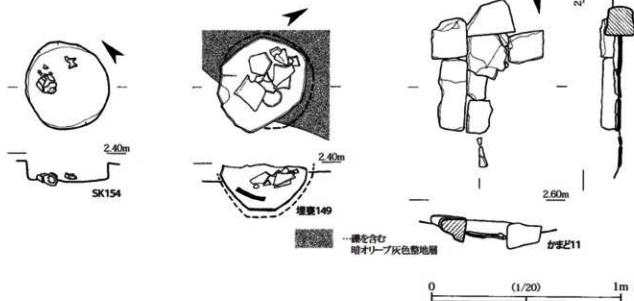
G区東半には用途不明遺構が集中する。SX78・136・143は整地面を掘った後、瓦や扁平な礫を立てた状態で埋設してある。SX136には中央部に伏せた陶器鉢があった。用途は不明である。SX135・77も同様の遺構であるが、被熱の痕跡がみられるため、上部に炉のような施設があったとも推測できる。SX137は円礫を組み合わせたもので陶器の蓋が含まれていた。用途は不明である。

G区埋鉢15は1面に属する遺構で、陶器の植木鉢を埋置したものである。用途は不明である。

C区で乳児人骨(Y-2)を検出した。出土層位はレベルから2面と設定したが、砂層に位置し周囲に時期を確定できる遺構もないため3面の可能性も考えられる。頭蓋と上半身のみであるが、残存状況から伏臥とみられ、新生児~3ヶ月の乳児と推定される。(付編1参照)



第41図 6地区用途不明遺構実測図③



第42図 7地区遺構実測図

B 7 地区 (第21-23・25・42回 図版16・23・31)

7 地区は外堀側に屈曲した現道路の東側に位置し、近・現代は畑地化されていた。耕作土を除去した時点で検出した面を1面とした。幕末～明治期の生活面である。南北方向の石列、かまど1基、埋甕遺構5基を検出したが、建物の痕跡は確認できなかった。石列128は玄武岩質安山岩を主体とした全長23m、幅0.8～1.2mの大規模なものである。東西の両側に面をもち、土塀基礎と考えられる。かまど11はコの字形の石組で床面に平瓦を敷いた小型のものである。焚き口は北側に開く。埋甕149は土師器で2面の道路整地層を掘り込んで埋設したものである。甕の内部から陶器碗・土師器皿が出土した。用途は不明である。

1面石列を除去すると礫を含む固く締まった面が検出された。19世紀前半の道路整地層と推定され、これを2面と設定した。東側に面をもつ石列147は道路敷設における土留めの役割を果たしていたと考えられる。石列148は一部に溝の痕跡を残しており、建物の遺構とみられるが詳細は不明である。SK154は道路整地層を掘り込んだ直径45cmの円形土坑で、高台内に墨書が入る萩焼の碗が出土した。2面道路整地層の下からも道路整地に関わるとみられる赤褐色粘土層が検出された。この2つの層によって、湿地を埋め立てて敷設した道路の範囲が確定する。道路東側は後に大量の砂で短期間に埋められている。この状況を遺構配置図では3面とした。

3面の下には6地区南半と同様に木器包含層が確認された。慶安5(1652)年絵図ではこの地区に沼が描かれており、周辺には「田」「深田」の記載がある。その後の絵図からも長い期間にわたって湿地であったことが推測される。また、木器包含層の埋土の花粉分析から水田などの環境が想定されており(付編3参照)、絵図の記載とも合致する。この層から「松坂屋」と墨書された木簡2点が出土した。松坂屋は17世紀後半に活躍した南片河町の有力商人であることが文献に記載されており、その存在と活躍時期を裏付ける貴重な考古資料といえる。

C 6-南端区・7-南端区 (第21-23・25回 図版16・31)

新堀川とこれに沿った道路に挟まれた地区で、調査面積が狭いためトレンチ調査で遺構の有無を確認した。

6-南端区

近代以降の客土が厚く堆積し、明確な近世遺構を確認できなかった。下層において新堀川北岸の石垣(石垣133)を検出したが、近世以前に遡るものではない。

7-南端区

客土とみられる厚い砂層が堆積しており、下層では湧水がみられる。遺構・遺物が確認できないことから、新堀川埋め立てによって造成された可能性が高い。

参考文献

- 1) 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『萩城跡(外堀地区)Ⅰ』2002
- 2) 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『萩城跡(外堀地区)Ⅱ』2004
- 3) 萩市史編纂委員会 『萩市史』1983

(3) まとめ

平成11年度、および16年度の調査において町屋形成に関連したいくつかの知見を得ることができた。ここでは、それらの中から遺構に関連することを中心に述べ、まとめとしたい。

平成11年度調査において、砂層上および砂層中に検出した弥生土器や、人骨をともなう中世土器等は、城下町形成以前の萩を考える上で貴重な資料となった。

阿武川の支流である松本川、橋本川に挟まれた萩デルタ内では今まで発掘調査が実施されなかったため、城下町形成以前の考古学的成果はほとんどない状態であった。特に弥生時代の遺跡分布はデルタを取り囲む周辺の丘陵部に知られているにすぎない。そのため今回の弥生土器の発見は、弥生時代中期における沿岸砂堆上の遺跡埋存を想定させ、当地域における弥生人の生活圏の広がりを示すものである。また16世紀とみられるST118は、毛利氏入府以前の資料として、中世集落の存在を示すものである。

5-1中區、6・7地区における屋敷区画をまとめたのが表1である。また、第43図には町屋の中心的な面である2・3面で検出した遺構から想定される町割を図化した。

これからすると両地区併せて21軒の町屋が建っていたことになる。1軒の敷地間口は、最小で6-1F、6-1D区南の4.0m。もっとも多いのは6-7Fである。最大は6-1E区SB189の14.6mで、5-1中-1E区の10.0mがこれに次ぐ。この両区画は大型の礎石が根固めの割栗石の上に据えられている本格的な礎石という点で共通していることや、6-1E区の堀側には礎の基礎部分と想定される石垣が付随することなどから有力な商人の存在が浮かび上がる。また5-1中-1E区は可能性としてC区まで一連の大型建物敷地であったとすることもできる。井戸がこの間1基しかないことや、石垣3以来に等間隔で並ぶ礎石列を区画するような東西方向の石列が未検出であることを主な理由としている。全調査区を通して最大の間口28.8mの区画になるが、不確定要素も多いため指摘にとどめておく。5-1中-1E区石垣2と石垣3の関係について少しふれておく。石垣2と石垣3はその東端と北端が接して直交する(図版4)。そのため同時期に短期間で大がかりな普請がなされたとするのが妥当である。そこで前述のように両者には構築上の差異が認められるが、時期差と考えるより石垣の持つ役割の違いととらえたい。石垣2は高低差を維持するための土留めの役割しか持たないのに比して、石垣3は高低差を維持することの他に上層構造を支える基礎の役割を持つ。そのために相応の荷重に耐えるものでなくてはならなかったといえる。元文4(1739)年の8間石垣とそれに伴う外堀改修以降の町屋

表1 敷地間口一覧

地区	区	間口(m)	間口(間)
5-1中	A	—	—
	B	10.4	5.2
	C(北)	7.6	3.8
	C(南)	5.0	2.5
	D	6.2	3.1
	E	10.0	5.0
	F(北)	6.0	3.0
	F(南)	4.1	2.2
	G	6.4	3.2
6	H	12.0	6.0
	A	—	—
	B	6.6	3.3
	C	5.6	2.8
	D(北)	7.6	3.8
	D(中)	4.1	2.2
	D(南)	4.0	2.0
	E	14.6	7.3
	F	4.0	2.0
	G	7.0	3.5
H	6.4	3.2	
I	7.0	3.5	

※1間々2mとする。

※地区・区は北から順に並べてある。



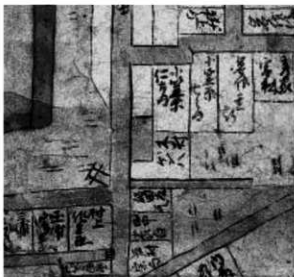
第43図 5-中、6・7地区町割推定図(1/1,000)

におけるいく度かの小改築は、基本的に個人を単位とするものであり、町全体を規制するような大規模な改築は今まで認められなかった。これに対して石垣2・3の構築は、現在のところ8間石垣以後の時期と考えられるのでそれ以降の大規模な町屋改築と見ることができる。さらに石垣1・29を埋めて構築していることや、6地区の石垣43につながっていることを考慮すると南片河町全体に関わる大きな町普請であったことが推察される。

平成16年度調査において外堀南端の様子が明らかになった。6-J区以南に遺構が認められるのは幕末（1面）以降である。それまでは嵩上げ整地はされていくものの町屋遺構は検出されなかった。第44図は絵図で見た、外堀南端部分の変遷である。外堀完成から30年経過した慶安5（1652）年絵図には外堀内に町屋は描かれていない。延宝6（1678）年の大火の後、天和元（1681）年に描かれた絵図では6地区の南半部まで町屋区画が描かれ、その南は堀に消えている。元文4（1739）年の堀幅8間への大改修後に描かれた寛保2（1742）年絵図では町屋南端は一定の広さの空き地が設定され、石段が付いて終わっている。ちょうど6-J区以南あたりに比定できる。石段については湧水のため検出できなかった。J区以南下層は木器を含む黒褐色土層で、18世紀中ばから後半の遺物を伴うことから、ほぼこの絵図のとおりを景観を呈していたと思われる。また、7地区で検出した道路整地層やその下層の湿地を埋めた形跡もこの絵図と符合することがわかった。絵図において道が堀側に屈曲する例は寛保2（1742）年絵図をのぞいて数少ないが、更地に表現してあるものは多い。原地形である沼地を避けて町が作られていった様子が絵図でも想定できるが、今回の調査によって考古学的に確かめられたといえる。



慶安5年絵図（部分 山口県文書館蔵）



天和元・2年絵図（部分 羽仁家蔵、萩博物館保管）



寛保2年絵図（部分 萩博物館蔵）

第44図 絵図に見る外堀南端部の変化

2 遺物

調査では5-中区、6・7地区を合わせて整理用コンテナ約500箱、総数で十数万点の遺物が出土した。遺物は土器、陶磁器、土製品、瓦、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品、骨角製品、貝製品、自然遺物など多岐にわたり、江戸時代の人々の生活の多様さを示している。これら大量の遺物のうち、土坑等の遺構出土遺物を中心に、建物整地層や焼土層、木器包含層等からの出土遺物と各場所・各時期の特徴的な遺物を併せて報告する。

以下、陶磁器・土器・土製品、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品、骨角・貝製品、自然遺物の順で遺物の概要について述べる。

なお陶磁器の時期については、九州近世陶磁学会による九州陶磁の編年および江戸遺跡研究会による陶磁器編年表を参考にした。萩近郊で生産された在地の陶磁器・土器については、製作技法・釉調・窯詰め時の肌跡等から産地を特定し、萩焼（深川・松本）を「萩」、須佐唐津窯の製品を「須佐」、萩あるいは須佐の製品ではあるが分類が難しいものを「萩・須佐」とし、小畑磁器窯の製品を「小畑」、防府市佐野地域の製品を「佐野」として一覧等に掲載した。

(1) 陶磁器・土器・土製品

①平成11年度（5-中区）

5-中区から出土した陶磁器・土器・土製品は、土坑その他の遺構に伴うものは少なく、建物整地層や焼土層等からの出土が多いことが特徴である。

SK45（第15・46図 図版32・33）

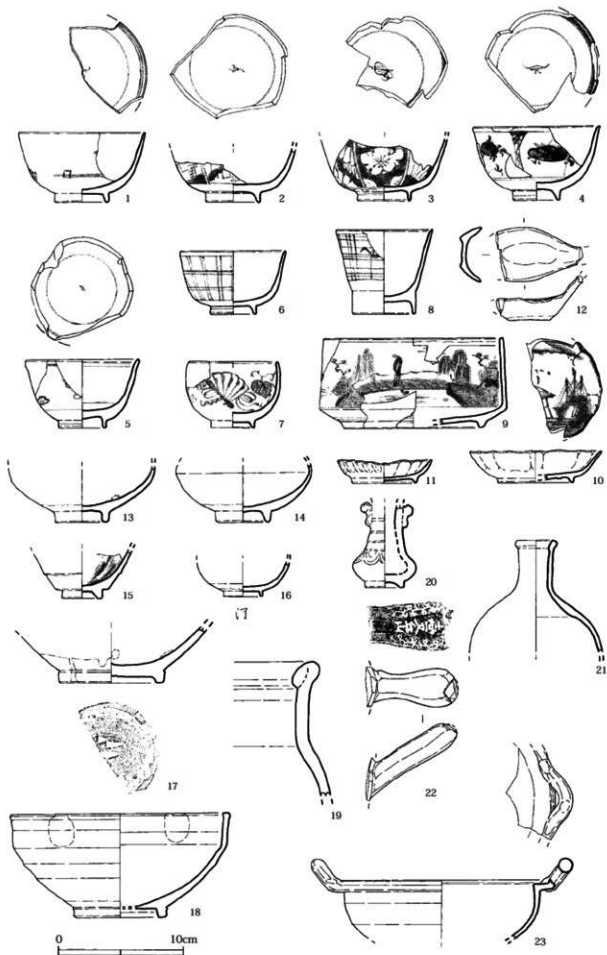
1～12は磁器、13～29は陶器、30は瓦質土器、31は土製品、32は瓦。

1～7は碗。1は帆舟文。4は花卉文。5は梅花文。6は二重格子文で、19世紀中頃のものである。7は屈文をもつ小碗。8は広東形の猪口で、二重格子文。9は榎園山水人物文の段重。10は帆舟文の描かれた輪花小皿で、口鏤を施す。19世紀中頃の製品である。11は白磁の輪花小皿。12は瑠璃釉の散莖草。1～5と7・8は、小畑で生産された磁器の可能性が高い。そのほかは肥前産の磁器であると考えられる。

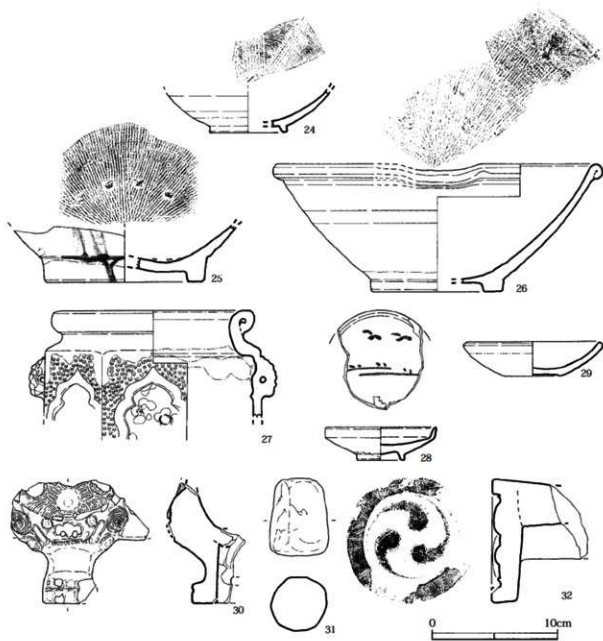
13・14は見込みにハマ痕をもつ碗。15は萩の開口碗で、薬灰釉に鉄袖を掛け流す。16は信楽のものとみられる丸碗。高台内に墨書をもつ。17・18は土灰釉の鉢。17は見込みに日痕が残り、高台内には板形のカンナ痕がみられる。18は口縁部を押し、輪花状にする。17・18は須佐唐津の製品であろう。19は甕の口縁部片。口縁内面を肥厚させ、鉄袖を施す。肥前の製品である。20は薬灰釉の小型仏花瓶である。胴部に花卉状の除刻を巡らす。21は土灰釉の瓶。須佐の製品と考えられる。22は行平の把手部。23は鍋である。24～26は播鉢。24は播り口の単位が疎らである。25は見込みにハマ痕がみえる。26は口縁を外面に折り返し、肥厚させている。見込みに日痕が残る。27は鉢。窓絵に梅花文と紗綾形文を施す。28は鉄絵の小皿。29は土灰釉の灯明皿。27～29は須佐唐津の製品と考えられる。

30は火鉢の獣足で、上部は獅子頭を象る。31は用途不明の土製品。栓状を呈する。32は三巴文の軒瓦である。

SK45は19世紀中頃、あるいは近代にかかる比較的新しい時期の土坑であると考えられる。



第45图 5—中区 SK45出土遗物①(1/3)



第46図 5-中区SK45出土遺物②(1/3)

SK82 (第47~49図 図版33~35)

33~43は磁器、44~65、80・81は陶器、66・67は窯道具、68~76は土師器、77は瓦質土器、78・79・82は瓦である。

33は染付の碗であるが、焼成が充分ではなく、器面には貫入がみられる。見込みには花卉文がみられる。17世紀末から18世紀前半の製品であろう。34は唐草文の碗で、器壁がやや厚い。35は薄手の碗である。36は皿片。37は青花の小皿で、高台内に「宣徳年製(造)」の銘をもつ。17世紀初めのものである。38は唐草文の皿で、墨弾きの技法を用いる。39は朝顔文を陽刻する隅切方形皿で、ロクロ成型後に型打ちをする。40~42はミニチュアの碗である。43は瓶で、高台内は無釉である。文様は松竹梅文であろう。

44は高台内に円刻をもつ碗。いわゆる肥前の京焼風陶器である。18世紀に入るものとみられる。45は萩の薫灰袖碗。46は平形形の碗。47・48は萩の刷毛日碗。49は土灰袖の小碗。50は高台型の小碗である。51・52は刷毛目の猪口。53は外面に薫灰袖、内面に土灰袖を施す。鉢か。54は手桶型容器の把手部である。51～54は萩の製品である。55は二彩唐津の鉢で、外面に波状の筋目を施している。56は灰袖の鉢片。57～59は鉄化班の擂鉢で、外面にはケズリ調整を施す。57・58は口縁を外面に折り返して肥厚させ、その中央を押圧する。59は底部片で、見込み・高台内に日痕が残る。60は土灰袖の鉢で、見込みには胎上日がみられる。57～60は須佐唐津の製品であろう。61・63は刷毛目の皿。62は土灰袖の碗。61～63は輪状の胎上日をもつ。いずれも、産地は萩である。64は見込みに貝目がみられる、萩の刷毛日皿である。65は土灰袖の皿。80は土灰袖の鉢で、見込み・骨付に輪状の胎上日をもつ。萩の製品である。81は薬灰袖の鉢片。

66は重ね積みの際に胎上日として使用された「熟餅」と呼称する窯道具である。中央を押圧してくはませるため、外縁のみが器面に接着し、輪状の日痕を残す。胎上は砂粒を含み、やや粗い。67はサヤ鉢である。底部に糸切痕がみられる。

68は口縁が窄む鉢形の焼壺である。京都深草系のもので、時期は18世紀中頃と考えられる。転用のためか、底部は穿孔されている。69は底部が板作りの焙格である。現防府市の佐野地域周辺で生産されたものであろう。70～76は土師器皿である。ヌスが付着したものもあることから、灯明皿としての利用が考えられる。

77は底部に板目がみられる瓦貫擂鉢である。78は瓦片。表面の酸打痕から二次的な使用が窺われる。79は菊文をもつ瓦当片である。82は瓦。

SK82の時期は、18世紀前半から中頃であると推定される。

SK89 (第50図 図版35・36)

83～86は磁器、87～95は陶器、96～101は土師器である。

83は草花文の碗片。84は白磁の猪口。85は赤絵の小杯。86は牡丹唐草文の皿で、肥前の17世紀後半の製品である。

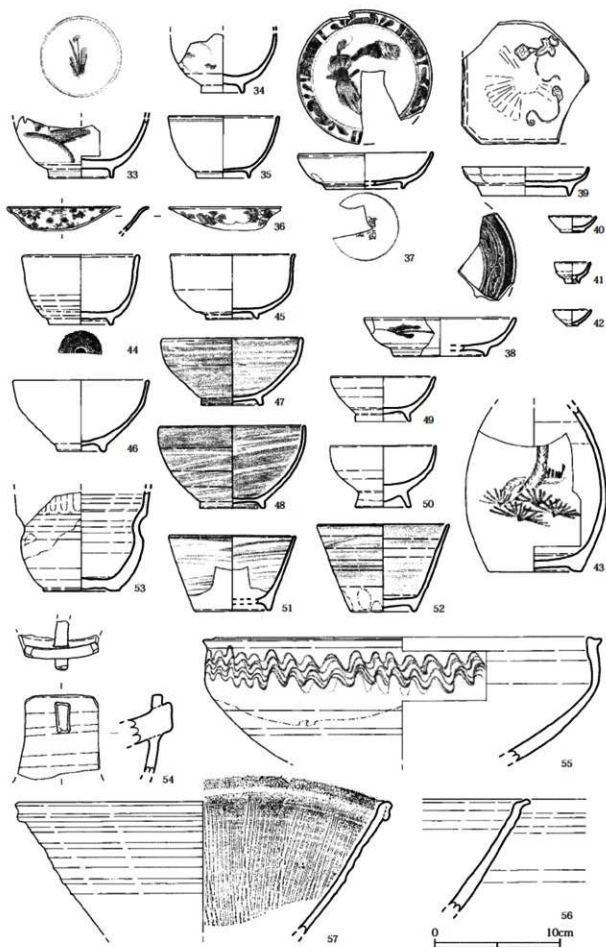
87・88は萩の丸碗である。87は高台内に渦巻状の削り込みがみられる。89は香炉の口縁片。90は萩の擂鉢片。91は刷毛目の皿で、砂日がみられる。92は見込み蛇の日刺割ぎの皿。呉須絵を施す。93の皿は見込みに蛇の口刺割ぎと砂日がみられる。94は皿の口縁片。95は鉄袖の鉢で、外面に沈線文がみられる。91～95は肥前の製品であろう。

96～101は土師器皿である。96～100には口縁にヌスが付着しており、灯明皿と考えられる。

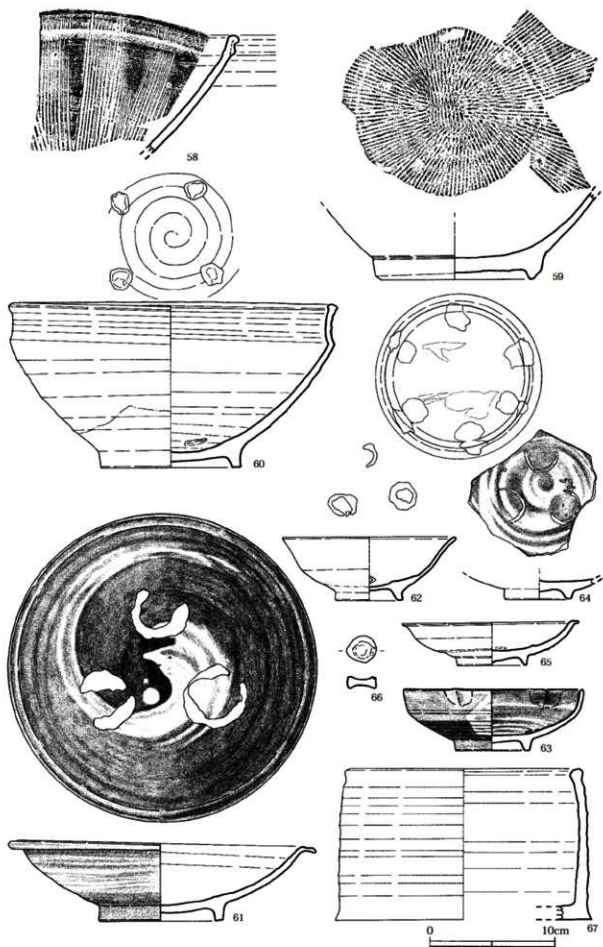
SK87 (第51～53図 図版36～39)

102～113は磁器、114～141は陶器、142は窯道具、143～154と156・157は土師器、155は土製品、158・159は瓦。

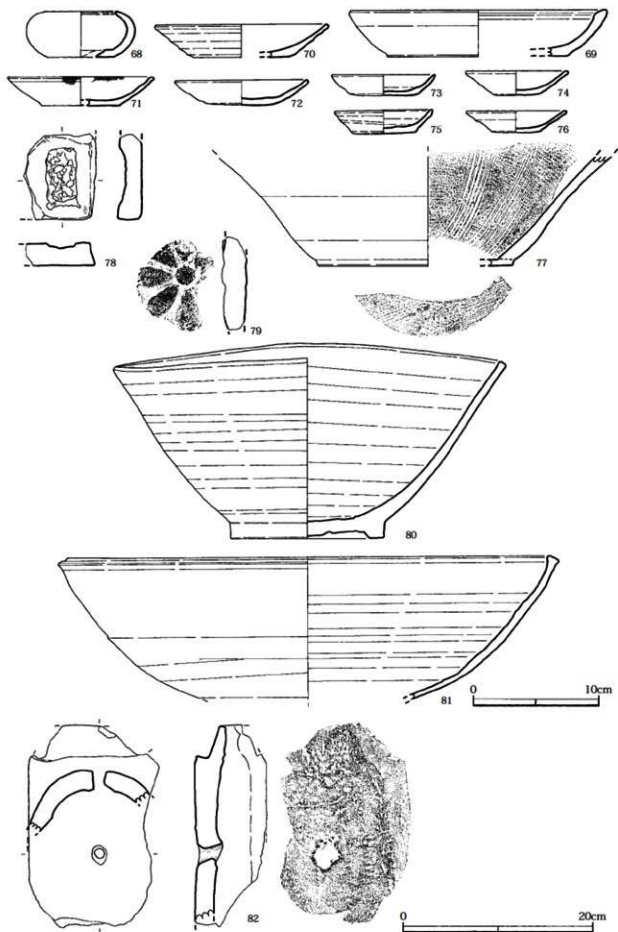
102は外面口縁付近に四方禪文を巡らせた碗で、高台内に二重方形枠「渦福」の銘をもつ。17世紀末から18世紀中頃の製品である。103は高台内に「太明」の字がみえる小杯。「太明」の意であろう。器形は細身で口縁が外湾する。時期は17世紀の後半以降である。104は白磁の猪口。105の青花皿片は、断面に漆継ぎのあとがみられる。106は見込みを蛇の日状に袖割きした鉢。やや焼成が甘い。107は見



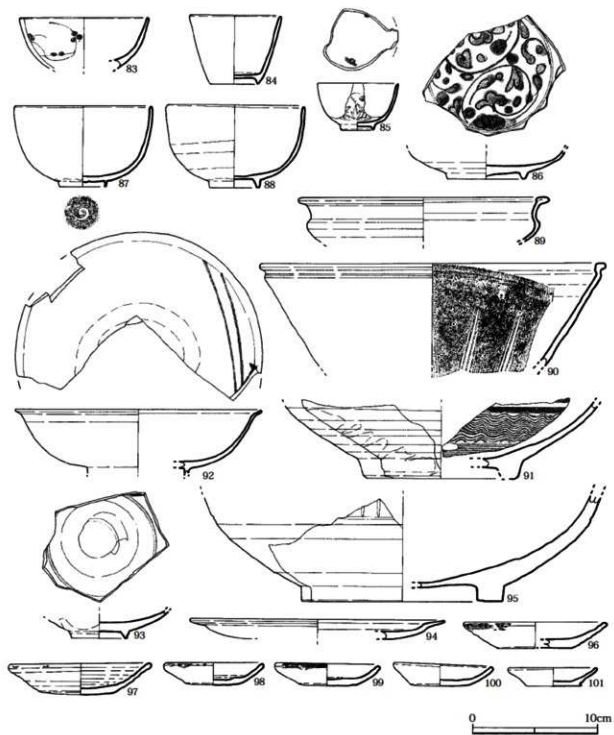
第47图 5-中区 SK82出土遗物①(1/3)



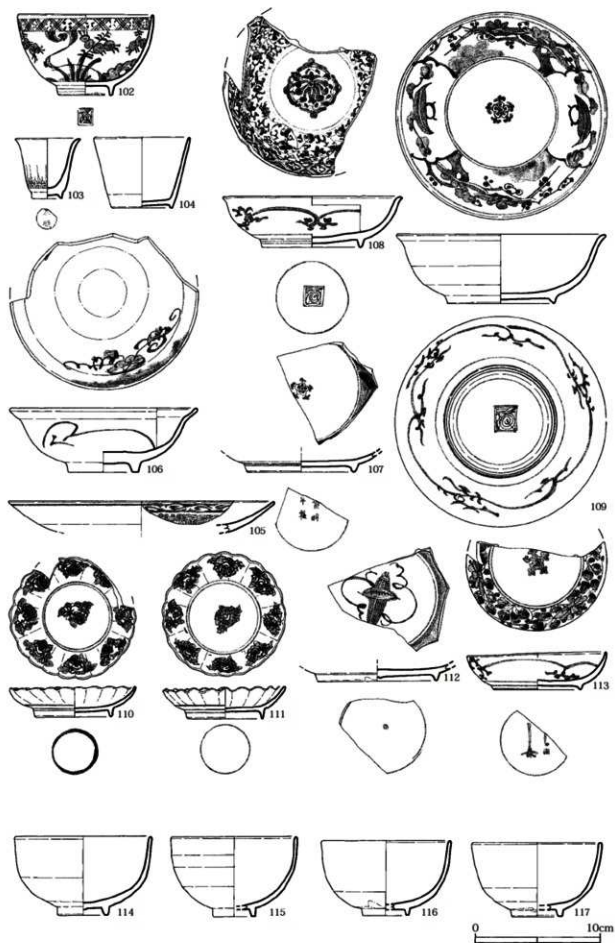
第48图 5-中区 SK82出土遗物②(1/3)



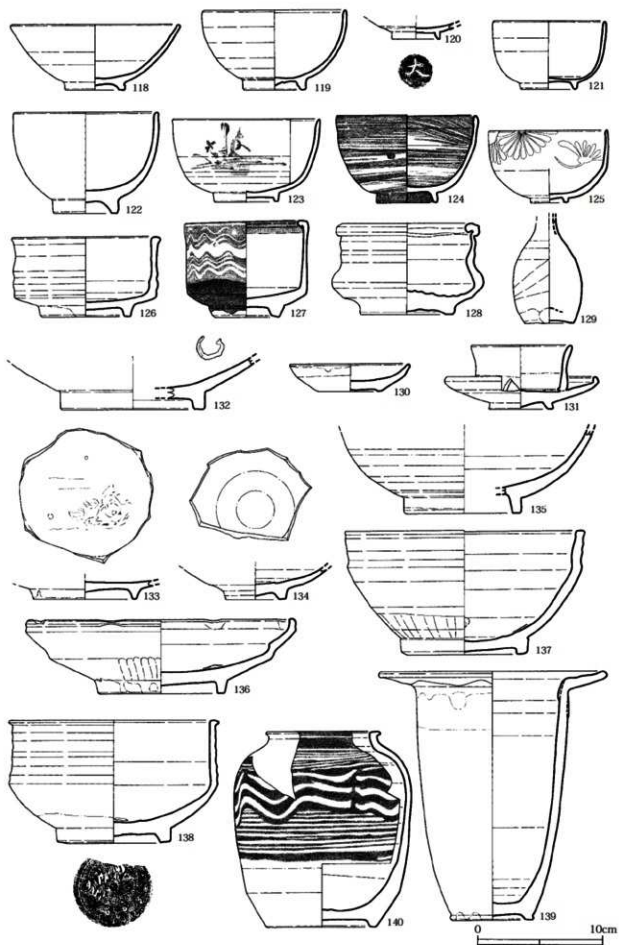
第49图 5—中区SK82出土物③(1/3, 1/4)



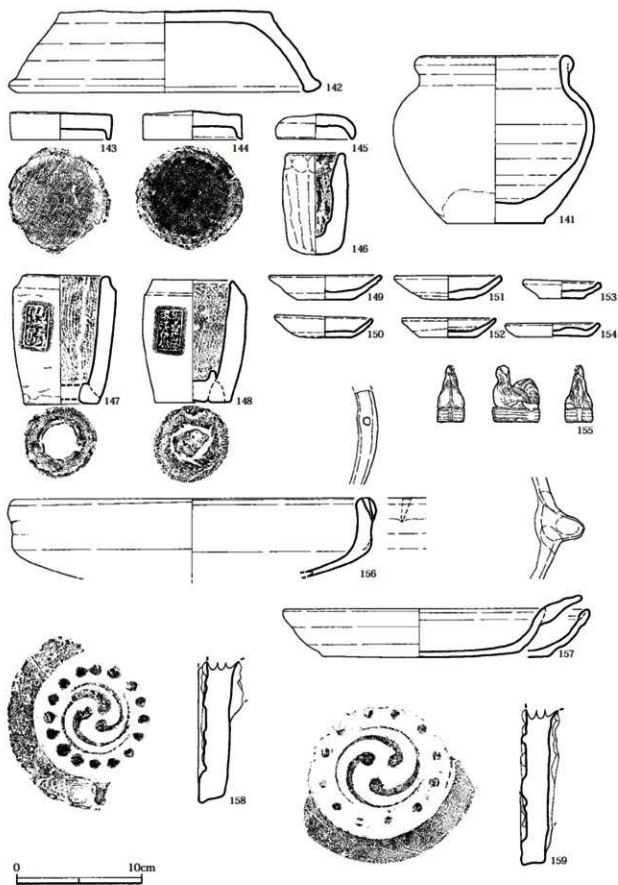
第50图 5—中区 SK89出土遺物(1/3)



第51图 5-中区 SK87出土遗物①(1/3)



第52图 5-中区 SK87出土遗物②(1/3)



第53图 5-中区 SK87出土遗物③(1/3)

込みに五弁花を手描きした皿で、銘は「天明年製」。17世紀末以降のものと考えられる。108は内面に四方博文と花唐草文を施し、見込みに牡丹唐草文を配する皿。109は松竹梅文の皿で、見込みに手描き五弁花がみえる。108・109は高台内に二重方形枠「渦福」の銘をもつ。17世紀末から18世紀中頃の製品であろう。110・111は同型の輪花小皿で、コンニャク印判で施文する。時期は17世紀末頃である。112はハリ支えのあとが残る皿で、17世紀末以降の製品。113は花唐草文の皿で、見込みにコンニャク印判で五弁花を押す。高台内の銘は「太明年製」をくずしたものである。17世紀末から18世紀中頃の製品であろう。

114～117は萩の丸碗で、藁灰釉を用いる。118は萩の平形碗。119は青磁釉の碗である。120は藁灰釉碗の底部片で、高台内には「大」字がへら書きされる。121は黒釉の碗。122は肥前の呉器碗。123は肥前の京焼風陶器で、楼閣山水文がみられる。底部は破損しているが、円刻の一部が確認できる。18世紀前半以降の製品。124は肥前の刷毛目碗。125は京焼の碗で、菊文を絵付けする。18世紀前半の製品である。126は須佐唐津の上灰輪鉢である。127は香があるいは火入れである。筒形で、外面に刷毛目を施す。128は鉢。目縁を内側に折り込む。高台内の削り込みが、浅く緩やかである。129は小型の甕。130は茗荷底の灯明皿。須佐唐津のものであろう。131は上灰釉の灯明受台である。高台のある皿に、円筒状の受部を貼り付けている。132は輪状の胎上目根をもつ皿の底部片である。萩の製品とみられる。133は瀬戸・美濃の皿。見込みに型紙摺りによる水鳥文とハリ痕がみられる。134の皿は、見込みの割絨軸を蛇の目状に刺ぎ取る。肥前の17世紀後半以降の製品である。135は肥前の鉄輪鉢。136～138は須佐唐津の製品である。136は目根の残る輪花鉢である。137・138は上灰釉の深鉢で、形状の似た胎土目をもつ。また、138の高台内には工具による削り痕がみられる。139は萩の花生で、透明釉の上に藁灰釉を掛け流す。140は鉄輪の刷毛目壺。胎土は赤褐色である。141の壺は鉄釉で、底部は糸切りである。

142はサヤ鉢の蓋である。143～145は焼塩壺の壺。143・144は断面が直線的で、内面には布目が残る。145は手捏ね成型のもので、形は丸みをおびる。146は小型の焼塩壺である。147・148の焼塩壺は粘土板を枠に巻きつけて成型する板作りで、内面には布目が見える。「御壺塩師／堺湊伊織」の銘をもつ。17世紀末から18世紀前半にかけて流通するものである。143と147、144と148は、それぞれ一対の可能性が高い。149～154は土師皿である。155は鶺鴒の土人形。左右型合わせで、表面には雲母が付着する。156は関西系の焙烙。耳の部分はやや肥厚しており、穿孔がみられる。157は把手を有する小型の焙烙で、表面にスガが付着している。在地系のもので、防府市佐野周辺で生産されたかと推定される。

158・159は三巴文の軒丸瓦である。

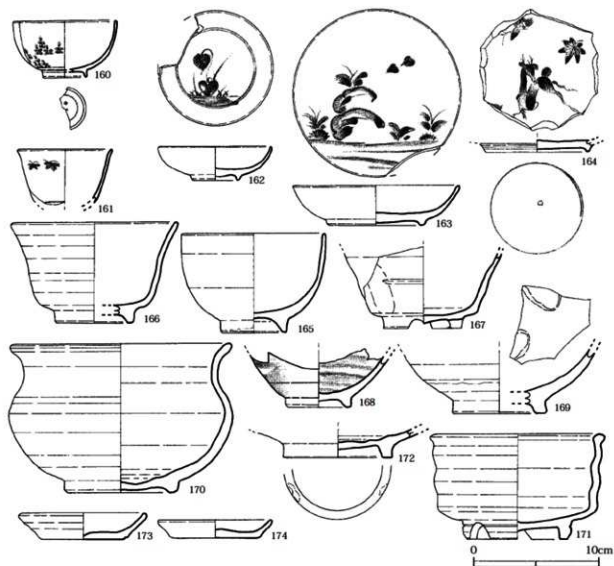
SK87は18世紀前半から中頃までの土坑であると考えられる。

SK97 (第54図 図版39・40)

160～164は磁器、165～172は陶器、173・174は土師器である。

160は小碗で、銘は「太明年製」をくずしたものと考えられる。161は小杯。160・161は17世紀末以降のものであろう。162・163の皿は17世紀後半の製品である。164は鹿文・紅葉文を描いた皿で、17世紀末からみられる。

165は肥前の呉器形碗で、製作年代は17世紀末以降である。166は藁灰釉の碗。167は高台の鉢。



第54図 5 - 中区 SK97出土遺物(1/3)

器面をヘラで削り、装飾する。168は刷毛目碗。169は薬灰釉の鉢片。見込みと畳付に貝目がみられる。166～169は萩の製品である。170は須佐唐津の鉢である。口縁付近が外湾する。171は割高台の鉢。172は皿片。171・172は萩の製品である。

173・174は、底部に糸切り痕がみられる土師皿である。

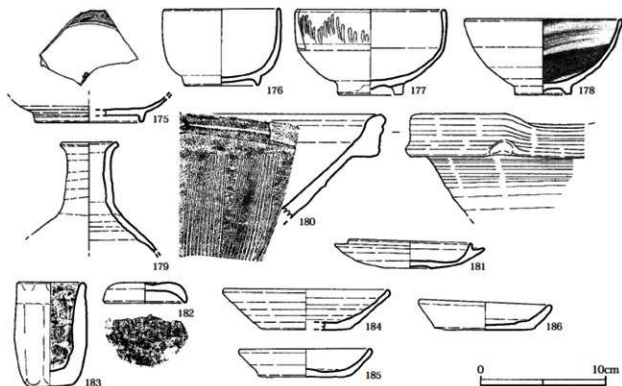
磁器の年代から、SK97の時期は17世紀後半から末であると考えられる。

SK100 (第55図 図版40)

175・176は磁器、177～181は陶器、182～186は土師器である。

175は皿片。墨弾き技法を用い、見込みにはコンニャク印判五弁花がみられる。18世紀中頃のものであろう。176は白磁の碗で、口鏝を施している。

177は萩の薬灰釉碗である。割高台で、おそらく2ヵ所を挟り込む。胴部はヘラ削りにより施文する。178は刷毛目の碗。179は鉄釉の瓶である。180は摺鉢片で、鉄化粧を施す。181は焼締めの灯明受皿で、底部には回転糸切りの痕が残る。180・181は備前の製品である。



第55図 5-中区SK100出土遺物(1/3)

182は、焼塩壺の蓋で、内面には布目がみられる。183は焼塩壺の身。小型で、輪積みにより成型する。184～186は土師皿で、底部には回転糸切り痕がみられる。

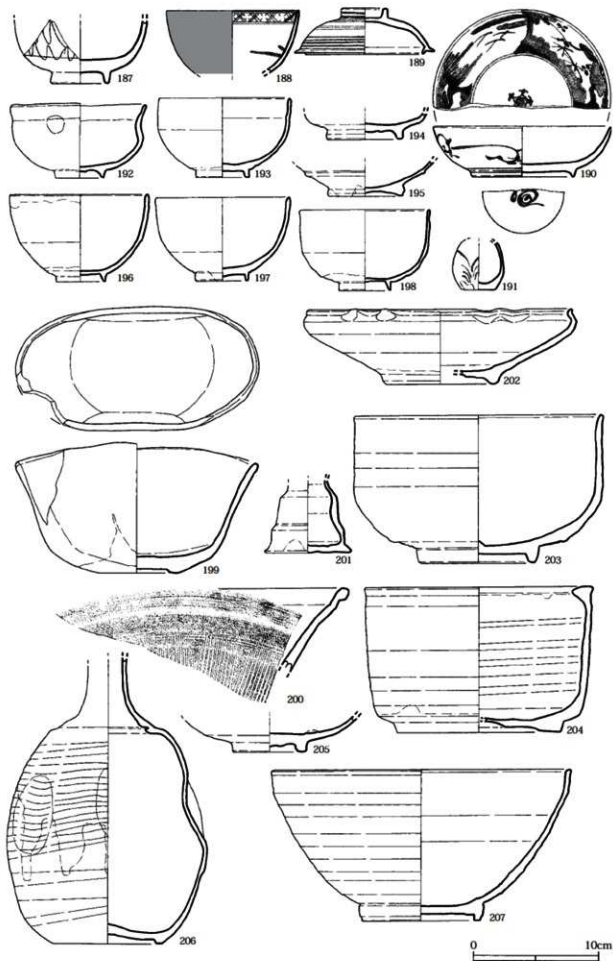
SK100は、18世紀中頃の土坑であると推定される。

SK102 (第56・57図 図版41・42)

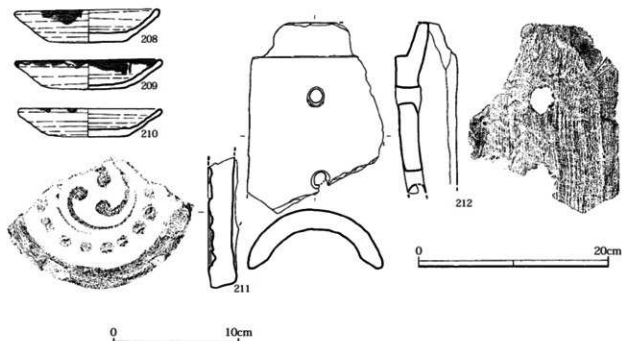
187～191は磁器、192～207は陶器、208～210は土師器、211・212は瓦である。

187は一重網目文の碗。器壁が厚く、やや青みを帯びる。肥前の17世紀後半の製品であろう。188は外面に青磁釉を施した柴付碗片である。口銹を施し、内面には四方禪文を廻らす。189は圈線文の蓋である。受部付近は無釉で、断面には漆継ぎを行った痕跡がみられる。17世紀末以降のものである。190は見込みにコンニャク印判による五弁花をもつ皿で、時期は17世紀末から18世紀中頃までが考えられる。外面は唐草文で、高台内に「渦福」の銘を入れている。191は草文の小瓶で、底部に回転糸切り痕がみられる。底部と内面の無釉部分は、赤褐色を呈する。

192は萩の薬灰釉碗で、胴部を指で押さえ、くほみを作るいわゆる拳骨形である。193は薬灰釉の丸碗。194は土灰釉碗の底部片。195の碗は、高台内を浅く削り込む。194・195は萩の製品であると考えられる。196～198は薬灰釉の丸碗である。199は土灰釉の香形碗である。200は鉄化粧の櫛鉢片。注口はごく小さい。199・200は須佐唐津の製品である。201は仏花瓶。202～204は萩の薬灰釉鉢。202は口縁部が内湾する浅鉢である。203は内面に別個体が溶着している。204は内面が無釉で、焼成時に底部を被損している。205は萩の皿片。見込みに輪状の胎土目痕が残る。206は土灰釉と薬灰釉を掛け分けた瓶。いわゆる「ヘコカン」形で、頸部と胴部を接ぎ合わせて、成型する。207は土灰釉の鉢。206・207は須佐唐津の製品である。



第56图 5-中区SK102出土遗物①(1/3)



第57図 5-中区 SK102出土遺物②(1/3、1/4)

208～210は土師皿である。口縁部にススが附着することから、灯明皿としての使用が想定される。211は三巴文の軒丸瓦である。212は丸瓦で、2ヶ所に穿孔している。

SK102はSK87の直下に位置することから、その時期は17世紀末から18世紀前半までであろう。

SK104 (第58図 図版42)

213～215は磁器、216～218は陶器、219は土師器、220は瓦である。

213は漳州窯系の皿。214の皿は、折縁状の口縁に日足文を巡らせる。見込みは点描地に菊花文と桜文を描く。肥前の17世紀前半から中頃の製品である。215は口錆の白磁十角皿で、ロクロ成型後、型押しを行っている。

216は碗で、内外面に銅緑釉を掛け流す。217は搗鉢の底部片。使用のため、内面は摩滅している。備前のものである。218は脚付の折縁皿。高台部は蛇の目状で、内外面に刷毛目を施す。

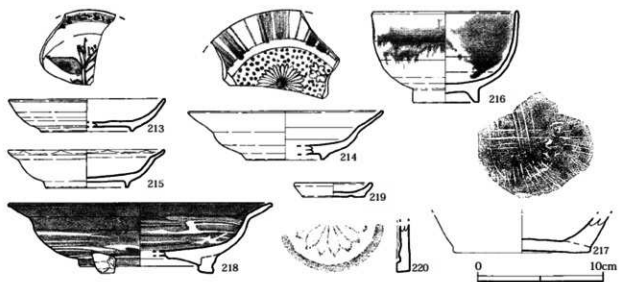
219は小型の土師皿で、熱を受け、黒色化する。220は小型の瓦当片である。文様は菊花文で、表面には雲母が附着している。

SK86 (第59図 図版42)

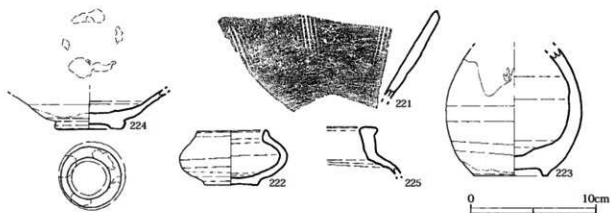
221～224は陶器、225は瓦質土器である。

221は肥前のものとみられる搗鉢片。搗り目は単位の間隔が広い。破断面が意図的に研磨されていることから二次使用の可能性がある。222はビロード軸の小壺。223は瓶。例り底で、器壁は厚い。藁灰釉に鉄釉を掛け流す。224は肥前の皿。見込み・畳付には砂目痕が残る。17世紀前半頃にみられる。225は甕の口縁片。一部にミガキ調整がみられる。

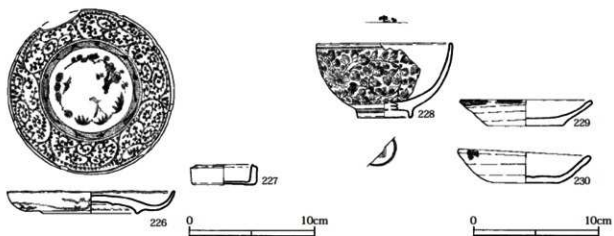
SK86は出土遺物と最下層の4面に位置することから、17世紀前半から後半までの土坑であると推定される。



第58図 5-中区 SK104出土遺物(1/3)



第59図 5-中区 SK86出土遺物(1/3)



第60図 5-中区集石58出土遺物(1/3)

第61図 5-中区かまど31出土遺物(1/3)

表2 5-中区 陶磁器・土器・土製品一覧①

県内	郡市	地区	出土地点	種類	特徴	備考	
1	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	桃文
2	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	成澤芦
3	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	小瀬か
4	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	小瀬か
5	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	小瀬
6	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	梅文
7	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	二喜彦文
8	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	小瀬 蓮文
9	45	32	5-D	SK45	磁器 碗	染付	見込みに赤菊あり
10	45	32	5-D	SK45	磁器 皿	染付	徳田本末人物
11	45	32	5-D	SK45	磁器 皿	白磁	小瀬 輪花 1段 押押し成り 見込みに白磁
12	45	32	5-D	SK45	磁器 皿	白磁	小瀬 輪花 2段成り
13	45	32	5-D	SK45	磁器 飯盛手	推滑台	
14	45	33	5-D	SK45	陶器 碗	白化粧土、土灰物	白丁で銀文 見込みにハマ煎
15	45	33	5-D	SK45	陶器 碗	土灰物	見込みにハマ煎
16	45	33	5-D	SK45	陶器 碗	磁化硝、灰釉	白磁 灰釉
17	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	長行物	高白内ケナシ煎 見込みに白磁あり
18	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	高白内ケナシ煎 見込みに白磁あり
19	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	高白内ケナシ煎 見込みに白磁あり
20	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	高白内ケナシ煎 見込みに白磁あり
21	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	高白内ケナシ煎 見込みに白磁あり
22	45	33	5-D	SK45	陶器 行平	一蓮一灰釉	把手のみ残存 染印
23	45	32	5-D	SK45	陶器 鉢	灰釉	鉢、須佐
24	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	鉢片 摺り目6条
25	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目10条
26	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	見込みにハマ煎 摺り目8条
27	46	32	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
28	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
29	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
30	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
31	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
32	46	33	5-D	SK45	陶器 鉢	土灰物	灰釉のみ 見込みにハマ煎 摺り目8条
33	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
34	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
35	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
36	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
37	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
38	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
39	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
40	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
41	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
42	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
43	47	33	5-C	SK82	磁器 碗	染付	三巴文
44	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
45	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
46	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
47	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
48	47	33	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
49	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
50	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
51	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
52	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
53	47	34	5-C	SK82	陶器 碗	素明陶	高白内製印(○)あり
54	47	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
55	47	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
56	47	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
57	47	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
58	48	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
59	48	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
60	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
61	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
62	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
63	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
64	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
65	48	34	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
66	48	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
67	48	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
68	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
69	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
70	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
71	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
72	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
73	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
74	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
75	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり
76	49	35	5-C	SK82	陶器 鉢	土灰物	高白内製印(○)あり

図号	新約	巻	面区	出二庫	頁	寸	目	器	種	備	考
77	49	35	5-C	SK82	北瓦	瓦	瓦	瓦			振り下り集
78	49	35	5-C	SK82	瓦	小	瓦	瓦			平瓦の 次振出
79	49	35	5-C	SK82	瓦	軒	瓦	瓦			瓦
80	49	35	5-C	SK82	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	成るみに廻り掛上目
81	49	34	5-C	SK82	陶器	瓦	瓦	瓦	土灰	土灰	1段板のみ残存
82	49	35	5-C	SK82	瓦	瓦	瓦	瓦			瓦有り
83	50	35	5-B	SK89	陶器	碗	碗	碗	土灰	土灰	1段板 草花文
84	50	36	5-B	SK89	陶器	燈	燈	燈	土灰	土灰	彫造
85	50	35	5-B	SK89	陶器	小	小	小	土灰	土灰	彫造 蓮華不具
86	50	35	5-B	SK89	陶器	碗	碗	碗	土灰	土灰	彫造 牡丹唐草文
87	50	36	5-B	SK89	陶器	碗	碗	碗	土灰	土灰	丸碗 高内内割垂込込
88	50	36	5-B	SK89	陶器	碗	碗	碗	土灰	土灰	丸碗
89	50	36	5-B	SK89	陶器	名	名	名	土灰	土灰	山形
90	50	36	5-B	SK89	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	山形
91	50	36	5-B	SK89	陶器	皿	皿	皿	土灰	土灰	白化粧上、透明釉、 与内裏焼色目 見込み砂目
92	50	36	5-B	SK89	陶器	皿	皿	皿	土灰	土灰	彫付 見込み焼の目縁にき 蓋縁取接合
93	50	36	5-B	SK89	陶器	皿	皿	皿	土灰	土灰	彫付 成るみに廻り掛上目
94	50	36	5-B	SK89	陶器	皿	皿	皿	土灰	土灰	彫付 成るみに廻り掛上目
95	50	36	5-B	SK89	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	彫付 成るみに廻り掛上目
96	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	丸碗 白線スス付
97	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	丸碗 白線スス付
98	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	有内裏 成るみに廻り掛上目 白線スス付
99	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	有内裏 成るみに廻り掛上目 白線スス付
00	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	見込み内裏
01	50	36	5-B	SK89	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	土灰	成るみに廻り掛上目
02	51	36	5-B	SK87	陶器	碗	碗	碗	土灰	土灰	丸碗 酒樽 彫
03	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
04	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
05	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
06	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
07	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
08	51	36	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
09	51	36	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
10	51	36	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
11	51	36	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
12	51	36	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
13	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
14	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
15	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
16	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
17	51	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
18	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
19	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
20	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
21	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
22	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
23	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
24	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
25	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
26	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
27	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
28	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
29	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
30	52	37	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
31	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
32	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
33	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
34	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
35	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
36	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
37	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
38	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
39	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
40	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
41	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
42	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
43	52	38	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
44	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
45	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
46	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
47	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
48	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
49	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
50	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
51	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
52	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫
53	52	39	5-B	SK87	陶器	鉢	鉢	鉢	土灰	土灰	丸碗 彫

放送	時刻	種別	地区	出二	種別	番組	種	備	備
54	53	39	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
55	53	39	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
56	53	39	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
57	53	39	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
58	53	38	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
59	53	38	5-B	SK87	土曜	嵐	嵐	嵐	嵐
60	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
61	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
62	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
63	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
64	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
65	54	39	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
66	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
67	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
68	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
69	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
70	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
71	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
72	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
73	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
74	54	40	5-B	SK97	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
75	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
76	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
77	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
78	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
79	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
80	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
81	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
82	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
83	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
84	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
85	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
86	55	40	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
87	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
88	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
89	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
90	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
91	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
92	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
93	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
94	56	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
95	56	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
96	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
97	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
98	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
99	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
200	56	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
201	56	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
202	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
203	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
204	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
205	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
206	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
207	56	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
208	57	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
209	57	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
210	57	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
211	57	42	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
212	57	41	5-B	SK102	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
213	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
214	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
215	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
216	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
217	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
218	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
219	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
220	58	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
221	59	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
222	59	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
223	59	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
224	59	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
225	59	42	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
226	60	43	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
227	60	43	5-G	SK100	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
228	61	43	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
229	61	43	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐
230	61	43	5-F	SK104	曜	嵐	嵐	嵐	嵐

集石58内出土遺物（第60図 図版43）

226は蛇の口門型高台の柴付輪花皿である。見込みには環状松竹梅文を描き、その周囲は納唐草文を配す。焼成時に変形している。

227は合子の身である。口縁、及び底部は無釉である。

集石58の出土遺物は少なく、年代を想定するのは難しい。226が18世紀後半頃の製品であることから、集石58の時期は18世紀後半以降であろう。

かまど31・かまど31周辺出土遺物（第61図 図版43）

228は花唐草文の柴付碗。見込みには手描き五弁花、高台内には二重方形枠に「渦福」の銘を入れていると推定される。

229・230は、灯明皿とみられる上師皿である。口縁部にススが付着している。

228の年代は17世紀末から18世紀前半である。かまど31の時期も、そこから大きく外れることはないものと思われる。

胞衣埋納容器（第62・63図 図版52）

5-中区においては、胞衣埋納遺構が6基検出された。

使用されていた胞衣埋納容器はすべて土師器の焙烙で、2個体を合わせ口にして蓋と身としている。これらの焙烙は、調理具として使用されたものと形態的な差異は認められないが、熱を加えた痕跡や炭化物の付着がみられるものは少ない。このことから、胞衣を埋納する際の容器には、多くの場合、未使用のものが用いられたと考えられる。

また、遺構として検出することはできなかったものの、出土状況や加熱痕がないことから、1組の胞衣埋納容器である可能性が高い焙烙213・214も併せて報告する。

検出された焙烙は、いずれも口径が20cm前後の小型品である。形態的には、平底で把手を有するものと、丸底で把手をもたないものの2種に分類できる。前者は231～242、後者は243・244にあたる。5-中区で検出されたものについては、胞衣容器の上下に使用された焙烙は同一形態のものであった。

平底の焙烙は紐作りで、底部を木板状に成型したのち、体部を積み上げており、底部には粘土継の痕や板目がみられる。体部には指押さえやナデによる調整がみられ、口縁は内側に折り込み、やや肥厚する。把手部は、口縁に貼り付けた粘土塊をつまみ出すようにして成型した、小突起状のものである。他の調査区では、大きくしっかりとした把手部をもつ平底の焙烙が出土しており、小突起状の把手は大きな把手が次第に退化した新しい段階のものであると考えられる。

丸底の焙烙は、外型により成型されたものである。外面には型打ち時の皺やひびがそのまま残り、口縁部のナデ以外に調整は施されないが、内面にはナデによる調整がみられる。口縁は内面が肥厚し、244は口縁の下部が凹線状になる。

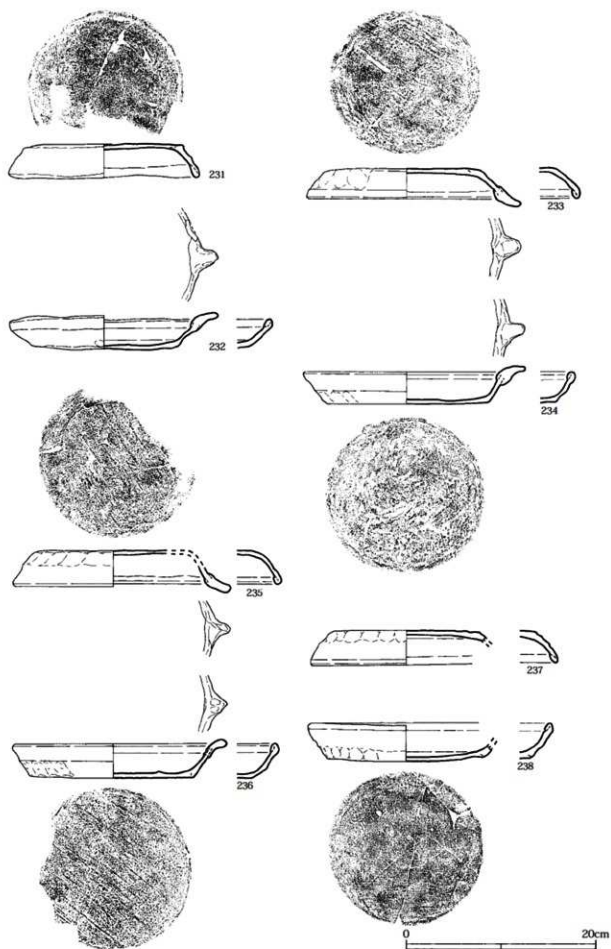
両タイプの焙烙は、防府市佐野地域周辺で製作された在地系のものと考えられる。

埋蔵85内出土遺物（第64図 図版43図）

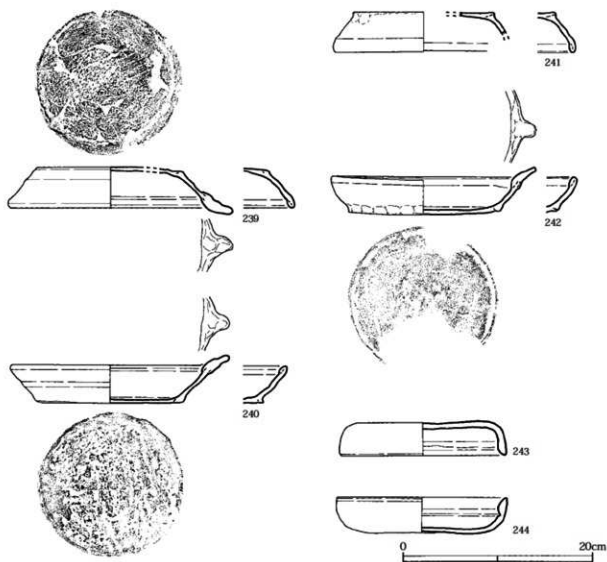
埋蔵85内からは多数の遺物が出土した。

245～248は磁器。249～251は陶器。252～255は瓦である。

245は端反形の小杯である。肥前の製品で、18世紀前半以降である。246は見込みに文様をもつ小杯



第62图 5—中区胞衣埋纳容器①(1/4)



第63図 5-中区胎衣埋納容器②(1/4)

表3 5-中区 胎衣埋納容器一覽

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	神宮番号	図版番号	出土地点	種別	器種	底	底面	口径	器高	底径	把手長	その他の特徴	
231	62	52	5-C	胎衣重59(上)	土師器	焙烙	平	20.0	3.6	16.8	欠	佐野	
232	62	52	5-C	胎衣重59(下)	土師器	焙烙	平	19.4	3.6	14.4	2.8	佐野	
233	62	52	5-E	胎衣重46(上)	土師器	焙烙	平	板口	20.0	3.2	16.4	3.2	佐野
234	62	52	5-E	胎衣重46(下)	土師器	焙烙	平	板口	20.8	3.3	16.8	3.2	佐野
235	62	52	5-F	胎衣重19(上)	土師器	焙烙	平	板口	21.0	3.8	16.8	3.7	佐野
236	62	52	5-F	胎衣重19(下)	土師器	焙烙	平	板口	21.4	3.6	17.4	2.2	佐野
237	62	52	5-E	胎衣重34(上)	土師器	焙烙	平	(20.0)	3.8	15.8	欠	佐野、スス付着	
238	62	52	5-E	胎衣重34(下)	土師器	焙烙	平	(20.8)	4.1	16.6	欠	佐野	
239	63	52	5-F	胎衣重30(上)	土師器	焙烙	平	21.2	4.2	15.4	3.6	佐野	
240	63	52	5-F	胎衣重30(下)	土師器	焙烙	平	20.6	4.0	15.4	3.4	佐野	
241	63	52	5-E	胎衣重36(上)	土師器	焙烙	平	(18.8)	*4.3	(14.8)	欠	佐野	
242	63	52	5-E	胎衣重36(下)	土師器	焙烙	平	19.2	5.0	16.0	2.9	佐野	
243	63	52	5-D	石列37以东	土師器	焙烙	丸	外型	17.5	3.55			佐野、胎衣埋納容器か
244	63	52	5-D	石列37以东	土師器	焙烙	丸	外型	17.8	3.75			佐野、胎衣埋納容器か

である。酒杯あるいは紅皿であろう。247は白磁のミニチュア碗。型による成型で、高台部は無袖である。248は皿片。見込みはコンニャク印判五弁花で、墨弾きで捺文を描く。

249は萩の薬灰袖碗である。高台の4ヵ所を切り取る割高台である。250は見込みにハマ痕をもつ薬灰袖碗。251は土灰袖の碗。250・251は須佐唐津の製品である。

252は棧瓦で、穿孔されている。253・254は海泉製の海泉瓦である。縁辺には5～6条の沈線が巡り、隅に穿孔がなされている。255は丸瓦である。

埋甕85は18世紀後半以降の遺構であると考えられる。

埋甕遺構出土遺物（第65・66岡 岡版52～54）

5 - 中区の調査では、埋甕遺構は21基が検出された。そのうち、実測が可能な資料は13点である。埋甕遺構で使用されていた器種は、陶器の甕、及び大甕、土師器の大甕であった。

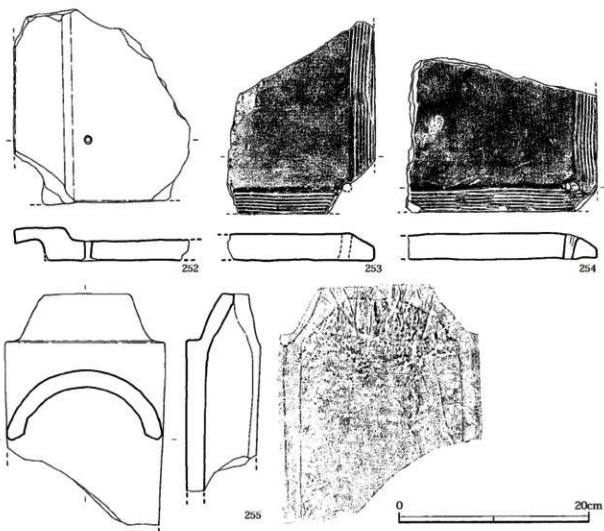
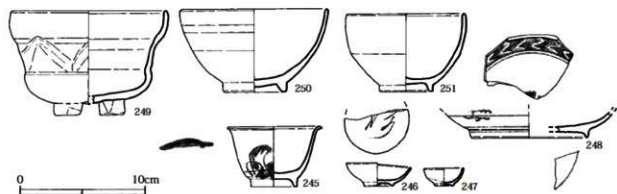
256は陶器の甕で、鉄軸を掛け流す。埋甕としてはやや小甕である。口縁部は内側に向けて、やや下がり気味に肥厚する。内面には格子目タタキのちナデ、外面にはタタキのちナデの調整を施す。産地は肥前と考えられる。

257・268は備前焼の大甕である。いずれも器面は板状工具によるナデ調整が施されている。268の胴部には捺印と思われるヘラ記号がみられる。ともに上部を欠損し、口縁の形状は不明である。

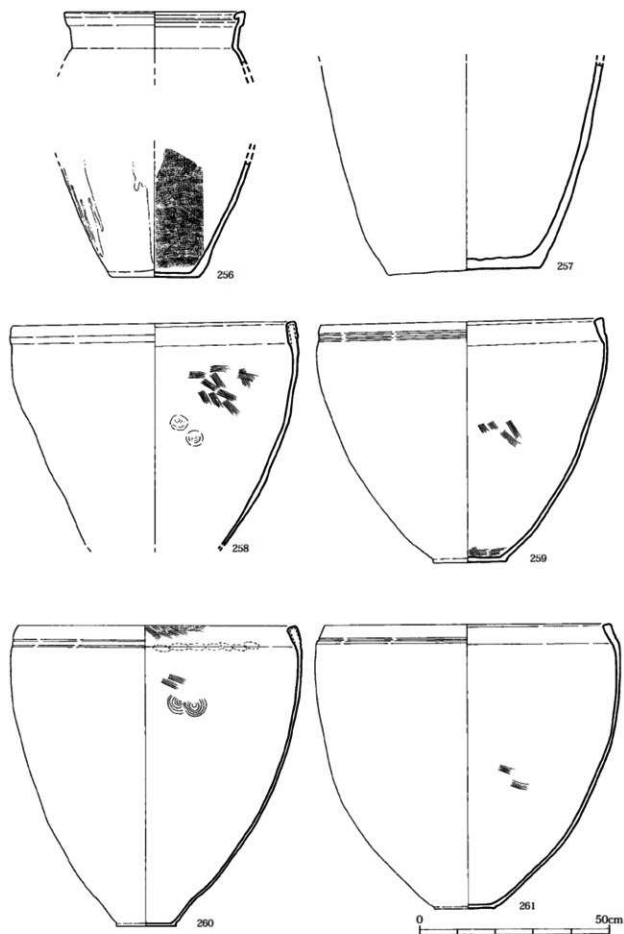
258～267は土師器の大甕である。円板状の底部に、粘土帯を積み上げて成型したものと考えられる。内面は同心目タタキがみられるが、胴部下は底部を中心に同心目状や放射状のハケメがみられる。底部付近は指頭による押し、ナデ、ハケによる調整を行い、上部は粘土帯を積み上げたあとタタキにより成型を行ったと考えられる。外面には成型ののち、ミガキあるいはナデによる調整を施している。器形は、口縁から底部にかけて緩やかに内湾し、粘土帯を貼り付けて肥厚させた口縁は内傾気味である。外面の口縁部と胴部の境界には、1～2条の沈線が巡っている。また、底径が口径の4～5分の1程度の大きさであるため、そのままでは安定性に欠ける。これら的大甕は、防府市佐野地域で生産されたものである。

土師器の大甕による埋甕遺構は、内面に石灰質の付着物がみられることから便槽として使用されていた可能性が高い。

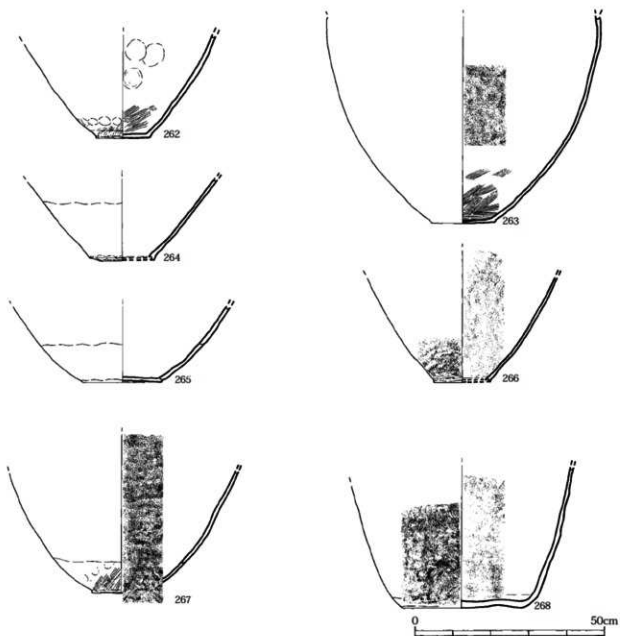
一方、256の肥前の甕や257・268の大甕は、土師器の大甕とは材質等も異なっており、石灰質の付着物もみられないので、水甕など別の用途も考えられる。



第64图 5—中区埋瓮85内出土遗物(1/3、1/4)



第65图 5-中区埋妾①(1/10)



第66図 5-中区埋甕②(1/10)

表4 5-中区 埋甕内出土遺物一覧

遺物 番号	図版 番号	図版 番号	出土地点	種別	器種	特徴		備考
245	64	43	5-H 埋甕85内埋上	磁器	小坏	染付		厩前 18C 前-
246	64	43	5-H 埋甕85内	磁器	小坏	染付	紅血か	
247	64	43	5-H 埋甕85内	磁器	ミニチュア碗	白磁	外型成型	
248	64	43	5-H 埋甕85内埋上	磁器	皿	染付	墨弾き 見込みコンニャク五弁花	厩前
249	64	43	5-H 埋甕85内埋上	陶器	碗	蒸灰釉	金袖 朔高台	萩
250	64	43	5-H 埋甕85内埋上	陶器	碗	蒸灰釉	見込みハマ鉢3	須佐
251	64	43	5-H 埋甕85内埋上	陶器	碗	土灰釉	離れ砂付者 トキン状高台	須佐
252	64	43	5-G 埋甕85内	瓦	棧瓦(平瓦)		穿孔有り	
253	64	43	5-G 埋甕85内	瓦	海鼠瓦		穿孔有り 櫛目敷有り	
254	64	43	5-G 埋甕85内	瓦	海鼠瓦		穿孔1 縁に6条・側面に3条の沈線	
255	64	43	5-G 埋甕85内	瓦	丸瓦			

表5 5 中区 埋藏遺構出土遺物一覧

単位: cm () : 復元値 * : 残存値

遺物 番号	節田 番号	図版 番号	出土地点	種別	器種	口径	器高	底径	備考
256	65	52	5-F 埋裏18	陶器	甕	(23.8)		22.8	肥前 貝輪 内: 格子目タタキ・ナデ 外: タタキ・ナデ
257	65	52	5-A 埋裏81	陶器	甕		*56.0	40.0	備前か 内外: ナデ 内: 底部に底道の痕跡
258	65	53	5-G 埋裏85	土師器	甕	74.8	*59.4		内: 同心円タタキ・ハケメ 外: ハケメ・ナデ
259	65	53	5-C 埋裏92	土師器	甕	74.0	62.0	19.2	内: スス・石灰分付着 同心円タタキ・ハケメ 外: ハケメ・ナデ
260	65	53	5-R 埋裏35	土師器	甕	73.4	79.2	15.6	内: 同心円タタキ・ハケメ 外: ミガキ・ナデ
261	65	53	5-C 埋裏44	土師器	甕	75.0	75.0	15.8	内: スス付着 同心円タタキ・ハケメ・ナデ 外: ミガキ
262	66	51	5-C 埋裏4	土師器	甕		*27.4	14.0	内: 石灰分付着 同心円タタキ・ハケメ・ナデ
263	66	53	5-D 埋裏28	土師器	甕		*54.6	16.6	内: 石灰分付着 同心円タタキ・ハケメ・ナデ 外: ミガキ
264	66	53	5-D 埋裏41	土師器	甕		*21.0	(17.0)	内: 石灰分付着
265	66	51	5-D 埋裏9	土師器	甕		*20.6	10.4	内: 同心円タタキ・ナデ
266	66	51	5-G 埋裏60	土師器	甕		*28.0	(14.8)	内: 同心円タタキ・ハケメ・ナデ 外: ナデ
267	66	51	5-F 埋裏16	土師器	甕		*32.4	15.2	内: 同心円タタキ・ハケメ 外: ハケメ・ナデ
268	66	51	5-F 埋裏12	陶器	甕		*37.6	36.0	備前 底印有り 内外: ナデ

E 区建物壁地層内出土遺物 (第67図 図版44)

269は端反形の磁器碗である。外面は青磁、内面は四方棒文と手掻き五弁花、高台内に二重方形枠「福福」銘をもつ。肥前の17世紀末から18世紀初めにかけての製品である。270は陶器の灯明皿で、底部を糸切りする。須佐唐津の製品であろう。271は土師器の皿である。

E 区建物壁地層直下の出土遺物 (第68図 図版44)

272は染付の皿である。

273~276は陶器。273の碗は、白化粧土の上に鉄絵で装飾をしている。274は香があるいは火入れで、口縁は外面に折り返して肥厚させる。外面上半に鉄釉を施し、暮目に掻き落とす。275は銅緑釉の埴の目軸刺ぎ皿で、重ね焼きの痕跡がみえる。273・275は肥前の製品と推定される。276は上灰釉の灯明皿で、表面にススが付着している。須佐唐津の製品であろう。

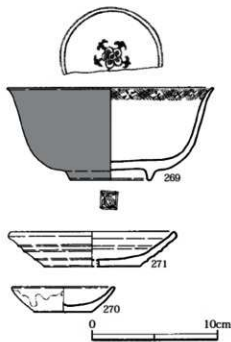
277は土師器の皿である。全体が熱を受けている。

A~H 区焼土層直上の出土遺物 (第69図 図版44)

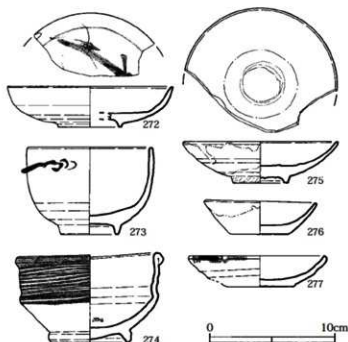
278は染付の盃で、内外面に丸文を描く。肥前の18世紀末以降の製品と考えられる。

279~281は陶器で、いずれも産地は肥前と考えられる。279は描鉢口縁片で、口縁付近にのみ鉄釉を施しているとみられる。口縁端部は内側に突出している。280は瓶の肩部片で、外面は薬灰釉と鉄釉が掛け分けられている。内面に同心円タタキがみられる、17世紀中頃の製品である。279・280は熱を受けている。281は印花皿で、見込み・唇付けには胎土目が見られる。17世紀末頃のものであろう。

282・283は土製品。282は魚の土型。283はミニチュアのコマで、上半部を型で作る。



第67図 5-中-E区建物整地層内出土遺物(1/3)



第68図 5-中-E区建物整地層直下の出土遺物(1/3)

A～H区焼土層内出土遺物（第70・71図 図版44・45）

284～289は磁器、290～296は陶器、297・298は土師器、299・300は瓦である。

284は碗の底部片である。285は筒形碗で、四方摺文と山水文をもつ。286は青花皿片。花唐草文。287は須具赤絵の大皿片である。288は肥前の17世紀中頃の製品である。289は亀甲文を墨弾きで施文した皿片で、18世紀中頃のものであろう。

290は薬灰釉の瓶。頸部は短く、小型である。291は志野の平鉢で、唐草様の文様が見える。被熱している。292は肥前の皿で、底部には目痕がある。口縁の残存部にねじれがみられることから、押圧によりひだ状の装飾を施していた可能性がある。293は須佐唐津の薬灰釉の折縁形皿。高台内を暗赤褐色にしている。294は薬灰釉に鉄化粧を施した皿。295は播鉢片で、被熱する。296は鉄化粧の播鉢。萩の製品である。

297は大型の土師皿、298は小型で非常に浅い土師皿である。表面にはススが附着している。299は二重菊文の軒丸瓦である。300は丸瓦である。

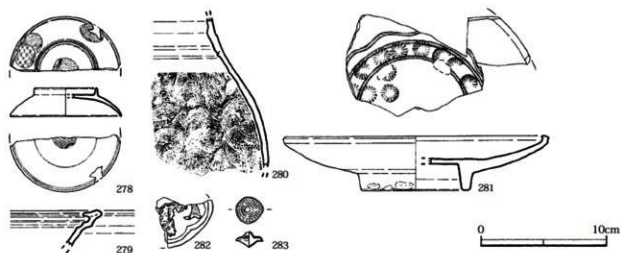
焼土層内から出土した遺物の多くは熱を受けている。

A～H区焼土層直下の出土遺物（第72図 図版45・46）

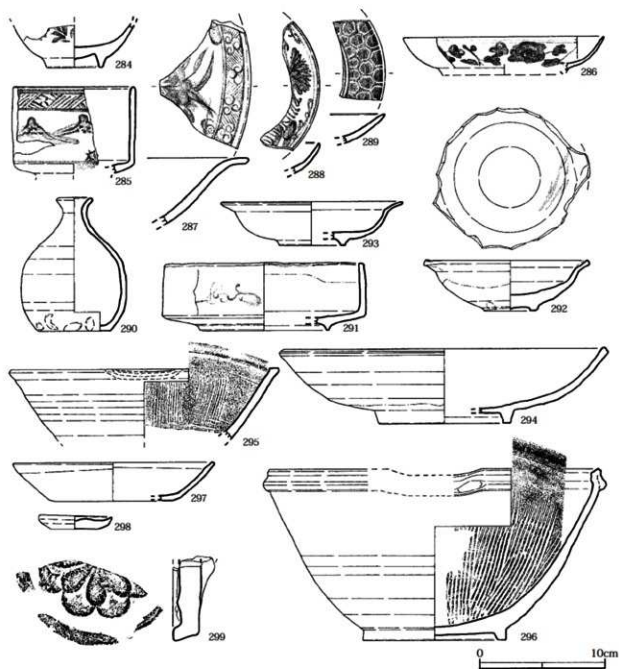
301は磁器、302～310は陶器、311～314は土師器である。

301は青花碗の底部片である。景德鎮のものであろう。

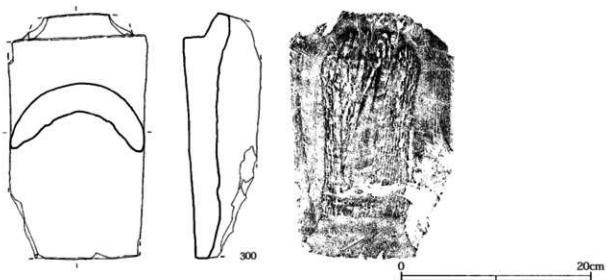
302は小碗。303は鉄釉の碗片。天目形か。304は薬灰釉の片口で、被熱している。口縁部を残してその下を切り取り、注口を貼り付けている。305は薬灰釉の脚付鉢である。306は瓶の口縁から頸部にかけての破片である。座地は備前。307は織部の向付で、型打ちののち脚部を半環状に貼り付けている。



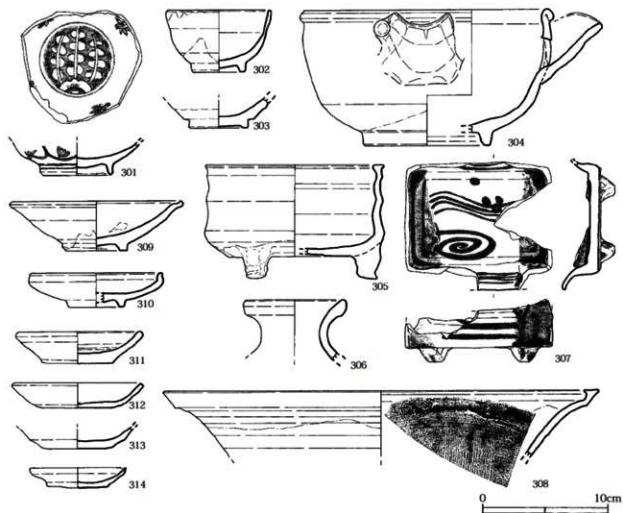
第69図 5-中-A~H区焼土層直上の出土遺物(1/3)



第70図 5-中-A~H区焼土層内出土遺物①(1/3)



第71図 5-中-A~H区焼土層内出土遺物②(1/4)



第72図 5-中-A~H区焼土層直下の出土遺物(1/3)

308は肥前の播鉢である。口縁部は内側に突出し、鉄軸を口縁にのみ施す。309は被熱した灰軸の皿である。口縁部に溝を巡らし、見込みに砂目が残る。肥前の17世紀中頃の製品である。310は薫灰軸の小皿で、畳付に目痕が残る。

311～314は土師皿である。313は被熱している。314は口縁にススが付着しており、灯明皿と考えられる。

その他の出土遺物（ST118・弥生土器）（第73・74図 図版46）

315はST118内から検出された中世の土師皿である。口径12.4cm、器高2.6cm、底径5.2cmである。焼成は良好で、色調は灰黄褐色。

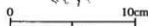
胎土は砂粒を含むが精良である。

316～318はいずれも弥生時代中期の土器で、口縁が下方に屈曲する垂下口縁をもつ壺である。316はB区3面下層の地砂直上層から出土した口縁部片で、斜格子文を施文する。口径の復元値は14.8cmで、胎土はやや粗く砂粒を含む。

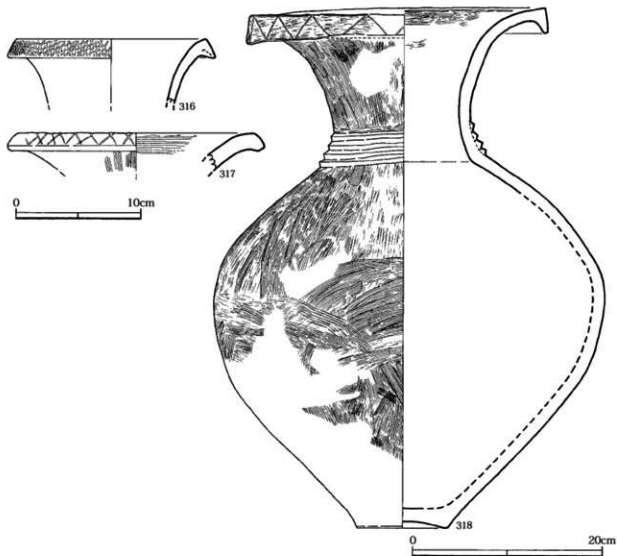
317はD区1面から出土した口縁部片で、鋸歯文を施文する。外面にタテハケ、内面にヨコハケに



315



第73図
5-中区その他の出土遺物①
(ST118) (1/3)



第74図 5-中区その他の出土遺物②（弥生土器）(1/3、1/4)

よる調整がみられる。復元した口径は20.2cmである。

318はC区淡黄色砂層から出土した壺で、ほぼ全体がわかる資料である。口縁には貝殻で鋸歯文を施文し、頸部と胴部の境界に断面三角形の突帯を4条貼り付ける。底部は上げ底で、胴部に黒斑がある。外面の調整はハケが主体で一部にミガキ・ナデがみられる。内面は口縁付近にヨコハケがみられる。口径31.3cm、胴部径41.2cm、器高55.3cm、底径9.9cmである。

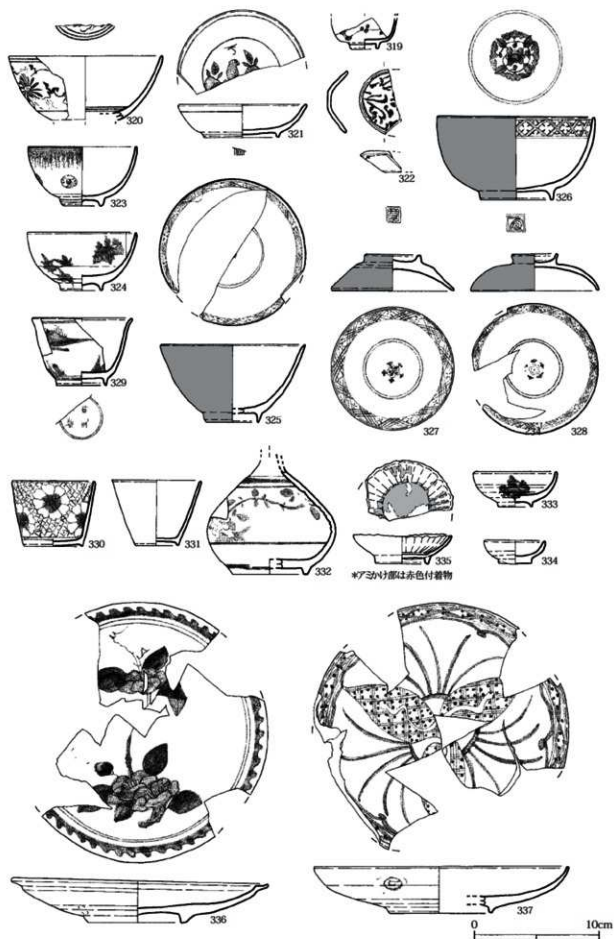
その他の出土遺物（第75～81図 図数46～51）

319～352は磁器である。

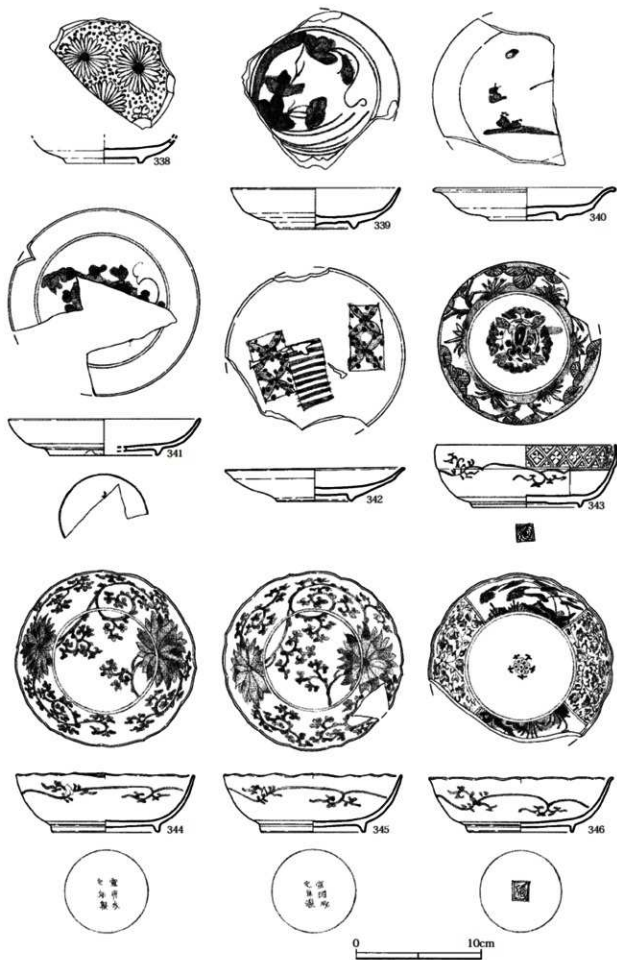
319は青花の小坏。景德鎮の製品である。320は赤絵の碗片。17世紀初頭のタイのものである可能性が高い。321は花鳥文の青花小皿。322は景德鎮の散蓮華片。323は雨降文の小碗で、コンニャク印判と型紙摺りを用いる。銘は「大明年製」くずし。肥前の17世紀末以降の製品である。324の小碗は、コンニャク印判で桐文と楓文を施文する。18世紀前半のものである。325～328はいわゆる外青磁。325は口鈿の碗で、四方標文を巡らす。見込みは五弁花か。326は見込み牡丹唐草の碗で、銘は二重方形枠「満福」である。327は手描き五弁花の蓋で、つまみ部内に二重方形枠に「筒江」銘をもつ。この銘は、武雄領内の窯場のものでされ、18世紀中頃からみられる。328はコンニャク印判五弁花の蓋。329は山水文の播反形の小碗で、銘は「宣明年製」。17世紀末以降の製品である。330は氷裂文に花文を描いた猪口で、18世紀前半以降のもの。331は白磁の猪口。332は色絵の油壺である。333は小坏。コンニャク印判で桐文を施文する。内面に鉢状のものが付着している。334はベタ底の白磁紅皿。335は白磁の紅皿で、内型による成型のち、高台を貼り付ける。内面に付着する赤色物質は鉛丹である可能性が高い。336・337は17世紀中頃の皿である。336は折縁形で波文と悟文を描く。337は三方銀赤文に七宝雲文を巡らす。338は点描地に菊花文と桜文を描く皿で、17世紀前半から中頃の製品である。339・340は17世紀中頃の皿である。339は朝顔文。340は牡丹文の皿で、「太明」銘をもつ。17世紀後半のものであろう。342は播反形の皿であるが、焼成不良のため、器面には貫入がみられる。17世紀中頃以降の製品。343は蛇の目門型高台の皿。見込みは牡丹唐草文で、銘は二重方形枠に「満福」である。時期は18世紀中頃。344・345は同一の意匠と規格をもつ製品である。菊唐草文の輪花皿で、高台内には「宣明成化年製」銘とハリ痕がみえる。これらは17世紀末のものである。346は草花文と唐草文の輪花皿。見込みに手描き五弁花、高台内に二重方形枠「満福」銘とハリ痕を有する。18世紀前半の製品。347は後開山水人物文の皿。「満福」をくずした銘をもつ、18世紀後半の製品である。348は肥前の青磁大皿で、高台内を蛇の日糸刺ぎして鉄化処理している。17世紀後半のものであろう。349は青磁の脚付鉢で、見込みに印花を施す。肥前の17世紀中頃の製品である。350は雀文と竹文を描いた碗。19世紀中頃の小畑の製品であらう。351は焼痕痕が残る小坏。「長門埴田」銘がみえる、小畑の製品である。352は竹文の線香筒。底面の墨書は「コけ口」と読める。

353～374、381～385は陶器である。

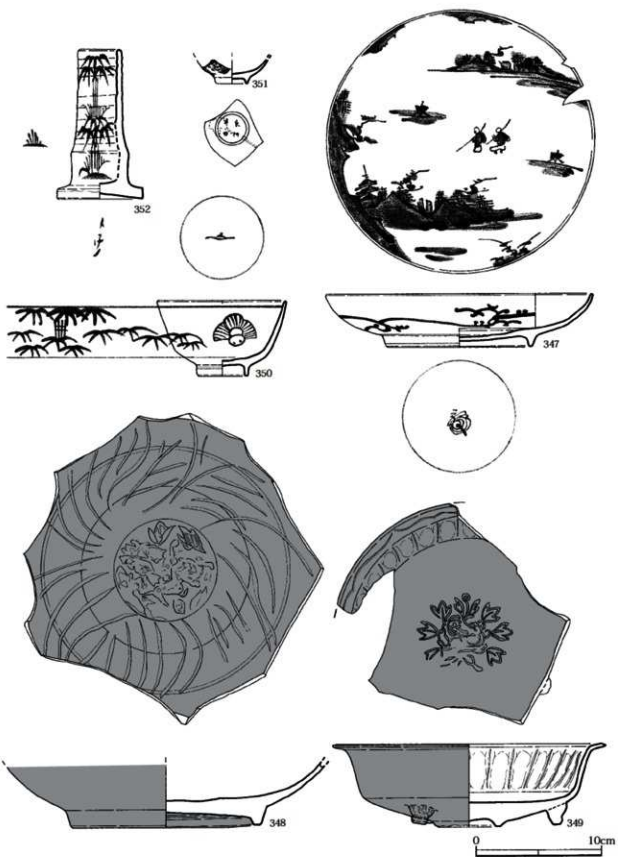
353は瀬戸の犬目碗。354・355は萩の丸碗。356は曇灰釉の碗。357は肥前の灰釉碗である。358～360は淡黄色の糖練胎土に只須で絵付けをし、高台内には刻印をもつ。いわゆる京焼風陶器とされるので、肥前で17世紀後半に出現する。358は碗。浅い「刻」と「柴」の刻印銘をもつ。359の碗には、渦巻状の刻印と「清」字が含まれる印銘がみえる。焼成不良のため、釉が白濁する。360の鉢は内面が



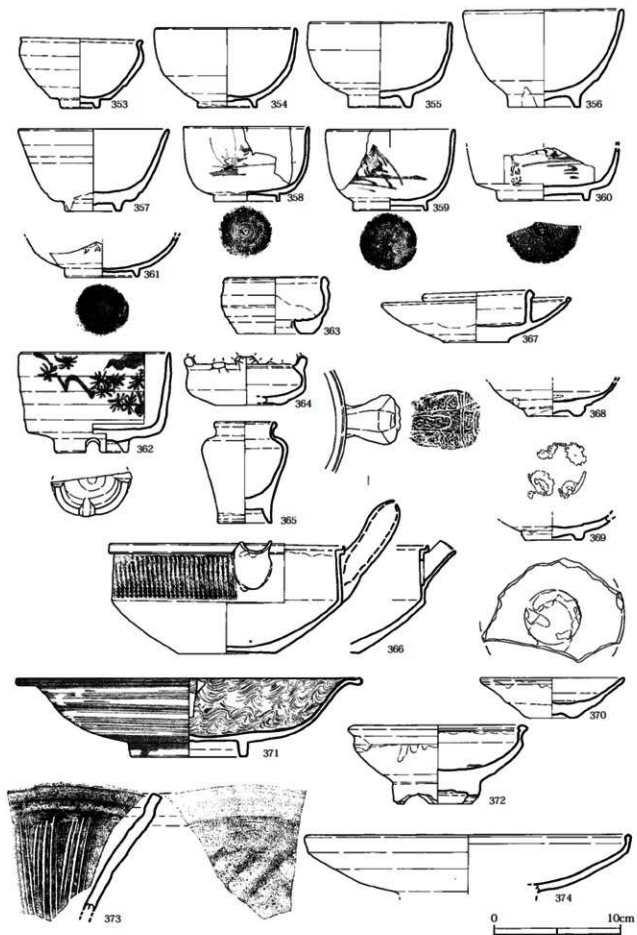
第75図 5-中区その他の出土物③(1/3)



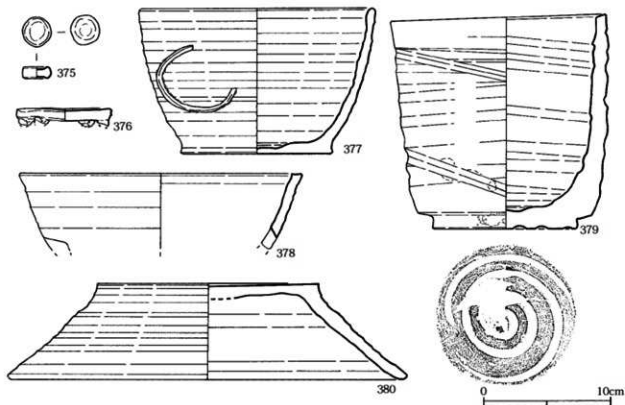
第76図 5-中区その他の出土遺物④(1/3)



第77図 5-中区その他の出土遺物⑤(1/3)



第78図 5-中区その他の出土遺物⑥(1/3)

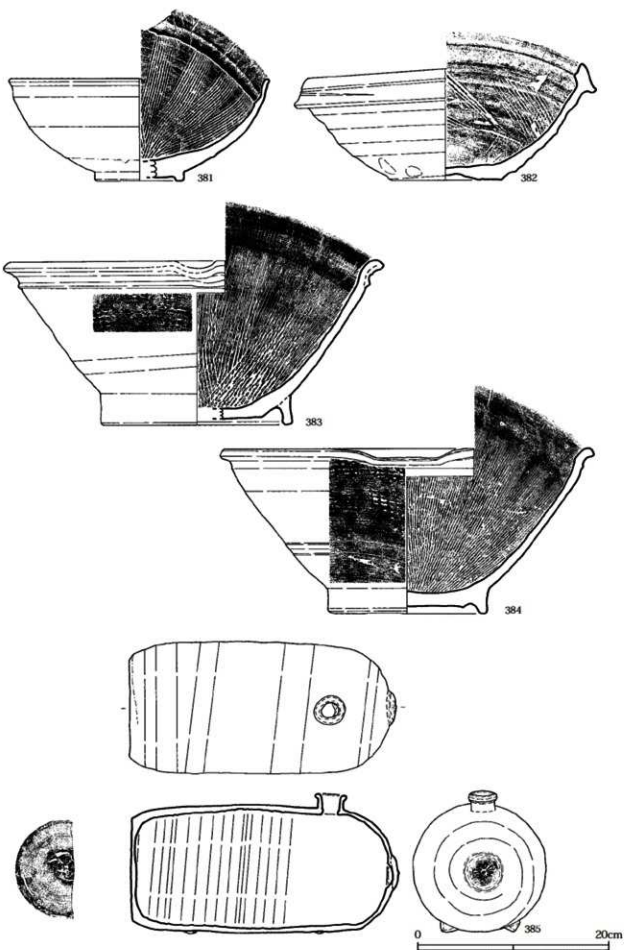


第79図 5—中区その他の出土遺物⑦(1/3)

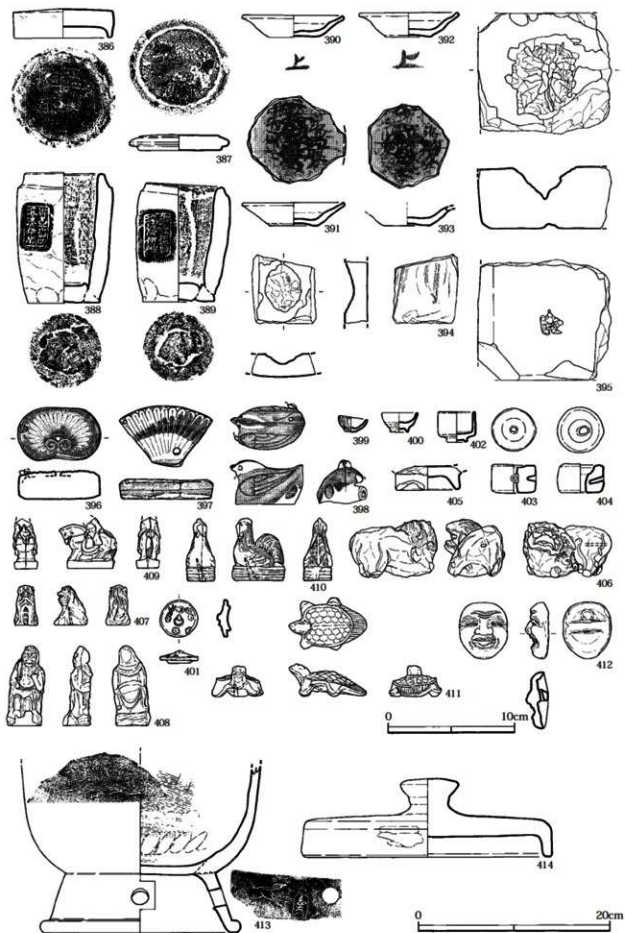
無軸のため香炉の可能性が高い。円刻内に「松小吉」を押印する。361は色絵を施す京焼風陶器の碗。高台内に「清」字くずしを押印する。362は鉄絵の筒形碗。割高台で、4カ所を抉り取る。363は小型の植木鉢。鉄軸を施す。364は織部の緑軸小鉢。口縁に把手状の突起を貼り付ける。365は土灰軸の壺。いわゆる飴壺に類似した形状を呈す。萩あるいは須佐唐津の製品である。366は須佐唐津の行平。見込みにハリ痕がみられる。367は鉄軸の灯明受台。受部と底部付近に重ね積みの痕跡がみえる。368～370は肥前の砂目の皿。368・369は三日月高台。370はクリ底で、口縁にへこみがある。371は刷毛目皿。372は肥前の香炉。口縁は内側に折り込み、丸くおさめ、口縁部のみ施軸する。高台は3ヶ所を抉る割高台で、その壘付の形状は見込みの重ね焼痕と酷似する。373は丹波の櫛鉢。口縁は無装飾で、外面に押圧痕がみられる。374は薬灰軸の皿。須佐唐津の製品である。381～384は描鉢である。381は須佐唐津。外面はケズリ調整で、土灰軸を施す。382は備前の製品。内面は摩耗する。383・384は肥前。口縁は外側に折り返し、その端部を成型して稜をつくる。底部は貼り付け高台で、外面は格子目タタキがみえる。385は土灰軸の湯たんぽ。胴部をロク口成型し、傘めた口を円形の粘土板で塞ぎ、側面に穿孔して注口を付けている。また反対の側面には脚を貼り付け、底部とする。須佐唐津の製品か。375～380は窯道具である。

375は熟餅。窯詰めの際に目として使用されたもので、中央をくぼませているため器面には輪状の目痕を残す。胎土は砂粒を含み、縁辺は剝離する。376は6足ハマである。377～379はサヤ鉢である。377は体部に窯印を有する。379は筒形で、底部を渦状に削る。380はサヤ鉢の蓋。天井部に糸切り痕がみられる。

386～393は土師器である。



第80図 5-中区その他の出土遺物⑧(1/4)



第81図 5-中区その他の出土遺物⑨(1/3、1/4)

386・387は焼塩壺の蓋。386は型作りで、内面には布目痕がみられる。387は表面に雲母が付着し、方形枠内に「深草／砂川／権兵衛」の印銘を有する。京都深草系の花焼塩壺の蓋である。388・389は板作りの焼塩壺で、「御塩壺師／堺湊伊織」の刻印銘をもつ。2つの刻印名は書体が異なり、388の方がやや早く、17世紀末からみられ、389は18世紀前半頃に流通する。390～393は土師器皿。390・392は底面に「上」と墨書きする。391・393は内面の外周に一から十の漢数字を巡らす。391の見込みには「此病両眼根」や「眼病主一代府」の文字がみえる。393の見込みには「此病胸塞口」や「病主一代」の文字がみえる。重ねて書かれているため一部しか判読できないが、ともに病についての記述である。390と391、392と393がそれぞれ一組で、「上」の墨書をもつ皿を上にして重ねられていた。こうした遺物の類例がなく、詳細は不明であるが、病の平癒を目的としたものであると推察される。

394は瓦片。395は磚の破片である。表面に敲打痕がみられることから、何かに転用されたと考えられる。

396・397は磁器の水滴である。396は団扇形、397は扇形で、呉須と鉄軸で彩色する。ともに型打ちで、側面に接合痕が残る。398は陶製のオシドリ形人形で、左右を型合わせする。中空で穿孔があることから、水滴とも考えられる。399・400は白磁のミニチュア碗である。399は型作りである。401は白磁のミニチュア蓋。型作りで、上面に松竹梅文を陽刻する。402は陶器のミニチュア碗。403・404は石臼形の土製品である。405は碗の底部。体部と高台を意図的に打ち欠けしており、灯芯押さえに転用されたとみられる。406～408は陶製の人形。406は青磁軸の獅子。須佐唐津の製品と考えられる。407は土灰軸の狛犬で、底部に穿孔している。408は不動明王で、前後を型合わせ。透明釉を施す。409～411は土人形で、表面に雲母が付着する。409は左右型合わせで、馬に人物あるいは動物が乗っている。410は鶏。左右を型合わせする。411は上下型合わせの亀。410・411は底部に穿孔がみられる。412は箭の面根付である。黄釉を施す。

413・414は瓦質土器。413は佐野の火鉢。外面はミガキ調整、内面は指押さえやハゲがみられる。体部に鳳凰文、脚部に銘と馬文を押印する。銘は隅入方形枠に「甚右エ門」とあり、防府市佐野の製品。414は火消し壺の蓋である。

注

- 1) 株式会社吉田生物研究所が行った成分分析による。分析(3)参照。

参考文献

- 1) 小川望「御塩壺師／堺湊伊織の刻印をもつ焼塩壺について」『江戸在地系土器の研究』Ⅱ 1994
- 2) 江戸陶磁土器研究グループ『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅱ 1996

表6 5-中区 陶磁器・土器・土製品一覧②

品目	種別	場所	年代	特徴	備考			
269	67	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	青磁夾伝 外青磁 見込み5弁花 二重方形枠内 器箱, 底	昭和17C末-18C前	
270	67	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉 底面赤銅彩	須佐	
271	67	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉		
272	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	夾伝 白化粧土, 灰釉 鉄繪	史前 史前	
273	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	鉄繪(大人丸)	赤・須佐	
274	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	刷毛塗	史前	
275	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉	赤の目地に茶 外面洗明輪	須佐
276	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉	底面赤銅彩 鉄胎	
277	68	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉	赤明輪 口縁スス付 緑釉	
278	69	44	5-G	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C末-
279	69	44	5-G	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前
280	69	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
281	69	44	5-G	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C末
282	69	44	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉	上灰	史前 17C末
283	69	44	5-G	造物窯跡内の下	陶器 甕	上灰釉	上灰	
284	70	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
285	70	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
286	70	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
287	70	44	5-E	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
288	70	44	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 17C中
289	70	44	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
290	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
291	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
292	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
293	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
294	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
295	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
296	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
297	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
298	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
299	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
300	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
301	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
302	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
303	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
304	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
305	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
306	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
307	70	45	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
308	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
309	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
310	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
311	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
312	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
313	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
314	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
315	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
316	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
317	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
318	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
319	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
320	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
321	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
322	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
323	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
324	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
325	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
326	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
327	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
328	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
329	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
330	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
331	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
332	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
333	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
334	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
335	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
336	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
337	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
338	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
339	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
340	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
341	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
342	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
343	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
344	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
345	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中
346	72	46	5-C	造物窯跡内の下	陶器 甕	赤	丸文	史前 18C中

収録	巻	話	地区	形式	種別	器種	音	楽	考	
347	77	47	5-E	石列5列以	聴器	籠	楽付	桂田山人物文 “流福くすし”語	東河 18C後	
348	77	48	5-A	2-3曲(石列 以内)	聴器	籠	竹笛	白花 朝平 合合合の目録は宮	東河 17C後	
349	77	48	5-B	2-3曲(石列以外)	聴器	籠	竹笛	山花 石河 藤花	東河 17C中	
350	77	46	5-E	2-2曲(石列)	聴器	籠	楽付	竹文 繁文	小瀬 19C中	
351	77	48	5-E	1曲(電機機出)	聴器	小唄	楽付	綾瀬直 「長門扇扇出」	小瀬 19C中	
352	77	48	5-1	2-2曲(以内)	聴器	籠	楽付	竹文 繁藤に忠告有り「口付」	小瀬 19C中	
353	78	48	5-B	3曲(石列5曲以南 内トレンチ)	陶器	籠	黒糖	大ト糖	東河	
354	78	48	5-C	石列5列以	陶器	籠	楽付	丸紙	東河	
353	78	48	3-G	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	透明節	トキンタ合音 見込み得戻	東河	
356	78	48	3-G	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	楽付	楽付	東河	
357	78	49	3-G	3 (石列以外)	陶器	籠	杖糖	浴室不呂	東河	
358	78	49	5-B	石列5列以(クララ)	陶器	籠	透明節	高合内割付 ○に「榮」	東河	
359	78	49	5-A	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	透明節	高合内(究職文) 高合内(原原あり)	東河 17C末-18C初	
360	78	48	5-B	石列5列以(クララ)	陶器	籠(香煙)	透明節	高合内割印あり ○に「松」字、原原松(山水文)	東河 17C末	
361	78	48	5-B	石列5列以(クララ)	陶器	籠	透明節、色絵	高合内割付 「清、のくすし、赤、紅の色絵	東河	
365	78	49	5-F	石列5列以	陶器	籠	楽付	鉄杖 朝高台	東河	
365	78	48	5-F	石列5列以	陶器	籠	杖糖	松木杖 高合内丸有り 赤切り紙	東河	
364	78	49	5-F	石列5列以	陶器	籠	杖糖	高合内 小唄 口付要部(高有り付)	東河	
365	78	49	5-G	1回(石列5列以)	陶器	籠	女	十灰節	東河	
366	78	49	5-H	2-1回	陶器	籠	上灰節	把手に割付 外周トビゴソ 見込み丸ハ紙	東河	
367	78	49	5-D	1回(石列5列以)	陶器	籠	灯明(台)	杖糖	口付、楽付(高有り付) 赤切り紙	東河
368	78	49	5-F	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	上灰節	高合内	東河	
369	78	49	5-H	3曲以下(石列5列以)	陶器	籠	上灰節	見込み得付	東河	
370	78	49	5-G	3曲以下(石列5列以)	陶器	籠	杖糖	見込み得付 口付へこみツリ	東河	
371	78	49	5-F	石列5列以(高有り)	陶器	籠	上灰節	高合内(高有り)	東河	
372	78	49	5-G	石列5列以	陶器	籠	香付	上灰節、高灰節 見込み得付 下の重体の高合	東河	
373	78	50	5-1	4曲(石列5列以外)	陶器	籠	籠	高合内 5条	東河	
374	78	49	5-C	4列5列以	陶器	籠	楽付	高合内	東河	
375	79	49	5-D	1回(石列5列以)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
376	79	49	5-D	トレンチ内	陶器	籠	籠	高合内	東河	
377	79	49	5-E	トレンチ内(石列5列以)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
378	79	50	5-C	石列5列以	陶器	籠	籠	高合内	東河	
379	79	49	5-D	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
380	79	50	5-B	2-3曲(石列以外)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
381	80	50	5-H	1回(石列)	陶器	籠	上灰節	高合内	東河	
382	80	50	5-H	2-3曲(内)	陶器	籠	上灰節	高合内	東河	
383	80	50	5-1	1回(石列)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
384	80	50	5-E	電機機出	陶器	籠	籠	高合内	東河	
385	80	50	5-H	トレンチ(石列)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
386	81	50	5-A	2-3曲(石列 以外)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
387	81	50	5-A	2-3曲(石列 以内)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
388	81	50	5-A	2-3曲(石列 以外)	陶器	籠	籠	高合内	東河	
389	81	50	5-B	電機機出	陶器	籠	籠	高合内	東河	
390	81	51	5-C	石列5列以	陶器	籠	籠	高合内	東河	
391	81	51	5-C	石列5列以	陶器	籠	籠	高合内	東河	
392	81	51	5-C	石列5列以	陶器	籠	籠	高合内	東河	
393	81	51	5-C	石列5列以	陶器	籠	籠	高合内	東河	
394	81	50	5-A	2-3曲(石列 以外)	瓦	瓦	高合内	高合内	東河	
395	81	50	5-H	1-2回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
396	81	50	5-D	トレンチ内	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
397	81	50	5-D	トレンチ内	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
398	81	50	5-H	1回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
399	81	51	5-F	電機機出	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
400	81	51	5-D	石列5列以外	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
401	81	51	5-1	1回(石列5列以外)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
402	81	51	5-1	1回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
403	81	51	5-D	電機機出	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
404	81	51	5-A	2-3曲(石列 以内)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
405	81	51	5-1	1回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
406	81	51	5-1	1回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
407	81	51	5-B	2-3曲(石列 以外)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
408	81	51	5-B	2-3曲(石列 以外)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
409	81	51	5-1	1回(石列5列以外)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
410	81	51	5-B	2-3曲(石列5列以外)	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
411	81	51	5-B	石列5列以	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
412	81	51	5-1	1回	陶器	籠	高合内	高合内	東河	
413	81	51	5-F	電機機出	瓦	瓦	高合内	高合内	東河	
414	81	51	5-B	2-3曲(石列5列以外)	瓦	瓦	高合内	高合内	東河	

②平成16年度（6・7地区）

SE156（第82図 図版55）

415～417は磁器、418～422は陶器、423・424は土師器。

415・416は肥前の碗で、外面に一重網目文があり、416は青磁軸が施されている。17世紀後半以降。417は葡萄文の瓶。17世紀後半以降。418は白化粧土に長石軸が内外面に施された刷毛目碗。高台内がトキン状になっている。419は高台が少し高い碗。420は内面には白化粧土に土灰軸が施され、砂目が残る刷毛目の皿。17世紀末以降。421は萩・須佐の皿。422は肥前の甕。肩部に縄目状突帯が2条ある。口縁端部は内外に突出し、口縁上部には重ね積み痕が見られる。内面には格子目のタタキ痕が残る。423・424は土師器の皿で底部に糸切り痕がある。

SE156の廃絶時期は、17世紀後半と考えられる。

SK170・SK171（第83図 図版55）

SK170とSK171についてはレベルや時期の差が無いことから、まとめて記述する。

425・428は藁灰軸を施軸する皿で、425は上部が外反している。426は口縁部が肥厚せず、ほぼ直線になった摺鉢片。427は青花の皿で漳州窯系である。

SK169上層（第84図 図版55・56）

429・430は磁器、431～433は陶器、434・435は土師器。

429は見込みに蛇の目軸刺ぎが見られる碗。18世紀前～中頃。430は外面に草花が描かれた猪口で、18世紀中頃。431は高台内に「清（水）」銘がある碗片。432は内面に4条の刷毛目がある皿で、底部には細砂粒が付着している。433は体部がゆるやかに外反している皿。見込みに胎土目があり、高台の畳付に板目痕が見られる。434は植木鉢で底部に排水用の穴がある。435は佐野の焙烙で、口縁部は折り込んで肥厚させ、把手部は貼り付けた後にナデで調整している。底部は平底で板目痕がある。見込みにはスガが付着している。

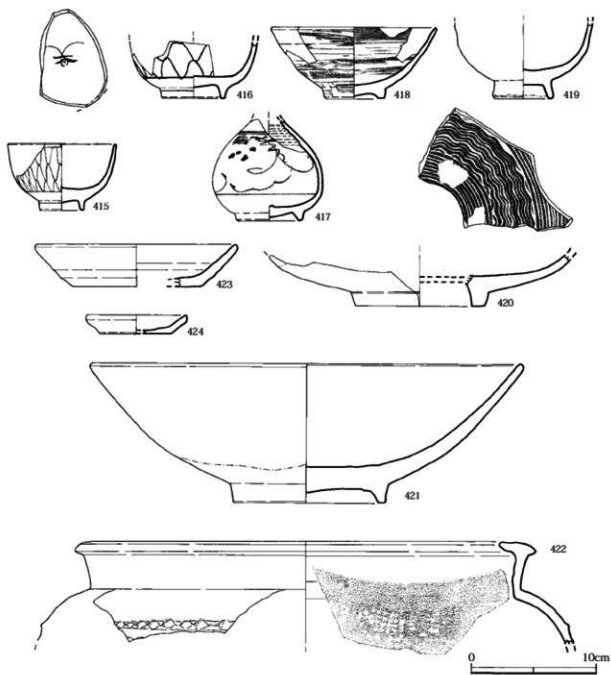
SK169上層は18世紀中頃以降と考えられる。

SK169下層（第85図 図版56）

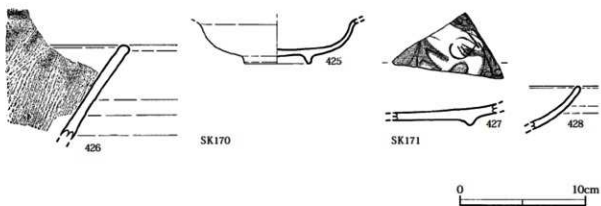
436～443は磁器、444～451は陶器、452は土師器、453は瓦質土器。

436は蓋付碗で口縁端部に軸刺ぎが見られる。外面には丸文がある。437は白磁の猪口。438は白磁の紅皿。外面は菊花の型成型である。439は青磁のミニチュア壺で色絵の柴東文がある。440は仏飯器で脚部に2条の圏線が巡り、体部外面には雨降り文がある。高台内に人名と思われる墨書が残る。18世紀中頃。441～443は肥前の皿で、441は見込みに2条の圏線が巡り、その外側に松竹梅の文様が見られる。18世紀中頃以降。442は見込みにコンニャク五弁花、高台内に「大（明）年（製）」くずし銘がある。18世紀中頃～後半。443は見込みに荒磯文がある小皿である。

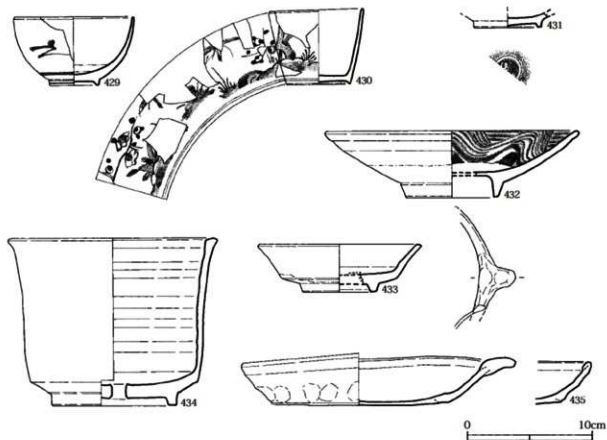
444は萩の丸碗。445は開口碗で、高台畳付を布状のもので軽くぬぐっている。446は塩軸を施した摺鉢片で口縁を折り返して肥厚させている。447は鬚水入れ。448は見込み中央が盛り上がり、口縁の一部が突起している。鉄軸が施されている。灯明具と考えられる。449は左右型合わせのミニチュアの壺。450は折縁の皿片で見込みに鉄絵と髹刷毛目がある。451は底部に糸切り痕のある須佐の皿。外面にスガが付着。452は七厘のサナデ、糸切り後に穿孔を開けている。453は佐野の焙烙。把手を有す



第82图 6地区SE156出土遺物(1/3)



第83图 6地区SK170・SK171出土遺物(1/3)



第84図 6地区 SK169上層出土遺物(1/3)

る型と思われるが欠損している。口縁を折り込んで肥厚させている。板目が残る平底で内外面にススが附着する。

SK160・SK159 (第86図 図版57)

454・455は陶器、456は瓦。

454は擂鉢で、見込み・高台内に重ね積み痕の胎土目が6個ある。455は皿片で見込みを蛇の目軸刺ぎし、銅緑釉を施軸する。17世紀後半以降。456は軒平瓦当片である。

SK121 (第87図 図版57)

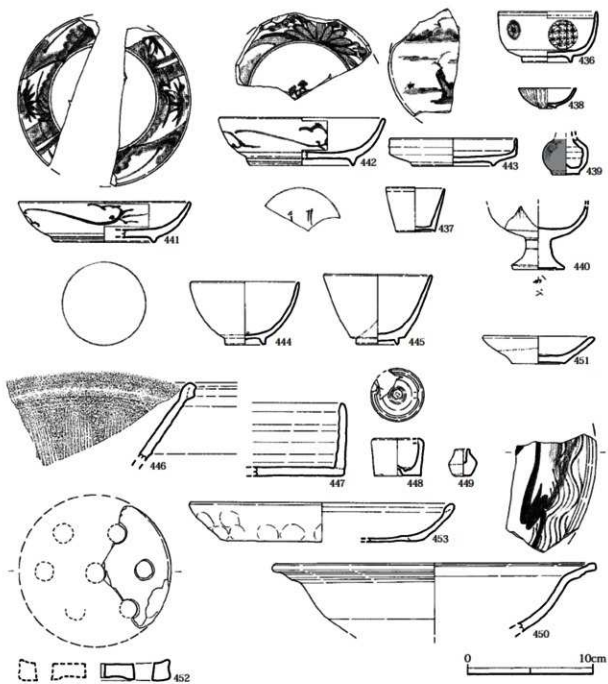
457～461は磁器、462～465は陶器、466は土師器。

457は段重の蓋。把手部を貼り付けている。19世紀前半以降。458は見込みに五弁花と草唐草文、側面に四方標文がある皿。高台内には、二重角の中に「筒江」銘がある。18世紀中頃から後半。459は輪花の皿片で、18世紀後半～。460は紅皿。462～464は京・信楽系の製品である。462は腰折碗で胴部に鉄銹・白泥部が見られる。463・464の碗は胴部に緑釉と赤絵で描かれた文様がある。削り出し高台で円刻がある。465は蓋で底部に糸切り痕がある。466は小型の焼壇壺の身。輪積み成型で、外面は当て具で押圧成型した後ナデで調整し、内面には布目が残る。

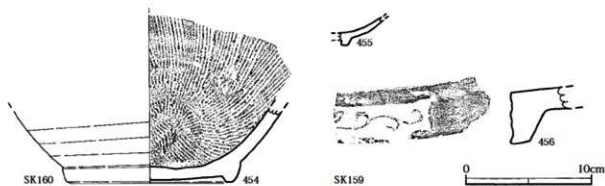
SK121の時期は18世紀後半以降と考えられる。

SK107 (第88図 図版57・58)

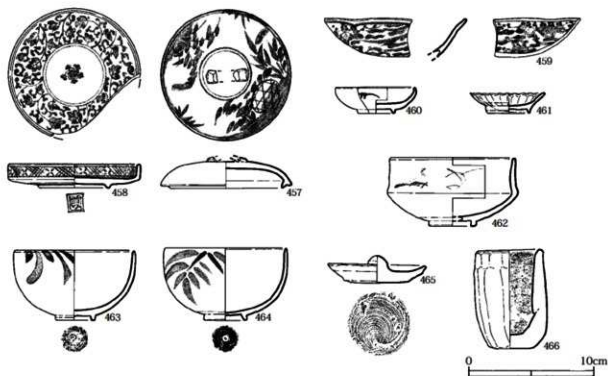
467～478は磁器、479～486は陶器。



第85图 6地区 SK169下層出土遺物(1/3)



第86图 6地区 SK159・SK160出土遺物(1/3)



第87図 6地区SK121出土遺物(1/3)

467～470は肥前の碗。467は見込みに草花文、胴部に鳳凰文、高台内に「宣明化製」の銘がある。17世紀末以降。468の胴部は溶融不良で歪んでいる。外面には山水文。17世紀後半。469は白磁。470は見込みに赤の二重圏線と赤・黒で描かれた五弁花がある。471は柳文の小杯。高台内に銘があるが不明。17世紀後半～末。472は底部欠損の香炉。胴部に凸出しの型押除刻と印花がある。外面は青磁釉、内面は透明釉が施されている。473は青花の皿。口縁の内外に圏線が巡る。474・475は肥前の皿でどちらも見込みにコンニャク五弁花、高台内にハリ支えがあり、18世紀中頃以降。474は器壁が厚く、側面に唐草文、高台内に「大明年製」くずしの銘がある。476～478は肥前の紅皿でいずれも外型成型。476は見込みにコンニャク印判の桐文がある。

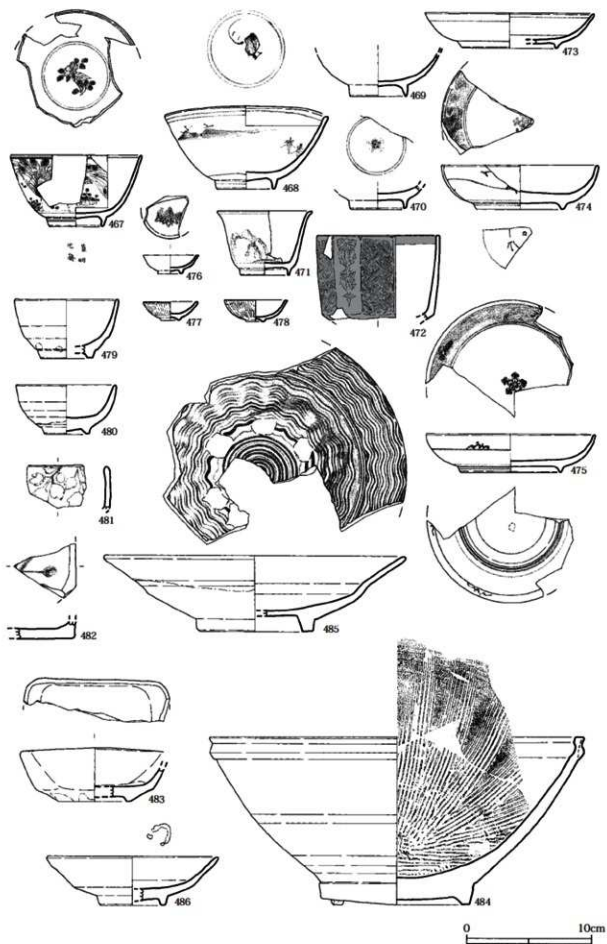
479・480は須佐の碗で480は器壁が厚く、三日月高台である。481は京焼で器種不明。外面に青釉と緑釉で描かれた葉文がある。482は織部の向付片。底の内外面には布目がある。483は香形碗で須佐。484は須佐の搦鉢で、見込み・疊付に胎土目痕が残る。口縁部を折り返して肥厚させ、ナデで窪みをつけている。485は二彩唐津の刷毛目皿。見込みに緑釉が施軸されている。体部中央で軽く屈曲している。17世紀末以降。486は見込みに輪状の胎土目痕が残る皿。口縁はわずかに肥厚している。

SK107は17世紀後半以降と考えられる。

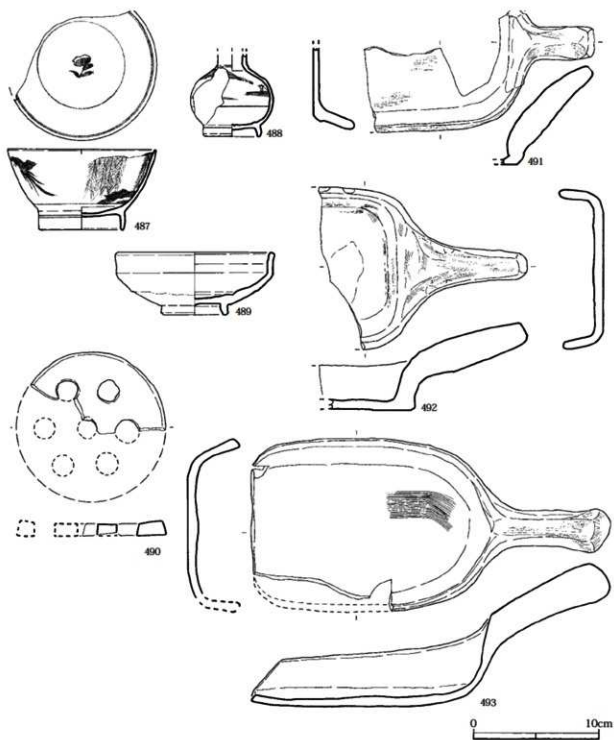
SK151 (第89図 図版58・59)

487・488は磁器、489は陶器、490・491は土師器、492・493は瓦質土器。

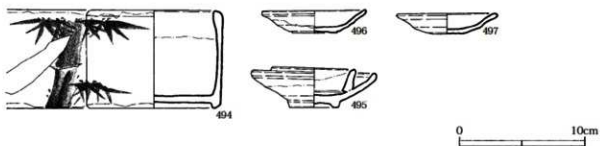
487は高台が少し高く、見込みに花文、体部に柳文と鳥文がある広東碗。19世紀初め。488は山水文の小瓶。489は見込みに足付ハマ痕が残る腰折碗。490は七厘のサナで佐野。491～493は十能。491の底部は板目痕があり、把手の上面は刷毛状工具で撫でている。492の底部には圧痕があり、把手の上部はミガキ、下部はナデで調整している。493は底部に圧痕、把手部の上部は刷毛状工具でナデ後へ



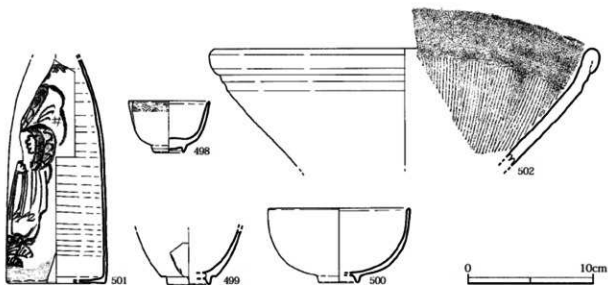
第88图 6地区SK107出土遺物(1/3)



第89图 6地区SK151出土遺物(1/3)



第90图 6地区SK166出土遺物(1/3)



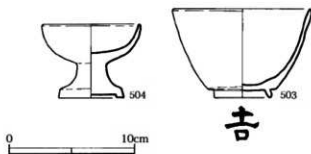
第91図 6地区SK127出土遺物(1/3)

ラ状工具でミガキ、下部は指オサエ後ミガキで調整している。

SK166 (第90図 図版59)

494～496は陶器、497は土師器。

494は筒型の火入れで、外面は白化粧土の上に竹文の鉄絵がある。口縁端部には煙管による敲打痕がある。底部を等間隔で削って装飾している。495は灯明受け台で高台内がトキン状になっている。496は灯明皿で底部に糸切り痕がある。497は底部に糸切り痕がある皿。



第92図 7地区SK154出土遺物(1/3)

SK127 (第91図 図版59)

498は磁器、499～502は陶器。

498は口縁に四方禪文がある小坏。499は杉形の小碗片で信楽。500は丸碗で、高台畳付には鉄漿か塩漿が付いている。501は白化粧土に鉄絵・緑釉で人物を表していると思われる彌徳利。502の描鉢は口縁部を折り返して肥厚させている。

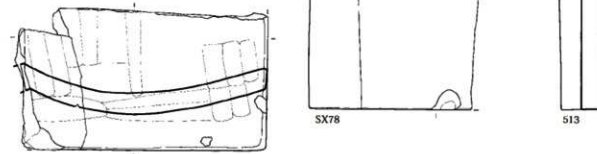
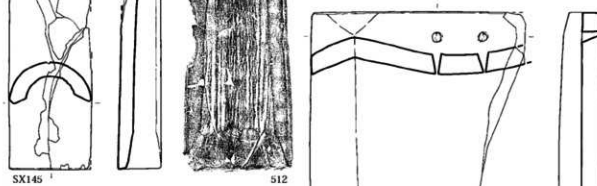
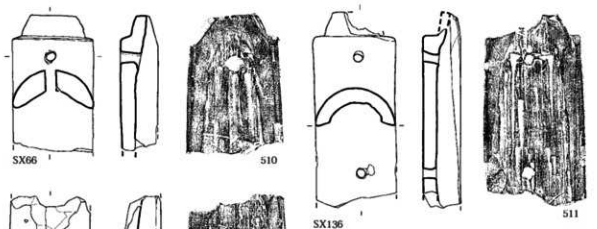
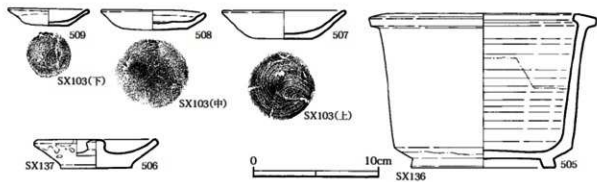
SK154 (第92図 図版59)

503・504は陶器で、503は薬灰釉の萩の開口碗。高台内に「吉」の字の墨書がある。

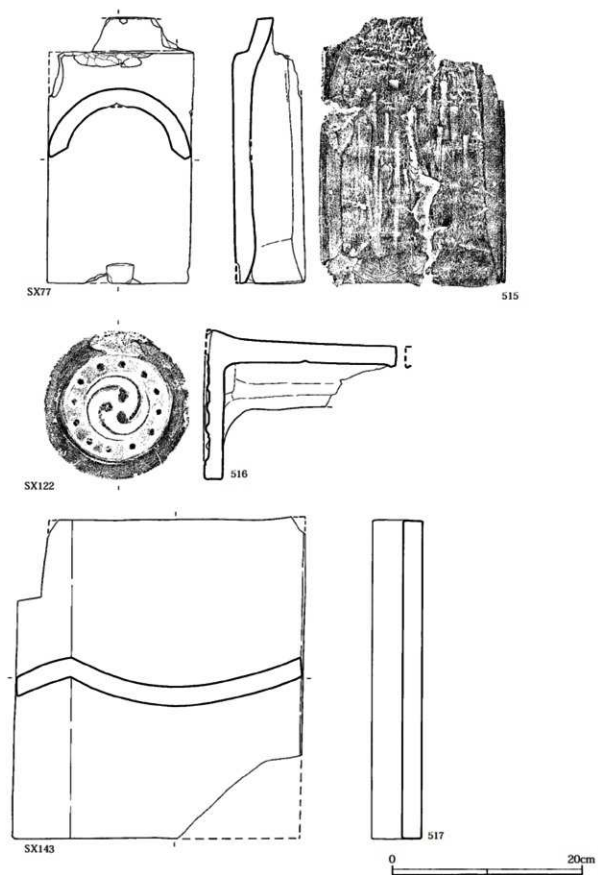
用途不明遺構 (第93・94図 図版59・60)

505・506は陶器、507～509は土師器、510～517は瓦。

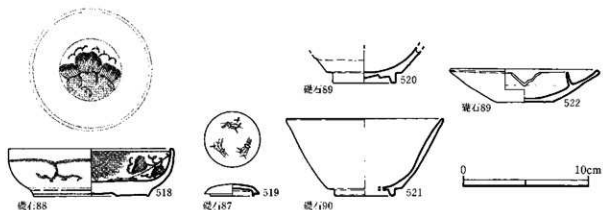
505は鉢で口縁部が内外に突出している。506は蓋で底部に糸切り痕がある。507～509は灯明皿で、507・509は底部に糸切り痕、508の底部はナデである。510～512・515は丸瓦で、内面に布目がある。511は穿孔が2ヶ所あり、内面にはへら状工具で磨いた痕が見られる。515は大型で縄目がつく。513は平棧瓦で穿孔が2ヶ所ある。514は軒平棧瓦で三葉文・唐草文がある。516は軒丸瓦当で12珠文の左三巴文がある。517は平棧瓦。



第93图 6地区SX出土遗物①(1/3、1/4)



第94图 6地区SX出土遺物②(1/4)



第95図 6-E区礎石検出時出土遺物(1/3)

表7 6・7地区 陶磁器・土器・土製品一覧①

遺物番号	棟元番号	区域番号	地区	出土地点	種別	器種	特徴	備考	
415	82	35	6-C	SE156	磁器	鉢	染付 一点鶴目文	肥前 17C後-	
416	82	35	6-C	SE156	磁器	鉢	青磁 一点鶴目文	肥前 17C後-	
417	82	35	6-C	SE156	磁器	鉢	染付 蕪荷文	17C後	
418	82	35	6-C	SE156	陶器	碗	白化粧上、長石釉 羽毛目	萩か	
419	82	35	6-C	SE156	陶器	碗	二灰釉	須佐か	
420	82	35	6-C	SE156	陶器	皿	白化粧土、二灰釉	肥前 17C末-	
421	82	35	6-C	SE156	陶器	皿	高灰釉	萩・須佐	
422	82	35	6-C	SE156	陶器	鉢	鉄釉	縄目状交番 口縁部に重ね積み痕	肥前
423	82	35	6-C	SE156	土師器	皿	糸切り痕		
424	82	35	6-C	SE156	土師器	皿	糸切り痕		
425	83	35	6-B	SK170	陶器	皿	高灰釉	須佐	
426	83	35	6-B	SK170	陶器	椀鉢			
427	83	35	6-C	SK171	磁器	皿	青花	漳州窯	
428	83	35	6-C	SK171	陶器	皿	高灰釉	萩・須佐	
429	84	36	6-B	SK169上層	磁器	碗	染付	見込み碗の目相おき	
430	84	36	6-B	SK169上層	陶器	猪口	染付	18C前 中	
431	84	36	6-B	SK169上層	陶器	碗	透明釉	18C中	
432	84	36	6-B	SK169下層	陶器	碗	二灰釉、白化粧二	高台内に刷毛に「清水」跡	
433	84	36	6-B	SK169上層	陶器	皿	二灰釉	見込みタンゴ目 たみ板目痕	
434	84	36	6-B	SK169上層	土師器	椀鉢		肥前	
435	84	36	6-B	SK169上層	土師器	椀鉢		須佐	
436	85	36	6-B	SK169下層	磁器	茶付碗	染付	18C前-	
437	85	36	6-B	SK169下層	磁器	小茶門	白磁		
438	85	36	6-B	SK169下層	磁器	紅皿	白磁	外型成型	
439	85	36	6-B	SK169下層	磁器	ミニチュア雲	青磁、色絵	染付文	
440	85	36	6-B	SK169下層	磁器	仏飯器	染付	雨降り文 底部墨書「カメ」(人名か)	
441	85	36	6-B	SK169下層	磁器	皿	染付	見込み松竹梅文	
442	85	36	6-B	SK169下層	磁器	皿	染付	見込みコンニャク五弁花 高台内「大明年辰くずし」	
443	85	36	6-B	SK169下層	磁器	皿	染付	芝草文	
444	85	36	6-B	SK169下層	陶器	碗	高灰釉	萩	
445	85	36	6-B	SK169下層	陶器	碗	二灰釉	萩・須佐	
446	85	36	6-B	SK169下層	陶器	椀鉢	高石釉	須佐	
447	85	36	6-B	SK169下層	陶器	鬺水入れ	高灰釉	萩	
448	85	36	6-B	SK169下層	陶器	ひも明か	鉄釉	須佐か	
449	85	36	6-B	SK169下層	陶器	ミニチュア雲	高灰釉	萩	
450	85	36	6-B	SK169下層	陶器	皿	二灰釉、白化粧二	左右割合わせ	
451	85	36	6-B	SK169下層	陶器	皿	二灰釉	白化粧に鉄絵、髹毛目	
452	85	36	6-B	SK169下層	土製品	七厘のサナ		肥前	
453	85	36	6-B	SK169下層	瓦質	焙瓷	平底 板目底 把手あり(把手は欠)	須佐	
454	86	37	6-F	SK169	陶器	椀鉢	鉄化性 須佐	須佐	
455	86	37	6-F	SK150	陶器	椀鉢	須佐	肥前 17C後	
456	86	37	6-F	SK159	瓦	軒平瓦当			
457	87	37	6-D	SK121	磁器	波蓋	染付	小瀬か 19C前	

遺物番号	調査番号	図版番号	地区	山十地点	種類	器種	特 徴	備 考
458	87	57	6-D	SK121	磁器	皿	染付 早唐草文 五弁花 四方嚢文 内内に「龍江」	高 足前 18C中-後
459	87	57	6-D	SK121	磁器	皿	染付	足前 18C後-
460	87	57	6-D	SK121	磁器	紅皿	染付	足前 19C前-
461	87	57	6 D	SK121	磁器	紅皿	白磁	足前 18C後か
462	87	57	6 D	SK121	陶器	碗	白化粧土・透明釉	京・信楽 18C末
463	87	57	6-D	SK121	陶器	碗	透明釉	京・信楽
464	87	57	6-D	SK121	陶器	碗	透明釉	京・信楽
465	87	57	6-D	SK121	陶器	碗	二灰釉	須佐
466	87	57	6-D	SK121	土師器	浅鉢(身)	新橋み成型 小型 無蓋 内面布目	須佐
467	88	57	6-B	SK107	磁器	碗	染付 「宣明化装」銘	足前 17C末-
468	88	57	6-B	SK107	磁器	碗	染付	足前 17C末
469	88	58	6-B	SK107	磁器	碗	白磁	足前
470	88	58	6-B	SK107	磁器	碗	色絵	足前
471	88	57	6-B	SK107	磁器	小坏	染付	足前
472	88	58	6-B	SK107	陶器	香炉	青磁	足前 17C末-末
473	88	57	6-B	SK107	磁器	皿	底面欠損 百花(樹押除刺)	
474	88	57	6-B	SK107	磁器	皿	染付	足前 18C中-
475	88	58	6-B	SK107	磁器	皿	染付	足前 18C中-後
476	88	58	6-B	SK107	磁器	紅皿か	染付	足前
477	88	58	6-B	SK107	磁器	紅皿	白磁	足前
478	88	58	6-B	SK107	磁器	紅皿	白磁	足前
479	88	58	6-B	SK107	陶器	碗	高台無蓋	須佐
480	88	58	6 B	SK107	陶器	碗	二灰釉	須佐
481	88	58	6-B	SK107	陶器	小皿	色絵(青箱・緑輪) 京焼	京都
482	88	58	6-B	SK107	陶器	向付	長石壺・緑釉	美濃
483	88	58	6-B	SK107	陶器	碗	二灰釉	須佐
484	88	58	6 B	SK107	陶器	楕鉢	播磨日 8条	須佐
485	88	58	6 B	SK107	陶器	皿	白化粧土・透明 釉・緑釉	足前 17C末
486	88	58	6-B	SK107	陶器	碗	灰釉	須佐
487	89	58	6 C	SK151	磁器	碗	染付	足前 18C末 19C前
488	89	58	6-C	SK151	磁器	碗	染付	須佐
489	89	59	6-C	SK151	陶器	碗	黒灰釉	須佐
490	89	59	6-C	SK151	土師器	七皿のサナ	七皿のサナ	須佐
491	89	58	6-C	SK151	十師器	十瓶	底面欠損	須佐
492	89	58	6-C	SK151	瓦	瓦	底面欠損	須佐
493	89	58	6-C	SK151	瓦	瓦	底面欠損	須佐
494	90	59	6-C	SK166	陶器	火入れ(灰受と)	白化粧土・鉄絵	須佐
495	90	59	6 C	SK166	陶器	灯明受け	二灰釉	須佐
496	90	59	6-C	SK166	陶器	灯明皿	二灰釉	須佐
497	90	59	6-C	SK166	土師器	皿	底面欠損	須佐
498	91	59	6-D	SK127	磁器	小坏	染付	足前
499	91	59	6 D	SK127	陶器	碗	透明釉	信楽
500	91	59	6-D	SK127	陶器	碗	二灰釉	京・信楽
501	91	59	6-D	SK127	陶器	瓶	白化粧土・鉄絵 ・呉須・緑釉	京・信楽
502	91	59	6-D	SK127	陶器	楕鉢	鉄釉	須佐
503	92	59	7	SK154	陶器	碗	黒灰釉	須佐
504	92	59	7	SK154	陶器	仏飯鉢	黒灰釉	須佐
505	93	59	6-G	SX136	陶器	鉢	二灰釉	須佐
506	93	59	6-G	SX137	陶器	鉢	二灰釉	須佐
507	93	59	6-D	SX103	土師器	皿	打明皿 糸切り素	須佐
508	93	59	6-D	SX103	土師器	皿	打明皿	須佐
509	93	59	6-D	SX103	土師器	皿	打明皿 糸切り素	須佐
510	93	60	6-G	SX66	瓦	瓦	穿孔あり 内面布目	須佐
511	93	60	6-G	SX136	瓦	瓦	小型 穿孔 2ヶ所 内面布目	須佐
512	93	60	6-G	SX145	瓦	瓦	内面布目	須佐
513	93	60	6-G	SX78	瓦	瓦	平棧瓦	須佐
514	93	59	6-G	SX143	瓦	軒平棧瓦	瓦当 表面雲母付着 二葉文 唐 草文	須佐
515	94	60	6-G	SX77	瓦	瓦	内面純白 布目	須佐
516	94	60	6 D	SX122	瓦	軒瓦	瓦当 穿孔 左二戸文(12株文)	須佐
517	94	60	6-G	SX143	瓦	瓦	平棧瓦	須佐
518	95	61	6-E	礎石88検出	磁器	皿	染付	19C中-幕末
519	95	61	6-E	礎石87検出	磁器	合子蓋	染付	幕末
520	95	61	6 E	礎石89検出	陶器	碗	黒灰釉 鉄釉	須佐
521	95	61	6-E	礎石90検出	陶器	碗	黒灰釉	須佐
522	95	61	6-E	礎石89検出	陶器	灯明受皿	二灰釉	須佐

6-E 区礎石検出時出土遺物（第95図 図版61）

518・519は磁器、520～522は陶器。

518は草花を模した文様のある皿で、蛇の目型高台。19世紀中頃～幕末。519は草東文のある合子蓋。幕末。520・521は萩の開口碗。520は表面に薬灰釉・鉄釉を流しかけ、高台は渦巻き状になっている。521は体部の中ほどがやや厚い。522は灯明受皿で須佐の製品であろう。

6 地区胎衣埋納遺構出土遺物（第96～99図 図版79～81）

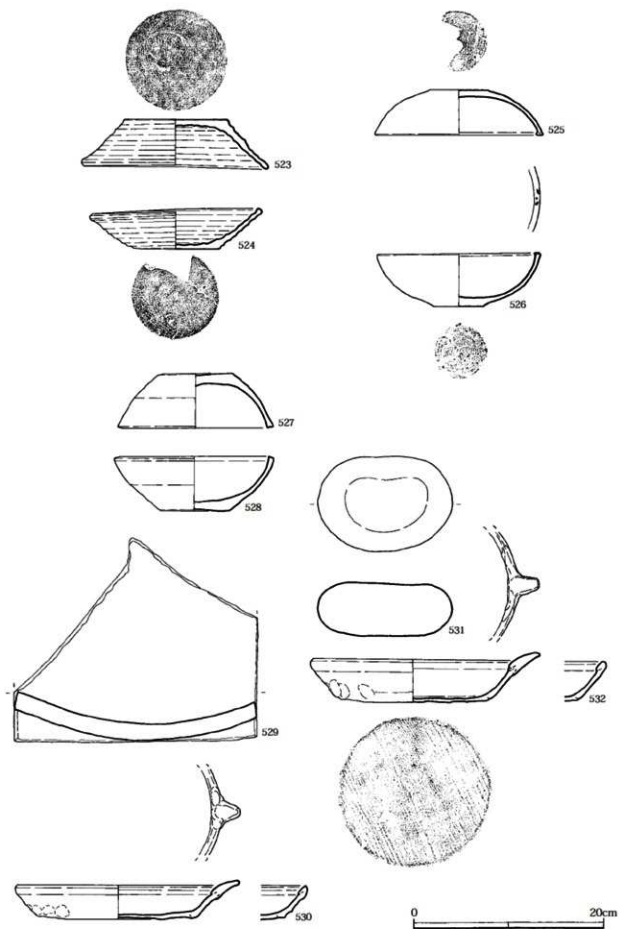
胎衣埋納遺構は平成16年度の調査において6地区から26基が検出され、16基が焙烙、8基が鉢で、皿と壺がそれぞれ1基である。7地区からは検出されていない。

胎衣埋納遺構125の523・524は土師器の皿を使用しており、いずれも底部に糸切り痕がある。外面にはナデ調整の稜がはっきりと表れている。焙烙を使用する時期よりやや古い形態と考えられる。

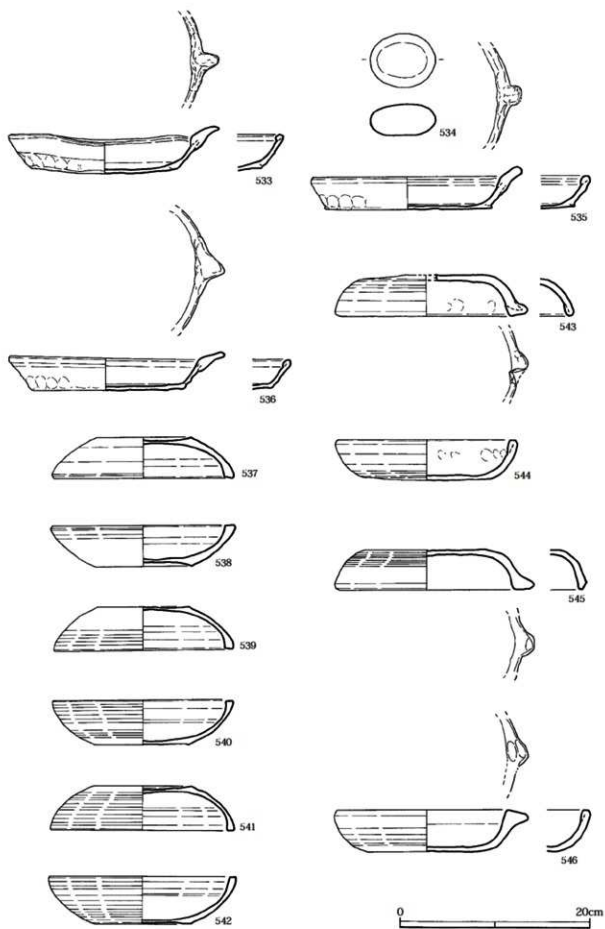
土師器の鉢を使用しているのは胎衣埋納遺構8の525・526、17の527・528、75の537・538、84の539・540、1の541・542、埋鉢44の565であり、5の570、3の572は陶器の鉢、12の573・574は土師器の壺の身と蓋である。525は口縁を折り返して肥厚させている。底部には糸切り痕がある。526は525と同じ作りだが、見込みがトキン状になっており、口縁部には解読不明の墨書がある。527・528は底部に糸切り痕がある。537～542は萩市近郊の三見で焼かれたと思われる土師器で、見込みに工具による渦巻状の削り痕が見られるのが特徴である。537・538は底部が上方に湾曲している。565は見込みに後線が見られ、口縁はナデで肥厚させている。相伴遺物として産石と思われる玄武岩貫安山岩が入っていた。570は口縁を折り返して肥厚させており、見込みに胎上目がある。相伴遺物として、鉢の中に産石に転用したと思われる瓦片とアワビの殻があり、横に白磁の瓶が置いてあった。572は薬灰釉を施釉し、口縁端部を内側に折り込んで肥厚させている。見込みには渦巻状のケズリ痕がある。蓋が欠失しており、以前は鉢として使用されていたものを胎衣埋納容器として転用したと考えられる。573は内側面に沈線がある。574は底部に糸切り痕があり、内部はナデで調整している。

焙烙で紐作りされたものは、胎衣埋納遺構187の530、67の532、146の533、117の535、158の536であり、内面は回転ナデで調整されている。530、532、533、535、536は把手を貼り付けた後ナデで調整しており、把手部が3cm以上の長さがある。口縁は内側に折り返して肥厚させている。底部は板目が残っている。530と536についてはスガが付着しており、胎衣埋納容器として二次使用したと考えられる。胎衣187の529は、平瓦を胎衣容器の蓋として代用している。また、胎衣67の531と胎衣117の534は花崗岩の丸い川原石であるが、産石として埋納されたと思われる。

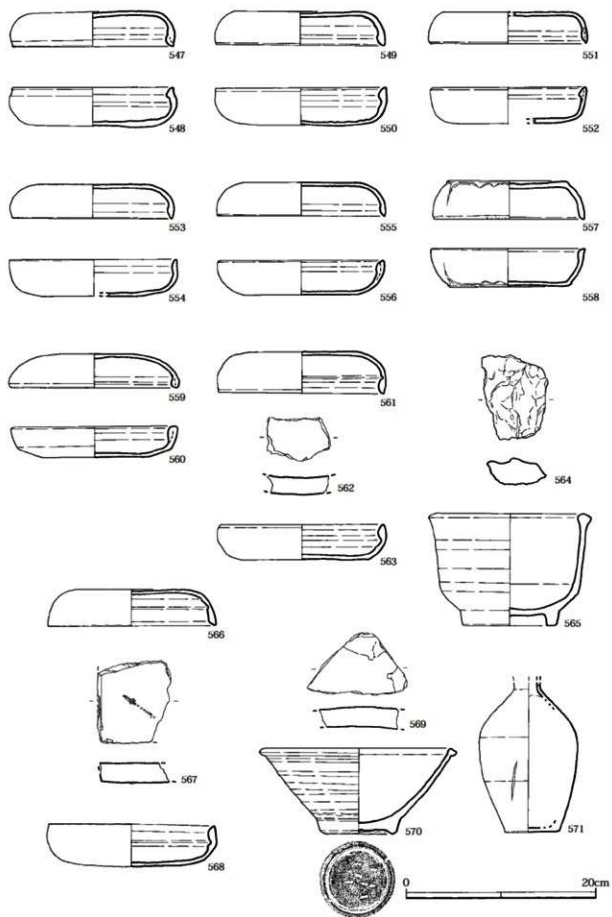
一方、型作り成型のものは、胎衣埋納遺構21の543・544、13の545・546、16の547・548、37の549・550、20の551・552、9の553・554、60の555・556、14の557・558、10の559・560、4の561・563、2の566・568である。557・558以外は丸底で、543～546の底部には回転ヘラ削りの痕が残っており、口縁は内側に折り返してわずかに肥厚させている。外面には雲母が付着している。543・545・546は口縁の一部を短く突出させ、把手部としている。544は把手部が欠損か。547～556、559～561、563、566・568は口縁部を内側に肥厚させ、547・548、553・554、561・563、568においては、胴部から口縁部にかけて内側に軽く湾曲している。553・554、559・560にはスガが付着しており、胎衣埋納容器として二次使用されたと思われる。557・558は底面が平底で同一の外型枠による成型である。口縁部



第96图 6地区胎衣埋納遺構出土遺物①(1/4)



第97图 6地区胞衣埋納遺構出土遺物②(1/4)



第98图 6地区胎衣裡納遺構出土遺物③(1/4)

はわずかに肥厚している。共伴遺物として胎衣4には煎石を転用されたと思われる瓦片が入っていた。また、胎衣2の瓦片には針が付着していたことから、女兒の胎衣を埋納したと考えられる。

6・7地区埋甕・埋鉢遺構出土遺物 (第100~102図 図版61・81・82)

平成16年度の調査では、埋甕は15基が検出された。そのうち実測可能な資料は9点である。なお、ここでは埋甕遺構における共伴遺物と埋鉢15の出土遺物についても以下に報告する。

埋甕に使用される容器は、土師器大甕・甕、陶器大甕であった。

575は楕前の大甕で口縁から肩部にかけて残存している。口縁端部は折り返して肥厚させ、外に開いて立ち上がっており、外面はナデ、内面はケズリで調整している。破片の外面には煎印であるヘラ記号が入っている。16世紀末のものである。



第99図 6地区胎衣埋納遺構出土遺物(①)(4)

表8 6地区胎衣埋納遺構出土遺物一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	種別	形状	出土地点	種類	器底	口径	器高	把手長	煎石等	その他の特徴	
523	96	79	6-A	胎衣125(上)	土師器	重	平	高切り	19.8	5.3	
524	96	79	6-A	胎衣125(下)	土師器	重	平	高切り	18.1	4.3	
525	96	79	6-G	胎衣8(上)	土師器	鉢	平	高切り	(17.7)	4.8	
526	96	79	6-G	胎衣8(下)	土師器	鉢	平	高切り	17.3	5.7	
527	96	79	6-C	胎衣17(上)	土師器	鉢	平	高切り	15.3	5.8	
528	96	79	6-C	胎衣17(下)	土師器	鉢	平	高切り	14.9	6.7	
529	96	80	6-G	胎衣187(上)	丸	平	底	長さ*21.5	幅5.5		
530	96	80	6-G	胎衣187(下)	土師器	筒形	平	板目	21.3	4.1	3.2
531	96	80	6-G	胎衣07(中)	石製	底	平	板目	長さ14.2	幅10.0	
532	96	80	6-G	胎衣07(下)	土師器	筒形	平	板目	21.4	4.6	3.6
533	97	80	6-G	胎衣146(下)	土師器	筒形	平	板目	20.2	4.9	3.4
534	97	80	6-F	胎衣117(中)	石製	底	平	板目	長さ5.9	幅5.7	
535	97	80	6-F	胎衣117(下)	土師器	筒形	平	板目	20.2	4.5	3.2
536	97	80	6-F	胎衣158(下)	土師器	筒形	平	板目	20.6	4.0	3.3
537	97	79	6-B	胎衣75(上)	土師器	鉢	平		18.9	4.3	
538	97	79	6-B	胎衣75(下)	土師器	鉢	平		19.2	4.3	
539	97	79	6-F	胎衣84(上)	土師器	鉢	平		18.8	4.7	
540	97	79	6-F	胎衣84(下)	土師器	鉢	平		19.0	4.7	
541	97	79	6-G	胎衣1(上)	土師器	鉢	平		19.4	4.7	
542	97	79	6-G	胎衣1(下)	土師器	鉢	平		19.7	5.0	
543	97	79	6-G	胎衣21(上)	土師器	筒形	丸	四輪へラ磨り	18.2	4.35	2.0
544	97	79	6-G	胎衣21(下)	土師器	筒形	丸	四輪へラ磨り	18.9	4.35	2.1
545	97	79	6-R	胎衣13(上)	土師器	筒形	丸	四輪へラ磨り	(19.4)	4.2	2.2
546	97	79	6-R	胎衣13(下)	土師器	筒形	丸	四輪へラ磨り	(19.4)	4.1	2.4
547	98	79	6-C	胎衣16(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	16.95	3.7	
548	98	79	6-C	胎衣16(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	17.0	4.2	
549	98	79	6-D	胎衣37(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	17.7	3.6	
550	98	79	6-D	胎衣37(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	18.0	4.0	
551	98	79	6-G	胎衣20(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	(16.8)	3.4	
552	98	79	6-G	胎衣20(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	(16.6)	3.8	
553	98	79	6-G	胎衣9(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	16.9	3.6	
554	98	79	6-G	胎衣9(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	17.6	3.9	
555	98	79	6-J	胎衣90(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	(17.6)	3.5	
556	98	79	6-J	胎衣90(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	(17.2)	3.6	
557	98	79	6-L	埋鉢17(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	15.9	4.0	
558	98	79	6-L	埋鉢14(上)	土師器	筒形	平	外型成型	15.9	4.0	
559	98	80	6-N	胎衣10(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	(18.0)	3.6	
560	98	80	6-N	胎衣10(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	(17.6)	3.2	
561	98	80	6-G	胎衣4(上)	土師器	筒形	丸	外型成型	17.4	4.4	
562	98	80	6-G	胎衣4(中)	丸	底	平	長さ*6.8	幅*4.5		
563	98	80	6-G	胎衣4(下)	土師器	筒形	丸	外型成型	17.2	3.7	
564	98	81	6-L	埋鉢44	石製	底	平	長さ	19.0	幅7.0	
565	98	80	6-L	埋鉢44	土師器	鉢	平		19.0	11.85	

器物番号	調査年度	出土地点	種別	器底	底面	口径	器高	把手長	産石等	その他の特徴	
566	98	80	6-G	陶衣2(上)	土師器	丸	外型成型	17.8	3.8	名刺	
567	98	81	6-G	陶衣2(中)	丸	丸弁	外型成型	長さ*8.55	幅*7.6	針付着	
568	98	80	6-G	陶衣2(下)	土師器	丸	外型成型	17.4	4.5	丸弁(507)と針	
569	98	81	6-G	陶衣5(中)	丸	丸弁	外型成型	長さ*10.7	幅*6.6	産石に転写か	
570	98	80	6-G	陶衣5(下)	陶器	鉢		20.8	9.0	丸片(569) アフリビ(1172)	
571	98	80	6-G	陶衣5	陶器	皿		断面径10.3	*13.8	須佐 給土員墓あり 高台内カンナ目	
572	99	80	6-G	陶衣3(下)	陶器	鉢		16.8	11.2	口縁 陶衣に天押	
573	99	80	6-N	陶衣12(上)	土師器	蓋		外径13.0 内径9.7	器高2.9	574の蓋	
574	99	80	6-N	陶衣12(下)	土師器	蓋		糸切り	13.1	10.9	

576は肥前の甕で肩部に縄状突起帯が2条入っている。内外面に鉄化粧および格子目のタタキが施してある。口縁端部は内外両側に突起している。

577～583は防府市佐野産の土師質大甕であり、580以外は底部から口縁部まで比較的良好に残存している。口縁部は内側を厚くしており、真っ直ぐ立ち上がるものと、内傾しているものがある。内面においてはハケやナデで調整しており、中には同心円のタタキを施しているものもある。外面にはハケ、ミガキ、ナデで調整している。底部は板作りで、外面にはナデや指押さえの痕が見られ、内底には同心円状のハケメが残るものもある。581は器高と比して底径が他の甕に比べて21cmと大きい。582は口径・器高ともに70cmを越え、今回の調査の中で最も大きい甕である。

584は肥前の鉢で、外面には白化粧土に土灰釉で絵付けを施した二彩唐津である。胴部の内外面はナデで調整しており、口縁端部は外側に大きく屈曲させている。植木鉢と思われる。

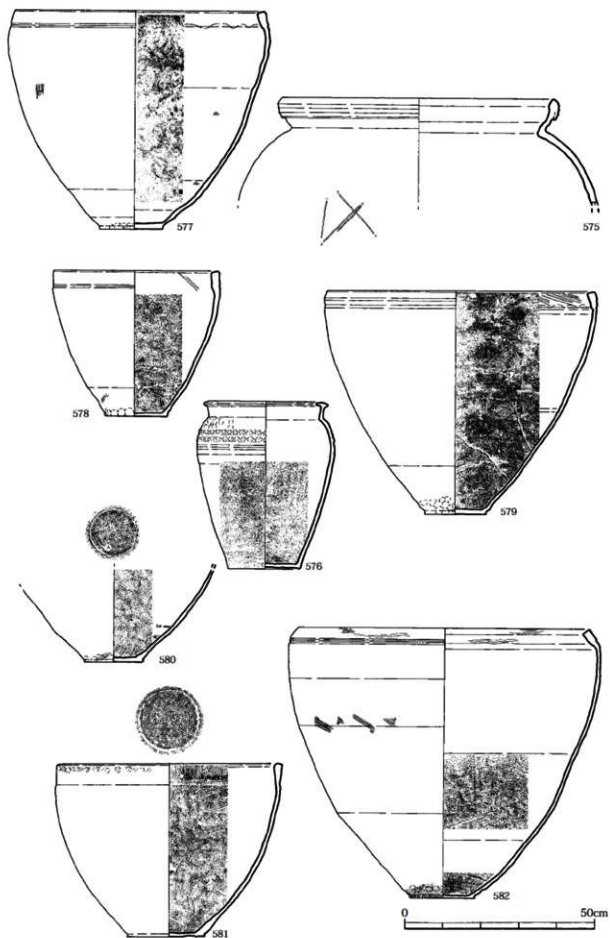
585～587は埋壺内の出土遺物である。585の丸碗は緑釉で紫文が描かれている。金彩も施しているがほとんど剥落している。1730～1740年代の京焼。586・587は埋壺149内から出土しており、586は藁灰釉の開口碗で萩。高台内が渦巻状になっており、高台脇から口縁に向かってゆるやかに内湾している。587は土師器の皿で、底部は糸切り後にナデしており、内外面はロクロナデの痕が残っている。

6-E区 SB189直上整地層出土遺物 (第103～108図 図版61～65)

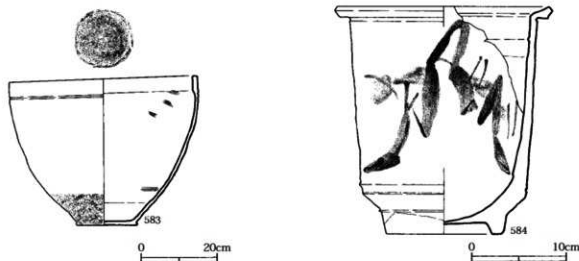
588～608は磁器、609～628・637～642・645・651～653・657は陶器、629～633・636・654・656・658は土師器、643・644・646～650は土製品、634・655は瓦質土器、635は瓦である。

588は雷文と山水文が描かれた筒丸形の碗で高台内が少し深め。外側面には縦方向にケズリによる装飾が施されている。高台内には596と同じ「乾」銘がある。19世紀前半～中頃。589は花草草が描かれた蓋付碗の身で肥前。590は松竹梅文と鳳凰文、見込みに亀が描かれた碗で、口縁が外反する。幕末。591・592は猪口で591は鶴文があり、592は輪花の白磁で腰が彫らんでいる。593は色絵の丸碗で幕末。594は段重で植物に模した文様があり、腰部が抉れている。幕末。595は合子の蓋で上面に山水文がある。596は肥前の蓋で、外面に花草草、内面に雷文がある。597・598は段重の蓋で二重圏線の中に把手を貼り付けている。19世紀。599は燗台で小畑。600はタコ唐草文の神酒徳利。601・602は鞆徳利で小畑。603は松竹梅文がある瓶。604・605は白磁の紅皿で外型成型。606は肥前の皿で口縁端部が緩やかに外反している。幕末。607は小畑の皿で、腰部が内側に屈曲し、口縁端部は緩やかに外反している。見込みに蕨文がある。608は四方隅切の角皿で、型成型によって作った後、高台を貼り付けている。外面には笹文、見込み内には笹文と鳥が描かれている。これも小畑の製品であろう。

609は胴部が丸く口縁部が隅丸方形形状になっている碗で、腰部から口縁に向かって緩やかに内湾して口縁に至っている。外面にはウサギが対極に貼り付けられている。610・611は須佐の平碗で見込み



第100図 6・7地区埋瓮・埋鉢①(1/10)



第101図 6・7地区埋甕・埋鉢②(1/10、1/4)



第102図 6・7地区埋甕内出土遺物(1/3)

表9 6・7地区埋甕・埋鉢遺構出土遺物一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	神田区	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備考
575	100	81	6-H	埋甕134	陶器	甕	(72.0)	*27.8		備前大甕、室印、16C末
576	100	81	6-E	埋甕105	陶器	甕	(32.8)	44.0	18.8	鉄軸 肥前 内外: 格子目タタキ 縄状突起2条
577	100	82	6-E	埋甕157	土師器	甕	(65.8)	57.6	16.5	佐野 内: 同心円タタキ・ハケメ 外: ミガキ・ハケメ
578	100	81	6-E	埋甕81	土師器	甕	(43.0)	38.4	(16.0)	佐野 内面跡・石灰分付着 内: ハケメ 外: ミガキ・ハケメ
579	100	82	6-D	埋甕104	土師器	甕	(70.4)	58.9	15.8	佐野 内: タタキ・ハケメ・ナデ 外面: ミガキ・ハケメ
580	100	81	7	埋甕149	土師器	甕		*24.2	14.9	佐野 内: 同心円タタキ・ハケメ 外: ミガキ・ハケメ
581	100	81	6-F	埋甕106	土師器	甕	59.2	45.6	21.0	佐野 内: 同心円タタキ・ハケメ 内面石灰分付着
582	100	82	6-I	埋甕6	土師器	甕	76.6	71.4	16.6	佐野 内面石灰分付着 内: ハケメ・ナデ 外: ミガキ・ハケメ
583	101	82	7	埋甕130	土師器	甕	49.6	39.4	15.6	佐野 内面石灰分付着 内: ハケメ・ナデ 外: ミガキ
584	101	81	6-G	埋鉢15	陶器	鉢	(22.4)	24.0	12.0	白化粧・土灰軸 肥前 二彩 槇木鉢

表10 6・7地区埋甕内出土遺物一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	神田区	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備考
585	102	61	6-E	埋甕157	陶器	碗	(10.0)	5.5	(3.2)	京焼丸碗 緑軸 金彩 京都
586	102	61	7	埋甕149	陶器	碗	(11.8)	7.6	4.1	濃灰軸 萩 高台にススカ墨付着
587	102	61	7	埋甕149	土師器	皿	(11.4)	2.5	6.0	底部糸切りのちナデ

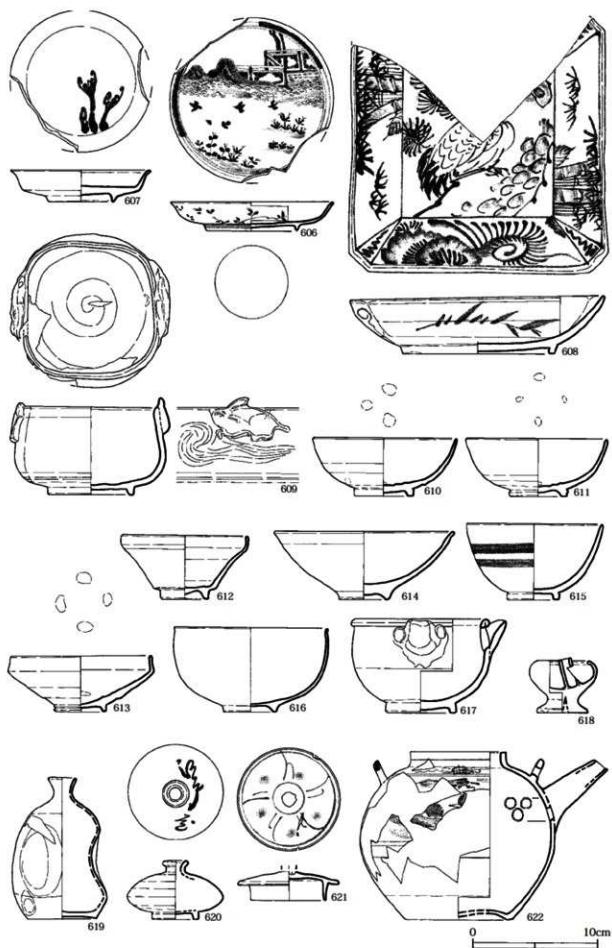
にダンゴ目が残っている。612は萩の碗で黒色の鉄袖が施してある。高台脇をはは直角に削っており、口縁部は屈曲した後、真っ直ぐトへ立ち上がっている。トキン状高台。613は須佐の碗で鉄袖が施してある。口縁部は内側に屈曲した後、立ち上がっている。見込みにダンゴ目が残っている。614は須佐の平碗で底が厚い。615は長石軸が施された丸碗。瀬戸・美濃の製品であろう。616は口縁端部がやや外反している丸碗。高台に切れ込みがある。

617は片口。口縁端部を外側に折り込んで肥厚させ、注ぎ口は貼り付けている。618は灯明具で「タンコロ」と呼ばれるもの。底部に糸切り痕と穿孔がある。中央部の突起は切込みを入れた後貼り付けている。619は鉄化粧のペコカン徳利。620は油壺。外面は口縁部以外、ケズリで調整している。「江戸屋」銘。621・622は土瓶の蓋と身で、白化粧土に緑釉・鉄袖が施してある。623は算盤玉形の土瓶で底に豆粒ほどの胎上が3ヶ所貼り付けてある。624は行平。外面上部に縦縞のトビガンナ痕。把手部は上下を型合わせした後、ナデの調整をしており、上部に刻印がある。口縁は外へ折り曲げてさらに上へ立ち上げて着受け部をつくる。625～628は須佐の皿。625は胴部から口縁にかけて外反し、見込みに梅花がある。626は見込みに印花。トキン状高台。627は腰部に後を持つ皿で口縁端部はナデ調整でわずかに厚くなっている。見込みにハマ痕。628は平皿。トキン状高台で、外面に重ね積み痕が残る。口縁端部が外へ屈曲している。見込み内には松と亀の鉄絵が描かれ、高台内には解説が困難な墨書がある。629～631は底面に糸切り痕が残る灯明皿。中央に穿孔がある。629は板目もある。632は竈道具のハマ。外型成型で底部は中央に向かって窪んでいる。633は水注。下部は被熱し、底部は上に向かって湾曲している。胴上部には把手が貼り付けてあった痕がある。634は上瓶の蓋で上面に突起状のアラレ文がある。635は軒丸瓦当。横一文字に12珠文がある。636は土師質焙烙。11径が推定ではあるが35cmあり、焙烙の中でも大型でいわゆる「妻炒り」といわれるタイプである。外面にススが付着している。

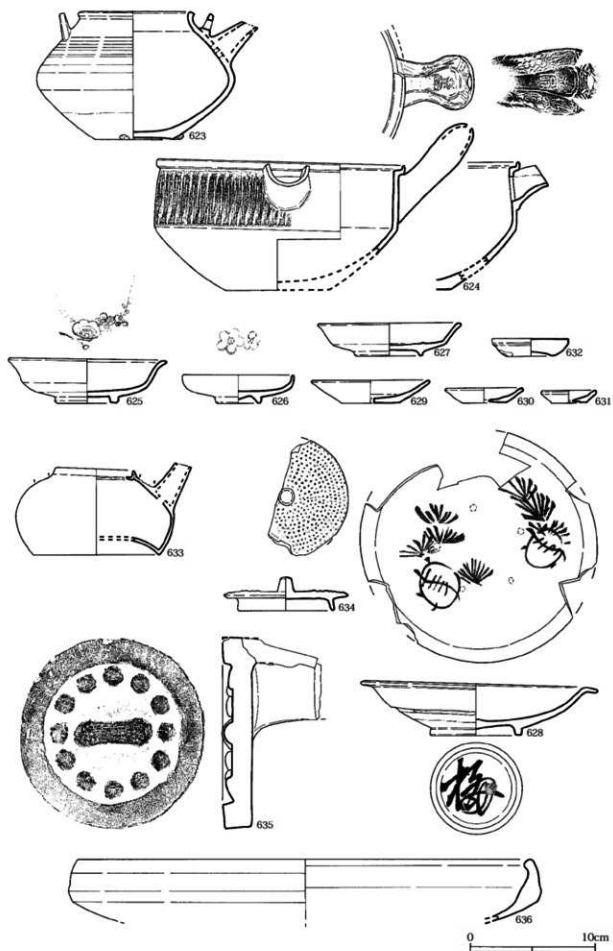
637～642はミニチュアの陶器でままごと道具と思われる。637は行平。638は鍋。底部に糸切り痕。把手部貼り付け。639は甌。外面に薬灰釉と鉄袖でビラがけが施してある。640は油壺。底部に糸切り痕がある。641は鉄袖の碗。糸切りのベタ高台である。642は3連かまど。外面には明赤褐色の柿釉が施している。外型成型である。643～645は人形の頭部でいずれも京都。643・644は土製品で額上部に差し込み穴があり、首の中には穿孔がある。胡粉が残っていたことから絵付がされていたと思われる。645は黄釉が施され、外型成型で前後型合わせである。首の中に穿孔がある。616・619はエビのり童子の下部と上部である。下部は船の舳先に似た形状で平底になっており、底面には二重亀甲内に「亀」銘がある。上部は外型成型で上下の型を合わせて作られている。いずれも19世紀中頃と思われる。647は着飾った女性を模した土人形で、帯や振袖の文様は印花である。外面には胡粉やベンガラが残っている。後の足元には二重亀甲内に「亀」の銘がある。内部が空洞で砂粒があり、振ると鳴る。648は狎を抱いた童子の土人形で、頭部が欠損している。外型成型で前後型合わせである。背中には亀甲内に「亀」銘が入っており、19世紀中頃と思われる。650は貴族と思われる土人形で頭部が欠損している。表面はヘラで磨き、印花で模様をつけている。外型成型で前後と底部を合わせている。651はペコカン型の甌で、肩部が上に突出している。表面は鉄袖の上から土灰釉をかけ、さらに薬灰釉をかけ流している。底部には胎土目が残る。652は鉄絵の馬の日皿で長石軸を施している。高台の畳付が広く、



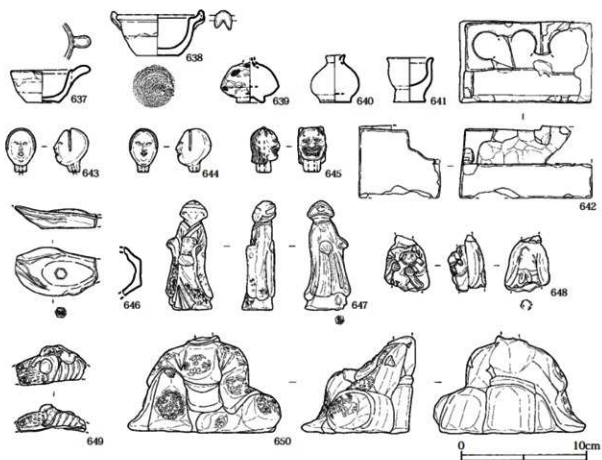
第103图 6-E区SB189直上整地層出土遺物①(1/3)



第104图 6-E区SB189直上整地层出土器物②(1/3)



第105图 6-E区SB189直上整地層出土遺物③(1/3)



第106図 6-E区SB189直上整地層出土遺物④(1/3)

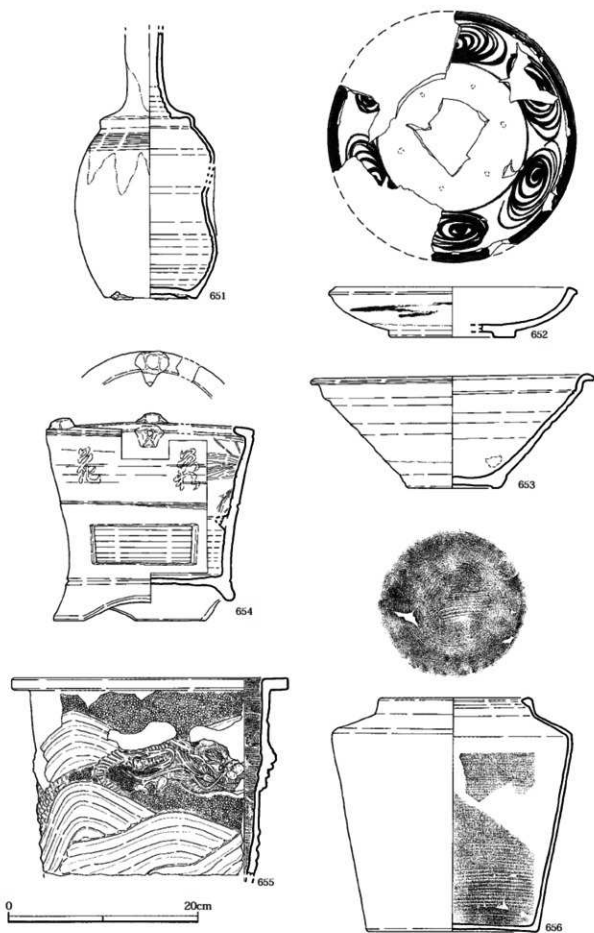
口縁端部はわずかに厚みを持たせている。653は須佐の鉢。口縁部は内側に屈曲させた後、外反させている。見込みにダンゴ目がある。654は焔炉で口縁に貼り付けた突起物がある。内面は櫛状工具によるケズリ痕があり、外面には「萩」「花」の刻印がある。655は火鉢で底部が欠損している。外面には竜と波文、アラレ文が彫られ、内面には櫛状工具で強く横ナデしている。656は壺で内面にススが附着していることから、火消し壺と考えられる。器壁は薄い、口縁端部は厚くさせている。内面には櫛状工具の痕が見られる。657は瀬戸・美濃の浅めの木鉢で19世紀中頃。外面は土灰釉の上から鉄釉と緑釉で模様をつけている。見込みには砂目があり、口縁は折り返して内側に肥厚させている。658は佐野の鉢。胴部中央では突起状の把手を貼り付けている。口縁端部では粘土を貼り付けて厚くしている。

SB189直上整地層では比較的新しい遺物が出土しており、19世紀以降と考えられる。

6地区木器包含層出土遺物（第109～111図 図版65～67）

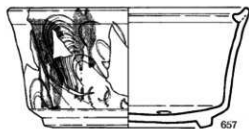
659～670は磁器、671～691・698・699は陶器、692～694は土師器、695・696は土製品、697は瓦。

659・663は肥前の小鉢。659は丸型で17世紀後半。663は桶型で白磁。660・661は肥前の丸碗で661は白磁。660はコンニャク印判の桐文がある。662は猪口で口縁部に雨降文、底部に3条の圈線がある。割れ口に漆継ぎ痕がある。664は瓶の首部。口縁をケズリで調整している。17世紀後半。665は青花の皿で見込みに宝文、高台内に銘がある。17世紀初め。666～668は肥前の皿。666は捺文があるが、呉須の発色が悪い。底部に指痕が有る。17世紀中頃。667は見込みに重ね積み痕のある、二重斜格子文

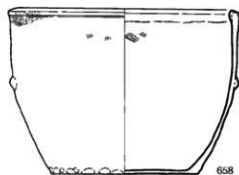


第107图 6-E区SB189直上整地層出土物⑤(1/4)

の皿である。18世紀後半。668はコンニャク五弁花、重ね積み痕がある。17世紀末～18世紀中頃。669は変形で横長の小皿。糸切り成型の後に高台を貼り付けている。外面には折松葉文、内面は紙摺で施文する。17世紀末～18世紀前半。670は白磁の紅皿で肥前。



671・672は萩の丸碗。673は須佐の丸碗。胎土に赤土と白土の2種類を混ぜている。焼成は悪い。674～677は肥前の碗。674は呉器碗で17世紀末以降。675は外面に呉須絵、高台内に円刻がある京焼陶器の碗。676は白化粧土に土灰釉で刷毛目を入れている。677は外面に蜚手、内面に刷毛目がある丸碗。17世紀末～18世紀前半。678は京焼の腰折碗。外面に蕨文の鉄絵と白泥絵があり、見込みにはハマ痕が見られる。679は須佐の香形碗。側面を板状工具で内側に押し、底部を荖筒底にする。680・681は小坏で680は口縁部を外反させる。681は須佐。682は京・信楽の燗徳利。外面に大福帳の鉄絵がある。



683は鉢の底部片。見込みにはダンゴ目、高台内にはカナナの削り痕がある。684～688・698・699は搦鉢。684は備前の搦鉢片で、肥厚させた口縁に2条の沈線がある。口縁下部には重ね積みの痕がみられる。685は備前の眞搦鉢。見込みから掻き上げた

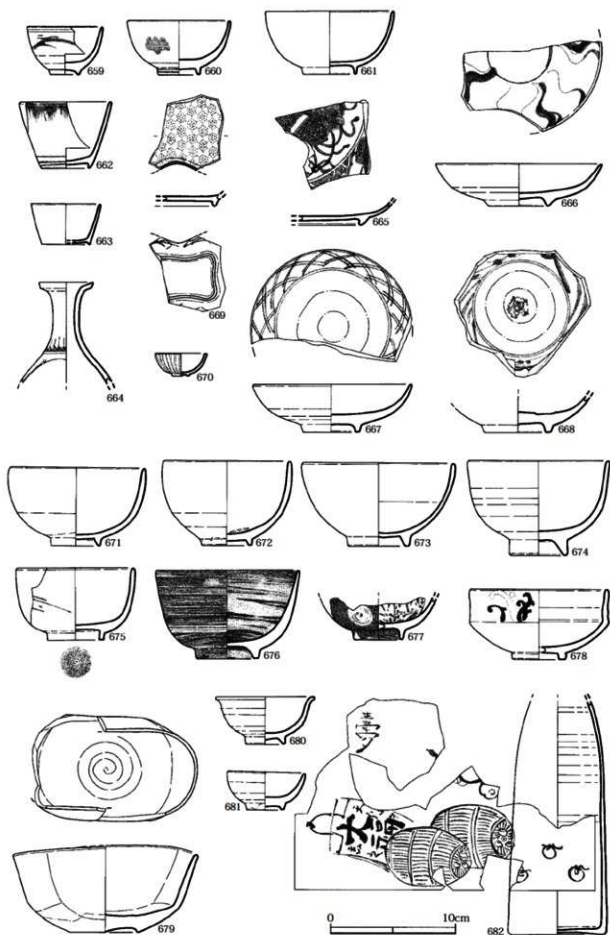


0 20cm

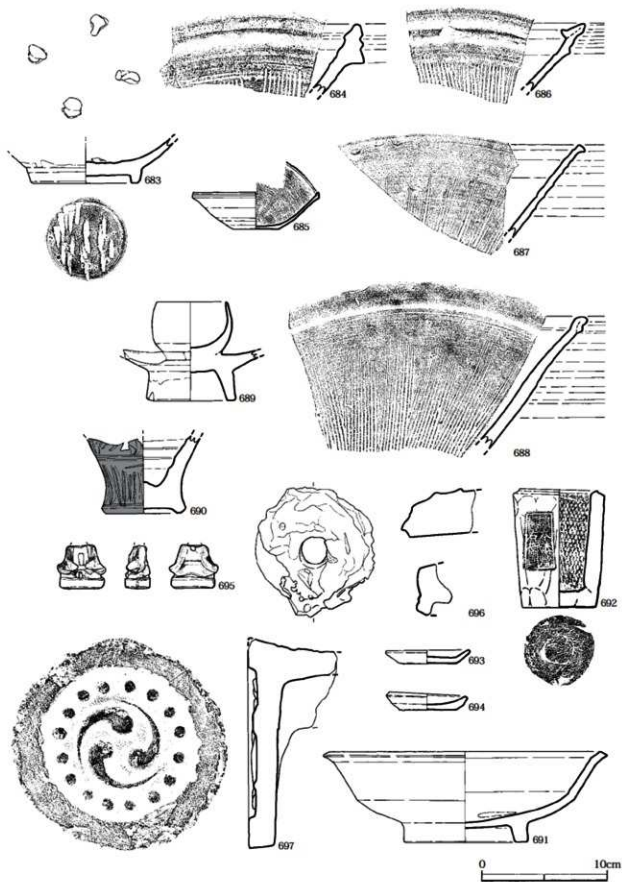
搦目が4条あり、口縁部には沈線が2条見られる。686は肥前の搦鉢片。口縁を内側へ折り返して厚くしている。687は萩の搦鉢片。口縁端部を外側へ突出させている。688は須佐の搦鉢片。口縁端部を外側へ折り返して厚くしている。698は肥前。口縁下部に粘土紐を貼り付けて肥厚させている。貼り付け高台。口縁から見込みへ掻き下ろした搦目が11条ある。699は須佐の搦鉢片。高台畳付にダンゴ目が残る。689は藁灰釉の壺台。胴上部は半球状で下に受皿がある。高台の中は深く削り出している。690は瓶の底部。胴部と裏底には青磁釉、底部には塩釉が施されている。外面には刻花、割れ口には漆継ぎ痕がある。691は胴部中央で内側に屈曲し、口縁までやや外反している皿。見込みに貝目痕がある。萩・須佐。

第108図 6-E区SB189直上整地層出土遺物⑥(1/6)

692は焼塩壺の身。板作り成型で内面には布目が残る。外面には「堺本漆焼／吉右衛門」の刻印銘がある。693・694は灯明皿で底部に糸切り痕がある。695は天神の人形で首部欠損。外型成型の前後合わせである。外面を墨で着色し、雲母を塗布している。696は轆羽口。中央に穿孔があり、表面に鉾澤が溶着している。697は軒丸瓦。左巴文に16珠文。



第109图 6地区木器包含层出土器物①(1/3)



第110图 6地区木器包含层出土物②(1/3)

7地区木器包含層出土遺物（第112図 図版67・68）

700～706は磁器、707～719は陶器、720～723は土師器。

700は見込みに菊花文がある鉢。肥前で17世紀後半以降。701は小坏で外面に鏝・寿文がある。肥前で17世紀中頃。702は十字花文がある肥前の皿で17世紀中頃以降。703は草文がある皿で、17世紀中頃以降。704は17世紀後半以降の肥前の皿。705は17世紀後半の皿。706は白磁の皿。肥前。

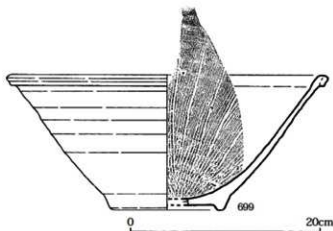
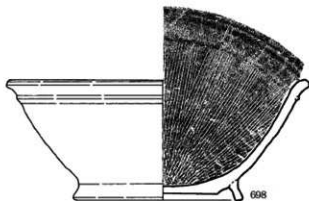
707は肥前の呉器碗で口縁がわずかに外反している。708・709は萩の碗。高台内は渦巻き状になっている。710は見込みに胎土目がある碗。711・712は平形の碗で711は萩・須佐。見込みに胎土目がある。712はダンゴ目がある。713は萩で小型の碗。トキン状高台。714は平形の碗で須佐。畳付に板目があり、見込みに胎土目が残る。715は灯明皿で底面に糸切り痕がある。716は蓋で須佐。717は肥前の掃鉢片。口縁をわずかに屈曲させ、口縁端部を内側に突出させている。718は備前の掃鉢片。719は萩の掃鉢片。口縁を外に折り返して肥厚させている。

720・721・723は土師器の皿で720は底面に糸切り痕、723は糸切り痕と板目が見られる。722は土師器の灯明皿でススが附着している。底面に板目痕がある。

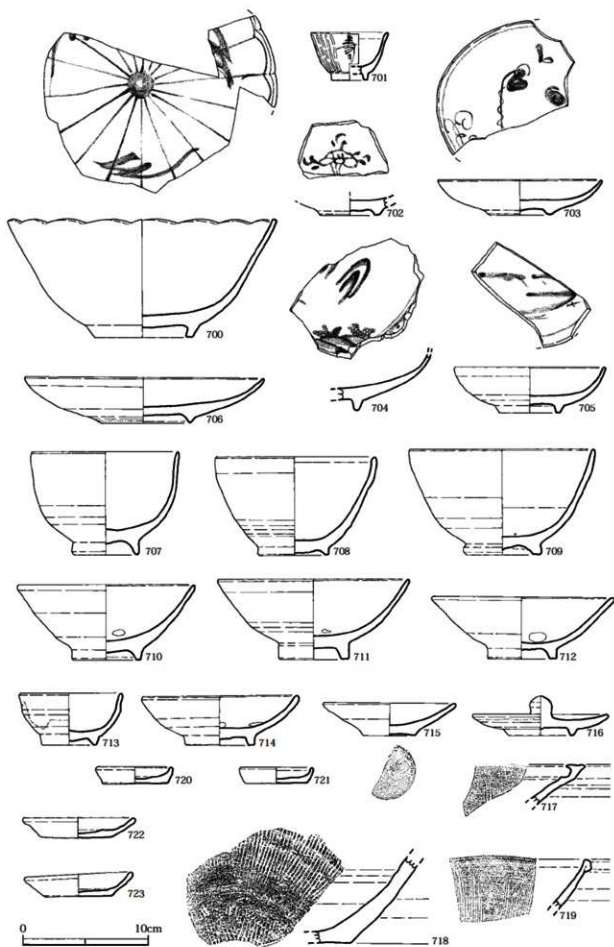
7地区土層断面検出時出土遺物（第113図 図版68・69）

724～726・728～730・736～744・748・749は磁器、727・731・732・734・745～747は陶器、733～735・750は土師器である。

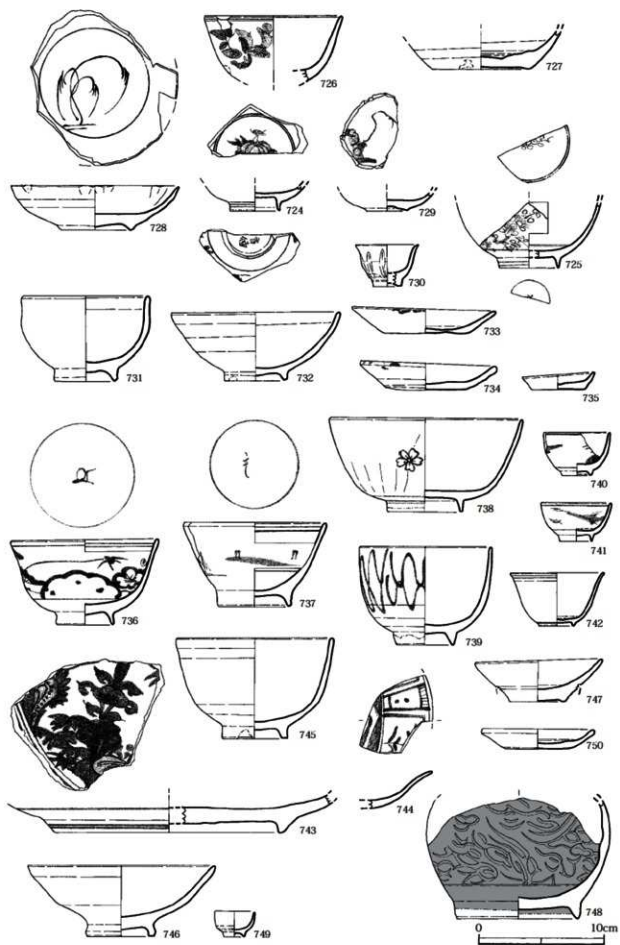
724は高台内に「宣徳□□（年）銘」銘がある碗片。725は内外面に梅花文がある碗。726は桃文の色絵がある碗片である。727は底面に糸切り痕がある萩の壺底部。728は梅文がある肥前の輪花皿。729は蛇の目高台の皿片。730は青白磁釉が施された小坏。731は肥前の呉器碗で口縁がわずかに外反している。17世紀末。732は口径が大きい器高が低い平形に似た碗。733～735は土師器の皿。733は底部に板目痕、口縁にススが附着している。734は底部に圧痕、口縁にススが附着。735は底部に圧痕がある。736は外面に梅花文、見込みに降灰物がある小畑の碗。口縁部が外反している。737は見込みにくずし「壽」がある広東碗。738は胴部をへら状工具で調整した板文のある碗。739は一重網目文がある碗。肥前で17世紀中頃。740～742は小坏で、741・742は肥前。742は器壁が薄く、口縁部が外反している。743は宝相華文が描かれた青花の皿。貼り付け高台で畳付を研磨している。津州窯系。744



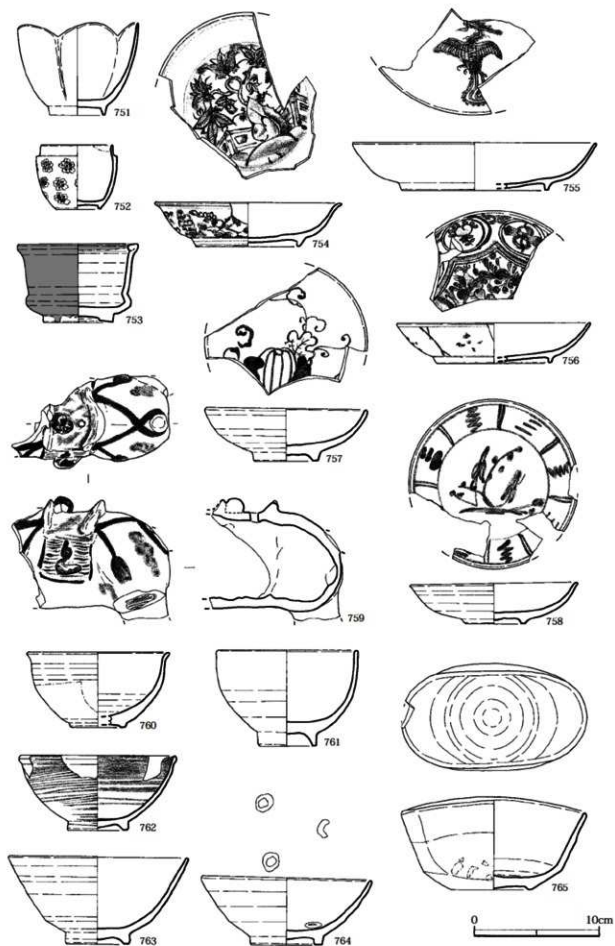
第111図 6地区木器包含層出土遺物③(1/4)



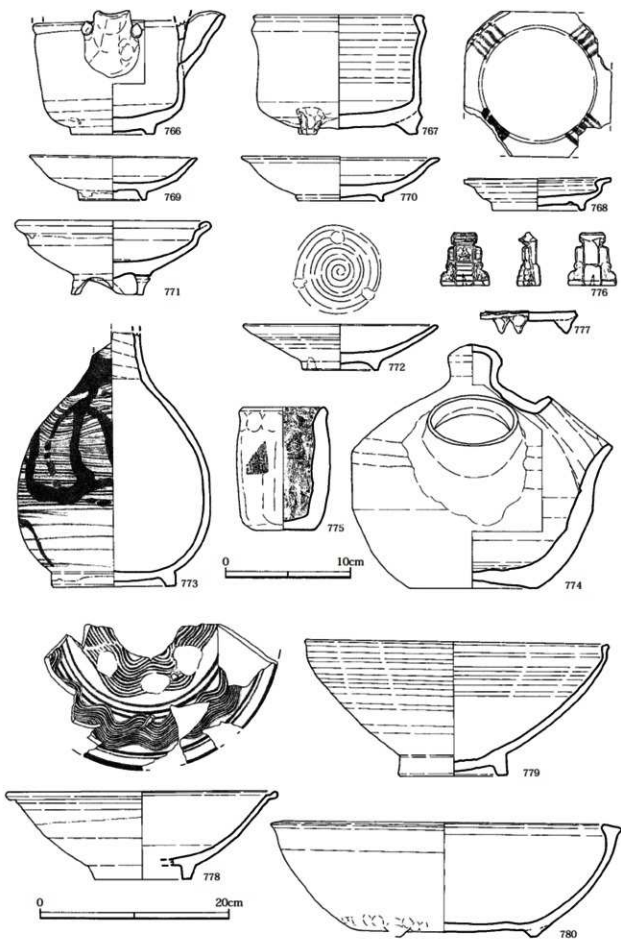
第112图 7地区木器包含层出土遗物(1/3)



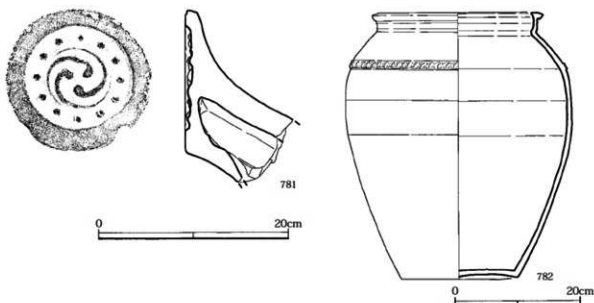
第113图 7地区土層断面検出時出土遺物(1/3)



第114图 6-B~C区石列47·48以西2面検出時出土遺物①(1/3)



第115图 6-B~C区石列47·48以西2面検出時出土遺物②(1/3, 1/4)



第116図 6-B-C区石列47・48以西2面検出時出土遺物③(1/4、1/6)

は芙蓉手写しの皿片。肥前で19世紀。745は萩の碗。746は萩の平碗。747は灯明皿で受台と一体型の皿部。土灰釉が施されている。748は青磁の壺底部で刻花がある。内面は白化粧後に透明釉を施している。749は白磁のミニチュア碗。750は土師器の皿。

6-B-C区石列47、48以西2面検出時出土遺物(第114~116図 図版69~71)

751~759は磁器、760~774・778・779・782は陶器、775は土師器、776は土製品、777は竈道具、780は瓦質土器、781は瓦である。

751は白磁の輪花碗。水引き後に型成型している。752はナツメ形の茶入れ。桜文があり17世紀末~18世紀前半の肥前。753は青磁釉で肥前の香炉。胴下部を膨らませ、口縁を折り返して肥厚させている。754~756は17世紀前半の青花の皿。754は底部に放射状のケズリ痕が残る。755は景徳鎮で鳳凰文がある。756は底部に放射状のケズリ痕、割れ口に漆継ぎ痕が残る。757はトキン状高台で瓜文がある肥前の皿。758は口縁がわずかに外反している肥前の皿。17世紀中頃。759は馬の置物で、赤・緑・淡黄・黒色で絵付けしている。部分ごとに成型し貼り合わせている。

760・761は肥前の碗で、760は外反した口縁を持ち、761は呉器碗で17世紀末。762~764は萩の碗。762は溶融不良の刷毛目の碗で口縁下部が窪んでいる。764は表面にナデ、ケズリの稜がはっきりと表れている。見込みに輪状の胎目がある。765は須佐の香形碗で碁笥底になっている。766は片口で把手部は欠損。注口は貼り付け。767は香炉。底部の3ヶ所に脚部を貼り付けている。口縁下部を膨らませ、端部をわずかに厚くしている。768は5本の編の鉄絵が四方の隅に入る皿。円形に水引き後、皿面を切断している。見込みをやや鋭角に折り曲げ、口縁を外へ床面とはほぼ平行に突出させている。769は須佐の皿で溶融不良。腰部が内側に屈曲している。770は表面に藁灰釉が施され、見込みにはケズリの稜線がある平たい須佐の皿である。771は肥前の皿。高めの割高台で高台内はトキン状になっている。胴上部でやや内側に屈曲し、外反した口縁になっている。口縁端部は内側に折り曲げて肥厚させている。見込みに重ね積み痕がある。772は長石釉が施された美濃の平皿。見込みに胎目がある。

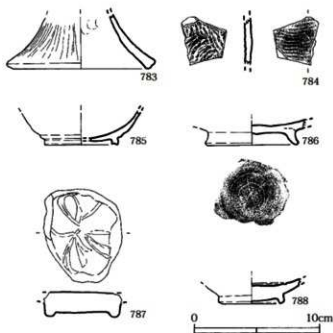
ある。773は肥前の二彩刷毛目の瓶。白化粧土に柳刷毛目をつけ、その上から鉄軸と緑軸をかけ流している。17世紀後半～末。774は渡船で萩。穴の周囲を漏れないようにするためか、ナデ固めた痕が見られる。775は焼塩壺の身。輪積み成型で二重方形枠内に刻印がある。内面には布目痕、外面は板状工具によって叩いた後、ナデ調整をし、底部には板目が残る。17世紀中頃。776は社付きの天神。前後型合わせで合わせ目の一部を削っている。底部中央には穿孔がある。表面には胡粉が残っている。777は窯道具のハマ。ハマの上下面には糸切り痕があり、脚を3足貼り付けている。778は白化粧土に土灰軸を施した柳刷毛目皿で、見込みに砂目痕がある。口縁が外側にせり出している。17世紀後半～末。779は萩の鉢で、口縁部が短く立ち上がり、端部はやや厚くなっている。780は脚付き鉢。底部は板作りで脚部は貼り付けている。口縁端部はナデで厚くしている。781は鳥ぶすま瓦で左三巴文に12珠文を施す。内部には指痕が残る。782は鉄軸の臺で、肩部に縄状の突帯が巡っている。

6・7地区その他の出土遺物（中世以前）（第117図 図版71～72）

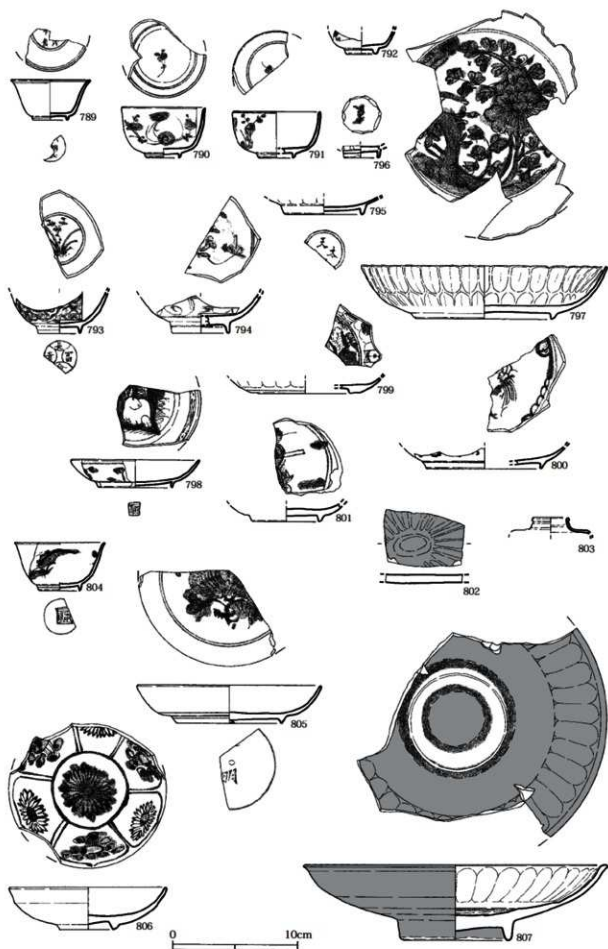
783～788は中世以前の遺物である。783は弥生中期で台付鉢の脚部。外面には縦方向へのミガキ、内面にはナデと押圧痕が見られる。脚部部は中心付近がごく浅く窪んでいる。784は須恵器片で器種・時期は不明。わずかに反っており、内面に同心円のタタキ、外面に平行のタタキの痕が見られる。785は平安期の高台が付いた坏で、胴部と高台の境は少し膨らんでいる。内面には回転ナデと静止ナデが見られる。786は平安期の土師器碗の底部。内面は静止ナデ、外面はロクロナデで調整されている。貼り付け高台で、高台内に「×」の釘書がある。787は青磁の碗の高台片。龍泉窯で12世紀後半～13世紀中頃。見込みに片切ヘラ描き草花文があり、軸が薄く残っているが摩滅が著しい。高台の側面には灰オリーブ色の軸が残っている。788は白磁の碗の高台片。13世紀で中国。外面には高台裾まで軸が施され、見込みに丸形に沈線が巡っている。

6・7地区その他の出土遺物（第118～124図 図版72～78）

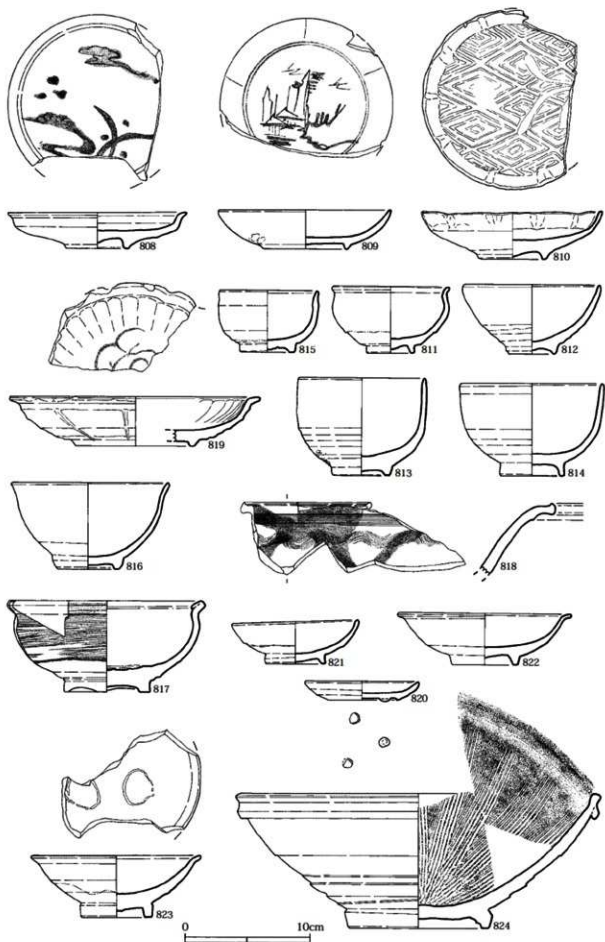
789～801は青花。789は端反小坏で見込み・高台に「大明成化年製」の銘がある。景德鎮で17世紀前半。791は草花文がある小坏。腰部には放射状にケズリ痕が残る。景德鎮で17世紀前半以降。792は高台内無軸の小坏。景德鎮で17世紀前半。793は高台内に「富貴長命」の銘がある小碗。景德鎮。794は内外面に草花に模した文様がある碗。景德鎮。795は輪花皿で高台内に「天□（下）太□（平）」銘。景德鎮。796は高台片で灯心押さえに転用されたもの。景德鎮。797は型成型による輪花皿。見込みに草花文があり、高台内には放射状のケズリ痕が残る。17世紀前半。798は見込みに兔文、高台に「福」銘がある皿。割れ口には漆継ぎ痕がある。景德鎮。799は型成型



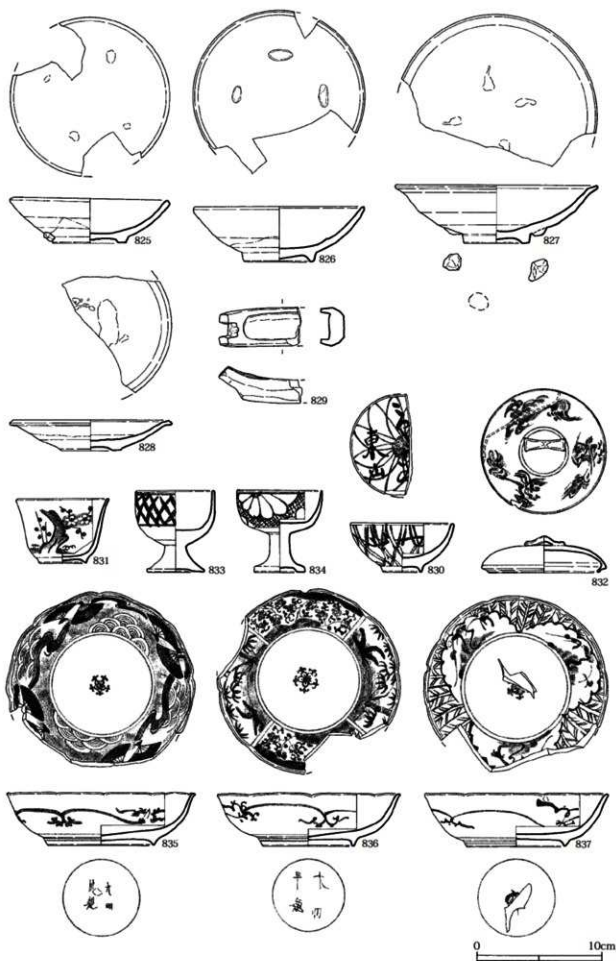
第117図 6・7地区その他の出土遺物①（中世以前）(1/3)



第118図 6・7地区その他の出土遺物②(1/3)



第119図 6・7地区その他の出土遺物③(1/3)



第120図 6・7地区その他の出土遺物④(1/3)

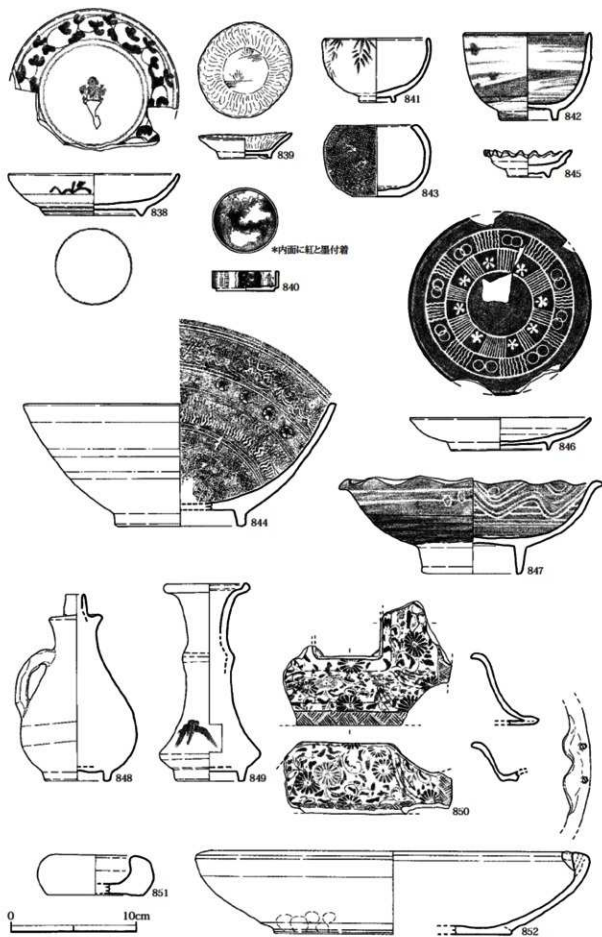
による輪花皿。萼筒底で高台内に放射状のケズリ痕が残る。景徳鎮で17世紀前半。800は皿片で17世紀前半。801は高台内無軸で渦巻状のケズリ痕がある皿。17世紀前半。802は明緑灰色の青磁皿片。龍泉窯の製品で13世紀後半。803は黒軸が施された釘衝茶入れ片。中国で14世紀代のものであろう。

804は湯反の小坏で、高台内に「福」銘があり、17世紀中頃。805～810は皿。805は広底で見込みに牡丹文、高台に「□(太)明」銘がある。17世紀後半。806は菊花文があり17世紀中頃。807は青磁の皿で、見込みを蛇の日輪割し、鉄軸を施す。内側面は花弁状にヘラ削りしている。高台内に渦巻状のケズリ痕がある。17世紀後半以降。808は側面部に稜があり口縁が外傾している。外面は軸の垂れ、ムラが多い。17世紀中頃。809は見込みに樓閣山水文があり、呉須の染色がやや鈍い。17世紀後半。810は水引き後型成型した白磁の輪花皿で、見込みに陽刻の入子菱文がある。17世紀中頃。

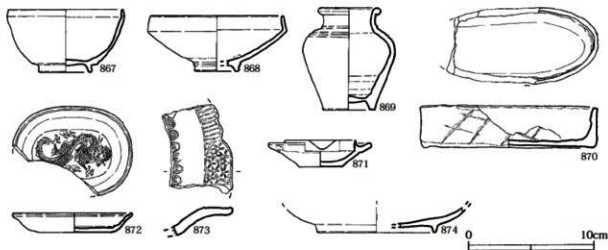
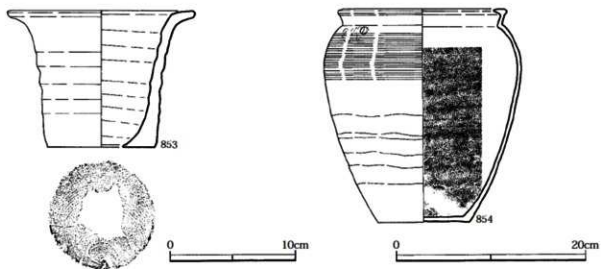
811は黒軸が施された瀬戸・美濃の天目碗。腰部がゆるやかに内湾し、口縁が外傾している。812は外面のケズリ痕が顕著に見られる碗。トキン状高台。813は筒丸型の碗。見込みに渦巻状のナデ痕、壺付に糸切痕がある。814は肥前の呉器碗で17世紀末以降。815は小碗。口縁部にはナデによる凹線が見られる。816は口縁が外傾した碗。高台内に輪状の胎土目がある。貫入があり、焼けひずみが激しい。817は二彩刷毛目の鉢。割高台で見込みに胎土目がある。口縁端部は折り返して肥厚させている。818は瀬戸・美濃の鉢。見込みに緑釉を施した後に、ヘラで直線と波線の櫛目を表している。819は長石釉が施された志野の輪花皿。内面は水引き後、菊花状に型成型しており、鉄絵がある。貼り付け高台で、口縁部には強く横ナデした痕が残る。820は萼筒底で高台内に胎土目が残る小皿。821は薬灰釉の小皿。胎土は灰色だが、高台から腰部にかけては暗赤褐色である。822は折縁の皿で、壺付に糸切痕が残る。823も折縁の皿で、見込みと高台に貝目痕が残る。824は採鉢で塗釉が施され暗赤褐色を帯びている。口縁部を外側に折り返して肥厚させている。見込みと高台の壺付に日痕がある。825は皿で、見込みと高台脇にダンゴ目が残る。壺付には糸切痕が見られる。826はトキン状高台の皿。見込みにダンゴ目、壺付に板目止痕が残る。827は折縁の皿で、見込みと高台脇に胎土目がある。828は見込みと高台に砂目が残る折縁皿。829は胎の置物で削りによる成型。

830は丸碗で、見込みに菊花文、外面に二重刺目文、内外面に筆書きがある。18世紀前半。831は梅花文がある湯反の猪口。832は段重の蓋で焼き継ぎ痕があり、把手を貼り付けている。19世紀以降。833・834は仏飯器で、833には斜格子の文があり18世紀末～19世紀、834には菊花と斜格子の文があり18世紀後半以降である。835～839は18世紀初めから中頃以降の皿。835は輪花皿で、見込みに青海波・扇・五弁花、高台内に「大明化製」銘がある。836は輪花皿で、内面に草文とコンニャク五弁花、高台内に「大明年製」銘がある。837は輪花皿で、内面に植物を模した文様とコンニャク五弁花、高台内に「渦福」くずし銘がある。838は内面に唐草文とコンニャク五弁花がある。839は小皿で内面を花弁状に型成型している。貼り付け高台で、内側に小片が付着している。焼けひずみが激しい。840は小型の段重で見込みに紅・墨が付着している。³⁾ 側面に、「福」「寿」の文字がある。19世紀前半～中頃。

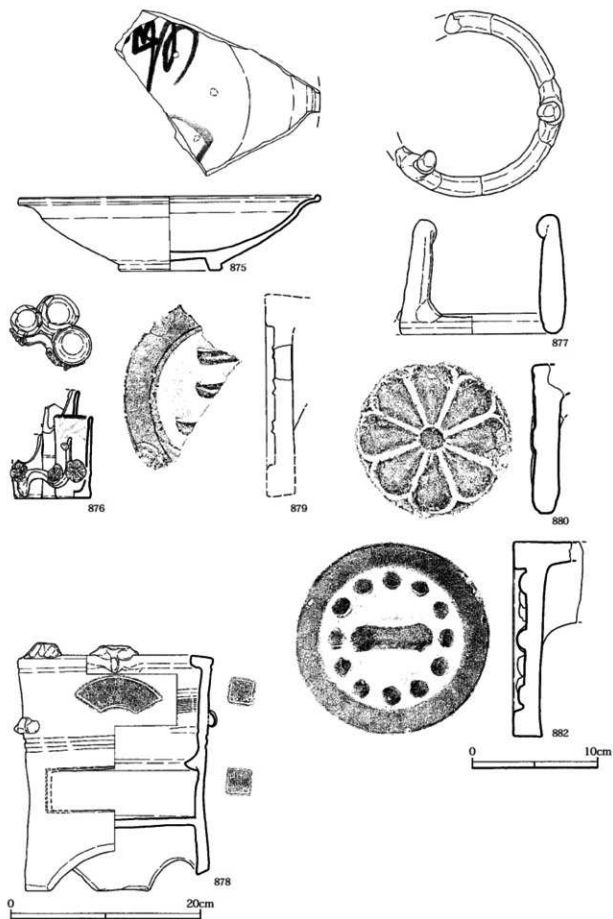
841は紫文を「絵付した丸碗。842は白化粧土に透明釉を施した刷毛目がある碗。843は軟質の陶器。京都で「ユズデンプ」⁴⁾といわれる容器の身である。844は印花がある象嵌の鉢。白化粧土に灰釉を施している。845は口縁がヒダ状の小皿。瀬戸・美濃製品に似せた須佐の製品であらう。846は印花がある象嵌の皿。白化粧土に土灰釉を施している。847は高台が高い刷毛目ヒダ皿。見込みを蛇の日輪割



第121図 6・7地区その他の出土遺物⑤(1/3)



第122図 6・7地区その他の出土遺物⑥(1/3、1/4)



第123図 6・7地区その他の出土遺物⑦(1/3, 1/4)

ぎし、軸刺ぎ部に重ね積み痕が残る。18世紀後半以降。848は油徳利で受部に穿孔があり、把手は貼り付ける。849は仏花瓶。胴上部は鉄軸、下部は土灰軸が施されている。篋文の鉄絵がある。850は古清水様式の香炉。緑軸・青軸・金彩で加飾している。1730～1740年代。851は「深草砂川権兵衛」銘の花焼壺壺の身。18世紀中頃。852は関西系の焙烙。内耳部は貼り付けで穿孔が2ヶ所ある。底面には板目が残る。853は土師器の植木鉢。口縁は外傾し、底面には糸切痕が残る。854は肥前の甕。鉄軸が施され、内面には格子状のタタキの痕が残る。

855・856は外面に筆書きがある紅猪口⁷。858は小坏。高台内に「長門埴田」銘が確認できる⁸。860は筆書きがある油壺片⁹。861は花文がある壺台。862はタコ唐草の神酒徳利。863は蛇の目凹型高台の輪花皿。見込みに鳥文・花文がある。19世紀前半以降。864は梅文の紅猪口。865は赤で色絵を施した紅猪口。866は白磁の小皿で見込みにスス付着。灯明皿として使用したと思われる。

867は鉄軸を施した天目碗で、見込みにハマ痕が残る。868は口縁がわずかに内湾する中折れ碗。鉄軸が施され、見込みにはダング目がある。869はいわゆる飴壺形で、口縁を外に折り返して肥厚させている。870は内面に白泥、外面には鉄化粧を施した鬘水入れ。側面には斜格子状のヘラ書きが見られる。底面に墨書があるが判読不能。872は型押し成型による珉平焼の小皿で、見込みに龍文がある。幕末以降。873・874は源内焼の皿片で緑軸が銀化している。873は内面成型で毘沙門亀甲文がある。874の見込みと高台内にはハリ痕が残る。875は見込みに「寿」の鉄絵がある皿片。口縁が緩やかに外反し、端部は丸く肥厚している。876は竹形の楊枝立てか。松文の鉄絵があり、枝と型成型した梅花を貼り付けている。底部には糸切り痕が残る。875・876は須佐の製品であろう。877は五徳で足部貼り付け。878は近代の博多産の提灯で、側面に山善商店の刻印が3ヶ所ある。879～881は軒丸瓦当で、879は「三」字文、880は菊花文、881は「一」に12珠文がある。

883は青磁で蛇の目凹型高台の香炉。見込みに墨書がある。「享保七…」とあり、数少ない紀年銘資料である。884は堯と紅葉の文様がある延宝様式の瓶。885は菊花文様の皿で17世紀中頃。886は鉄軸が施された天目碗。888は肥前の陶器皿で、見込みに鉄絵と胎土目痕がある。890～894は窯道具。890はトチン。891は型成型の3足ハマで足部は陶石。小畑磁器窯でも同じハマを使用しており、肥前と小畑の技術的な交流を知る良好な資料となり得るかもしれない。

895～898はミニチュア碗。895は松竹梅文、896は水裂文がある。897・898は白磁で型成型。899は緑軸・黄軸が施されたミニチュア羽釜。900は「ユズアンボ」の蓋で、茎・葉部は緑軸、果皮部は黄軸。901は玩具の鳥。902は鯛の土型である。

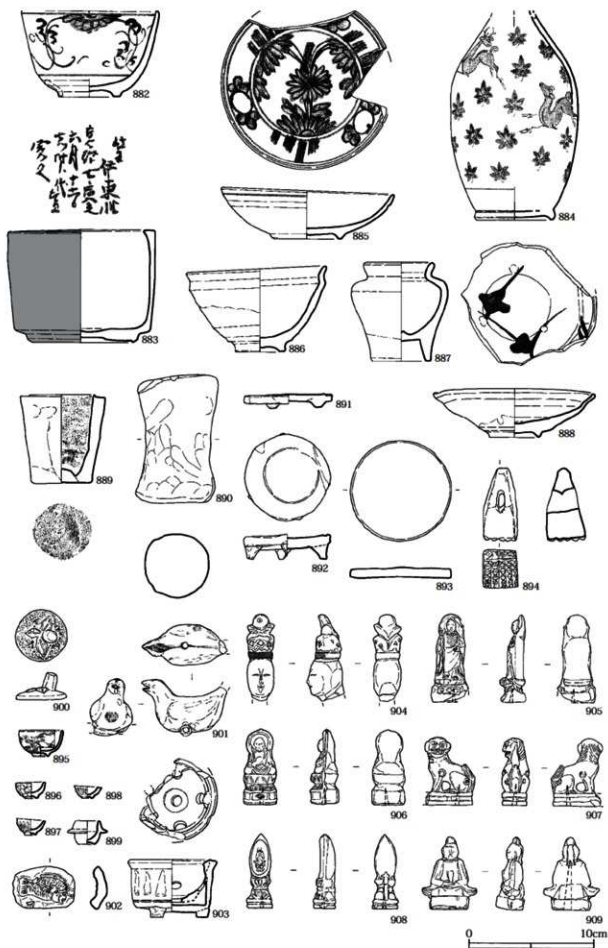
904～909は土製品の人形で、前後型合わせによる成型。905～909の底部には穿孔がある。

注

- 1) 付編5分析(3)を参照
- 2) 4) III-2-(9)「まとめ」を参照
- 3) 付編2を参照

参考文献

- 1) 開賢忠彦 『備前焼』考古学ライブラリー-60 ニューサイエンス社
- 2) 中野高久 『江戸遺跡における「亀」在印資料の流通と展開』江戸遺跡研究会『江戸時代の名産品と商標』2005



第124図 6・7地区その他の出土遺物⑧(1/3)

表11 6・7地区 陶磁器・土器・土製品一覧②

番号	村名	町名	地区	出土地点	種別	器種	特徴	備考
588	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	碗	朱付	肥前 19C前・中
589	103	62	6-E	SD189内上整地層	磁器	盃付前	朱付	花吉登文
590	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	碗	松竹梅 見込	小畑か 幕末
591	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	落口	朱付	小畑 幕末
592	103	62	6-E	SD189内上整地層	磁器	落口	白磁	松花
593	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	碗	色絵	肥前 19C(幕末)
594	103	62	6-E	SD189内上整地層	磁器	段蓋	色絵	肥前 19C(幕末)
595	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	合子蓋	朱付	
596	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	蓋	朱付	肥前 19C前・中
597	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	段蓋	朱付	肥前 19C
598	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	段蓋	朱付	肥前 19C
599	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	湯台	朱付	小畑
600	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	蓋	朱付	神酒無形 タン唐草文
601	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	蓋	朱付	高松利
602	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	蓋	朱付	高松利
603	103	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	蓋	朱付	松竹梅文
604	103	62	6-E	SD189内上整地層	磁器	紅口	白磁	外西成文
605	103	62	6-E	SB189内上整地層	磁器	紅口	白磁	外西成文
606	104	61	6-E	SD189内上整地層	磁器	皿	朱付	角皿(四方隅切) 板成型 貼り付け高台
607	104	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	皿	朱付	角皿
608	104	61	6-E	SB189内上整地層	磁器	皿	朱付	角皿
609	104	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	碗	赤灰釉	茶・灰佐
610	104	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	碗	土灰釉	平碗 ダンゴ目3個
611	104	62	6-E	SD189内上整地層	陶器	碗	土灰釉	平碗 ダンゴ目4個
612	104	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	碗	赤釉	茶 須佐
613	104	62	6-E	SD189内上整地層	陶器	碗	赤釉	タンゴ目4個
614	104	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	碗	土灰釉	平碗
615	104	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	碗	赤釉	茶
616	104	62	6-E	SD189内上整地層	陶器	碗	赤釉	茶
617	104	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	戸口	土灰釉	注し貼り付け
618	104	63	6-E	SD189内上整地層	陶器	戸口	土灰釉	青台タンゴ目型 板型赤切り裏
619	104	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	蓋	赤灰釉	ペコロン型
620	104	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	土灰釉	鉄粒散り	「江戸屋」銘
621	104	63	6-E	SD189内上整地層	陶器	土灰釉	鉄粒・赤釉・白化斑上	近代か
622	104	63	6-E	SD189内上整地層	陶器	土灰釉	白化粧上、鉄粒・赤釉	近代か
623	105	63	6-E	SD189内上整地層	陶器	土灰釉	土灰釉	須佐
624	105	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	行平	土灰釉	把手に刻印 外面トビガンナ 見込みハリ直
625	105	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	皿	土灰釉	鉄粒(梅花)
626	105	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	皿	土灰釉	片花
627	105	62	6-E	SB189内上整地層	陶器	皿	土灰釉	ハマ型3個
628	105	63	6-E	SB189内上整地層	陶器	皿	土灰釉、鉄粒	見込みが、色、色の鉄粒 高台内に墨書(焼成)花押の可能性有り
629	105	63	6-E	SB189内上整地層	土師器	灯明皿	土灰釉	土灰釉
630	105	63	6-E	SD189内上整地層	土師器	灯明皿	土灰釉	土灰釉
631	105	63	6-E	SB189内上整地層	土師器	灯明皿	土灰釉	土灰釉
632	105	63	6-E	SB189内上整地層	土師器	釜蓋	土灰釉	外西成基
633	105	63	6-E	SD189内上整地層	土師器	水注	土灰釉	ほうぶろか 下羽焼
634	105	63	6-E	SB189内上整地層	土師器	瓦	土灰釉	瓦
635	105	63	6-E	SD189内上整地層	土師器	瓦	土灰釉	瓦
636	105	63	6-E	SD189内上整地層	土師器	瓦	土灰釉	瓦
637	106	64	6-E	SB189内上整地層	陶器	ミニチュア	土灰釉	変り
638	106	64	6-E	SD189内上整地層	陶器	ミニチュア	土灰釉	赤切り裏 握手すり付け
639	106	64	6-E	SB189内上整地層	陶器	ミニチュア	赤釉	ビラがけ
640	106	64	6-E	SD189内上整地層	陶器	ミニチュア	赤釉	赤切り裏
641	106	64	6-E	SB189内上整地層	陶器	ミニチュア	赤釉	赤切り裏
642	106	64	6-E	SD189内上整地層	陶器	ミニチュア	赤釉	赤切り裏
643	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	人形頭部		高松利
644	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	人形頭部		高松利
645	106	64	6-E	SB189内上整地層	陶器	人形頭部		高松利
646	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	土人形		高松利
647	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	土人形		高松利
648	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	土人形		高松利
649	106	64	6-E	SD189内上整地層	土製品	土人形		高松利
650	106	64	6-E	SB189内上整地層	土製品	土人形		高松利

建号	種別	所在地	出上地点	種別	器種	特徴	備考		
851	107	64	6-R	SR189内上整地層	陶器	碗	鉄物、土灰物、 染灰釉	ベコカン型 胎土目	須佐
852	107	64	6-R	SR189内上整地層	陶器	皿	染灰釉	見込みハリ痕 馬の目皿	須佐
853	107	64	6-E	SD189内上整地層	陶器	鉢	土灰釉	見込みにタンゴ印	須佐
854	107	64	6-R	SR189内上整地層	土師器	土師鉢		刺印「萩花」部	
855	107	64	6-E	SD189内上整地層	瓦管	大鉢		底部欠	
856	107	64	6-E	SB189内上整地層	土師器	壺		火消し密か	佐野
857	108	85	6-R	SR189内上整地層	陶器	水鉢	土灰物、鉄物、 鉄粒	見込み彫り6ヶ所	畑中・美濃 150+
858	108	85	6-R	SR189内上整地層	土師器	鉢		底面取付 掘りあり	佐野
859	109	65	6-M	水窖包含層	磁器	小外	染付		肥前 17C後
860	109	65	6-K	水窖包含層	磁器	碗	染付	小碗 コンニャク型	肥前 17C末-
861	109	65	6-L	水窖包含層	磁器	碗	白磁		肥前
862	109	65	6-L	水窖包含層	磁器	猪口	染付	蓮華芝文 洞開文	肥前 18C前-
863	109	65	6-M	水窖包含層	磁器	小外	白磁		肥前
864	109	65	6-L	水窖包含層	磁器	蓋	染付	首溜のみ	17C後
865	109	65	6-K	水窖包含層	磁器	皿	青花	宝文 銘有り	17C初
866	109	85	6-L	水窖包含層	磁器	皿	染付	造文	肥前 17C中
867	109	65	6-L	水窖包含層	磁器	皿	染付	見込み彫りの目輪刺ぎ 二重斜格子文 土着花(コンニャク印) 見込み彫りの 目輪刺ぎ	肥前 18C後
868	109	85	6-K	水窖包含層	磁器	皿	染付	型紙取り 貼り付け高台 11筋 袴松 雲文 垂切り成恵	肥前 17C末-18C中
869	109	65	6-K	水窖包含層	磁器	小皿	染付		17C末-18C前
870	109	65	6-K	水窖包含層	磁器	新皿	白磁	外周成恵	肥前
871	109	66	6-K	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉		須
872	109	66	6-K	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉		須
873	109	65	6-K	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉		須佐
874	109	85	6-K	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉	呉漆刷	肥前 17C末-
875	109	66	6-K	水窖包含層	陶器	碗	透明釉、 鉄粒塗	高台内に○	肥前 18C前-
876	109	85	6-K	水窖包含層	陶器	碗	白化粧上、 土灰釉	刷毛目	伊予
877	109	66	6-M	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉	刷毛目 袋手	肥前 17C末-18C前
878	109	66	6-N	水窖包含層	陶器	碗	透明釉、鉄粒	白磁絵 瓦込みハマ真 厚肌 裏焼	京都 18C中
879	109	66	6-K	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉	青彩刷 茶荷底	須佐
880	109	66	6-N	水窖包含層	陶器	小外	土灰釉		須・須佐
881	109	66	6-K	水窖包含層	陶器	小外	土灰釉		須佐
882	109	66	6-N	水窖包含層	陶器	瓶	透明釉、鉄粒	大福蓋表書き「天保午ノ大肥ノ元之」	赤・白刺か
883	110	66	6-L	水窖包含層	陶器	鉢	土灰釉	見込みタンゴ印 高台付カンナ目	須佐
884	110	66	6-L	水窖包含層	陶器	鉢	鉄灰釉	掘り目9条 並ね筋のみ	須前
885	110	66	6-K	水窖包含層	陶器	鉢	鉄灰釉	掘り目9条	須前
886	110	67	6-K	水窖包含層	陶器	鉢	鉄灰釉	掘り目8条	肥前
887	110	66	6-K	水窖包含層	陶器	鉢	鉄灰釉	掘り目6条	須
888	110	67	6-K	水窖包含層	陶器	鉢	鉄灰釉	掘り目11条	須佐
889	110	66	6-K	水窖包含層	陶器	蓋	染灰釉		須佐
890	110	66	6-K	水窖包含層	陶器	蓋	染灰釉、 赤磁釉、 黒磁釉	刺花 蓮華芝文	須佐 須佐か
891	110	66	6-K	水窖包含層	陶器	皿	染灰釉	山形	須・須佐
892	110	67	6-K	水窖包含層	土師器	炭輪蓋(身)		板付り成恵一五角枠内 『塚本染焼』古 右前門 跡	18C中
893	110	67	6-K	水窖包含層	土師器	皿		灯明正 底面染切り	
894	110	67	6-K	水窖包含層	土師器	皿		灯明正 底面染切り 内外面に凸凹付	内外面に凸凹付
895	110	67	6-M	水窖包含層	土製品	土人形		大埴 墨・青粉を塗布 前後型合わせ	
896	110	67	6-L	水窖包含層	土製品	輪切皿		翠子 表面磁洋滑着	
897	110	67	6-K	水窖包含層	瓦	丸 丸		ビ文	
898	111	66	6-K	水窖包含層	陶器	細鉢	鉄灰釉	掘り目11条	肥前
899	111	66	6-K	水窖包含層	陶器	細鉢	鉄灰釉	高台付材にタンゴ印 掘り目8条	須佐
700	112	67	7	水窖包含層	磁器	鉢	染付	菊文	肥前 17C後-
701	112	67	7	水窖包含層	磁器	小外	染付	菊・菊文	肥前 17C中
702	112	67	7	水窖包含層	磁器	皿	染付	十字花文	肥前 17C中
703	112	67	7	水窖包含層	磁器	皿	染付		肥前 17C中-
704	112	67	7	水窖包含層	磁器	皿	染付		肥前 17C後
705	112	67	7	水窖包含層	磁器	皿	染付		肥前 17C後
706	112	67	7	水窖包含層	磁器	皿	白磁		肥前
707	112	68	7	水窖包含層	陶器	碗	化粧土、透明釉、 鉄粒		肥前か
708	112	67	7	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉		須
709	112	67	7	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉		須
710	112	68	7	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉	胎目H3割	須
711	112	68	7	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉	胎目H3割	須・須佐
712	112	68	7	水窖包含層	陶器	碗	土灰釉	タンゴH3割	須
713	112	67	7	水窖包含層	陶器	碗	染灰釉		須

建号	持号	町名	地名	出上地点	種類	器種	行	款	備考
714	112	68	7	水篋包含層	陶器	皿	土灰釉	胎土口割	備須佐
715	112	68	7	水篋包含層	陶器	皿		打割正 糸切り直	
716	112	68	7	水篋包含層	陶器	蓋	蓋灰釉		須佐肥前
717	112	68	7	水篋包含層	陶器	蓋鉢	鉄釉		肥前
718	112	68	7	水篋包含層	陶器	蓋鉢	鉄釉		肥前
719	112	68	7	水篋包含層	陶器	蓋鉢	鉄釉	襷目5条	肥前
720	112	68	7	水篋包含層	土師器	皿		糸切り直	肥前
721	112	68	7	水篋包含層	土師器	皿			肥前
722	112	68	7	水篋包含層	土師器	皿		打割正 板目	肥前
723	112	68	7	水篋包含層	土師器	皿		糸切り直 板目	肥前
724	113	69	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付	高台内に 宮城口(舟) (紫) 蓮	肥前
725	113	69	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付	桜文文	肥前
726	113	69	7	土師断面積出時	磁器	碗	色絵	梅文	肥前
727	113	69	7	土師断面積出時	陶器	蓋	鉄釉	底面鉢目銀 糸切り	肥前
728	113	69	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付	佛文 梅花	肥前
729	113	69	7	土師断面積出時	磁器	皿	染付	蛇の目高台	肥前
730	113	69	7	土師断面積出時	陶器	小坏	白磁		肥前
731	113	69	7	土師断面積出時	陶器	碗		呉蓋碗	肥前 17C末
732	113	69	7	土師断面積出時	陶器	碗		灰釉	肥前
733	113	69	7	土師断面積出時	土師器	皿		底面板目	
734	113	69	7	土師断面積出時	土師器	皿		底面板目	
735	113	69	7	土師断面積出時	土師器	皿		底面板目	
736	113	68	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付		小畑
737	113	68	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付	広葉紋	小畑か
738	113	68	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付		肥前
739	113	69	7	土師断面積出時	磁器	碗	染付	高台無袖	肥前 17C中
740	113	69	7	土師断面積出時	磁器	小坏	染付		肥前
741	113	69	7	土師断面積出時	磁器	小坏	染付	見込みに薄灰	肥前
742	113	69	7	土師断面積出時	磁器	小坏	染付		肥前
743	113	69	7	土師断面積出時	磁器	皿		青花	津州宮系
744	113	68	7	土師断面積出時	磁器	皿	染付	天香子写し	肥前 19C
745	113	69	7	土師断面積出時	陶器	碗	鉄釉	丹台に白磁	肥前
746	113	69	7	土師断面積出時	陶器	碗	鉄釉	瓦石釉	肥前
747	113	69	7	土師断面積出時	陶器	碗	鉄釉	瓦石釉	肥前
748	113	68	7	土師断面積出時	陶器	打割正	土灰釉	受台と 木製の皿部	須佐
749	113	69	7	土師断面積出時	磁器	盃	青磁	白化粧土 刺花	肥前
750	113	69	7	土師断面積出時	土師器	皿	白磁		肥前
751	114	69	6-C	2面(右列8段)	磁器	碗	白磁	スス付	肥前
752	114	69	6-C	2面(右列8段)	磁器	碗	染付	輪花 水引模成型	肥前
753	114	69	6-C	2面(右列8段)	磁器	碗	染付	桜文 ナツク形	肥前 17C末-18C初
754	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	青花	蛇の目高台	肥前
755	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	青花		17C前
756	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	青花	扇文 津鎌ぎ直	肥前 17C前
757	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	青花	津鎌ぎ直	肥前 17C前
758	114	70	6-B	打割正	磁器	碗	染付	瓜文	肥前
759	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	染付	草文	肥前 17C中
760	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	染付	草文	肥前
761	114	70	6-C	2面(右列8段)	磁器	皿	染付	草文	肥前
762	114	70	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
763	114	70	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
764	114	70	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
765	114	70	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
766	114	70	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
767	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
768	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
769	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
770	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
771	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
772	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	碗	鉄釉	馬 津鎌ぎ直	肥前
773	115	71	6-B	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	割高台 糸おろしの灰	肥前
774	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
775	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
776	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
777	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
778	115	71	6-B	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
779	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
780	115	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
781	116	71	6-B	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前
782	116	71	6-C	2面(右列8段)	陶器	皿	鉄釉	見込みに輪目	肥前

展覧会	開催地	展示施設	展示品	種別	器種	内容	備考		
789	118	72	6-C	遺構的陶器	小坏	青花	見込み・高台に「大明成化元年」銘	肥前 17C前	
790	118	72	6-D	2面(右列65以上)	磁器	小坏	青花		
791	118	72	6-1	2面	磁器	小坏	青花	宗徳鎮 17C前-肥前	
792	118	72	6-G	3面	磁器	小坏	青花	肥前 17C前	
793	118	72	6-G	2面(右列65以上)	磁器	碗	高台内に「高台長命」銘	宗徳鎮 肥前	
794	118	72	6-G	2面(右列65以上)	磁器	碗	青花	宗徳鎮 肥前	
795	118	72	6-D	SE97無り方	磁器	皿	青花	宗徳鎮	
796	118	72	6-C	1面検出	磁器	小坏	青花	肥前	
797	118	72	6-F	玉橋野焼	磁器	皿	青花	17C前	
798	118	72	6-H	2面	磁器	皿	青花	肥前	
799	118	72	6-G	3面	磁器	皿	青花	宗徳鎮 17C前	
800	118	72	6-C	3面	磁器	皿	青花	17C前	
801	118	72	6-G	3面	磁器	皿	青花	17C前	
802	118	72	6-E	2面	磁器	皿	青花	肥前	
803	118	72	6-A	2面(右列109以上)	陶器	茶入れ	黒釉	中国南部 14C	
804	118	72	6-H	3面(右列126内皿蓋134)局出	磁器	小坏	染付	方型中に「福」評	17C中
805	118	72	6-B	3面検出	磁器	皿	染付	牡丹文 「明」銘	17C後
806	118	72	6-B	3面検出	磁器	皿	染付	菊花文	肥前 17C中-
807	118	73	6-G	3面検出	磁器	皿	青磁	蛇の目刺刺ぎ 輪刺ぎ部鉄錆・チャツ灰あり 白白	肥前 17C後-
808	119	72	6-B	3面検出	磁器	皿	染付		肥前 17C中
809	119	73	6-I	3面検出(右列133内)	磁器	皿	染付	横顔日本文	肥前 17C後
810	119	72	6-F	3面検出	磁器	皿	白磁	陽刺 梅花頭	肥前 17C中
811	119	73	6-B	3面検出	陶器	碗	黒釉	大目頭	肥前 17C前
812	119	73	6-G	3面検出	陶器	碗	灰釉	鉄物	肥前
813	119	73	6-D	3面検出	陶器	碗	灰釉	鉄物	肥前
814	119	73	6-1	3面検出(右列33以内)	陶器	碗	透羽輪	見込み	肥前 17C末-
815	119	73	6-G	3面検出	陶器	碗	透羽輪	見込み	肥前
816	119	73	6-G	3面検出	陶器	碗	透羽輪	高台に梅状筋土付	肥前
817	119	73	6-G	3面検出	陶器	鉢	透羽輪	黒毛目 二彩 桐西首 見込み筋土目頭	肥前
818	119	73	6-E	3面ト下屋	陶器	鉢	透羽輪	黒毛目	肥前
819	119	74	6-E	3面ト下屋	陶器	皿	透羽輪	黒毛目	肥前
820	119	74	6-G	3面検出	陶器	皿	透羽輪	黒毛目	肥前
821	119	73	6-E	3面検出	陶器	皿	透羽輪	黒毛目	肥前
822	119	73	6-H	右列126内皿蓋134)局出	陶器	皿	透羽輪	見込みに赤切り裏	肥前
823	119	73	6-1	3面検出	陶器	皿	透羽輪	見込み・高台に「日」	肥前
824	119	74	6-I	3面検出(右列33以内)	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
825	120	73	6-1	3面検出	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
826	120	73	6-1	3面検出(右列33以内)	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
827	120	73	6-D	3面検出	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
828	120	73	6-C	3面検出	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
829	120	74	6-E	3面ト下屋	陶器	皿	透羽輪	見込みに「日」	肥前
830	120	74	6-E	2面検出	磁器	碗	染付	見込みに菊花 外面二重割目文の上に(内)「コみやこの裏山に」(外)「二七たんに〜」の赤きき有り	肥前 18C前
831	120	74	6-F	2面検出(右列33以内)	磁器	鉢	染付	梅花文	肥前 18C後か
832	120	74	6-1	2面検出	磁器	鉢	染付	梅花文	肥前 18C-
833	120	74	6-D	2面検出(右列33以内)	磁器	鉢	染付	梅花文	肥前 18C末-18C
834	120	74	6-D	2面検出(右列33以内)	磁器	鉢	染付	梅花文	肥前 18C後-
835	120	74	6-1	2面検出(右列33以内)	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C前
836	120	74	6-K	2面検出	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C中-
837	120	74	6-D	2面検出(右列33以内)	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C中-
838	121	74	6-D	2面検出(右列33以内)	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C中-
839	121	74	6-1	2面検出	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C初-
840	121	74	6-1	2面検出	磁器	皿	染付	青花	肥前 18C末-18C 中
841	121	75	6-E	2面	陶器	碗	透羽輪	丸眼	肥前
842	121	75	6-C	右列32以内	陶器	碗	透羽輪	丸眼	肥前
843	121	75	6-D	右列30以内	陶器	鉢	透羽輪	丸眼	肥前
844	121	75	6-G	右列65以内	陶器	鉢	透羽輪	丸眼	肥前
845	121	75	6-D	右列50以内	陶器	皿	透羽輪	丸眼	肥前
846	121	75	6-D	右列50以内	陶器	皿	透羽輪	丸眼	肥前
847	121	75	6-G	右列65以内	陶器	皿	透羽輪	丸眼	肥前
848	121	75	6-G	右列65以内	陶器	皿	透羽輪	丸眼	肥前
849	121	75	6-G	右列65以内	陶器	皿	透羽輪	丸眼	肥前
850	121	75	6-A	右列108以内	陶器	香炉	青花	見込みに「日」	肥前 18C中(1730-40)

図番	寸法	材料	用途	種別	器種	特徴	備考
851	121	75	6-R	2面	土師器	花笠埴土(身)	「深草跡工権兵衛、跡の身」 京都伏見 18C中
852	121	75	6-D	石罫90以上置	土師器	絞絡	内耳貼り付 穿孔2ヶ所 関西系
853	122	75	6-F	1-2面輸出	土師器	鉢	植木鉢
854	122	75	6-1	2面輸出	陶器	甕	
855	122	76	6-A	石玉器込め	磁器	紅猪口	「はさかた、河内清徳寺、吉野園、西園寺、高野山」
856	122	76	6-N	トレンチ罫り込み	磁器	紅猪口	「萩丸町○○○○(竹登御園)小川町」
857	122	76	6-N	砂罫(1面)	磁器	碗	小畑か
858	122	76	6-N	1面(石玉19除去)	磁器	小坏	「三門麻田、高人物因」
859	122	76	6-N	1面輸出	磁器	碗	「三門○○(麻田)評」
860	122	76	6-D	1面(石玉43以西)	磁器	漆台	「萩○○○○(丸町三利山)吹注」
861	122	76	6-N	1面輸出	磁器	金台	花文
862	122	76	6-N	砂罫除去	磁器	瓢(神酒罫)	タコ唐草
863	122	76	6-N	砂罫除去	磁器	皿	蛇の目点合
864	122	76	6-L	1面輸出	磁器	紅猪口	桜花文 内和鑄付着
865	122	76	6-C	1面輸出	磁器	紅猪口	内貼
866	122	76	6-N	砂罫(1面)	磁器	白磁	灯明として使用
867	122	76	6-D	1面(石玉13以西)	陶器	碗	大日願 見込みハマ直
868	122	76	6-N	砂罫(1面)	陶器	碗	見込みタン口
869	122	77	6-D	1面(石玉43以西)	陶器	甕	能書か
870	122	77	6-D	1面輸出	陶器	質水入れ	白磁、酸化産
871	122	76	6-N	砂罫除去	陶器	灯明受皿	成面に黒書 鉄鑄付着
872	122	76	6-N	1面輸出	陶器	漆台	受台内裏砂付着
873	122	76	6-G	2面	陶器	皿	面足除通 彫成彫 底部ハリ焼 葉平焼
874	122	76	6-N	1面輸出	陶器	皿	足跡門亀甲文 表面酸化 器内焼
875	123	76	6-N	砂罫(1面)	陶器	皿	土灰輪、鉄絵
876	123	77	7	1面輸出	陶器	小皿	方字 見込みハマ直
877	123	77	6-1	1面輸出	土製品	瓦惣	作形 鉄絵盆 梅を貼り付け 梅成文
878	123	77	6-1	1面輸出	土師器	赤猪	「四谷持多跡工工家町山善楽所製、跡」
879	123	77	6-D	1面輸出(石玉43以西)	瓦	軒丸瓦当	「三文字」
880	123	77	6-A	1面輸出	瓦	軒丸瓦当	菊花(8字)
881	123	77	6-N	砂罫除去	瓦	軒丸瓦当	12珠文
882	124	77	6-F	道標面埋埋トレンチ	磁器	碗	見込み黒書書「此下、伊東姓ノ享保丁亥之、六月十六日ノ七ツ時分ノ買之、代官製」
883	124	77	7	1面輸出	磁器	香炉	空磁
884	124	77	6-L	道標面埋埋トレンチ	磁器	瓢	彫と紅染
885	124	77	6-C	道標面埋埋トレンチ	磁器	皿	菊文文
886	124	77	6-G	道標面埋埋トレンチ	陶器	碗	大日願
887	124	78	6-G	石罫12置トレンチ	陶器	甕	土灰輪
888	124	78	6-F	道標面埋埋トレンチ	陶器	皿	灰輪、鉄絵
889	124	78	6-D	石玉50置トレンチ	土師器	埴埴土(身)	板作り 黒漆
890	124	78	6-H	道標面埋埋トレンチ	土製品	トチン	
891	124	78	6-N	石玉19除去	土製品	3足ハマ	足部のみ海土 呉鉛付着 彫成彫
892	124	78	6-E	1面輸出	土製品	4足ハマ	赤鉛付着 赤切り直
893	124	78	6-1	2面輸出	土製品	ハマ	赤切り直
894	124	78	6-F	1面輸出	土製品	カタタ具	格目目
895	124	78	6-G	2面輸出(石罫2以西)	磁器	ミニチュア碗	染付
896	124	78	6-A	1面輸出	磁器	ミニチュア碗	染付
897	124	78	6-L	1面輸出	磁器	ミニチュア碗	白磁
898	124	78	6-1	1面輸出(道標面埋埋トレンチ)	磁器	ミニチュア碗	白磁
899	124	78	6-M	トレンチ3	陶器	ミニチュア甕	鉄絵
900	124	78	6-C	2面輸出	陶器	甕	鉄絵、漆台
901	124	78	6-K	1面輸出	陶器	灰具	色絵
902	124	78	6-K	1面輸出	土製品	土型	海軍か
903	124	78	6-N	1面輸出	土製品	ミニチュア甕	彫成
904	124	78	6-N	砂罫除去	土製品	土人形	彫成 前後型合せ成直
905	124	78	6-G	2面輸出(石罫2以西)	土製品	土人形	彫成 前後型合せ
906	124	78	6-H	2面輸出	土製品	土人形	彫成 前後型合せ
907	124	78	6-C	2面輸出	土製品	土人形	彫成 前後型合せ
908	124	78	6-H	2面輸出(石罫2以西)	土製品	土人形	彫成 前後型合せ
909	124	78	6-B	2面輸出(石罫43以西)	土製品	土人形	彫成 前後型合せ

(2) 5-中、6・7地区石製品

発見された石製品には、硯・砥石・墨書石等がある。これらの遺物のうち主なものを調査年度ごとに紹介する。

①平成11年度(第125回 図版83・84)

5-中区では、硯・砥石・火打石・碁石を紹介する。

910は赤色頁岩の硯で、覆手に「赤間関」銘が確認できる。911・913は瓦硯で、911の硯背には釘書きがあり、913は硯面に3条の窪んだ研磨痕が残っている。いわゆる玉砥石に二次使用した可能性があると考えられる。912・914・915は粘板岩の硯で高嶋石か。912は硯破片を二次加工したもので用途は不明。側面には切断研磨痕、硯面には手彫りノミ痕がある。914・915の四方壁面には墨を塗布していると思われる。914は硯面の摩滅が激しい。

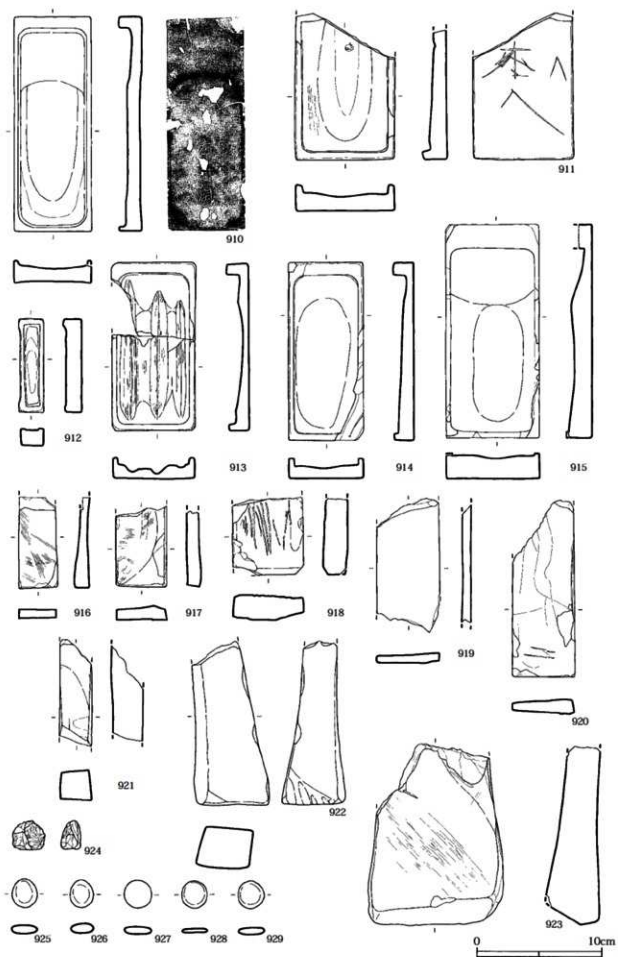
916～923は砥石。916～920は珪質頁岩の仕上げで京都産合砥。側面には手引き鋸による切断痕があり、擦過痕が見られものもある。918～920はいわゆる「 \cdot 」掛」といわれるサイズで幅約5cm。規格性がある。921は珪質粘板岩の中砥で四面使用。被熱している。922・923は砂岩の荒砥で922は四面使用。923は幅が約10cmで、表面には斜めに擦過痕がある。三面使用し、側面には一部加工痕が残る。924は緑色チャートの火打石片で、表面には火打金との打撃による小さい敲打痕が多く残る。925～929は珪質頁岩の碁石で、やや楕円形のものもある。

②平成16年度(第126～128回 図版84～86)

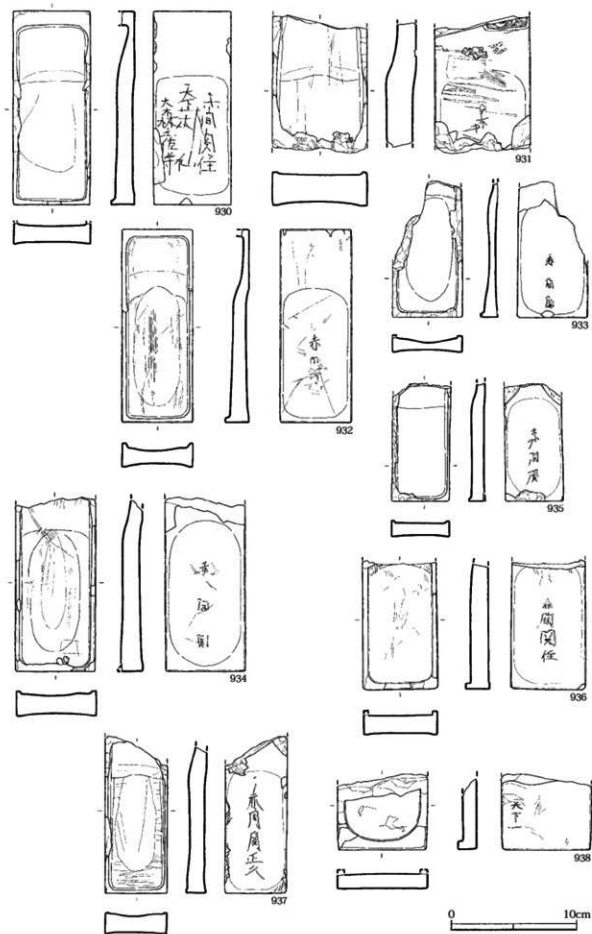
6・7地区では、硯・砥石・墨書石・温石・火打石・碁石・置物を紹介する。

930は黒色頁岩、931～936・938～941は赤色頁岩、937は緑色頁岩の赤間硯である。930の覆手に「赤間関住天下一大森上佐守」の釘書き、938の硯背の片隅に「天下」の刻字があるが、いずれも1面相当の出上で、天和2年(1682)に「天下」の称号が禁止になってからも大森家がこの銘を使用したとは考え難いため、所有者が私的に彫ったと思われる。931は覆手に「赤 \cdot 」銘があり、線を赤色で着色している。硯背に刻印がある。932～935・939・940の覆手に「赤間関」、936の覆手に「赤間関住」の銘がそれぞれ確認できる。937の墨堂には縦・横方向の擦過痕が残り、覆手には「赤間関正久」銘がある。940は「赤間関」銘の左横に「長屋」の釘書きが確認できる。941は幅が10cmを超える太子硯である。942・943は頁岩の硯で、942は硯面の上下に硯池があり、943はいわゆる玉砥石に二次使用したと考えられる激しい牽流痕が硯面に残っている。944は安山岩スコリアの硯。石をそのまま活用し、墨堂と硯池を彫り、硯背を平たく加工しただけである。

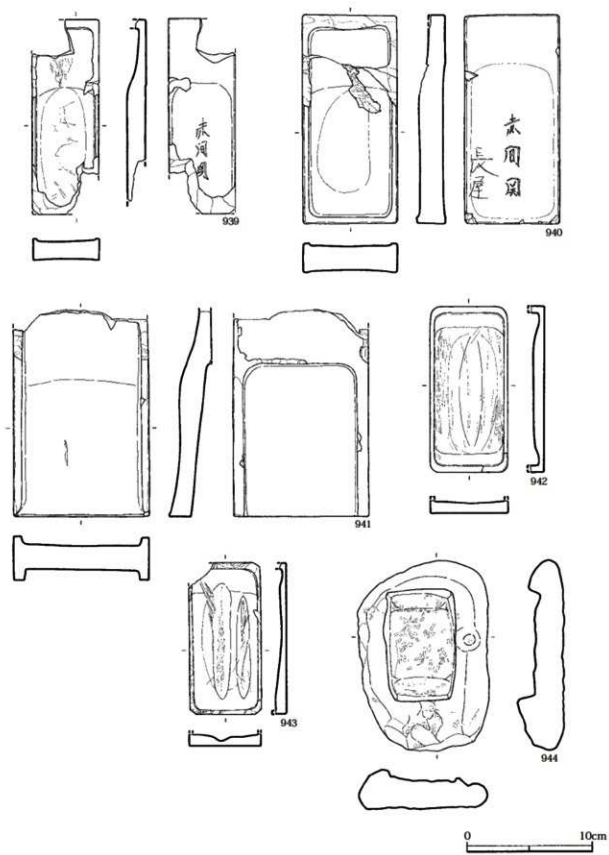
945～949は珪質頁岩を使用した仕上げで京都産合砥。側面には手引き鋸による切断痕が残る。950は流文岩質凝灰岩の中砥で伊予砥。四面とも使用しているが、一面のみ摩滅が激しい。切断面にはノミ痕が残る。951は砂岩の砥石で荒砥。2面が残っており、両面とも使用痕が残る。今回の調査では砥石が56点出土し、内訳は仕上げが47点、中砥が5点、荒砥が2点、種別不明が2点である。仕上げが全体の90%近くを占めている。この傾向は、この年だけの傾向ではなく、外堀全体を通していえることである。またどの面においてもほぼ同じ傾向を示す。中砥は仕上げよりは粒が粗いため包丁などに適している。天草砥が2点、伊予砥が2点、青砥が1点出土している。青砥については「和漢三才図会」の中で「庵丁刀砥 黄色コレヲ青砥トイフ 山城ノ産ヲ最上トシ 丹波及比防州岩国ノ産コレ



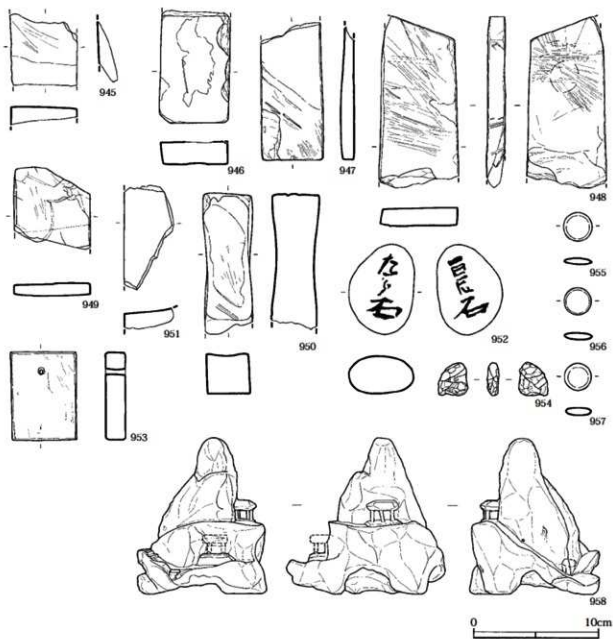
第125图 5—中区石製品(1/3)



第126图 6·7地区石製品①(1/3)



第127图 6·7地区石製品②(1/3)



第128図 6・7地区石製品③(1/3)

二次ぐ」と記述されていることから、砥石の産地同定や流通について検討する必要がある。

952は安山岩スコリアの丸い墨書石で、表面に「た□石」、裏面に「百度石」と書いてある。お百度参りに使用したものか。953は砂岩を直方体に加工した温石で、体部に1ヶ所穿孔がある。全面に加工痕があり、角を面取りしている。954は緑色チャートの火打石片。表面には敲打痕が多く残る。955～957は頁岩の碁石。それぞれほぼ円形をしている。958は安山岩スコリアで作られた置物。山に模した石の中腹に社が彫られている。裾部には、側面と裏側の2ヶ所に社があったと思われるが欠損している。中腹の社からそれぞれの社に向かって、参道および階段が作られている。一方の側面には小さい穿孔がある。

参考文献

- 1) 岩崎仁志 「近世赤間関の跡について」 山口歴史文化センター 2005
- 2) 京都天然砥石組合編 記念誌「京都天然砥石の魅力」 2003
- 3) 寺島良安 「和漢三才図会」東京美術 1970

表12 石製品一覧 ※瓦硯を含む

単位：cm ※：残存価

遺物番号	所収番号	河原番号	地区	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考
910	125	83	5-H	1-2階遺構検出	石製品	硯	16.9	6.1	1.8	赤色頁岩 赤面硯 「赤面間」跡
911	125	83	5-B	2-3階(石垣29以南トレンチ)	瓦	硯	*11.5	8.0	2.1	釘書き有り
912	125	83	5-B	SK87	石製品	硯	7.35	1.85	1.5	紅板岩 高橋石か 硯上部を二次使用
913	125	83	5-F	2-3階(石列35以南トレンチ)	瓦	硯	13.3	6.5	1.8	瓦硯を土硯石に経用したもの
914	125	83	5-B	SK97	石製品	硯	14.0	5.9	1.8	紅板岩 高橋石か 御面塗布か
915	125	83	5-B	SK87	石製品	硯	16.8	7.35	2.0	紅板岩 高橋石か 御面塗布か
916	125	83	5-B	地層上(石垣63以东)	石製品	砥石	*7.2	3.05	*1.2	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
917	125	83	5-B	SK87(以西2-3階赤褐色層の下)	石製品	砥石	*6.3	4.0	*1.1	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
918	125	83	5-B	SK87(以西2-3階赤褐色層の下)	石製品	砥石	*6.0	5.55	*1.95	黒石型地質頁岩(住上区(京都産合硯)) 丁掛
919	125	83	5-C	SK82	石製品	砥石	*10.5	5.0	*0.7	黒石型地質頁岩(住上区(京都産合硯)) 丁掛
920	125	83	5-G	SK100	石製品	砥石	*13.9	4.0	*1.15	黒石型地質頁岩(住上区(京都産合硯)) 丁掛
921	125	83	5-C	樓上層内(石垣3以东)	石製品	砥石	*8.45	2.55	*2.4	性質劣化硯 中砥
922	125	83	5-B	SK87(以西2-3階赤褐色層の下)	石製品	砥石	*13.0	5.0	*3.15	砂岩 荒砥 西側使用
923	125	83	5-D	樓上層の下(石垣3以东)	石製品	砥石	*14.3	10.05	*4.2	砂岩 荒砥
924	125	84	5-F	樓上層の上(石垣3以东)	石製品	火打石	2.55	2.25	1.6	緑色チャート 敲打板
925	125	84	5-B	地山直上(石垣63以西)	石製品	基石	径2.1	直径1.85	0.75	性質頁岩 黒
926	125	84	5-B	地山直上(石垣63以西)	石製品	基石	径2.3	直径1.95	0.65	性質頁岩 黒
927	125	84	5-B	SK87下層	石製品	基石	径2.2	0.6	性質頁岩 黒	
928	125	84	5-E	建物敷地層の下	石製品	基石	径2.05	0.32	性質頁岩 黒	
929	125	84	5-D	SK15	石製品	基石	径2.3	直径1.0	0.55	性質頁岩 黒
930	126	84	6-E	SB189直上整地層	石製品	硯	17.25	6.05	1.85	黒色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面間」跡(天下一大石工保存)釘書き
931	126	84	6-E	SB189直上整地層	石製品	硯	*10.85	7.5	2.65	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面」跡
932	126	84	6-H	1階検出	石製品	硯	15.3	5.6	1.9	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面」跡
933	126	84	6-E	上段	石製品	硯	*10.8	5.55	1.3	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面」跡
934	126	84	6-E	上段トレンチ	石製品	硯	*13.8	6.3	2.0	赤色頁岩 赤面硯 「赤面間」跡
935	126	84	6-I	2階	石製品	硯	*9.3	4.6	1.3	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 小型 「赤面間」跡
936	126	85	6-N	1階検出	石製品	硯	*10.2	5.9	1.9	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面間」跡
937	126	85	7	トレンチ5表土	石製品	硯	*12.45	4.85	1.2	緑色頁岩(青石) 赤面硯 「赤面間」跡
938	126	85	6-D	1階検出	石製品	硯	*6.0	7.1	1.5	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「天下」通字
939	127	85	6-G	1階検出	石製品	硯	15.4	5.3	1.7	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面」跡
940	127	85	7	トレンチ3	石製品	硯	16.5	7.5	2.3	赤色頁岩(常磐石) 赤面硯 「赤面間」跡 釘書き
941	127	85	6-E	SB189直上整地層	石製品	硯	*14.4	10.7	3.45	赤色頁岩(赤石) 赤面硯 太子硯
942	127	85	6-C	2階検出(石列18以西)	石製品	硯	13.1	6.2	1.3	頁岩 荒砥
943	127	85	6-I	トレンチ	石製品	硯	11.95	5.6	1.15	頁岩 高山石か 玉砥石に転用か
944	127	85	6-F	透視南面認トレンチ	石製品	硯	15.0	10.3	3.7	安山岩スコリア
945	128	86	6-B	SK107	石製品	砥石	*5.6	5.2	*1.4	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
946	128	86	6-B	SK107	石製品	砥石	*8.9	5.4	*1.8	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
947	128	86	6-I	2階検出	石製品	砥石	*10.85	4.9	*1.1	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
948	128	86	6-E	SB189直上整地層	石製品	砥石	*13.5	6.3	*1.4	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
949	128	86	6-L	木塚包含層	石製品	砥石	*10.25	6.0	*1.05	黒石型地質頁岩 住上区(京都産合硯)
950	128	86	6-E	SB189直上整地層	石製品	砥石	*11.1	3.7	*3.15	流文岩質地質 中砥(伊予砥)
951	128	86	6-D	SK121	石製品	砥石	*8.2	*3.95	*1.3	砂岩 荒砥
952	128	86	6-G	南端石列32以西	石製品	基石	径7.1	直径5.1	3.0	安山岩スコリア 「白灰石」跡(石)の墓書き有り
953	128	86	6-E	黒色土層(石垣150上層)	石製品	砥石	6.95	5.1	1.55	砂岩
954	128	86	6-E	SB189直上整地層	石製品	火打石	2.6	2.3	0.95	緑色チャート
955	128	86	6-F	SK159	石製品	基石	径2.2	0.5	頁岩 荒砥 黒	
956	128	86	6-L	木塚包含層	石製品	基石	径2.2	0.5	頁岩 黒	
957	128	86	6-E	SB189直上整地層	石製品	基石	径2.1	0.55	頁岩 黒	
958	128	86	6-E	SB189直上整地層	石製品	蓋物	10.2	12.5	高さ12.3	安山岩スコリア

(3) 5-中、6・7地区木製品 (第129-132 図版87-89)

平成16年度に出土した木製品は、ほとんどが保水性のある黒灰色粘質土の堆積層である木器包含層からである。総数は約150点で、下駄・漆椀・桶・箸・櫛・栓など多種にわたり、さらに墨書の痕跡が残る木簡も出土した。漆器の表面漆色調については、主観的な判断で黒、赤、赤黒(褐色)の3種類に分けた。蒔絵については、金、銀、錫蒔絵の種類があるとされるが、色調からの区別は難しいので、表面観察による発色の色調を記載した。

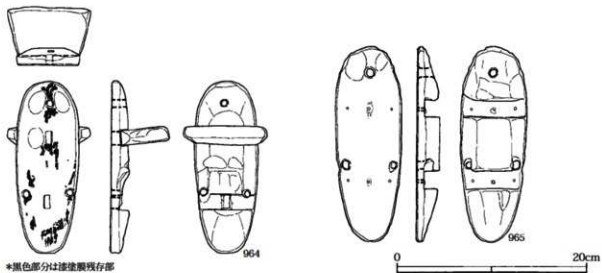
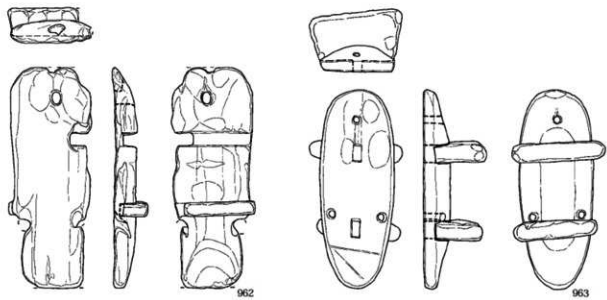
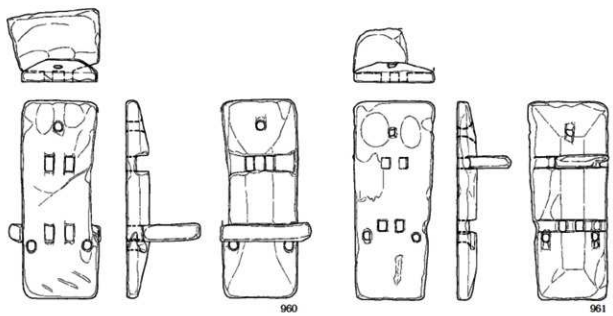
959は5地区SK89から出土した漆漉し紙である。捻られた二本の紙が、漆が固まったことによって接着している。写真図版のみ掲載した。

960-970は下駄で、いずれも前壺の回りに指痕のくぼみがあり、歯は使用により摩滅している。また、眼の周囲は鼻緒による摩滅痕が見られる。960・961・963・964は露卯の差歯下駄。960は前歯が欠落しており、後歯には砂のめりこみがある。横緒孔が柄の後方にある。961は後歯が欠落。台下部の周囲に接地による摩滅痕がある。963は丸形で、柄に詰木をしており、横緒孔が柄の前方にある。台先端には接地による摩滅痕がある。964は丸形で少し小型。後歯欠落。台の表面には漆塗りの痕が残り、柄に詰木をしている。横緒孔が柄の前方にある。台部と差歯の接合部には鋸による切断痕がある。962・965は陰卯の差歯下駄である。962は前歯が欠落し、後歯には砂のめりこみがある。965は丸型で差歯が欠落。木釘・鉄釘を打ち込んで修復した痕跡が認められる。横緒孔が後歯の前方にある。右足用か。

966・968は一本の連歯下駄で、台と歯の境には鋸による切断痕がある。966は前後の歯の間隔が狭く、横緒孔が後歯の後方にある。968は歯の間隔が広く、横緒孔が後歯の前方にある。967・969は一本の列り下駄である。967は丸型で接地面には砂粒が付着している。969は子供の右足用と考えられる。970は中折れ下駄の前部で、修復のための木釘、釘穴が残っている。左足用か。

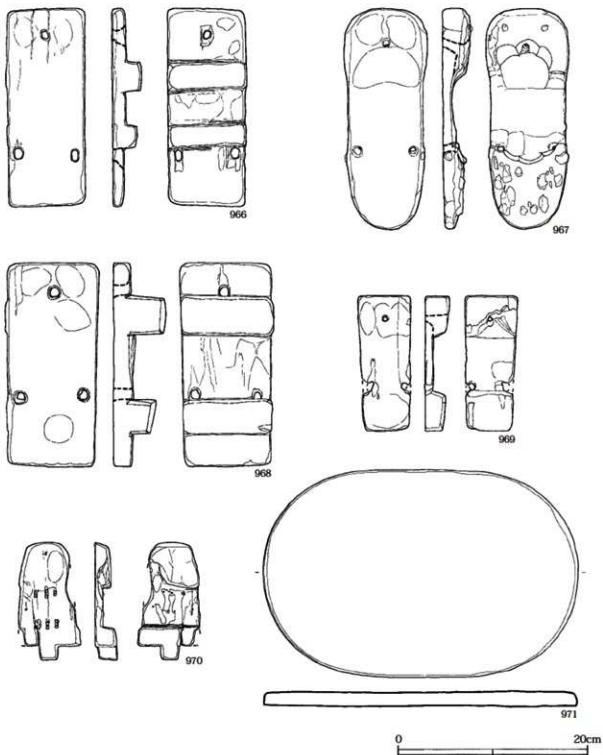
971は小判型の桶底。972・973は箸。974はヘラで材質は竹。975は木鐙。八角形の板の中央に刀身を通す楕円形の穴があり、刀身との接地面には圧痕が見られる。976は蓋で印籠蓋の形状をしている。内外面にロクロによる削り痕がある。977は傘部品でロクロ。中央には柄を通す穴があり、下方に向かって狭まっている。978は7地区木器包含層から出土。内部に穿孔、表面に目釘穴があることから包丁の柄か。979・980は櫛で、979は7地区木器包含層から出土。981-983は木栓で、981の上部には鋸目がある。984は曲物部品で、蓋の天板部か身の底部か。両面に漆が残っており、曲部には備板が付いていたが一部剥がれている。985はハケの柄部。下部に切り込みが3条あり、それぞれの線上に穿孔がある。986はシュロ刷毛で、樹皮に付いている毛を紐で束ねている。写真図版のみ掲載した。

987-994は漆椀で、987・990-992は6地区から出土、それ以外は7地区木器包含層から出土した。987-989は椀の身、990-994は椀の蓋。987の樹種はケヤキ。内外面とも下地の後に黒漆を上塗りしている。988の樹種はモクレン属で高い高台。内面は赤黒漆、外面は黒漆をそれぞれ上塗りしている。989の樹種はトチ。内面は赤黒漆、外面には黒漆が上塗りされている。また外面には、赤黒漆で二重丸に二ツ雁と思われる文様を加飾している。990はSK169から出土し、樹種はケヤキ。内面は赤黒漆、外面は黒漆が上塗りされている。外面には赤黒漆で草の文様を加飾している。991の樹種はトチで、内外面とも黒漆で上塗りしている。992の樹種はトチ。内面は黒漆を塗った後に赤黒漆を上塗りし



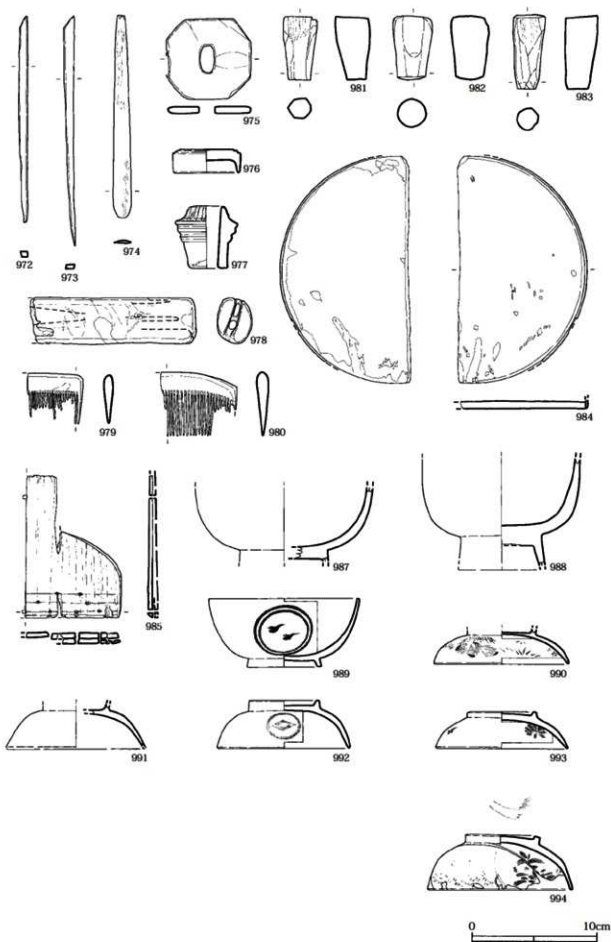
*黑色部分は接合部残存部

第129图 6·7地区木製品①(1/4)

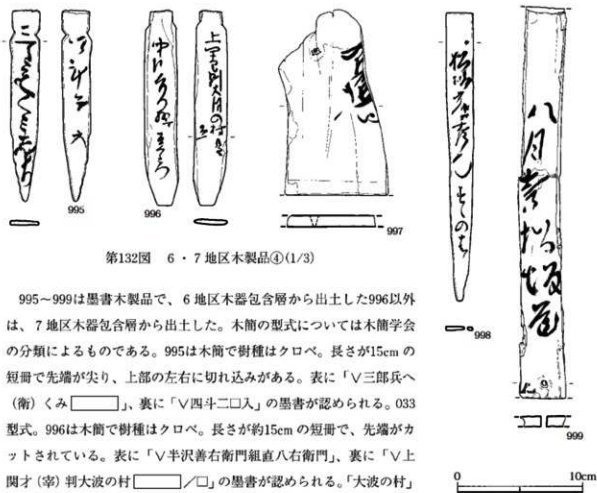


第130図 6・7地区木製品②(1/4)

ている。外面は黒漆を上塗りし、さらに丸に中陰菱の文様を加飾しているが色褪せている。993の樹種はケヤキ。内外面は黒漆、口縁端部とつまみ縁は赤黒漆で上塗りしている。外面には赤黒漆で葉の文様を加飾している。994の樹種はトチで、横木取りのため歪んでいる。内面は赤黒漆、外面は黒漆で上塗りしている。外面には葉の文様があるが色褪せて色調が判別できない。つまみ内に赤黒漆の線文がある。



第131图 6·7地区木製品③(1/3)



第132図 6・7地区木製品④(1/3)

995～999は墨書木製品で、6地区木器包含層から出土した996以外は、7地区木器包含層から出土した。木筒の型式については木簡学会の分類によるものである。995は木筒で樹種はクロベ。長さが15cmの短冊で先端が尖り、上部の左右に切れ込みがある。表に「V三郎兵へ(衛)くみ□□」、裏に「V四斗□入」の墨書が認められる。033型式。996は木筒で樹種はクロベ。長さが約15cmの短冊で、先端がカットされている。表に「V半沢善右衛門組直八右衛門」、裏に「V上関才(宰)判大波の村□□/□」の墨書が認められる。「大波の村」は現在の田布施町大字大波野を示していると思われる。033型式。997の樹種はスギ。焼失や欠損で長さ約15cm、幅約7cm残存している。表面には鉄釘痕がある。墨書は判読不能。081型式。998は木筒で樹種はクロベ。上部には切り込みがなく、小さい穿孔がある。先端は尖っている。表に「○松坂屋吉右衛門/す、のは、」の墨書が認められる。051型式。999は木筒で樹種はスギ。表に「八月吉松坂屋○」の墨書が認められる。081型式。これらの木筒には、人名や地名が書いてあることから荷札として使用されたと考えられる。

表13 6・7地区 下駄一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	扉版番号	図版番号	地区	造 構	木製品種別	長さ	幅(奥含む)	幅(前部)	高さ(前部)	高さ(後部)	台部厚さ	樹 種	備 考	
960	129	87	6-L	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	21.0	*9.6	8.0	欠	*7.7	2.4	アスナロ属		
961	129	87	6-L	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	21.0		8.5	*6.7	欠	2.1	トネリコ属		
962	129	87	6-K	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	*23.4		*8.5	欠	*3.7	2.3	台部:キリ 裏部:センゲン		
963	129	87	6-M	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	21.1	*9.8	7.8	*6.6	*6.2	2.8	台部:アスナロ属 裏部:カワラ つばね:アスナロ属	つめ木有り	
964	129	87	7	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	18.3	*8.8	6.7	*6.2	欠	2.0	台部:アスナロ属 裏部:カワラ	つめ木有り 漆塗りの痕跡	
965	129	87	7	木器包含層	下駄(恙寅・露卯)	*20.7		*7.0	欠	欠	2.4	アスナロ属	石足用か 本釘あり 鉄釘あり	
966	130	87	6-M	木器包含層	下駄(木・連濁)	21.0	8.3		*3.1	*2.6	1.4	トネリコ属		
967	130	87	6-B	SK169下層	下駄(木・朝り)	23.35		8.8	*3.2	3.5	1.2	アスナロ属		
968	130	88	7	木器包含層	下駄(木・連濁)	25.55		9.3	*5.55	*4.45	2.0	アスナロ属		
969	130	88	6-K	木器包含層	下駄(木・朝り)	*14.3		5.5	*2.65	*2.15	0.8	アスナロ属	子供用か 石足か	
970	130	88	6-K	木器包含層	下駄(中折れ)	*12.5	*6.2					*2.3	サクラ属	前部 左足用か 釘あり

表14 6・7地区漆碗一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	挿入番号	図版番号	地区	造 構	木製品種別	口径	器高	底径	つまみ径	樹 種	備 考
987	131	89	6-M	木器包含型	碗(身)		*5.8			ケヤキ	外・内: 黒
988	131	89	7	木器包含型	碗(身)		*8.4			モクレン属	外: 黒 内: 赤黒
989	131	89	7	木器包含型	碗(身)	(11.7.)	5.4	(5.8)		トチ	外: 黒 内: 赤黒 赤黒で二重丸にニツ雁か
990	131	89	6-B	SK169	碗(蓋)	(10.6)	*2.7			ケヤキ	外: 黒 内・文様: 赤黒
991	131	89	6-K	木器包含型	碗(蓋)		*3.45			トチ	外・内: 黒
992	131	89	6-K	木器包含型	碗(蓋)	10.5	3.8		5.5	トチ	外: 黒 内: 赤黒 丸に中陰菱
993	131	89	7	木器包含型	碗(蓋)	10.4	2.9		5.5	ケヤキ	外・内: 黒 文様・縁: 赤黒
994	131	89	7	木器包含型	碗(蓋)	11.4	4.4		5.9	トチ	外: 黒 内: 赤黒

表15 6・7地区墨書木製品一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	挿入番号	図版番号	地区	造 構	種別	長さ	幅	厚さ	樹 種	墨 書 積 文	備 考
995	132	89	7	木器包含型	木筒	*15.2	2.3	0.38	クロバ	(表)「V三郎兵へくみ」 (裏)「V四斗二口入」	033型式
996	132	89	6-L	木器包含型	木筒	*15.4	2.5	0.4	クロバ	(表)「V平若石南門相道八右衛門」 (裏)「V上隈才木大波の村」	033型式 穿孔1ヶ所有
997	132	89	7	木器包含型	板部材	*14.7	*8.15	0.9	スギ	判読不能	081型式 焼失部多し
998	132	89	7	木器包含型	木筒	*22.7	2.1	0.3	クロバ	「○松坂屋吉右衛門ノすのは。」	051型式 穿孔1ヶ所有
999	132	89	7	木器包含型	木筒	30.8	*3.6	0.85	スギ	「八月古松坂屋 ○」	081型式 穿孔1ヶ所有

表16 その他の木製品一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

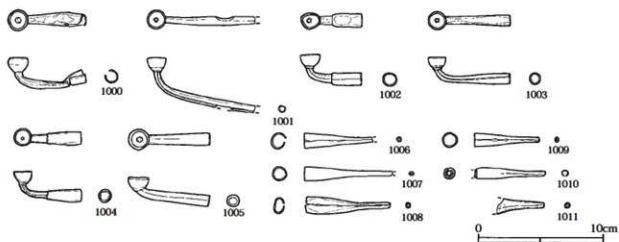
遺物番号	挿入番号	図版番号	地区	造 構	木製品種別	長さ	幅	厚さ	備 考
959	-	89	5-B	SK89	漆漉し紙				写真のみ
971	130	88	6-N	木器包含型	桶底	長径33.4	短径21.85	1.5	小判型
972	131	88	6-L	木器包含型	蓋	17.3	0.6	0.42	
973	131	88	6-K	木器包含型	蓋	18.2	0.7	0.35	
974	131	88	6-M	木器包含型	へラ	16.0	1.4	0.32	
975	131	88	6-K	木器包含型	木鐙	高6.3	*6.6	0.6	
976	131	88	6-K	木器包含型	蓋	口径(5.3)	器高1.9		印施蓋型
977	131	88	6-K	木器包含型	傘部品	高4.9	径4.9	孔径1.6-2.6	手元ロクロ
978	131	88	7	木器包含型	柄	*13.0	3.7	2.7	包丁の柄か
979	131	88	7	木器包含型	櫛	*4.4	4.0	0.7	
980	131	88	6-K	木器包含型	櫛	*6.0	5.1	0.88	
981	131	88	6-K	木器包含型	栓		径2.7	高さ5.0	この日有り
982	131	88	6-K	木器包含型	栓	長径3.1	短径2.9	高さ5.05	
983	131	88	6-K	木器包含型	栓	長径2.55	短径2.5	高さ5.8	
984	131	88	6-L	木器包含型	曲物部品	径18.1		0.6	蓋の天板部か身の底部 漆残
985	131	89	6-K	木器包含型	ハケ	*11.2	*7.6	*0.85	柄部
986	-	89	6-K	木器包含型	シュロ刷毛				写真のみ

(4) 5-中、6・7地区金属製品

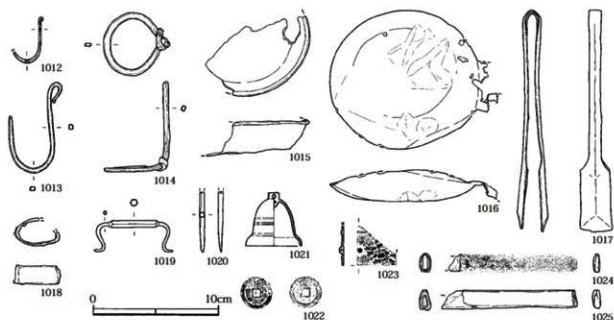
①平成11年度 (第133・134図 図版90)

1000～1005は火皿がある煙管の雁首。1000は敲打痕がある。1001は敲打痕があり、内部に羅字竹が一部残存している。1002は肩部、補強帯がある。1003は羅字竹が残存。1004は肩部があり、内部に羅字竹が残る。1005は肩部、補強帯も無く比較的新しい煙管と考えられる。1006～1011は煙管の吸口。1010には羅字竹が残存する。

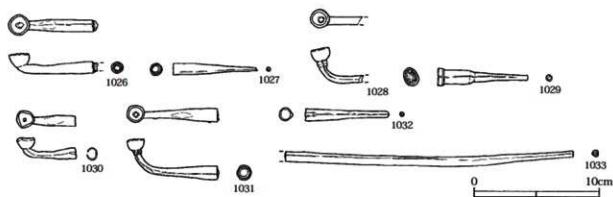
1012・1013は灯明具の吊り金具。断面が1012は丸状、1013は方形の針金を使用している。1014は断面が方形の針金を用いた銅製の灯芯押え。1015・1016は銅製の皿で秤の皿か。1015の内面にはススが付着し、口縁端部は外側に折り返している。底部は平底。1016は柄が付いており、底部は丸底。1017は全長17.4cmと小型の火ばさみである。1018は環状の銅製品だが、何の部品かは不明。1019は把手金具で、触手部は断面が六角形の形状になっている。引き出しの把手か。1020は鉄製の四つ目錐の先端部。1021は柁が開いた銅製の風鈴。錆化が著しいため、体部中央に3条の沈線を確認するのみ



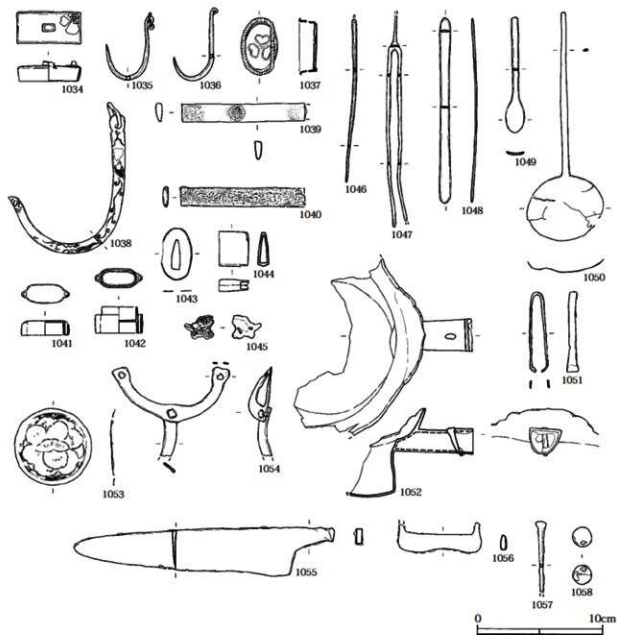
第133図 5-中区煙管(1/3)



第134図 5-中区金属製品(1/3)



第135图 6地区烟管(1/3)



第136图 6地区金属制品(1/3)

である。舌には1022の新寛永通宝(文銭)を使用。1023は牡丹文がある懐中鏡片。紐を通す穴が付いている。江戸中期。1024・1025は小柄の柄袋で、いずれも刃部の根元で折れている。1204は斜格子文の毛彫り装飾がされている。

②平成16年度(第135・136図 図版90・91)

1026・1028・1030・1031は煙管の雁首。1026・1030は肩部・補強帯が無く、比較的新しい時期と考えられる。1026は羅字竹が残る。1028は火皿と首部残存。補強帯がある。1031は補強帯があり、内部に羅字竹が残る。敲打痕がある。1027・1029・1032・1033は吸口。1027は羅字竹残存。1029は肩部があり、胴部には段がついている。羅字竹が残る。1033は羅字部と吸口部が一体型となっており、残存長は22.7cmである。

1034は銅製で方形の水滴。表面に切れ目を入れて、内側に折り返して穿孔としている。1035・1036は吊り金具で、1035は環付き。1037は戸袋で、側面に穿孔がある。内面には片喰文、縁には螺旋状の模様がある。1038は掛金具。環状の金具が付いている。胴部には藍による列点によって草文風の文様を施してある。御簾用か。1039・1040は小柄の柄袋。1039の表面には片喰文、表面には敲打痕がある。1040の表面は唐草高肉彫りで装飾されている。1041・1042は同一個体の銅製の印籠。左右に紐を通す穴がある。1043・1044は刀の部品で1043は切羽、1044は鑷。1045は目貫金具で、刀と扇子を持った人物が表現されている。一部に金色の塗装が残る。1046は髪結い道具の弁か。六角形の断面を持つ。1047は銅製の簪。1048は平たく、両端がわずかに広がっている。眉作りの道具か。1049は銅製の匙。1050は杓子で柄の部分は平たい。1051は毛抜き。1052は火袋斗で、皿の口縁は輪花状になっている。柄の受口には2条の沈線があり、打ち込んだ釘がある。受口の内部には柄の木質が残存している。1053は円盤状の飾金具でゆるやかに湾曲している。表面には椿と思われる花が毛彫りで装飾され、鍍金を施している。小さい穿孔が2ヶ所ある。1054は把手金具で、固定するための穿孔があり、留具が付いている。1055は包丁の刃。1056は火打金で敲打痕がある。1057は釘。1058は鉛の弾丸。径が1.5cm、重量が19.7g。

表17 煙管一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	種目番号	図版番号	地区	出土地点	材質	器種	長さ	高さ	火皿径	小口径	吸口径	備考
1000	133	90	5-B	3西・地砂直上(石列6以西)	銅	雁首	6.1	2.4	1.55	0.95		敲打痕
1001	133	90	5-E	砂層上(トレンナ内)	銅	雁首	8.5	4.35	1.45	0.5		羅字竹残存
1002	133	90	5-D	2-3両建物壁地層の下	銅	雁首	4.8	2.4	1.5	0.95		敲打痕 肩部有り 補強帯有り
1003	133	90	5-E	建物壁地層の下	銅	雁首	6.45	2.1	1.4	0.8		羅字竹残存 補強帯有り
1004	133	90	5-F	2-3両 SK104周辺	銅	雁首	5.3	2.4	1.3	0.9		羅字竹残存 肩部有り
1005	133	90	5-D	塚裏28	銅	雁首	6.5	2.8	1.65	0.9		
1006	133	90	5-C	地山直上層(石列5以东)	銅	吸口	5.45			1.2	0.35	
1007	133	90	5-C	地山直上層(石列5以东)	銅	吸口	7.0			1.05	0.3	
1008	133	90	5-E	2-3両建物壁地層の下	銅	吸口	6.7			1.2	0.35	
1009	133	90	5-G	焼上層の下(石垣3以东)	銅	吸口	5.15			1.1	0.35	
1010	133	90	5-G	SK100	銅	吸口	5.45			0.9	0.45	羅字竹残存
1011	133	90	5-F	2-3両 SK104周辺	銅	吸口	*3.8				0.4	
1026	135	90	6-D	SK121	銅	雁首	6.7	1.6	1.6	0.9		羅字竹残存 敲打痕
1027	135	90	6-D	SK121	銅	吸口	6.6			0.9	0.35	羅字竹残存 補強帯有り
1028	135	90	6-G	3両検出	銅	雁首	*4.1	*2.85	1.45			補強帯有り
1029	135	90	6-G	3両検出	銅	吸口	7.1			1.45	0.45	羅字竹残存 肩部有り
1030	135	90	6-K	木器包含層	銅	雁首	4.65	1.7	1.4	0.9		
1031	135	90	6-D	2両検出(石垣4以西)	銅	雁首	7.2	3.2	1.4	1.1		羅字竹残存 敲打痕 補強帯有り
1032	135	90	6-I	SX138	銅	吸口	6.6			1.0	0.3	
1033	135	90	6-E	3両下層	銅	羅字吸口	*22.7				0.45	羅字吸口一体型

表18 その他の金属製品一覧

単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	採掘番号	図版番号	地区	出土地点	材質	器種	長さ	幅	厚さ	備考
1012	131	90	5-B	地砂上(石列83以南)	銅	吊り金具	3.65	*2.35	径0.2	
1013	131	90	5-E	埴物惣地層の下(石垣3以西2-3間)	銅	吊り金具	7.1	3.5	径0.3	
1014	131	90	5-B	石垣29直下	銅	灯芯棒さえ	径4.0	器高7.1		
1015	131	90	5-C	地山直上炭化層(石垣2.3境界)	銅	皿	口径(5.2)	底径(3.7)	高2.5	厚秤の皿か
1016	131	90	5-F	かまど31周辺	銅	皿	口径(10.3)	高*2.5		厚秤の皿か
1017	131	90	5-A	2-3両(石垣1以西)	銅	火ばさみ	17.4	2.4		
1018	131	90	5-B	SK87	銅	部品	長径(3.7)	短径(2.2)	高1.5	
1019	131	90	5-B	SK87の西2-3両(赤褐色層の下)	銅	把手金具	6.2	2.5	最大径0.6	
1020	131	90	5-B	SK96	鉄	鎌	*4.8	0.35	0.35	刃ノ口端先端部
1021	131	90	5地区	遺構検出	銅	風鈴	器高4.2	底径1.4		舌には支線を転用
1022	131	90	5地区	遺構検出	銅	寛永通宝	径2.5	孔径0.6 ×0.6		新寛永(文) 1021の舌として使用
1023	131	90	5地区	遺構検出	銅	横中鏡	*3.15	*3.15	0.1	紐有り 江戸中期
1024	131	90	5-C	埴1層の下(石垣3以南)	銅	小柄(柄袋)	*10.3(袋部9.3)	1.4	袋部厚0.5	毛彫り裝飾有り
1025	131	90	5-E	埴等惣地層の下(2-3間)	銅	小柄(柄袋)	*10.8(袋部9.1)	1.3	袋部厚0.4	
1031	136	91	6-E	2両検出	銅	水滴	5.0	2.5	高1.55	
1035	136	91	6-G	2両検出(石垣85以南)	銅	吊り金具	高5.35	3.7	径0.39	環付き
1036	136	91	6-G	2両検出(石垣85以南)	銅	吊り金具	高5.8	3.15	径0.4	
1037	136	91	6-G	2両検出(石垣85以南)	銅	戸袋	4.5	2.9	深1.4	片嵌文
1038	136	91	6-F	2両検出(石列82以西)	銅	掛金具	10.95	8.15	0.2	御座掛金具か 環付き 毛彫り裝飾有り
1039	136	91	6-I	2両検出(石列83以西)	銅	小柄(柄袋)	14.7	1.4	0.55	片嵌文
1040	136	91	6-M	木器包含層	銅	小柄(柄袋)	6.75	1.5	0.45	啓草高肉彫 内部に刀子の茎が残存
1041	136	91	6-I	2両検出(石列83以西)	銅	印籠の蓋	3.7	1.45	高1.15	1042と同
1042	136	91	6-I	3両検出	銅	印籠の身	3.7	1.45	高2.1	1041と同
1043	136	91	6-L	木器包含層	銅	切羽	長径1.05	短径2.35	0.05	
1044	136	91	6-N	木器包含層	銅	釧	2.75	2.3	0.9	
1045	136	91	6-G	2両検出	銅	日貫金具	2.3	1.8	0.45	
1046	136	91	6-D	SK121	不明	弁か	*12.9	0.35		断面六角形
1047	136	91	6-E	礎石87検出	銅	管	*16.7	1.2	径0.2	
1048	136	91	6-I	2両検出(石列83以西)	銅	扇作り道具か	14.6	0.85	0.1-0.15	
1049	136	91	6-G	2両検出(石垣85以南)	銅	匙	14.1	1.4		
1050	136	91	6-E	SB189直上惣地層	銅	杓子	18.5	5.95		
1051	136	91	6-B	2両(石列47以西)	銅	毛抜き	6.3	1.35	0.55-0.9	
1052	136	91	6-C	石列66以西トレンチ	銅	火燧手	(14.0)	(14.0)	高さ7.0	柄の本質が残る
1053	136	91	6-G	2両検出(石垣85以南)	銅	円盤状飾り金具	径6.05			毛彫り 縁か 鍍金
1054	136	91	6-B	SK169下層	銅	把手金具	*7.0	9.2	0.2	
1055	136	91	6-E	SB189直上惣地層	鉄	包丁	*20.6 (刃部17.2)	最大3.8	刃0.1-0.45 茎0.5-0.9	
1056	136	91	6-E	石列118以南トレンチ	鉄	火打金	6.6	*2.4	0.45	敲打痕あり
1057	136	91	6-K	木器包含層	鉄	釘	*5.65	0.85	0.3	
1058	136	91	6-C	遺構跡確認トレンチ	鉛	弾丸	径1.5			重量19.7g

(5) 出土銭貨

5-中區、6・7地区の調査では600点あまりの銭貨が出土した。

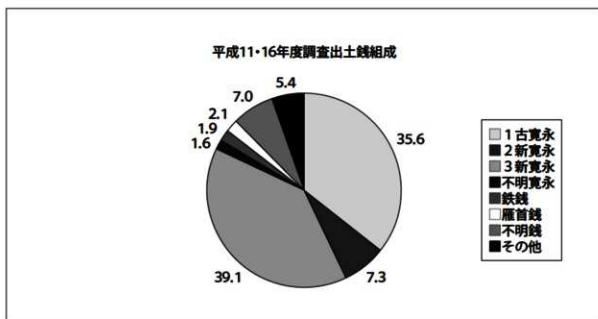
ここでは『日本出土銭総覧 1996年版』(永井久美男編 兵庫埋蔵銭調査会 1996)を基に、まず寛永通宝を「1期古寛永」、「2期新寛永(文銭)」、「3期新寛永」の3つに分類し、寛永通宝ではあるが遺存状態の悪さから分類し難いものを「不明寛永」とした。また、材質が鉄とみられるものを「鉄銭」、煙管の雁首を平たく潰して用いたものを「雁首銭」、判読が困難であるものを「不明銭」とし、これらの分類のいずれにも属さないもの(渡来銭、模倣銭、無文銭など)を「その他」として分類した。

この分類に基づく5-中區、6・7地区の出土銭貨の組成を表19と第137図に示す。出土した銭貨のうち、寛永通宝が占める割合は83.6%であり、このうち1期古寛永が35.6%、2期新寛永が7.3%、3期新寛永が39.1%となる。

5-中區及び6・7地区において、出土銭の多くは建物の立地していた部分、あるいはその周辺から検出されており、敷地の裏庭部分にあたる堀側からの出土は少ない。これは、他の調査区でもみられた傾向である。また、遺構が少ない6-J~N区・南端区や7地区における銭の出土数も極めて少ない。出土状態としては、建物部分の整地層を面的に掘り下げていくなかで、1、2点あるいは数点が1ヶ所から出土する例が最も多い。容器に収められていたことを示すような出土状況はみられなかったが、6-E区において銭辯の状態のまま15枚の寛永通宝が出土している。

これまでの調査から、北の惣門通りに隣接する2地区や、中の惣門通りに隣接する4地区において表19 出土銭内訳

	1古寛永	2新寛永	3新寛永	不明寛永	鉄銭	雁首銭	不明銭	その他	小計
平成11年度(5-中區)	63	11	38	10	0	2	16	10	150
平成16年度(6・7地区)	160	35	207	0	12	11	28	24	477
合計	223 (35.6%)	46 (7.3%)	245 (39.1%)	10 (1.6%)	12 (1.9%)	13 (2.1%)	44 (7.0%)	34 (5.4%)	627 (100%)



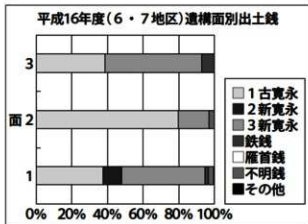
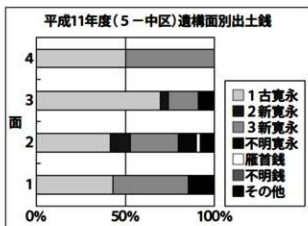
第137図 出土銭組成

銭貨の出土数が突出することが明らかになっており³⁾、これは建物の性格や居住者の階層・職種を反映するものと考えられる。しかし、中の惣門通りの北に位置する4地区に対して、南に位置する5-北区では銭の出土数はやや少ない。5-北区に隣接する5-中区と、さらに南側に位置する6・7地区においても同様に銭の出土数は少ない傾向にある。このことから、中の惣門の南側と北側では建物や居住者の性格が異なっていた可能性も考えられる。また、6地区の南側や7地区は町屋群の南端にあたり、1面あるいは2面でも新しい段階になるまで居住区域として整備されなかったことが、出土銭の分布に影響している。

各調査区における出土銭の組成を遺構面別に示したものが第138図である。5-中区では最下層である4面の段階から1期古寛永と3期新寛永の割合が拮抗し、6・7地区では3面の段階で3期新寛永が1期古寛永を上回る。しかし、出土した銭の絶対量が少ないことから、当該期の流通の実態を明確に反映するものとは言い難い。また両区画とも、その後の組成の推移に何らかの傾向を見出すことはできない。

その他の銭貨は5-中区、6・7地区で合計34枚出土しており、その多くは渡来銭である。しかし、これらのなかには文字が不明瞭であるなど粗悪なものも含まれており、模倣銭の可能性が高い。

豆板銀は、5-中区の1～2面の検出時に2点が出土している。組成分析の結果、銀の含有量は1059が82%、1060が20%であった。このことから、1059は慶長豆板銀あるいは正徳・享保豆板銀、1060は宝永四ッ宝豆板銀の可能性が高い³⁾。8年間の調査で出土した豆板銀の総計は32点となる。貨幣的価値の高い豆板銀が、1つの遺跡からこれほど大量に出土することは稀である。これは居住者たちの経済力の高さを反映するとともに、火災等の理由により他の遺物とともに一括して放棄されたことを示唆するものとも考えられる。

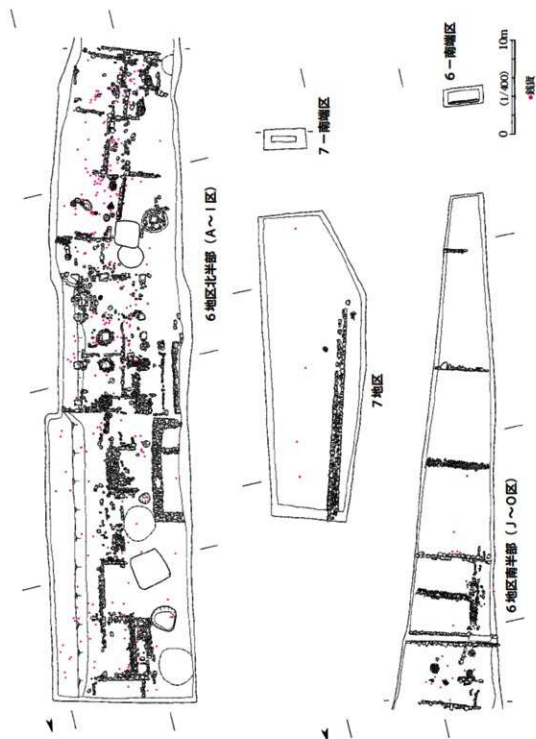


第138図 各年度遺構面別出土銭組成

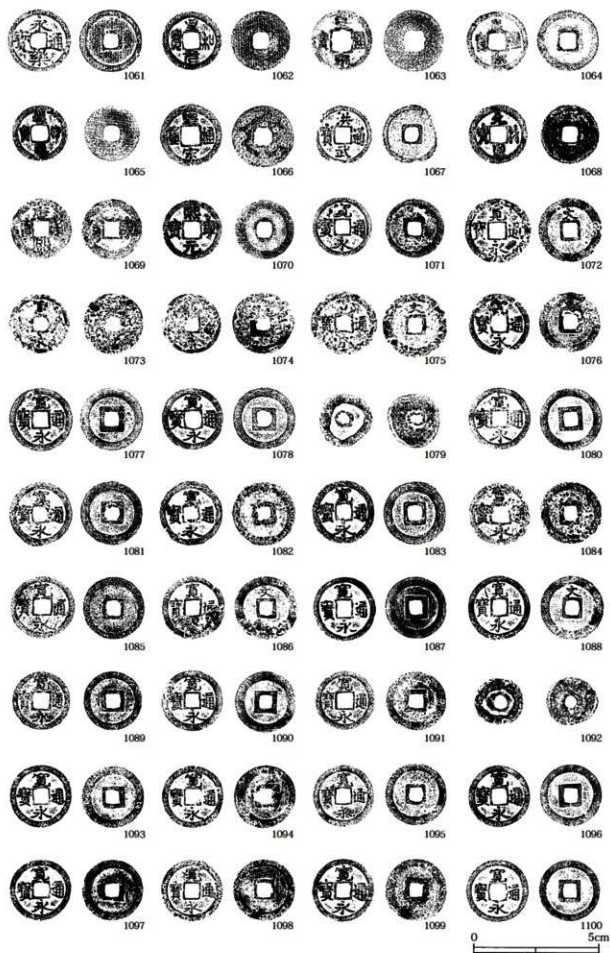


第139図 5-中区豆板銀(1/2)

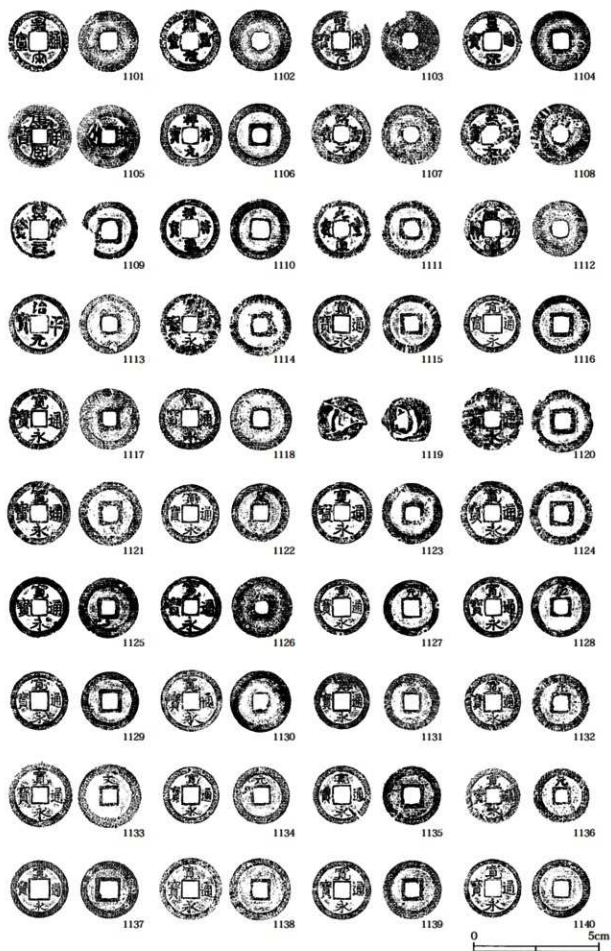
注 1) 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』 2002
 2) 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』 2004
 3) 谷口哲一 『萩城跡（外堀地区）出土の豆板銀』 『陶璣』 第13号 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 2000



第140図 6・7地区出土銭の分布



第141图 5—中区出土钱(2/3)

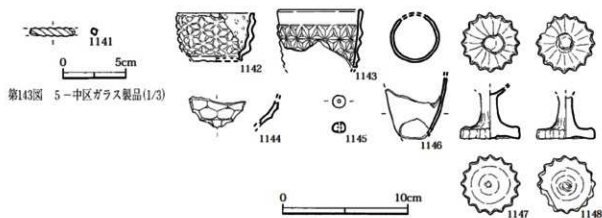


第142图 6·7地区出土钱(2/3)

(6) 5-中、6・7地区ガラス製品 (第143・144 図版92)

8点のガラス製品が出土し、分析の結果、全てがカリウム鉛珪酸塩ガラスと判明した。(付編4 参照)

1141は5地区の遺構検出で出土したものである。管あるいは筆巻に使用されたと思われる。透明で、表面は捻られて螺旋状になっている。成分は酸化ケイ素が55.2%、酸化鉛が38.9%である。1142は小坏か。6枚の菱形の花弁で花に模した文様が、型吹きで表面に装飾されている。表面は銀化している。成分は酸化ケイ素が48.7%、酸化鉛が38.3%である。1143は小坏。口縁端部の周囲がカットされ、口縁部には装飾は無い。体部には麻の葉の文様がカットされた装飾が施してある。成分は酸化ケイ素が45.4%、酸化鉛が42.7%である。いわゆる「萩ガラス」の可能性が高い。1144は小坏片。表面の亀甲文を崩したような文様を、グラインダーによって削っている。表面は銀化している。成分は酸化ケイ素が47.7%、酸化鉛が40.1%である。1145は径が1cmで青色の緒締である。中央に径が0.25cmの穿孔がある。1146は脚付杯の碗部で表面が銀化している。成分は酸化ケイ素が43.4%、酸化鉛が47.7%である。1147・1148は脚付杯の脚部。いずれも型流し成型で、表面は銀化している。底面にはポンテ痕が残る。1148の底面の縁には砥石による研削痕がある。成分は、1147が酸化ケイ素50.1%、酸化鉛44.5%、1148が酸化ケイ素43.4%、酸化鉛46.8%である。



第143図 5-中地区ガラス製品(1/3)

第144図 6地区ガラス製品(1/3)

表22 ガラス製品一覧

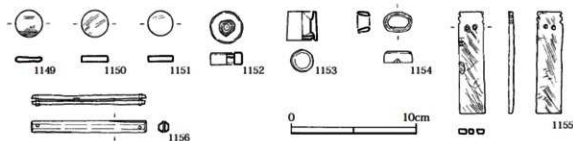
単位: cm (): 復元値 * : 残存値

遺物番号	母図番号	図版番号	地区	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考
1141	143	92	5地区	遺構検出	ガラス製品	管(筆巻)か	*3.55	径0.7		破片 カリウム鉛珪酸塩ガラス
1142	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	小坏か	口径(6.1)	器高*3.8	0.4	型吹き 表面銀化 カリウム鉛珪酸塩ガラス
1143	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	小坏	口径(6.8)	器高*5.6	0.4	カットガラス(亀甲) カリウム鉛珪酸塩ガラス
1144	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	小坏			0.4	カットガラス(切り) 表面銀化 カリウム鉛珪酸塩ガラス
1145	144	92	6-I	遺構西確認トレンチ	ガラス製品	緒締	高0.85	径1.0	孔径0.25	カリウム鉛珪酸塩ガラス
1146	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	脚付杯碗部		器高*4.8	0.2	表面銀化 カリウム鉛珪酸塩ガラス
1147	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	脚付杯脚部	高*4.0	底径1.6		脚部は型流し成型 ポンテ痕有り 表面銀化 カリウム鉛珪酸塩ガラス
1148	144	92	6-E	SB189直上整地層	ガラス製品	脚付杯脚部	高*3.5	底径1.6		1147と同型 脚部は型流し成型 ポンテ痕有り ガラス鉛珪酸塩ガラス

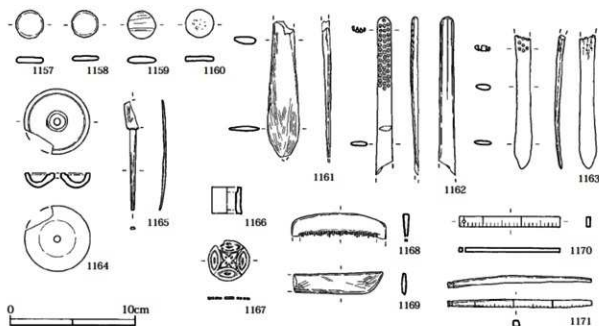
(7) 5-中、6・7地区骨角・貝製品 (第145・146図 図版92)

1149は貝製の白い碁石。径が約2cmで、表面には貝の筋が見られる。1150・1151は骨角製で双六の駒か。表面に擦過痕があり、1150の両面の縁は削られている。1152は骨角製で円形の双六の駒。両面の外枠の内側を蓋で塞ぐが、底の蓋は欠落している。蓋には点の周りに円刻がある。外枠の縁は削られている。1153は鹿角製で器種不明。円筒の上下を円盤で塞ぐ形状になっている。円筒の縁には切痕、表面にはミガキの痕が残る。1154は骨角製で器種不明。楕円形の筒状になっている。1155は骨角製の拍板か。端に穿孔と抉りがある。表面には擦過痕が見られる。1156は骨角製品で器種不明。断面が台形になっている棒状のものを二つ合わせ、一方の中央付近は方形に抉っている。

1157～1159は貝製の白い碁石。1159はSB189直上整地層から出土し、表面には貝の筋が見られる。1160は骨角製の双六の駒。表面には点の周りに円刻がある。1161は櫛刷毛の柄で、先端部になるにつれて薄く幅広がっている。表面には擦過痕が見られる。形態から18世紀以降。1162も櫛刷毛で柄が欠損している。表面には3列にはは規則正しく並んだ穿孔があり、裏面には3条の切り込みが入っている。1163も櫛刷毛で、先端部はわずかに幅広がっている。欠損付近には1162と同じように穿孔と切り込みがある。1164は象牙製の鏡頭根付。中央に穿孔があり、周囲は丸く窪んでいる。1165は木器包含層から出土。骨角製で櫛の一部か。平たく、先端に向けて徐々に細く尖っている。柄と思われる



第145図 5-中区骨角・貝製品(1/3)



第146図 6・7地区骨角・貝製品(1/3)

表23 骨角・貝製品一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	博覧会番号	図版番号	地区	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考
1149	145	92	5-B	瀬砂直上(右列3以西)	貝製品	碇石		径2.06	0.3	白
1150	145	92	5-B	2-3溝(右列83以西)	骨角製品	双六の駒		径2.1	0.4	
1151	145	92	5-B	2-3溝(右列63以西)	骨角製品	双六の駒		径2.0	0.4	
1152	145	92	5-A	2-3溝(右列82以西,右列94以北)	骨角製品	双六の駒		径2.5	0.96	上部に線刻有り
1153	145	92	5-B	3溝(右列63以西)	骨角製品	不明	高さ2.3	外径2.4	内径1.3	両面状の上下を日盤でよぎて取状
1154	145	92	5-G	1-2溝遺構検出	骨角製品	不明	長径2.25	短径1.6	高さ0.85	
1155	145	92	5-B	3溝(右列83-右列84)	骨角製品	碇石か	8.0	1.95	0.3	
1156	145	92	5-B	1高塚遺構検出	骨角製品	不明	9.0	0.95	0.85	
1157	146	92	6-C	1高塚出土(右列18以西)	貝製品	碇石		径2.2	0.47	白
1158	146	92	6-B	1高塚(右列13以西)	貝製品	碇石		径2.06	0.33	白
1159	146	92	6-E	SB189直上整地層	貝製品	碇石		径2.2	0.5	白
1160	146	92	6-D	1高塚出土(右列18以西)	骨角製品	双六の駒		径2.2	0.41	線刻有り
1161	146	92	6-D	SK121	骨角製品	櫛切毛	*10.7	2.4	0.58	柄のみ
1162	146	92	6-C	2-3溝(右列18以西)	骨角製品	櫛切毛	*12.5	*1.25	4.5	穿孔有り
1163	146	92	6-F	2高塚出土(右列32以东)	骨角製品	櫛切毛	*1.55	1.0-1.3	0.2-0.4	
1164	146	92	6-I	3高塚出土	象牙製品	根付	高1.15	径5.15 (径4.6)	0.3	段高根付下部
1165	146	92	6-K	本塚宮倉居	骨角製品	不明	*8.7	*1.4	0.2	櫛の 部か
1166	146	92	6-E	SB189直上整地層	骨角製品	不明	高さ2.1	外径2.3	0.3	
1167	146	92	6-E	SB189直上整地層	骨角製品	飾り部品		径3.25	0.1	段高根付上部の飾り部か
1168	146	92	6-E	SB189直上整地層	骨角製品	櫛	7.4	*2.0	0.4	
1169	146	92	6-E	SB189直上整地層	骨角製品	箸作り道具	*7.0	1.65	0.28	『榊なり』
1170	146	92	7	本塚宮倉居	骨角製品	折尺	*7.9	0.8	0.3	1号尺(1寸寸,9.69cm) 10号尺
1171	146	92	6-B-C	大トレンチ	骨角製品	物差	11.35	0.6	0.6	上部に挟り込み有り

部分には擦過痕がある。1166～1169はSB189直上整地層から出土。1166は骨角製で根付か。円筒の上下を円盤で塞ぐものと思われる。底部の縁は削られている。1167は骨角製の飾り部品。七宝文の中に花弁状の文様がある。1168は骨角製の櫛。1169は骨角製の箸作り道具。ヘラ状になっており、縁にはケズリの痕がある。1171は骨角製の物差か。断面は方形で端部に挟り込みがあり、表面には長さを表す線刻がある。日盤は1分刻みで3寸を測る。1170は骨角製の折尺。先端部に穿孔があり、表面に長さを表す線刻がある。日盤は1分刻みで2.5寸を測る。

(8) 6地区自然遺物 (図版93)

1172は胎衣5、1173～1179はSK166、1180・1181はSK151から出土した。1172・1173はクロアワビ、1174～1177はサザエ、1178はベンケイガイ、1179・1180はハマグリ、1181はマシジミである。日本海および橋本川・松本川がすぐ近くにあるという地理的環境から、貝が日常食べられていたと考えることができる。なお、貝類の同定は、萩博物館の堀成丈氏にお願いした。アワビには数種類あるが、出土したものは大小にかかわらず全てクロアワビであった。クロアワビはアワビの中でも最も珍重され、おいしくとされている。いずれにしても、選別して取り出して食べていることから当時の食生活の一端がうかがえる。1172は胎衣5の共伴遺物として出土している。アワビは殻の内面が妖しく光ることから、昔から各地で魔除けに使われており、ここでは生まれてきた子供を病魔や災いから守るといふ願いがこめられているのではないかと考えられる。

貝類以外にも様々な動物の骨が検出され、沖田絵麻氏(上井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)に同定していただいた。カワウソウの脛骨と尺骨が出土しており、付近に生息していたと考えることができる。大型の鯨の骨が出土しているのは、山口県の日本海側では江戸時代には捕鯨が盛んであったからとも考えられよう。

参考文献

- 1) 矢野憲・『ものと人間の文化史62 縄、法政大学出版局 2001

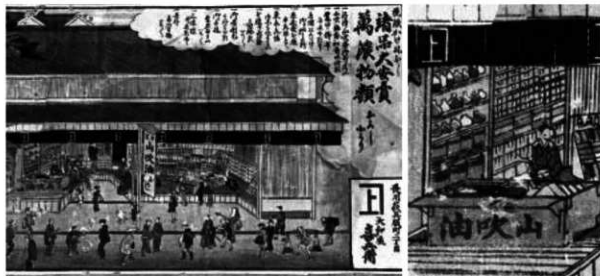
(9) まとめ

出土遺物は、遺物収納コンテナに約500箱、点数にして十数万点を数える。肥前産陶磁器と萩・須佐唐津・小畑などの在産陶磁器を中心に、京都・信楽産陶器、美濃・瀬戸産陶磁器、備前産陶器、上野・高取産陶器、源内焼や珉平焼、丹波焼などその他の産地も含めた国産陶磁器をはじめ、タイや中国からの輸入陶磁器などである。また、焼塩壺や焙烙、灯明皿、煙堿などの土師質土器製品、瓦やコンロ、十能などの瓦質製品、土人形などの土製品、足付ハマヤトチン、熟餅などの窯道具、赤間硯に代表される硯や京都鳴滝産合砥などといった石製品、煙管、毛抜き、刀装具、火熨斗、包丁、火打金といった金属製品、銅銭などの銭貨、漆椀や下駄といった木製品、櫛や櫛刷毛など骨角製品、緒締やカップなどガラス製品である。これら出土遺物の内、他産地からの搬入品は、萩城下町への物流を示し、萩焼をはじめとする在産地の遺物は近世における防長の産業を知る上で良好な資料となるだろう。特に萩焼については生産地である松本・深川の窯跡調査がなされており¹¹、当時の最大消費地である本遺跡の出土遺物と照合することによって、より詳細な知見が得られるものと期待される。

また、今回の出土遺物に弥生時代中期の垂下口縁の壺をはじめ、古墳時代の土師器や須恵器片、古代の土師器碗、中世期の中国青磁碗などの出土（第74図 第117図）があることが注目される。萩デルタの沿岸部砂堆上では弥生時代から営々と人々の生活があったことを窺わせる資料となったと同時に、萩デルタ内における今後の発掘調査に示唆を与えるものとなった。

前述の通り、出土遺物の中心は肥前産の陶磁器と萩焼をはじめとする在産の陶器が多数を占める。中心時期は17世紀末から18世紀後半にあたる。18世紀後半からは他の消費地同様瀬戸・美濃産の陶磁器が増加する傾向があるが、地元の萩、須佐唐津産陶器の占める割合を大きく交代させるには至っていない。また、肥前産陶磁器の内、甕、播鉢といった特殊な器形を除けば陶器の割合は低く、圧倒的に磁器の割合が高い。これは藩がいわゆる「地産地消」奨励策を実施したことを裏付ける結果を示していると思われる。¹²その他注目すべき遺物は多いが、それらをすべて網羅することはできないので、特徴的な遺物を取り上げてまとめとしたい。

近世遺跡に特徴的な出土遺物として「焼塩壺（花焼塩壺も含む）」がある。製品容器であるために



(部分拡大図)

第147図 上利家引き礼（個人蔵、萩博物館保管）

生産から廃棄までのサイクルが陶磁器と比較して短いと考えられ、遺構の時期決定の指標によく使われる遺物である。今回の調査区における焼塩壺の出上には、いくつかの特色が見られた。

5—中区においては花焼塩壺を含む焼塩壺の蓋、身合わせて72個体(刻印のあるものは破片も含む)出上した。この数は今までの調査区からの出上量に比べて少ない。また、A、B区の石垣1・29周辺に集中し、C区以南からの出上は極端に少なくなる傾向をみす。また、無銘の小型の壺を除き刻印の入る身はC区以南出土の「堺湊伊織」銘2個体の他はすべて「御塩壺堺湊伊織」銘のものに限られる。この銘のものは17世紀末から18世紀初めにかけて現れることからこの区画の時期決定との蓋然性も高い。またこの区画の石垣は「井筒屋市郎兵衛」名の入る木筒の出土地点でもあり、18世紀初めまでは少なくとも萩における「壺塩」の使用は富裕層に限られたといえるのではないだろうか。また、数は少ないが「深草砂川権兵衛」銘の花焼塩壺の蓋、「奈んぼん里う七度やきしを深草四郎左衛門」銘の蓋に対応する花焼塩壺の身の出上などもあり、萩と京都、大坂との商業の結びつきを考える上で興味深い。6地区においては、さらに出上量が減る。その中で6地区木器包含層出土の「堺本湊城古右衛門」銘の焼塩壺の身は他地域の近世遺跡においては出上例が少ないものである。本遺跡では、調査区最大の上坑である1地区SK293での出上以来である。18世紀中頃に比定される。このように焼塩壺だけ取り上げてみても萩と上方の特定の商業ルートの存在が見えてくる。

一方6地区出土遺物から「萩ブランド」といえる商品の存在が明らかになった。すなわち「江戸屋」銘の入る陶器製油壺(第104図 No.620)、「山吹油」銘の磁器油壺片(第122図 No.860)、「萩瓦町竹屋惣吉製御産小町紅」銘の紅猪口(第122図 No.855、856)である。「江戸屋」は藩主の御成道泊い萩呉服町において餐付け油を主に扱う有力商人であった。³⁾「山吹油」は同じく呉服町において小間物を扱う「大和屋」の商品であった。第147図は明治期の「大和屋」の引き札であるが、拡大部分に「山吹油」、また、看板に「本家山吹油おろし」とあり、この容器が山吹油専用容器であることがわかる。(付編2に伝世品の実測図がある)⁴⁾「竹屋」も萩瓦町に実在した商人であることがわかってはいたが、何を扱っていたかまではわかっていなかった。⁵⁾この遺物から紅をはじめとする小間物であろうことが判明した。また、7地区木器包含層出土の黒丹木製品から「松坂屋」の存在が明らかになった。「松坂屋」は南片河、北片河を代表する有力商人で、一時期町内商人の筆頭にもなり、萩で数少ない長輪出入りを許されていた商人である。⁶⁾調査全体を通して文献上に出てくる商家の存在が考古学的に明らかにされた唯一の例となった。今後の調査が待たれるところである。

今後の課題として、18世紀後半以後の在地陶磁器の問題がある。萩にはいわゆる「萩焼」の他に須佐唐津焼、小畑陶器窯製品がある。また、「小畑焼」という磁器製品もある。文献からこれら産地は原料や人的交流もあったことがわかっており、肥前や瀬戸、低部などの他産地との交流もあった。⁷⁾このようなことが出土遺物の分類をより困難にしている。生産地調査や文献調査など一層の進展が望まれる。

注

1) 山口県教育委員会『萩焼古窯』1990

2) 7) 付編2を参照

3—6) 萩博物館副館長樋口尚樹氏ご教示による

IV 1～3地区出土遺物（遺構外出土遺物）

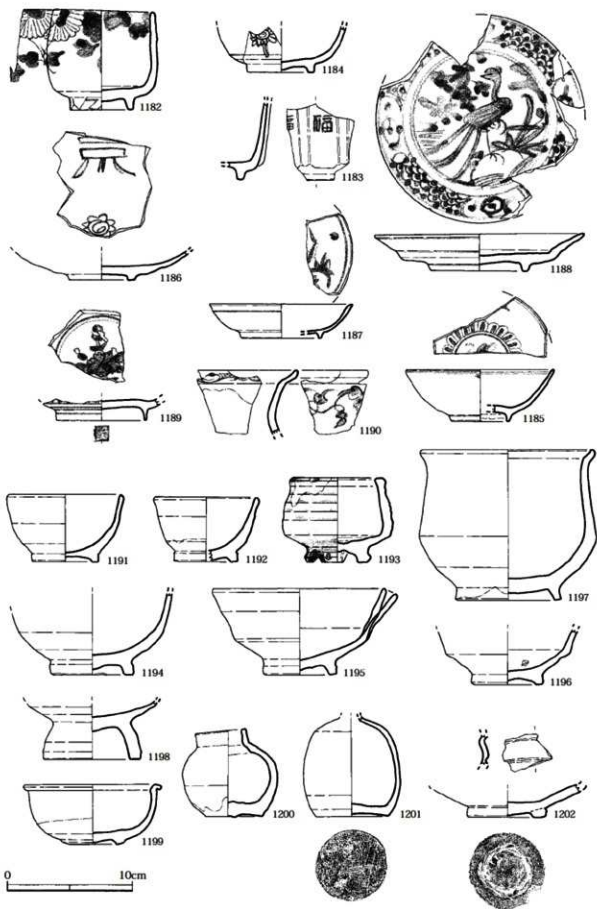
これらの地区の出土遺物については、すでに報告書Ⅰによって一部掲載をし、報告したところであるが、遺構外における出土遺物については紙面の都合上割愛せざるを得なかった。これら未報告の遺物のうち、焼土層からの出土遺物を中心に代表的な遺物について報告することにする。

(1) 陶磁器・土器・土製品

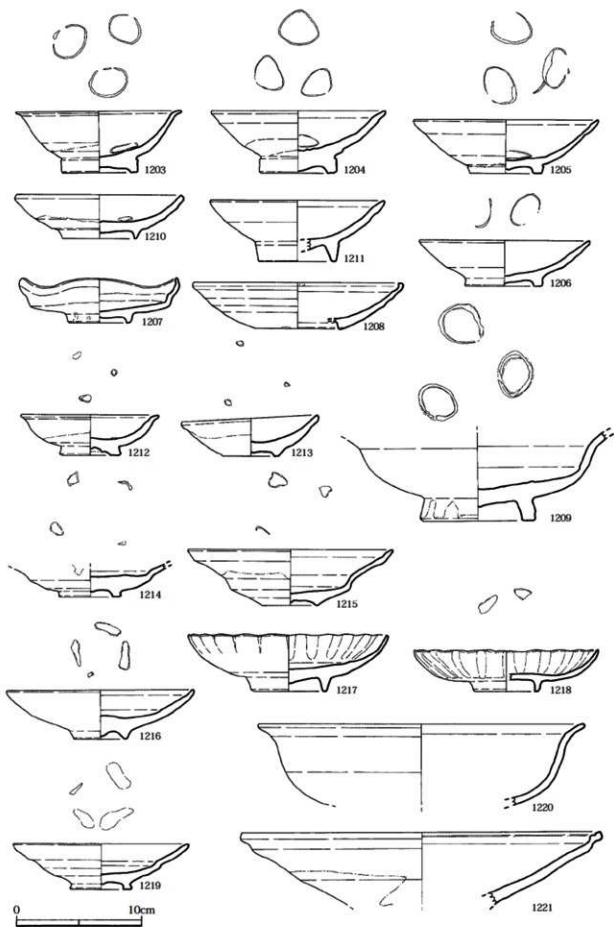
① 2地区（平成10年度調査）焼土層出土遺物

2-A～B区第2焼土層内・直下の出土遺物（第148～150図 図版94～96）

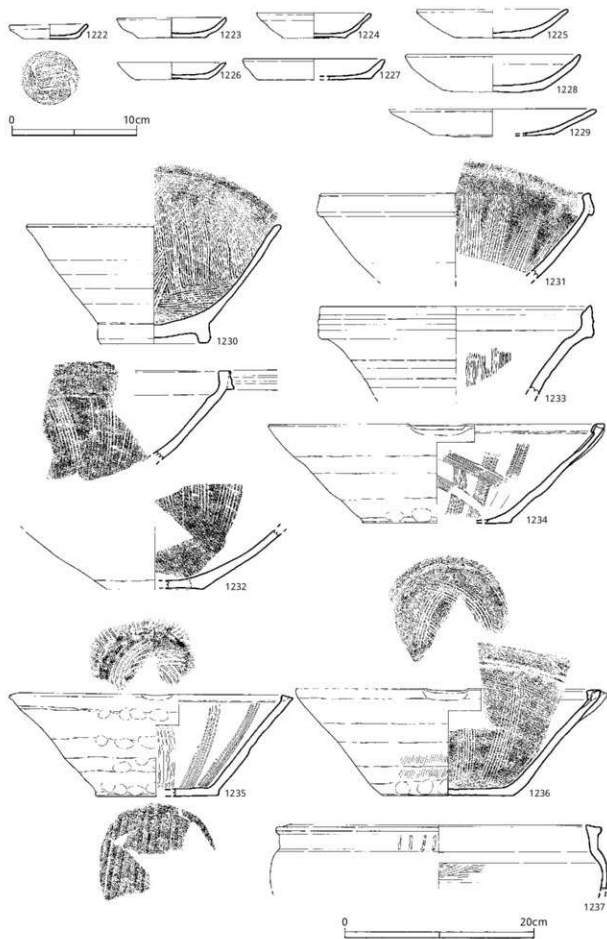
1182～1190は磁器である。1182は17世紀前半の肥前染付碗。菊文を施す。1183の中瓶は角状を呈し、各面に「福」の字を描いた染付福字篆文肩衝瓶。17世紀初頭の肥前の製品と思われる。1184は青花の碗で草花文を施す。内外面にスガが付着している。1185も青花の碗。見込みには菊弁文が描かれ、口縁内側に2条、外側面に1条の圈線をもつ。1186は肥前の染付の皿で1286と同型。草花文を描く。1187は景德鎮の皿。乗った虫の重みで草が緩やかにたわんでいる絵が描かれている。口縁部内外に1条の圈線。1188は青花の皿で、漳州窯系。中央に大きく鳳凰が描かれ、草文が周囲を囲む。1189は景德鎮の皿で花文が描かれている。高台に銘をもつが判読は難しい。高台内に放射状の削りが見える。1190は肥前の染付で香炉である。花唐草文が施されている。1191～1221は1218を除き陶器。1191、1192は萩土灰軸小碗で高台は無軸である。1192は糸切り痕を残す。1193、1195および1196は萩薬灰軸碗で、軸は総掛けである。1193は割高台、1195は一旦腰部が屈曲しかけるが続いて斜め上方に強い立ち上がりみせる。きれいな円周を描かず、やや歪みがある。畳付に貝目痕がある。1196も畳付に貝目痕があり、トキン状高台、見込みには胎土目痕がある。1194は萩白軸碗で軸は総掛けである。1197は萩の薬灰軸建水か。被熱などにより外側面下半は軸が泡立ち、さらには一部剝離している。内面にスガが付着している。1198は萩薬灰軸台付皿で全軸である。1199は肥前の鉄軸碗。トキン状高台、口縁に重ね焼き痕がある。1200は萩薬灰軸小壺。内面は渦巻き状でうろこ目がみえる。全体やや傾く。1201は備前の小壺で、底面に窯印「一」がみえる。内面には錆が付着している。1202は黒軸、透明釉の黒織部碗。底面に楔形の窯印あり。高台部は貼り付けである。1203は萩土灰軸皿で見込みに貝目痕が3か所ある。1204は萩薬灰軸皿で見込みは渦巻き状、貝目痕が3か所、高台はトキン状である。1205は萩土灰軸皿で貝目痕3か所、高台はトキン状である。1206の皿は、内外面にスガが付着し、貝目痕が3か所ある。被熱のため軸は不明である。1207は萩薬灰軸方形皿で、畳付に貝目痕がある。軸は全軸である。口縁部は上下に緩やかに波打つ。1208は萩薬灰軸皿で高台部は萁筒底で底部に貝目痕がある。1209は萩薬灰軸皿で見込み、畳付にそれぞれ3か所貝目痕がある。1210は萩・須佐の灰軸皿で、見込みに胎土目痕があり高台はトキン状である。1211は萩薬灰軸皿でトキン状高台をもつ。1212は灰軸の皿で見込み、畳付に胎土目痕がある。肥前か。高台内は渦巻き状に削られトキン状高台である。1213は肥前の灰軸皿で口縁にスガが付着しており、灯明皿と思われる。1214は肥前の灰軸皿で、見込みに胎土目痕、高台はトキン状である。1215は灰軸皿で見込みに胎土目痕がある。肥前か。1216は肥前灰軸皿で見込み、畳付に砂目痕があり、高台はトキン状である。1217はの長石釉型作り輪花皿で、内面に布目痕がある。1218は肥前白磁輪花皿で、見込み、畳付に砂目痕があり、型打成形による布目痕がある。1219は肥前の灰軸皿で、見込みに砂目痕。1220は薬灰軸の鉢で萩か。1221は折縁口縁の灰軸鉢。



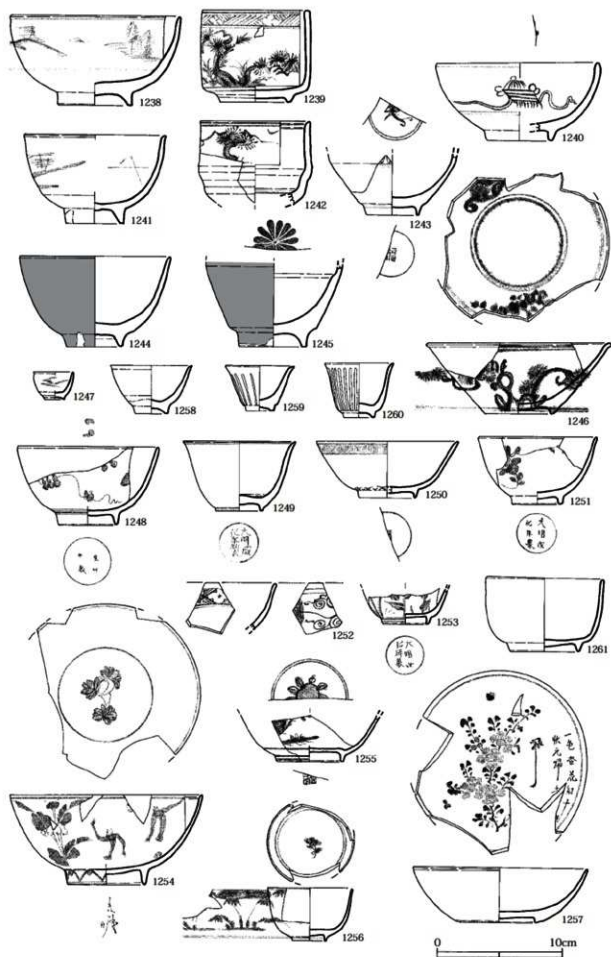
第148図 2-A～B区第2焼土層内・直下の出土遺物①(1/3)



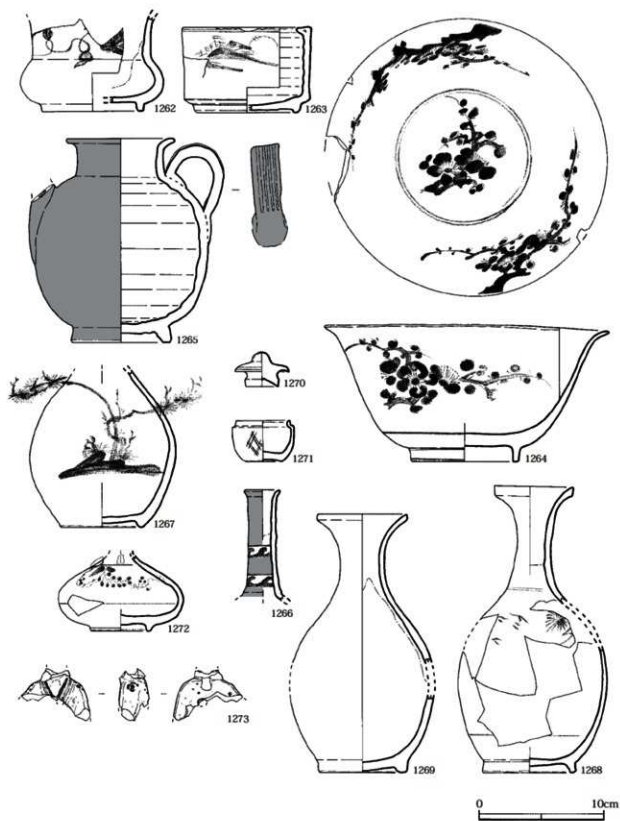
第149図 2-A～B区第2焼土層内・直下の出土遺物②(1/3)



第150図 2-A～B区第2焼土層内・直下の出土遺物③(1/3、1/4)



第151図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物①(1/3)

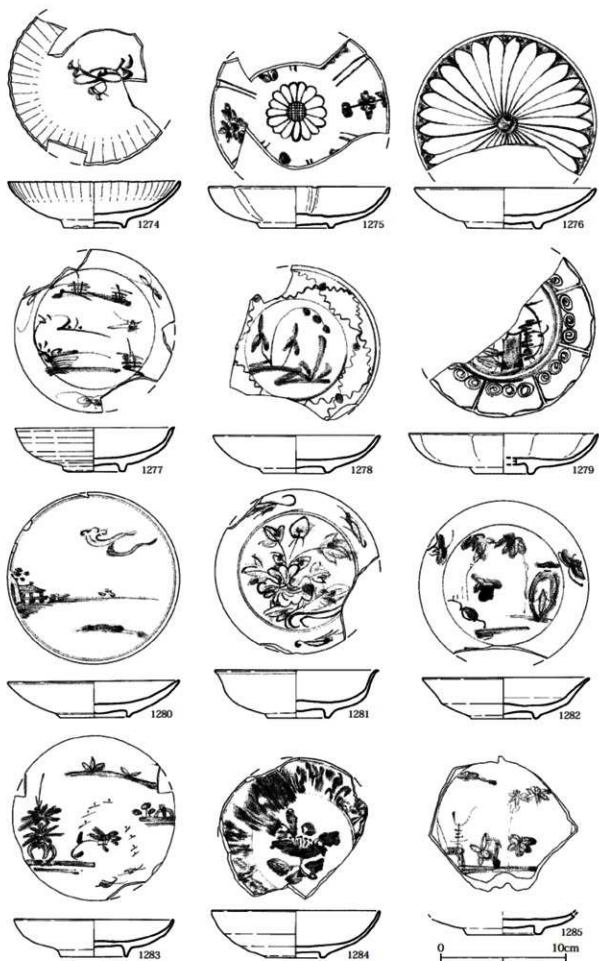


第152図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物②(1/3)

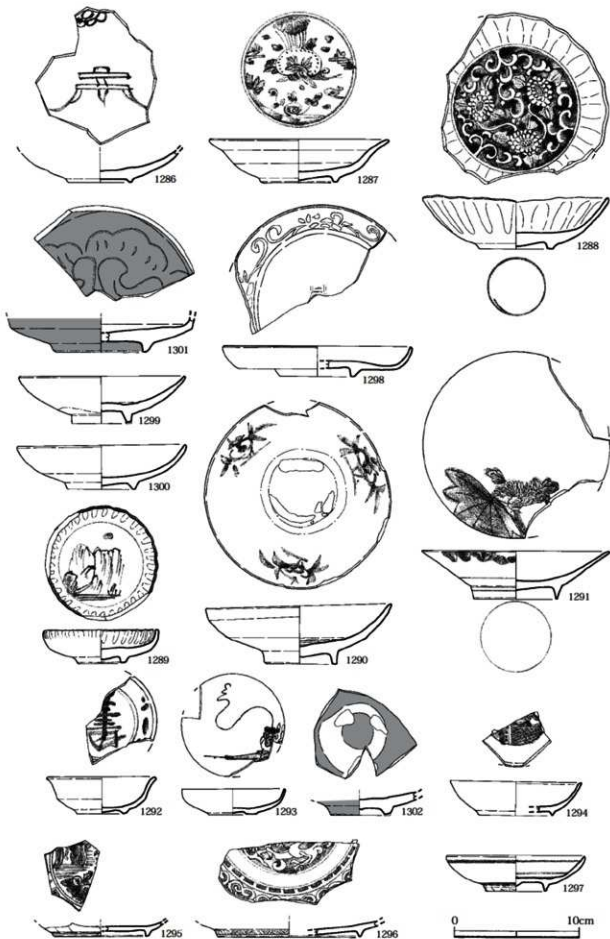
1222～1229は土師器の皿で1226を除き糸切痕が残る。1226は灯明皿。1230～1233は陶器の播鉢、1234～1236は瓦質の播鉢である。1231は須佐、1232は上野・高取、1233は備前、他は佐野とみられる。1237は瓦質の火鉢で、これも佐野の製品と思われる。

2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物（第151～163号 図版96～107）

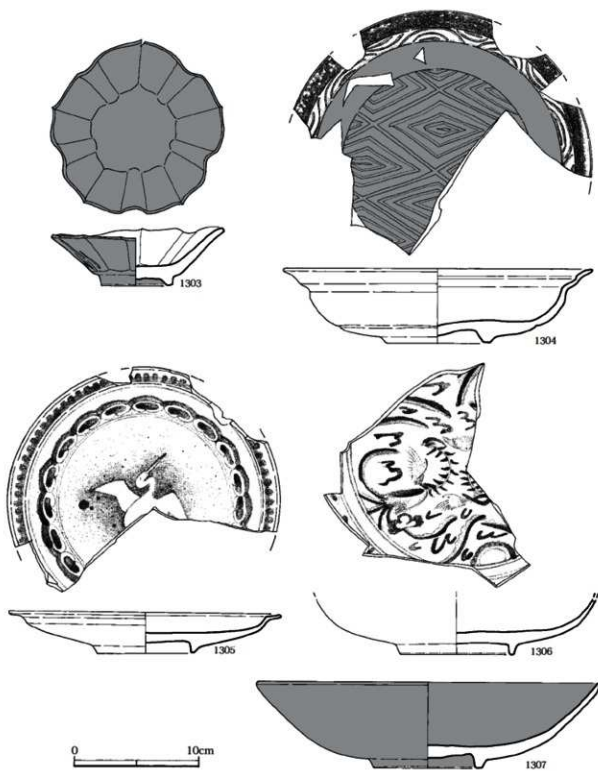
1238は肥前染付碗で、山水が描かれており1630～50年代の製品と思われる。1239の肥前碗は半筒形で松文が描かれている。1240は青花碗で17世紀中葉から後葉の製品であろう。1241～1243は肥前碗で1241は1640～50年代の製品、1242は松文が描かれている。1243は見込みの二重圏線内に文様、高台内に福の字がある。1244は高台内無釉の肥前青磁碗。1245は肥前青磁染付碗で見込みに菊花文、高台内無釉で1630～50年代の製品であろう。1246は青花碗で陶胎染付に近い。内外に松文があり、17世紀後葉から18世紀初頭の製品と思われる。1247は肥前染付ミニチュア碗で内面に鉄錆が付着している。1248～1250は染付碗で、1248は高台内に「宣明年製」銘があり17世紀末の製品。1249は「緑内外および高台外に二重の圏線をもち高台内に「大明成化年製」銘がある。17世紀中葉の製品であろう。1250は口縁外側面に雷文、高台脇に草文をもち、高台内には二重角内には銘があったものと思われる。1251～1255は青花碗である。1251は「大明成化年製」銘があり17世紀後葉の製品と思われる。1252は破片であるため全体像はつかみにくいが内面に四方摺文、外側面に唐草文をもち、17世紀初頭の製品と思われる。1253は「大明成化年製」銘があり17世紀初頭のものであろう。1254は見込みに花文、外側面に草文と唐子文を簡略化したような文様が2つ、高台外に幾何学文が施され高台内に「大明」銘がある。1255は見込みの花文を二重圏線が囲み、胴部に草木文、高台脇には一重圏線、高台外に二重圏線がある。高台内には銘が確認できるが、部分であるため判読は難しい。16世紀後葉のものと思われる。1256は17世紀初頭の青花小碗。見込みに花文、外側面には羽を上げて飛ぶ小鳥とその周りに草文がある。1257は17世紀後葉の青花碗。見込みの花の赤には釉裏紅を用い、その右には漢詩で「一色杏花紅点…ノ状元婦…」大きい字で「飛」と書かれている。1158は肥前白磁小坏。1159は17世紀中葉の白磁小坏で、体部に銘がある。1260は1630～40年代の肥前白磁小坏で、これも体部に銘がある。1261は肥前白磁碗。1262は外側面被熱の肥前染付香炉で、1190の底部と思われる。胴部に花卉草文が施されている。1263は胴部に山水文が描かれている肥前染付火入れ。高台内は蛇の目鉢割じした後に鉄化粧を施し、チャツ痕がみえる。口縁部に敲打痕がある。1264は梅花文が描かれている17世紀後葉の肥前染付鉢。生掛け焼成か。1265は注口部に漆継ぎ痕がある肥前青磁水注。1266～1269は肥前瓶。1266は青磁染付。胴部以下欠損のため、全体像をつかむことはできない。胴部付近とその上に二本の波文を回し、全体に緑灰色を呈する。1267は染付で首部が欠けている。胴部に松竹文を描き、1630～50年代の製品と思われる。1268は松竹文が描かれている染付。1269は白磁。1270は二重圏線をもつ肥前染付蓋。1271は格子状に線刻がある肥前白磁の合子。1272は肥前染付油壺。1273は人形をかたどり一部に金彩を施す肥前色絵水滴。1274～1293は肥前染付皿。1274はロク口型打成型で畳付に砂目痕がある。1275は見込みに陽刻の菊花文があり、ロク口型打成型で内面に布目が残る。1276は見込み全体に大きく菊花文を描く。1277は17世紀前半～中葉と思われる。1278は見込みに沢瀉文が描かれ、17世紀中葉～後葉と思われる。1279はロク口型打成型で1640年以降の製品と思われる。1280は山水文の中に家屋が描かれている。1281は大きく牡丹文を描く。1282は竹のようなものが描かれている。1283には乗った虫の重み



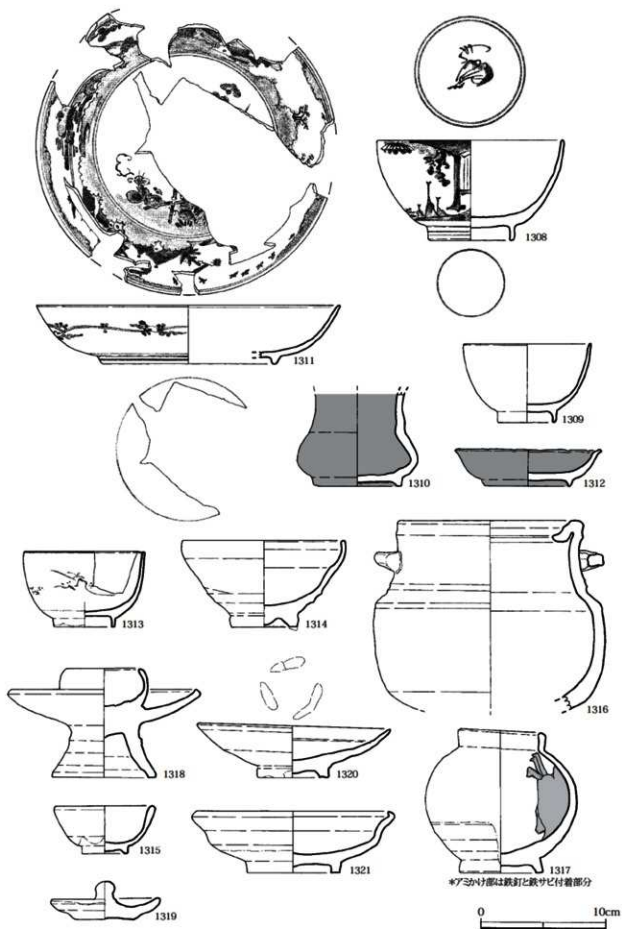
第153図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物③(1/3)



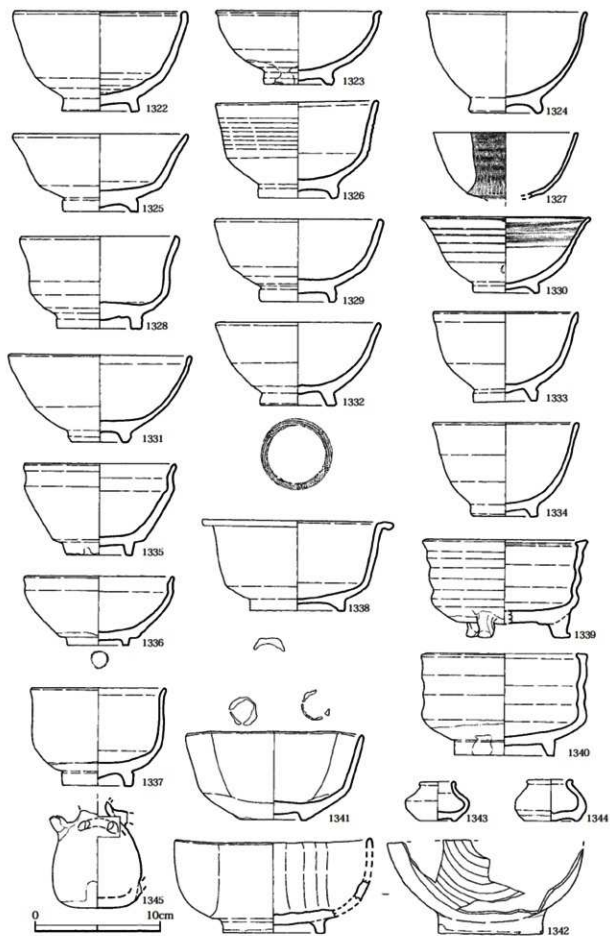
第154図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物④(1/3)



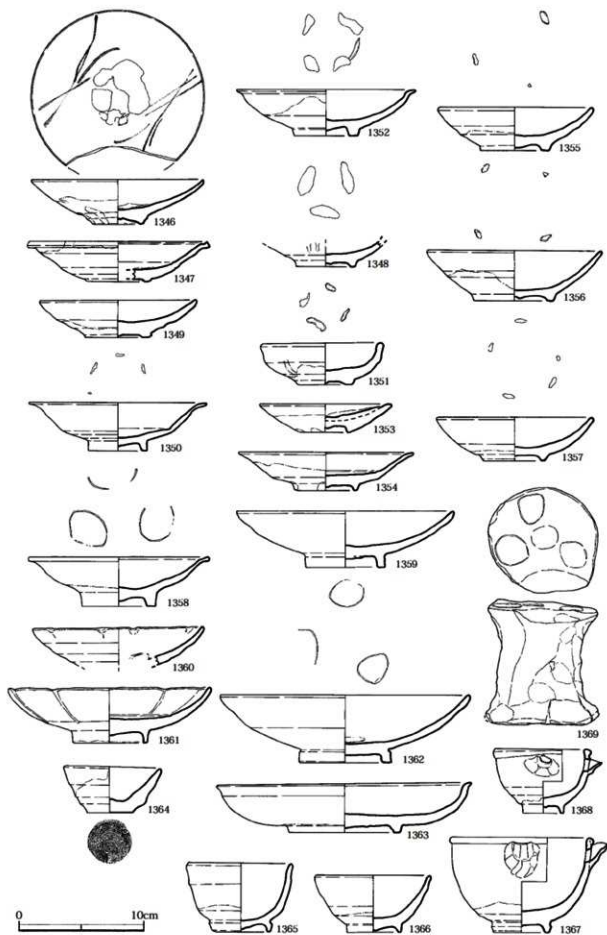
第155図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物⑤(1/3)



第156図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物⑥(1/3)

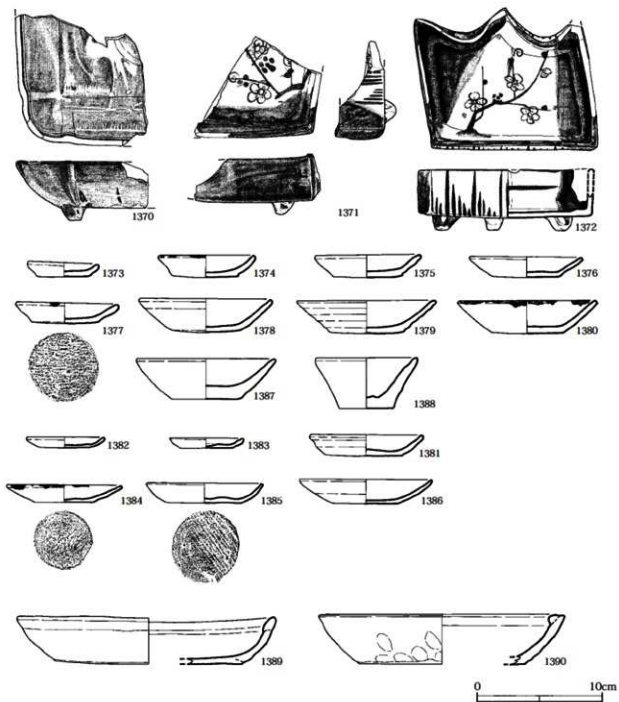


第157図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物⑦(1/3)

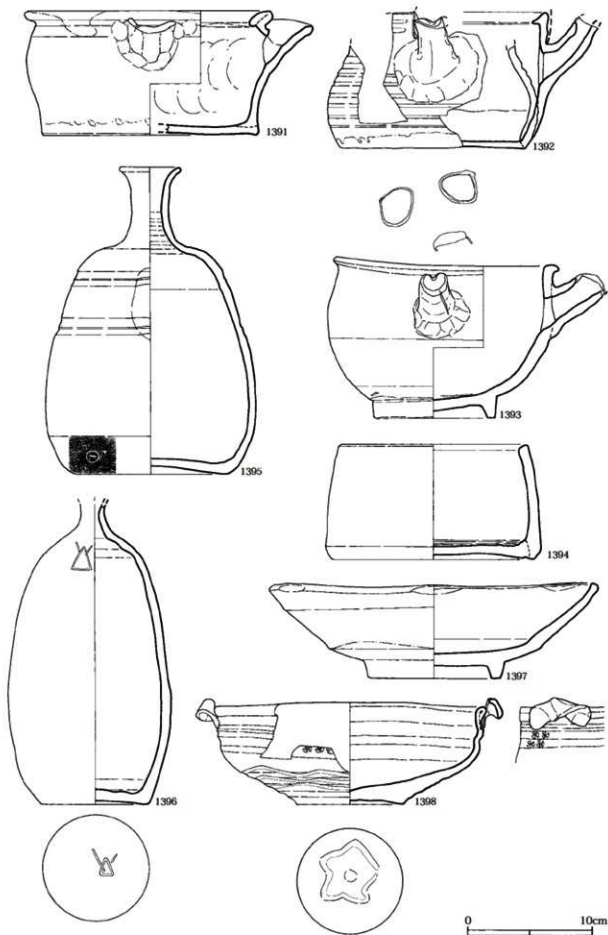


第158図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物⑧(1/3)

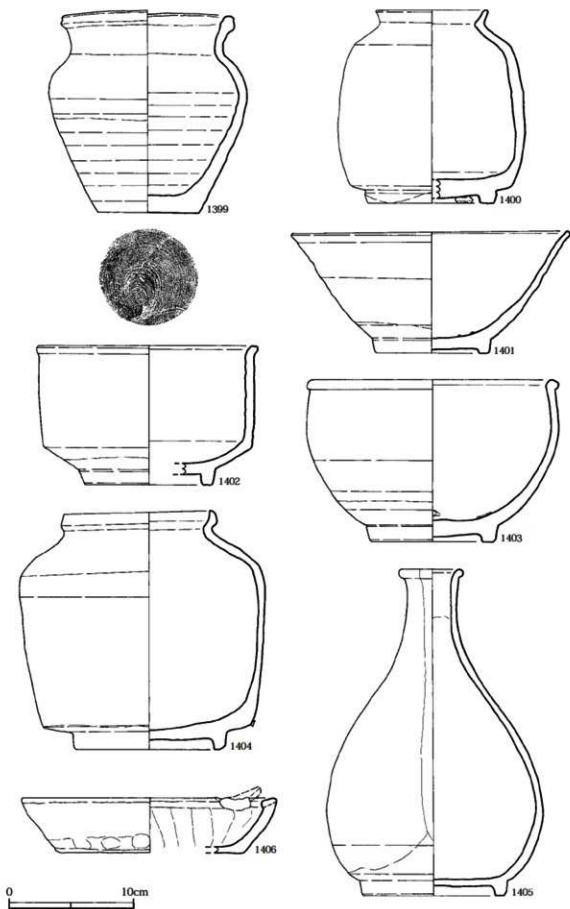
で草が緩やかにたわんでいる絵が描かれている。1284は中央に大きく花文を配している。1285は横向きの兔を描いている。1286は肥前の染付の皿で1186と同型。1287は二重圏線内に文様を描く。1288は窯ノ辻窯の1640～50年代の製品とみられ、菊苜草文が描かれる皿。ロク口型打成型である。1289はロク口型打成型の製品で柳文、口縁が施されている。1290は1610～30年代の製品とみられ、見込みに砂目痕があり、蛇の目軸割ぎである。1291は見込みの花文の一部が口縁の外側面にまではみ出して描かれている。1292は見込みの二重圏線内に大きく「壽」字が書かれている。1293は蔓文が描かれ、蛇の目高台である。1294～1296は見込みに文様をもつ青花皿である。1296は高台にも文様が描かれている。1297は見込み蛇の目軸割ぎで内外ともに二重圏線が描かれている。1298は陽刻、口縁をもつ肥前白磁皿である。1299は見込みが蛇の目軸割ぎの皿で青白磁か。1300は肥前の白磁皿。1301～1304は肥前青磁皿である。1301は見込みに陰刻をもつ。1302は見込みに砂目痕と蛇の目軸割ぎがある。1303はロク口型打成型で布目と線刻のある稜花皿である。1304は山辺田3号窯の1630～50年代の製品とみられ、口縁部一帯外側に鉄釉その内に黄釉を掛ける。1305は折縁口縁で吹墨鴛文の肥前染付皿である。口縁内側面に髹塗文を施す。1306は鳳凰文をもつ肥前染付皿、1307は肥前青磁皿である。1308は見込みに海老文を描いた肥前染付碗。1309は肥前白磁碗。1310は青磁の瓶で被熱している。仏花瓶か。1311は肥前染付大皿。口径はおよそ32cmに及ぶ。花の莖が垣根にからまる文様が描かれているが中央部分は多くが欠損しており、全体の構図は不明である。口縁内側面には鳥文や木が、外側面は唐草文が描かれている。高台から高台脇にかけて三重圏線が施されている。1312は肥前輪花青磁皿である。1313～1368は陶器である。1313は外側面に呉須絵を描き、口縁、底部に鉄化粧を施す肥前の透明釉碗。1314はトキン状高台の灰釉碗、1315、1316はいずれも萩葉灰釉の製品で1315は小碗、1316は水指。1317は鉄釉の壺。内面に鉄釘が付着し全面にわたり錆が残る。お歯黒壺に使用したものか。1318は萩葉灰釉の壺台。1319は灰釉の壺。1320は見込みに砂目痕、口縁にススが付着している肥前の灰釉皿。灯明皿に使用したのであろう。1321の十灰釉皿は萩か。1322は豊付に貝目痕のある萩葉灰釉碗。1323は萩・須佐の葉灰釉碗で豊付に胎土目痕がある。1324は肥前の1610～50年代の透明釉碗で豊付に砂目痕があり、トキン状高台である。1325は豊付に貝目痕のある萩葉灰釉碗。1326は萩の透明釉碗で豊付に貝目痕がある。1327は灰釉、白化粧を施す三島手碗。1328は豊付に貝目痕のある萩の十灰釉碗。1329は透明釉と白化粧を施す萩の碗。1330も透明釉と白化粧を施す萩の碗で、刷毛目が描かれている。豊付に砂目痕がありトキン状高台である。1331は萩の透明釉碗。松本窯の製品で、豊付に貝目痕があり、竹節高台である。1332は葉灰釉碗。トキン状高台で底部に糸切り痕がある。萩の深川窯の製品か。1333、1334はいずれもトキン状高台の萩十灰釉碗。1335の鉄釉の天日碗は肥前か。1336の高台内に「○」の墨書がある鉄釉の天日碗は萩か。1337の鉄釉の碗は萩か。1338は萩の鉄釉碗。1339の葉灰釉髹付香炉は萩・須佐の製品。1340の葉灰釉香炉は萩の製品。1341の唇形碗は唇底で見込みに輪状胎土目痕がある萩深川窯の製品。1342の葉灰釉割儀鉢は豊付に胎土目痕があり、貼付高台である。萩深川窯の製品か。1343の鉄釉の小壺は萩か。1344は灰釉の小壺。1345は手づくねの萩葉灰釉の水注あるいは水滴である。肩部に耳が付き。1346は1610～50年代の肥前灰釉皿。鉄絵が描かれ、見込み、豊付に砂目痕がある。1347は折縁口縁で見込み、豊付に砂目痕がある肥前灰釉皿。1348は見込み、豊付に砂目痕がある肥前透明釉皿。1349は肥前の灰釉皿。1350の見込み、豊付に胎土目痕がある灰釉皿は肥前か。



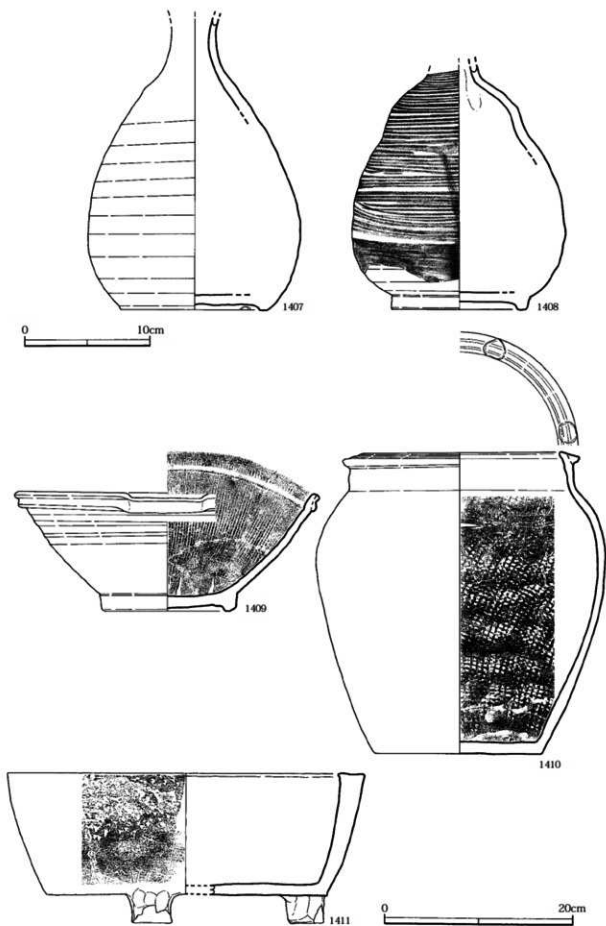
第159図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物⑨(1/3)



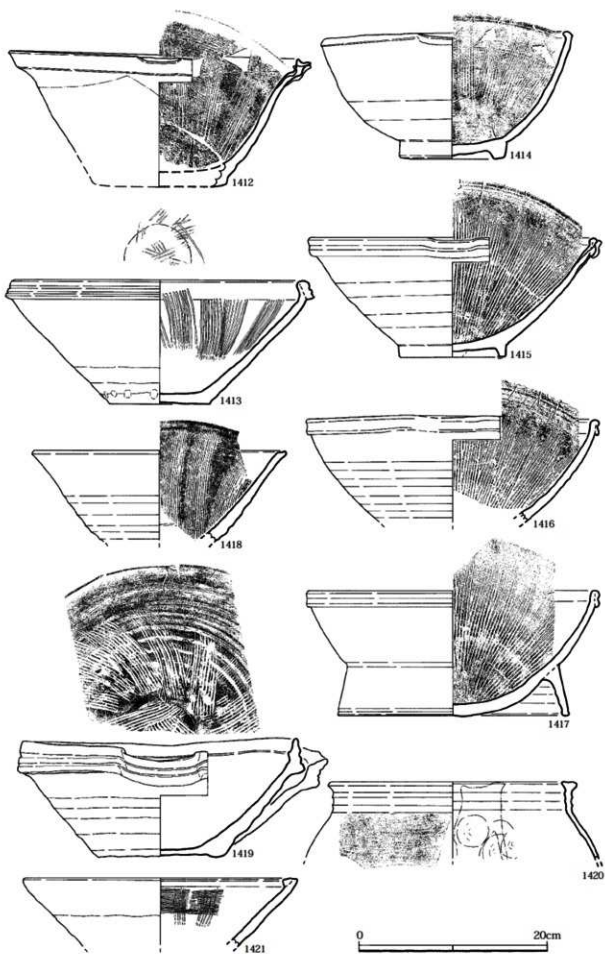
第160図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物①(1/3)



第161図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物①(1/3)

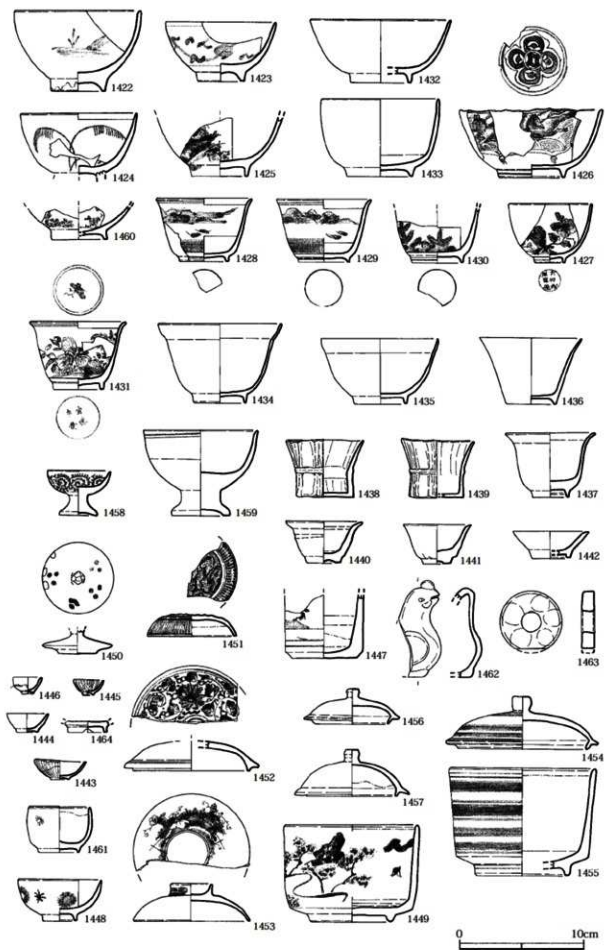


第162図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物②(1/3、1/4)

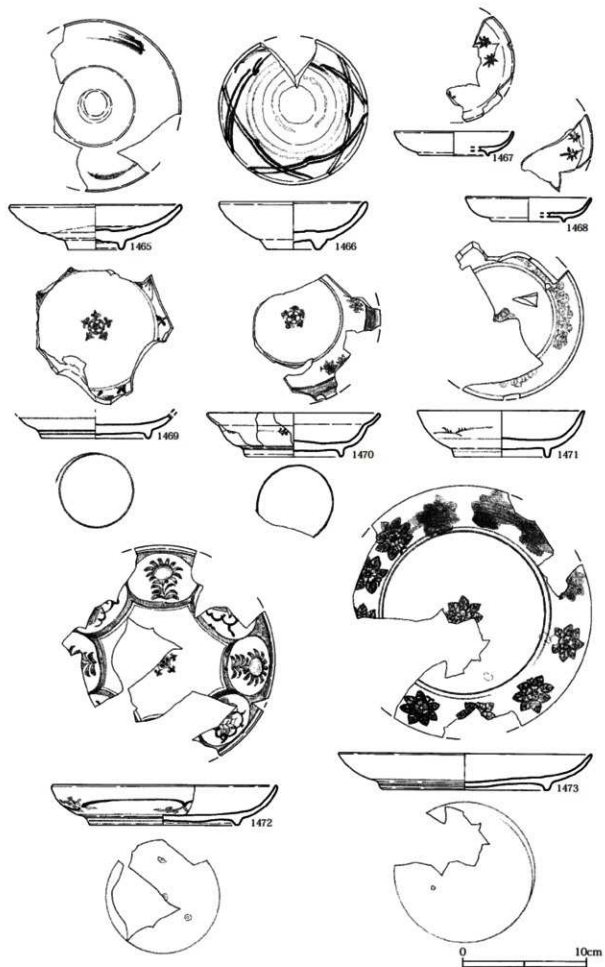


第163図 2-A～B区第1焼土層以下第2焼土層までの出土遺物③(1/4)

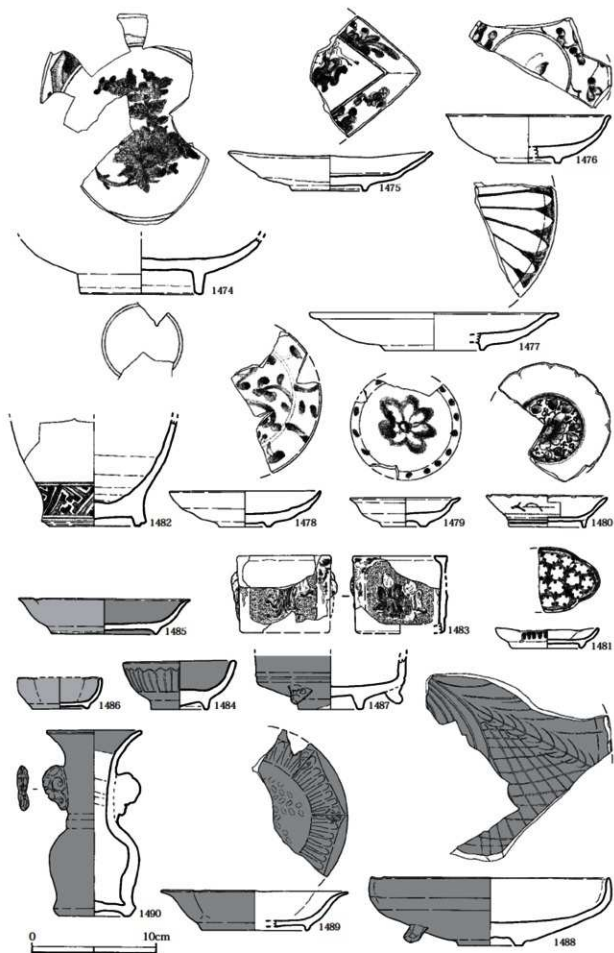
1351は見込み、壘付に砂目痕がある肥前の灰釉皿。1352の萩の土灰釉皿は見込み、壘付に砂目痕がある。1353の萩の皿は土灰釉、薬灰釉がかかり、萐苜底で底部に胎土目痕がある。1354の薬灰釉皿は壘付に胎土目痕がある。萩深川窯の初期の製品か。1355～1357は見込みに胎土目痕がある萩・須佐の上灰釉皿。1358の萩の土灰釉皿は見込みに貝目痕がある。1359の萩薬灰釉皿は壘付に貝目痕がある。1360は見込みに貝目のある土灰釉の輪花皿。1361の萩の透明釉輪花皿はクコロ型打成型。1362の萩薬灰釉皿は見込み、壘付に貝目痕がある。1363の薬灰釉皿は萩深川窯の製品か。1364は底部糸切りの肥前の灰釉小坏。1365はトキン状高台で胎上褐色系の薬灰釉小碗。1366はトキン状高台で内面にベンガラが付着する灰釉小碗。1367の鉄釉の片口は肥前か。1368の片口は小型。釉は鉄釉か。1369のトチンは貝目痕が3か所残る。1370は鉄釉、長石釉のかかる志野の駒付四方鉢である。鷺文を施し底部にはハリ痕が残る。1371と1372は同型で鉄釉、長石釉、緑釉を掛ける織部の元回敷窯の向付で17世紀初頭の製品と思われる。山形で梅樹文、木賊文が描かれ、平環足をもつ。1373～1387は上師器の皿である。1373は糸切り痕が残る。1374は板目痕が残り、ススの付着から灯明皿と思われる。1375もススの付着から灯明皿であろう。糸切り痕を残す。1376は板目痕がある。1377は板目痕があり、ススの付着から灯明皿であろう。糸切り痕を残す。1378は胎上白色系で糸切り痕がある。1379、1381は糸切り痕があり、ススが付着している。1380はススが付着しており、灯明皿であろう。1382は薄手で硬質、糸切り痕がある。1383は薄手で糸切り痕がある。1384も薄手で糸切り痕がある。胎上は白色系でススの付着から灯明皿であろう。1385は薄手で糸切り痕がある。1386は薄手で糸切り痕があり、硬質である。1387は糸切り痕がある。1388は糸切り痕のある上師器の坏か。1389の上師器は佐野の焙烙。板おこしてスス、炭化物が付着し、把手部欠損。1390の上師器も佐野の製品で、外側面にススが付着し把手部は残っていない。1391～1405は陶器である。1391は1590～1620年代の肥前の鉄釉片口。内面に同心円状の叩きみえる。1392は萩の薬灰釉水指で把手がある。底面に貝目痕が残る。1393は萩の薬灰釉片口で、内面と底部に貝目痕がある。1394は備前の鉢、1395は備前の鉄釉瓶で○の内に「一」の空印がある。1396も備前の瓶で三角形に二本の線が刺さるような空印がある。1397は萩の薬灰釉皿。1398は白化粧と透明釉がかかる萩の鉢で、底部に凹状に星印形の文様がある。1399は肥前の上灰釉、鉄釉壺。1400は高台に胎土目痕が残る須佐の土灰釉壺。1401～1403は須佐の土灰釉鉢。1404は須佐の土灰釉壺。1405は1650～90年代の肥前の鉄釉、緑釉の掛かる瓶。二彩で刷毛目がある。1406は土師器で佐野の焙烙で板おこし。1407～1410は陶器である。1407は萩の壘付に貝目痕のある薬灰釉瓶。1408は1650～90年代の肥前の透明釉、緑釉のかかる瓶。1409は須佐の鉄釉摺鉢。1410は格子目叩きのある肥前の甕。1411は土師器で外側面に楔形の刺突の痕がある駒付の火鉢。1412～1420は陶器。1412は肥前の鉄釉摺鉢。1413は上野・高取系の摺鉢。1414～1417は須佐の鉄釉摺鉢。1418の摺鉢は萩か。1419は備前の摺鉢。1420は内面に同心円状の叩きがある肥前の鉄釉甕。1421は佐野の瓦質の摺鉢。



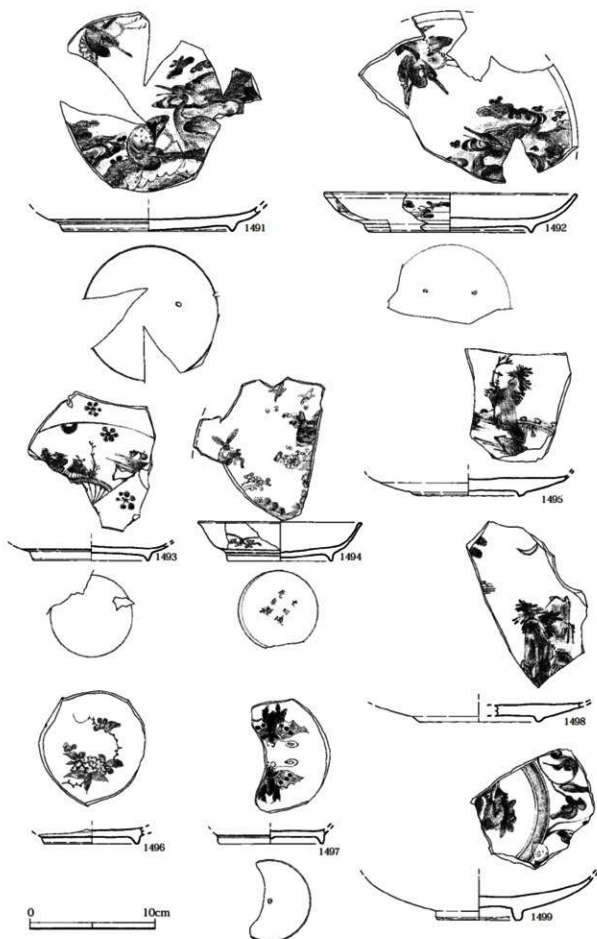
第164图 3地区烧土层出土遗物①(1/3)



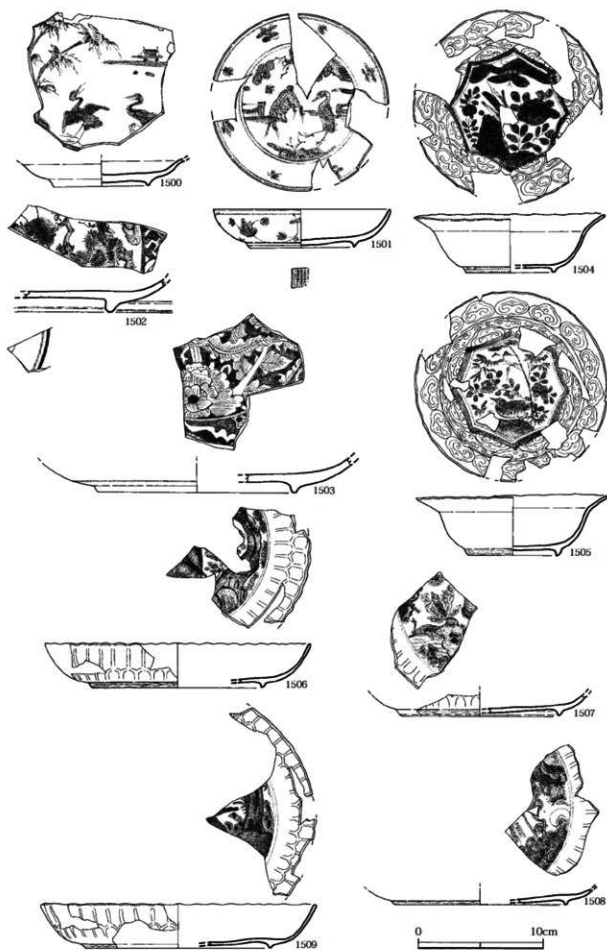
第165图 3地区烧土層出土遺物②(1/3)



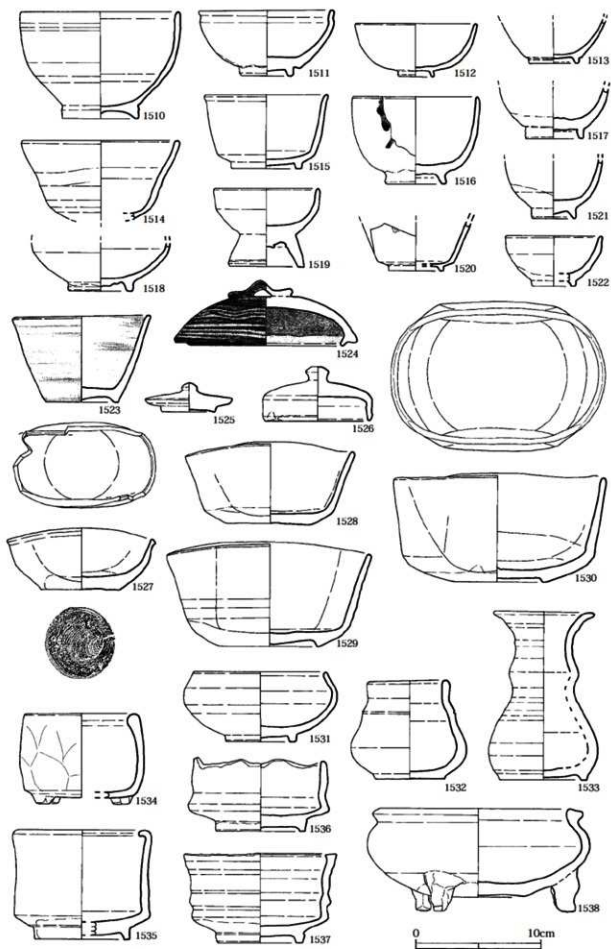
第166图 3地区烧土层出土遗物③(1/3)



第167图 3地区烧土层出土遗物④(1/3)



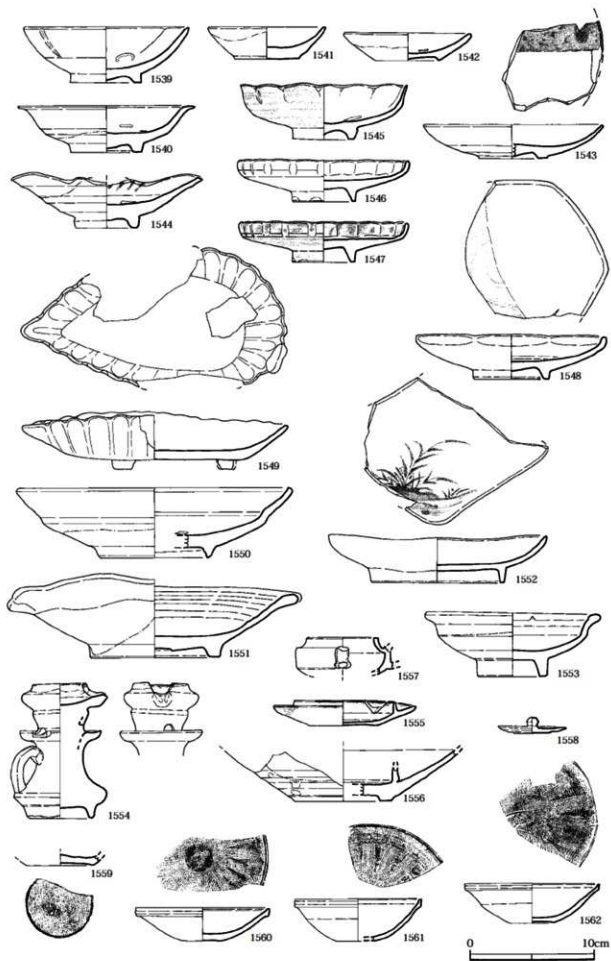
第168图 3地区烧土层出土遗物⑤(1/3)



第169图 3地区烧土层出土遗物⑥(1/3)

②3地区(平成12年度調査)焼土層出土遺物(第164~174図 図版107~116)

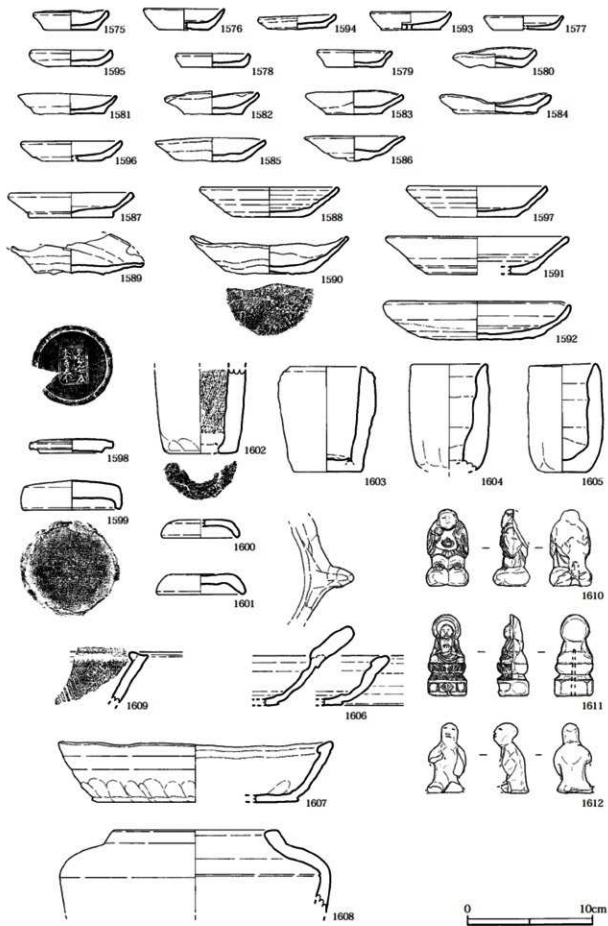
1422~1463は1426、1427を除き肥前の磁器。1422~1425は染付碗。1425は1453と一対か。1426は桜花で飛馬文のある青花の碗。組物のうちの1個体。1427は「大明成化年製」の銘がある17世紀初頭の青花の小碗。1428~1431は17世紀末頃の染付小坏。1428と1429は同型。1431は「宣徳年製」の銘がみえる。1432、1433は白磁碗でいずれも漆継ぎ痕がある。1434、1435は17世紀末頃の白磁碗で1435には口鏽がある。1436は白磁猪口、1437は白磁小坏。1438と1439は同型で17世紀中葉の白磁猪口。白型で型打成型陽刻。1440、1441は白磁小坏。1442、1443は白磁紅皿。1444、1445は白磁ミニチュア碗。1446は染付ミニチュア碗。1447は染付の灰落としか。1448は17世紀末のコンニャク印判に手描きのある染付小碗。1449は染付鉢。1450は染付蓋。1451は型打成型で陽刻の瑠璃釉のかかった合子の蓋。1452は花唐草文の染付蓋。1453は朝顔文の染付蓋。1425と一対か。1454と1455は一対の染付蓋と鉢。1456、1457は白磁の蓋。1458、1459は染付の仏飯器で1458には蜻蛉草文が描かれる。1460は梅文に金彩を施す赤絵の碗。1461は赤絵の合子の身。1462は鳥形の白磁水滴。1463は白磁の戸車。1464は灯心押さえに転用した白磁の小碗片。1465~1483は肥前の磁器。1465は見込み蛇の目軸割ぎの染付皿。1466は見込み蛇の目軸割ぎで二重格子文のある染付皿。1467と1468は同組で紅葉文が描かれた染付小皿。1469はコンニャク印判五弁花のある染付皿。1470は手描き五弁花のある染付皿。1471はコンニャク印判の染付皿。1472の染付皿は手描き五弁花が描かれ底面にハリ支え痕がある。17世紀末頃の製品と思われる。1473はコンニャク印判、紅葉文、底面にハリ支え痕のある染付皿。18世紀初頭の製品と思われる。1474は菊花文を施す染付皿。1475は17世紀後葉頃のロクロ型打成型の染付菱形変形皿。1476は染付皿。1477は菊花文を描く染付皿で、漆継ぎ痕がある。1478は染付皿。1479の染付皿は組物の内の1個体で、17世紀中葉の製品であろう。1480は型打成型、貼付高台で花文のある染付輪花小皿。1481は木瓜型の型打成型、貼付高台で口鏽、雪割文のある染付皿。1482は染付の壺。1483は人物文が描かれた色絵香炉である。1484は竜泉窯のトキン状高台をもつ小碗。1485~1490は肥前の青磁。1485は輪花皿。1486は小碗。1487は見込みに重ね焼きの痕がある脚付の香炉。1488は見込みにヘラで描いた陰刻、口鏽がある脚付輪花皿。1489は型打成型の皿。1490は仏花瓶。1491~1498は肥前の染付皿。1491と1492は同型で見込みに鶯文、青海波文を描き、底面にハリ支え痕がある。17世紀後葉頃の製品と思われる。1493は扇文を描く。1494は17世紀末頃の製品で兎文、千鳥文、青海波文を描き、底面にハリ支え痕、「大明成化年製」銘がある。1495と1498は同型で17世紀中葉の製品と思われる。1496、1497はいずれも17世紀末頃に底面にハリ支えがあり組物の内の1個体と思われる。1496は花文、1497には蝶文が描かれている。1499は陶胎染付。1500~1509は16世紀末~17世紀初頭の青花。1500は竹文、鶴文が描かれた皿。1501の皿は鹿文、鳥文を施し高台内に銘がある。1502は紗綾形文、松文のある皿。1503は漳州窯の皿で大きく牡丹文を描く。1504と1505は同型で陰刻型打成型の桜花鉢。1504は昆虫文、1505は鳥文、竹文が描かれている。1506~1509は型打成型の輪花皿で組物のうちの1個体と思われる。1510~1571は1543を除き陶器。1510は肥前の碗。1511の鉄軸の天目碗は被熱シスで黒色化している。1512は京・信楽の灰軸丸碗。1513の碗にはベンガラと思われる紅色が付着している。1514は透明釉碗。1515は灰釉碗。1516はの灰釉碗は肥前か。1517の17世紀末の肥前の碗は土灰釉、銅緑釉がかかる。1518は渦巻き高台の萩葉灰釉碗。1519の萩の灰釉小碗は高高台。1520は京・信楽の碗。1521は鉄釉小碗。1522は



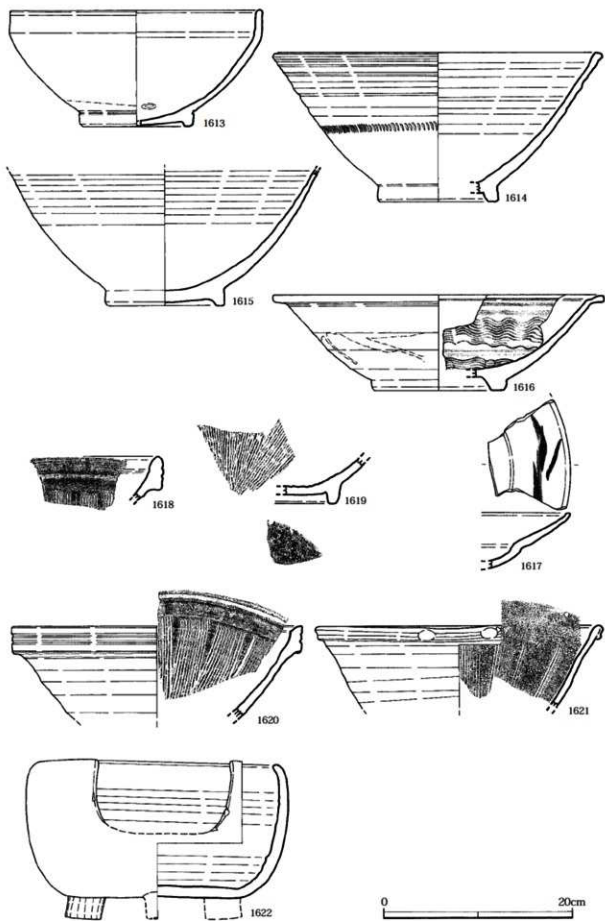
第170图 3地区烧土层出土遗物⑦(1/3)



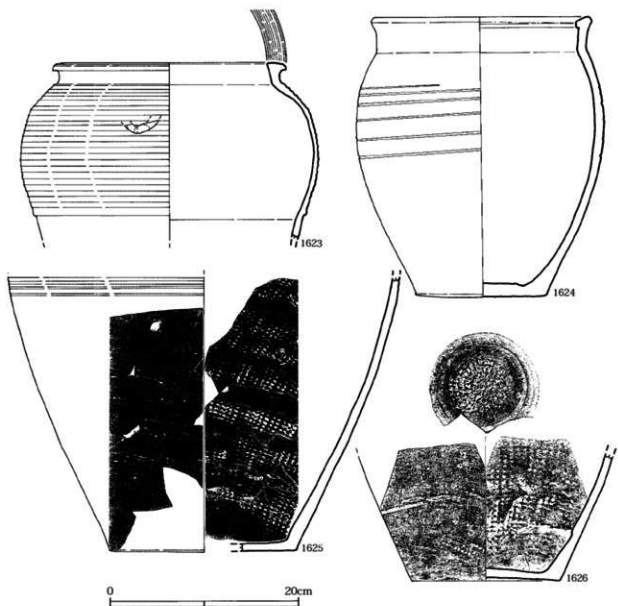
第171図 3地区焼土層出土遺物⑧(1/3)



第172图 3地区烧土层出土遗物⑨(1/3)



第173图 3地区烧土层出土遗物⑩(1/4)



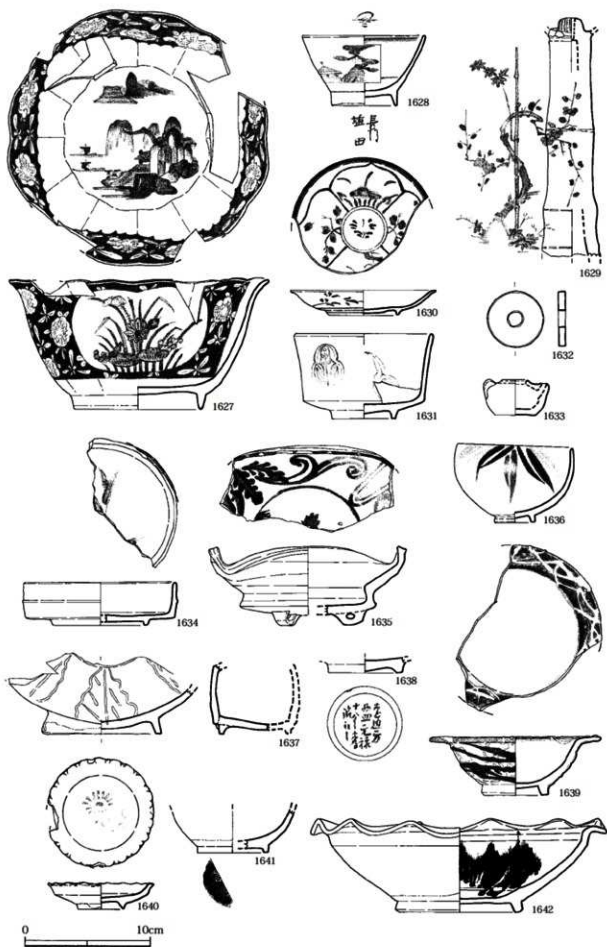
第174図 3地区焼土層出土遺物①(1/4)

萩の土灰軸小碗。1523は萩の透明軸、白化粧を施す刷毛目猪口。1524は透明軸刷毛目蓋。1525の土灰軸、銅緑軸蓋は萩か。1526の萩薬灰軸蓋は漆継ぎ痕が残る。1527～1530は萩・須佐の土灰軸杵形碗で、1529と1530は基筋底。1532は灰落とし。1533は仏花瓶。1534は萩の製品であろうか、脚付の透明軸、白化粧を施す刷毛目香炉。1535～1537は萩・須佐の香炉で1535は土灰軸、1536、1537は灰軸で口縁部に敲打痕があり灰落としに転用している。1538は萩の薬灰軸脚付香炉。1539は見込みに輪状胎土目痕がある萩の輪花灰軸皿。1540は見込みに胎土目痕のある折縁の萩の灰軸皿。1541は糸切りの灰軸皿。1542は見込みに胎土目痕のある萩・須佐の土灰軸皿。1543は肥前の磁器皿で、鉄軸と長石軸を皿の中央で掛け分けている。1544は鉄絵を描いた肥前の灰軸皿。1545～1547は萩の輪花刷毛目皿。1546は透明軸、1547は透明軸、白化粧を施す。1548は萩の型打成型刷毛目皿で、灰軸、白化粧を施す。1549は萩の脚付薬灰軸葉形型打皿。1550は見込みに胎土目痕の残る萩・須佐の土灰軸皿。1551は高台に輪状胎土目痕のある萩の皿で薬灰軸、鉄軸を掛ける。1552は呉須絵の描かれた型皿。1553は見込みに砂目痕のある肥前鉄軸皿。1554は須佐の鉄軸乗場。1555は灯明受皿であるが、灯明皿としても使用してい

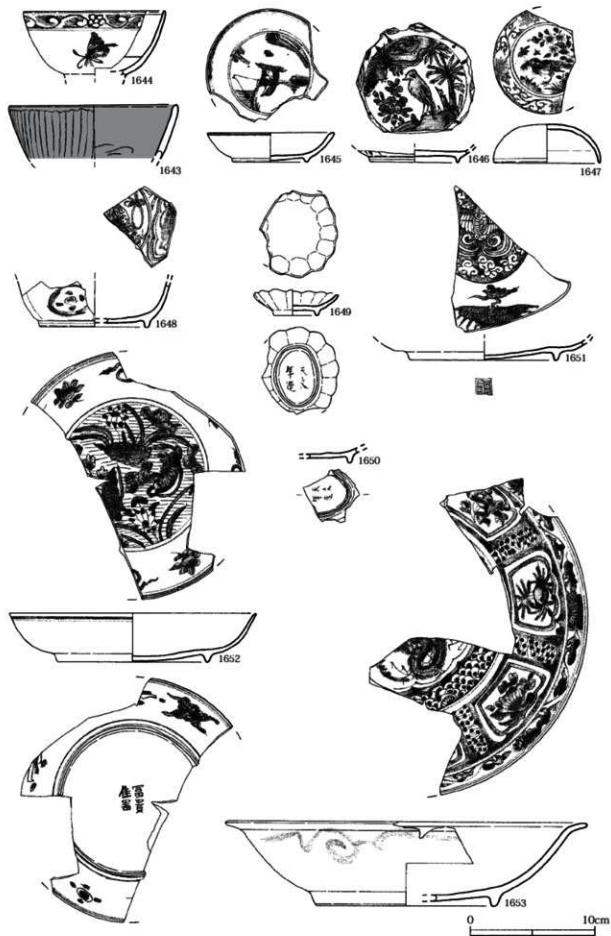
たと思われる。1556は鉄袖を施した肥前灯明受皿。1557は長石袖の水滴か。把手は貼付である。1558は糸切り痕を残す備前の蓋。1559は底面に「与見」の窯印がある。1560～1562は備前の阿福鉢。1563は萩の藁灰袖片口。1564、1565も片口で1564は灰袖、1565は透明袖を施し鉄絵を描く。1566は鉄袖の水注。1567は萩の藁灰袖瓶。1568は内面にベンガラの付着した萩・須佐の藁灰袖壺。1569は内面にベンガラの付着した萩の灰袖壺。1570は割高台で高台に輪状胎上日痕の残る萩の刷毛目鉢。深川窯の製品。1571は肥前と思われる割高台の藁灰袖鉢または香炉。1572は土師器の混丸。1573は瓦質の火鉢の脚部で獣の足をかたどる。表面に雲母、灰分が付着している。1574は瓦質の蓋で穿孔があり、外面磨き。1575～1597は土師器の皿。1575～1580と1583および1587は糸切り痕がある。1581、1582および1584は板目がある。1579～1584は二次被熱による焼きひずみがある。1585、1586は灯明皿。1588は糸切り痕と板目痕とが混在する。1589、1590は二次被熱による焼きひずみがある。1591は糸切り痕、1592は板目痕がある。1593は焼成前の穿孔があり、糸切り痕のある辻餅罎皿。1594～1597は糸切り痕がある。1598～1601は土師器の焼壇壺の蓋、1602～1605は土師器の焼壇壺の身。1598は「余んばん七度木やき志を」の刻銘を二重圏線が囲み、表面には雲母が付着している。1599は内面に布目痕が残る。1600、1601は手捏ね。1602は内面に布目痕が残る。1603は板作り成型で布目痕が残る。「御壺壺師」系の製品である。1604、1605は輪積み成型で小型。1606、1607はいずれも佐野の焙烙であるが、1606は土師器、1607は瓦質である。1608は佐野の土師器壺。1609は佐野の瓦質の福鉢。1610～1612は土製品。1610は穿孔のある土人形の大黒天。1611は下部に穿孔のある土人形の仏像。1612は土人形ではあるが何をかたどったものであるかは不明。1613～1626は陶器。1613は見込みに胎上日痕のある須佐の土灰袖鉢。1614は外側面中程に1cmほどのとび鈍削り痕が縦に連続してはしる萩の透明袖鉢。1615は高台に輪状胎上日痕の残る萩の透明袖鉢。1616は見込みに砂目痕のある肥前の土灰袖、白化粧を施す刷毛目鉢。1617は鉄絵が描かれた肥前の灰袖皿。1618は17世紀後半～18世紀前半の備前福鉢。1619は「○」の窯印のある備前福鉢で鉄化粧を施す。1620は備前の福鉢。1621は須佐の福鉢。1622は底面、脚部に輪状胎上日痕のある萩の鉄袖風炉。鉄袖がかかる。1623は肥前の水屋壺。1624は肥前の土灰袖甕。1625は内面に格子叩き痕がある肥前の大甕。1626の肥前の土灰袖甕も内面に格子叩き痕があり、底面には砂目痕がある。

③ 1地区（平成9・10・11年度調査）その他の出土遺物（第175～177図 図版117～119）

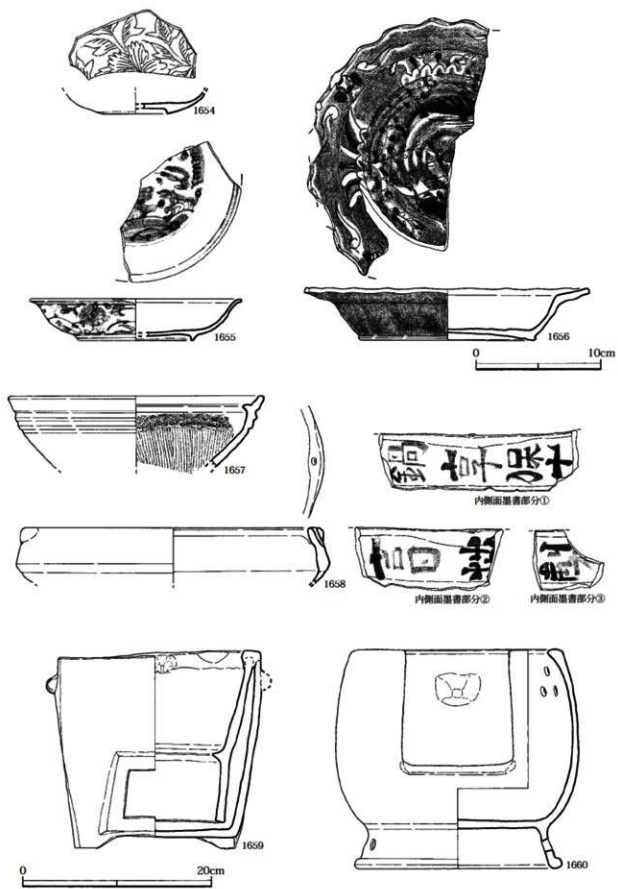
1627は肥前の染付で勾丁形の輪花鉢。1628は「長門埴田」銘のある小畑の広束碗。1629は梅竹文が描かれた肥前染付の燗台。1630の肥前輸出用カップ＆ソーサーの皿は色絵は描かれず漆継ぎ痕がある18世紀前半の製品。1631～1642は陶器。1631は長門沢渡文のある透明袖碗。1632は糸切り痕の残る萩・須佐の土灰袖戸車。1633の灰袖水滴は古瀬戸中期孫右門窯式で14世紀中葉の製品。1634は志野長石袖鉢。1635の志野の長石袖向付は鉄絵が描かれ、底部に日痕が残る。1636は京・信樂の色絵九碗で蓼文を描く。1637は萩の貼り付け高台の藁灰袖福鉢。1638の萩の土灰袖皿は「遠近方ノ丹皿元禄ノ十（年カ）八月廿九日ノ諸取之」の墨書がある。1639は萩の藁灰袖鉢のドラ掛。深川窯の製品。鉄袖、白袖がかかる。1640の美濃の長石袖ひだ皿は呉須で草花文を描く。灯明皿として使用したものとと思われる。1641は底部に小壺をかたどったような刻印のある灰袖碗である。1642は萩の藁灰袖鉢。鉄袖掛け流しで見込みにハマ痕が残る。1643～1655は磁器。1643は内面にヘラ描き花卉、外側面にヘラ描き蓮弁文



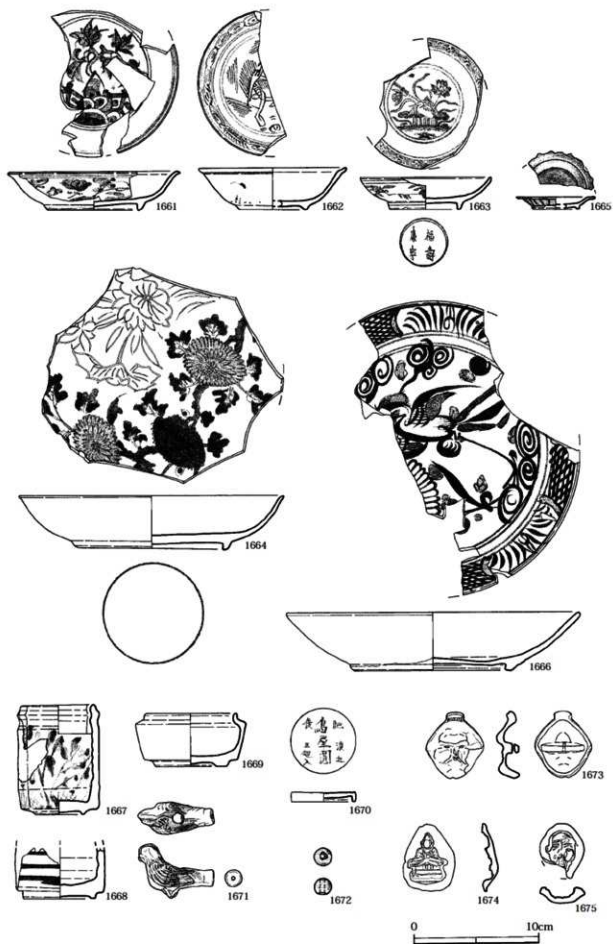
第175図 1地区その他の出土遺物①(1/3)



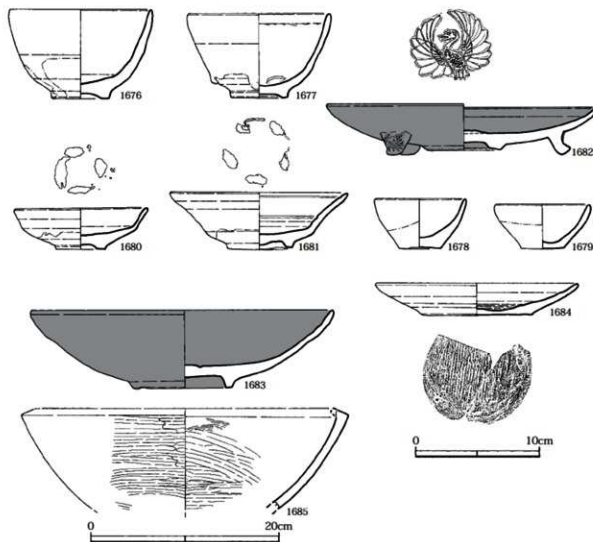
第176図 1地区その他の出土遺物②(1/3)



第177図 1地区その他の出土遺物③(1/3、1/4)



第178図 3地区その他の出土遺物①(1/3)



第179図 3地区その他の出土遺物②(1/3、1/4)

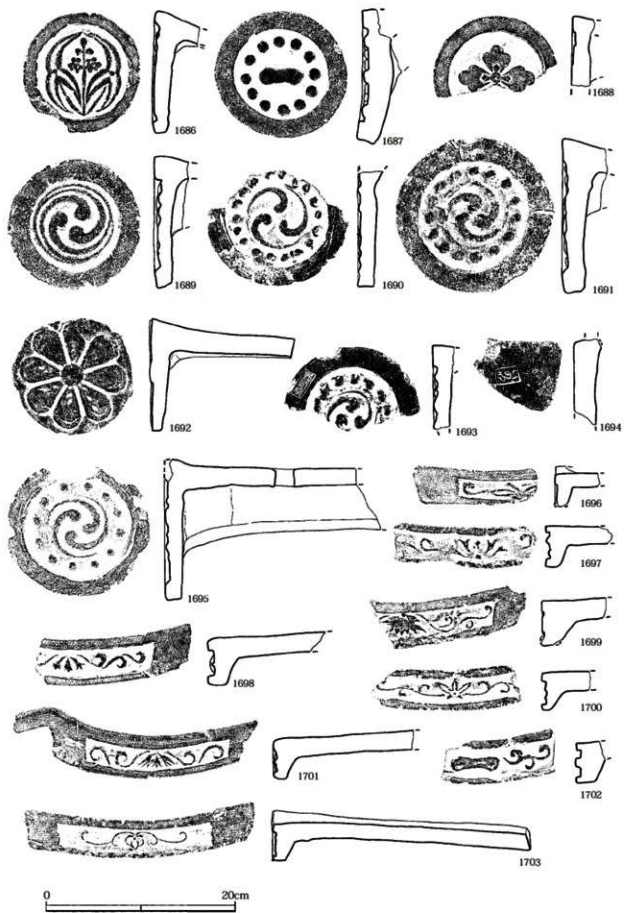
のある竜泉窯の青磁碗。1644は花唐草文、蝶文を描いた青花碗。1645の漆継ぎ痕のある青花皿は人物文が描かれている。1646は16世紀末～17世紀初頭の青花皿で見込み中央付近に鳥、その周囲に草文を描く。1647は17世紀後半～18世紀前半の景德鎮の青花合子の蓋。中央付近に虫を啄む鳥、その上部に虫を描きさらに花文を施す。側面には唐草文が描かれている。1648は16世紀末～17世紀初頭の青花鉢。外面に披熱が認められる。1649と1650は同型の青花の小型輪花皿で「天文年造」の銘がある。1651は高台内に銘、見込みに鳳凰を描いた青花の皿。1652は「富貴佳器」の銘をもつ16世紀～17世紀前半の景德鎮の青花皿。見込みには水面に浮かぶ鳥が2羽と草花が描かれ、外側面にも文様をあしらう。1653は漳州窯の芙蓉手青花盤。1654の中国の白磁皿は萁筒底で陰刻草花文を施す。1655は漆継ぎ痕のある青花皿。見込み、外側面に文様を描く。1656は中国華南三彩の魚藻文盤。緑釉、黄釉、褐釉を施す。1657は上野・高取系の陶器擂鉢。1658は関西系の内耳をもつ土師器の焙烙。内側面に「□銅享保十□」「□吉日坤□」「□裂□」の墨書がある。1659は瓦質の角形七厘。1660は瓦質の埴炉。

④ 3 地区 (平成12年度調査) その他の出土遺物 (第178～179図 図版119～121)

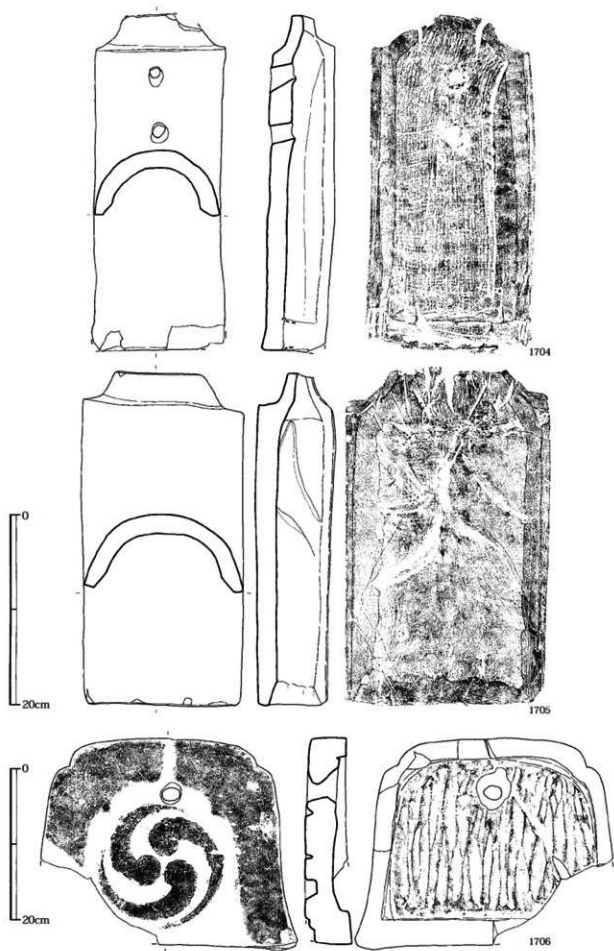
1661～1670は1667、1668を除き磁器。1661は青花皿。1662は高台内無軸の青花磁器。1663の景德鎮青花皿は見込みに鳥文、蓮文、外側面に草文がある。高台内は「福壽康寧」の銘を二重圏線が囲む。口縁にススが付着していることから、灯明皿に転用したものと思われる。1664は見込みに菊の絵と陰刻を施す青花皿。1665は16世紀末の中国の翡翠釉小皿。1666は磁器で漳州窯の赤絵鳳凰文皿。漆継ぎ痕が残る。1667は陶器で志野筒型向付。鉄絵が描かれ、長石釉を施す。1668は織部筒型向付。鉄絵を描き、長石釉を施す。1669は肥前白磁の合子または壺物で白粉と思われる白色の内容物が残存している。1670は19世紀中葉の肥前染付茶盒の蓋。「肥後／渡辺／烏屎皿／半処入」の銘が書かれている。1671は土製品で緑釉、黄釉の鳩笛。1672は陶器で赤色顔料のかかる緒締。1673は土製品の面根付。1674、1675は土製品の土型で、1674は天神、1675は人形の顔。1676～1681は陶器。1676は肥前灰釉碗。胎土が橙色系である。1677の肥前の鉄釉碗は軸が厚くかかり、高台胎でたまりをつくる。1678は糸切り痕の残る肥前の灰釉小坏。1679は糸切り痕の残る肥前の鉄釉小坏。1680は見込み、豊付に砂目痕のある肥前皿。1681は見込み、豊付に砂目痕のある肥前灰釉皿。1682は脚付で見込みに帖花のある肥前の青磁皿。1683は肥前の青磁大皿。1684は底部に板目痕が残る土師器の皿。1685は佐野の瓦質鉢。

⑤ 1～3 地区 (平成9～12年度調査) 瓦 (第180～183図 図版121～123)

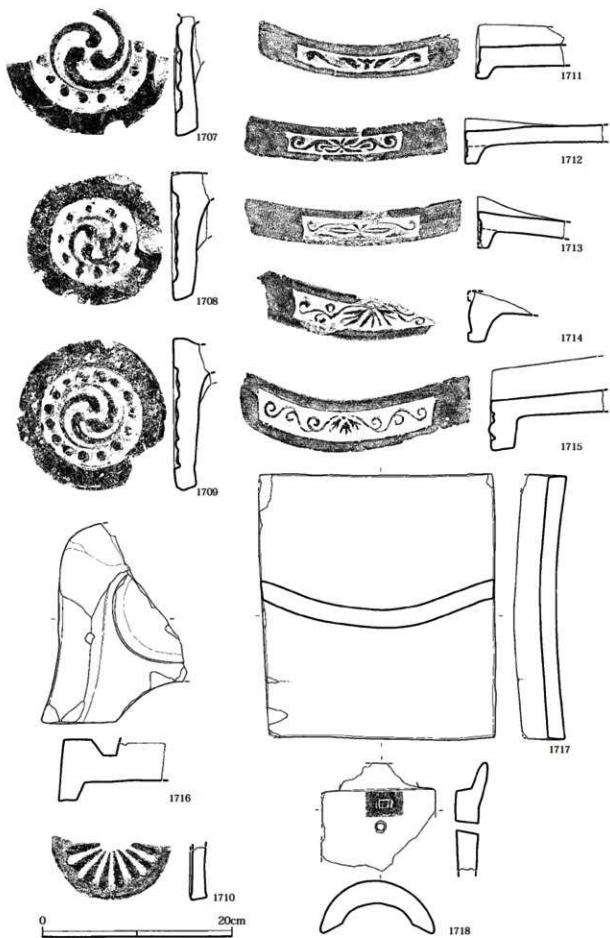
1686は長門沢瀉文のある軒丸瓦当。1687は一文字文、珠文のある軒丸瓦。1686～1691は軒丸瓦当。1688は花菱、1689は巴文、1690、1691は巴文、珠文がある。1692は菊花文のある軒丸瓦。1693は瓦当に一重角内「野頭焼」銘、巴文、珠文のある軒丸瓦。1694は上部に一重角内「いの助」銘のある丸瓦。1695は巴文、珠文のある軒丸瓦。1696～1700は軒平瓦瓦当。1701は軒棧瓦瓦当。1702は赤瓦で一文字文、唐草文のある軒平瓦瓦当。1703は軒平瓦瓦当。1704は穿孔が2カ所ある軒丸瓦。1705は丸瓦。1706は巴文のある鬼瓦。1707～1709は巴文、珠文のある軒丸瓦瓦当。1710は菊文のある軒丸瓦瓦当。1711は黄橙色系の軒平瓦瓦当。1712は橙色系の軒平瓦瓦当。1713は黄橙色系の軒平瓦瓦当。1714、1715は軒棧瓦瓦当。1716は鬼瓦。1717は平瓦。1718は上部に窯印と穿孔のある丸瓦。1719～1723は巴文、珠文のある軒丸瓦瓦当。1724は菊花文のある軒丸瓦瓦当。1725、1726は丸瓦。



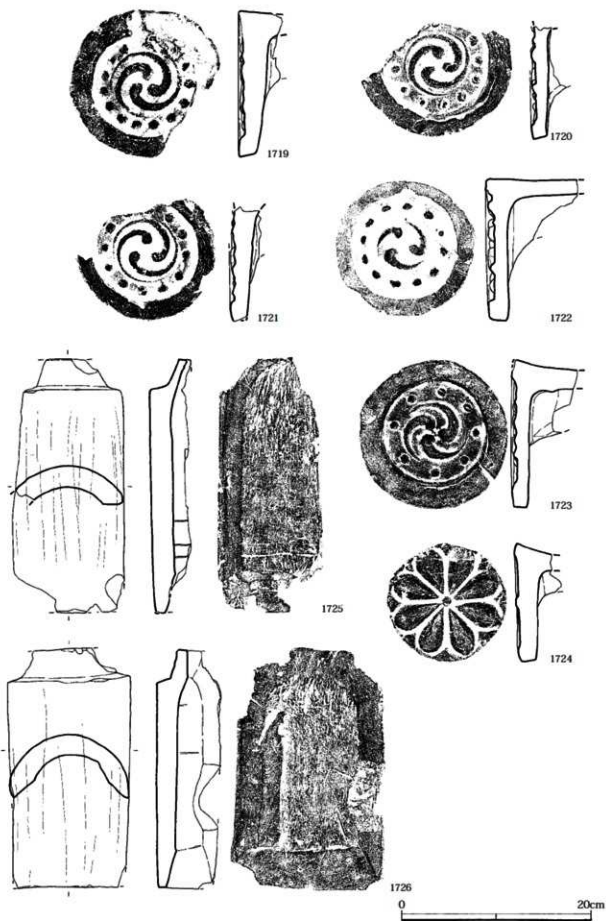
第180图 1地区瓦①(1/4)



第181图 1地区瓦②(1/4、1/5)



第182图 2地区瓦(1/4)



第183图 3地区瓦(1/4)

表24 1～3地区陶磁器・土器・土製品

探検番号	調査年度	調査地区	出 土 品 名	種 別	器 種	作 者	備 考
1182	148	91	2-A 当北トレンチ	第2坑下層	陶器	甕	高村
1183	148	91	2-B	第2坑上層	陶器	甕	高村
1184	148	91	2-B	第2坑上層(埋)	陶器	甕	高村
1185	148	94	2-A	第2坑上層	陶器	甕	高村
1186	148	94	2-B	石1757の下	陶器	甕	高村
1187	148	91	2-A	埋	陶器	甕	高村
1188	148	91	2-A	(石1583埋)	第2坑1層	陶器	甕
1189	148	94	2-A	埋	陶器	甕	高村
1190	148	94	2-A	石1583埋	第2坑1層以下	陶器	甕
1191	148	94	2-A	石1583埋	第2坑1層	陶器	甕
1192	148	94	2-B	石1757下	第2坑1層の下	陶器	甕
1193	148	91	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1194	148	91	2-B	石1757以下	第2坑上層	陶器	甕
1195	148	94	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1196	148	94	2-B	第2坑1層の下	陶器	甕	高村
1197	148	94	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1198	148	94	2-B	埋	陶器	甕	高村
1199	148	91	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1200	148	94	2-A	第2坑上層以下	陶器	甕	高村
1201	148	91	2-A	第2坑上層	陶器	甕	高村
1202	148	94	2-B	石1744以下 (埋トレンチ)	陶器	甕	高村
1203	149	95	2-B	埋トレンチ	第2坑下層	陶器	甕
1204	149	95	2-B	石1713下	第2坑上層	陶器	甕
1205	149	95	2-B	石1744埋	第2坑上層の下 (埋トレンチ)	陶器	甕
1206	149	95	2-B	第2坑下層	陶器	甕	高村
1207	149	95	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1208	149	95	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1209	149	95	2-A	当北トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1210	149	95	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1211	149	95	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1212	149	95	2-B	石1744埋	第2坑上層	陶器	甕
1213	149	95	2-B	石1744埋	第2坑上層	陶器	甕
1214	149	95	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1215	149	95	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1216	149	95	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1217	149	95	2-B	石1744埋	第2坑上層の下 (埋トレンチ)	陶器	甕
1218	149	95	2-A	当北トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1219	149	95	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1220	149	95	2-B	石1744埋	第2坑上層	陶器	甕
1221	149	95	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1222	150	96	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1223	150	96	2-A	当北トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1224	150	96	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1225	150	96	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1226	150	96	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1227	150	96	2-A	当北トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1228	150	96	2-B	石1713下	第2坑上層	陶器	甕
1229	150	96	2-B	石1757下	第2坑上層	陶器	甕
1230	150	96	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1231	150	96	2-B	埋トレンチ	第2坑上層	陶器	甕
1232	150	96	2-B	石1744埋	第2坑上層の下 (埋トレンチ)	陶器	甕
1233	150	96	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1234	150	96	2-A	当北トレンチ	第2坑下層(埋)	陶器	甕
1235	150	96	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1236	150	96	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1237	150	96	2-A	石1583埋	第2坑上層	陶器	甕
1238	151	96	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1239	151	96	2-B	石1583埋	第2坑上層より上	陶器	甕
1240	151	96	2-A	石1583埋	第1遺土層の下	陶器	甕
1241	151	96	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1242	151	97	2-B	石1583埋	第1遺土層の中心・下層	陶器	甕
1243	151	97	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1244	151	98	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1245	151	98	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1246	151	97	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1247	151	98	2-A	石1583埋	第1遺土層	陶器	甕
1248	151	97	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1249	151	97	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1250	151	97	2-A	石1583埋	第1遺土層	陶器	甕
1251	151	97	2-B	SK51	陶器	甕	高村
1252	151	97	2-B	石1744埋	第1遺土層上	陶器	甕

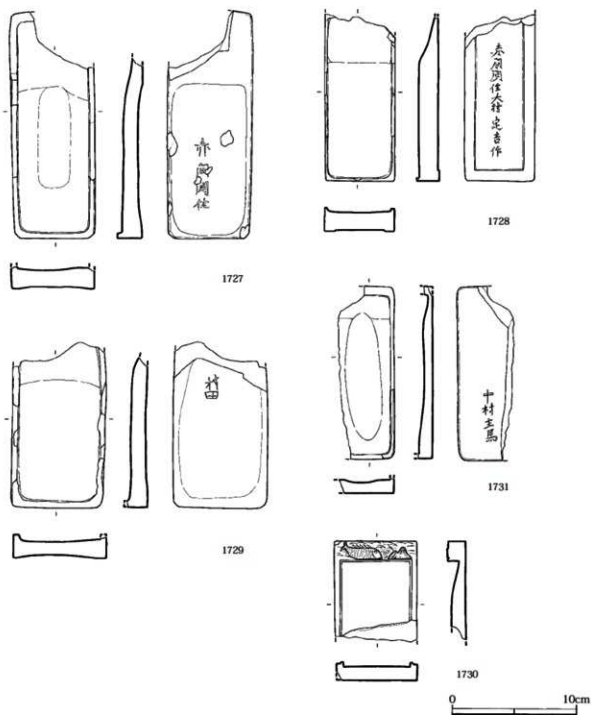
期日	時刻	地区	出 - 入地点	種別	番種	種	備考	
1329	157 - 02	2-B	石川74以西	第1流上層下	阿部	織	上灰種 袋付に目付	紙
1329	157 - 02	2-A	石川74以西	第2流上層以上	阿部	織	通明用、下化紙	紙 袋付に目付
1330	157 - 02	2-B	SK51		阿部	織	透明用、下化紙	紙
1331	157 - 02	2-B		第1流上層下	阿部	織	透明用	紙 袋付に目付、竹器高台
1332	157 - 02	2-B	SK51	下河	阿部	織	高灰種	紙(袋用)
1333	157 - 02	2-B		第1流上層下	阿部	織	上灰種	紙 袋付に目付
1334	157 - 02	2-B		第1流上層下	阿部	織	上灰種	紙 トキン状高台、袋用糸付
1335	157 - 02	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	織造	紙前 袋付に目付
1336	157 - 02	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	織造	紙前 袋付に目付
1337	157 - 02	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	織造	紙前 袋付に目付
1338	157 - 02	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	織造	紙前 袋付に目付
1339	157 - 03	2-B	SK51	第1流上層	阿部	織	高灰種	紙 袋付に目付
1340	157 - 03	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	高灰種	紙 袋付に目付
1341	157 - 03	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	織	上灰種	紙 高灰種、高灰種、見込みに 織造用目付
1342	157 - 03	2-B	SK51		阿部	織	高灰種	紙 高灰種、高灰種、見込みに 織造用目付
1343	157 - 02	2-B	SK51		阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1344	157 - 02	2-B	石川74以西	第1流上層下	阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1345	157 - 02	2-B	SK51		阿部	高灰種	高灰種	紙 高灰種
1346	158 - 02	2-B	SK51		阿部	高灰種	高灰種	紙 高灰種
1347	158 - 04	2-A	湖北トレンテ	第2流上層上	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1348	158 - 04	2-B		第1流上層の下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1349	158 - 03	2-B	SK51	下河	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1350	158 - 03	2-A	石川58以西	見込	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1351	158 - 03	2-B	石川58以西	第1流上層の下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1352	158 - 03	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1353	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1354	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1355	158 - 03	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1356	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1357	158 - 03	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1358	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1359	158 - 03	2-B	石川58以西	第1流上層の下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1360	158 - 04	2-B		第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1361	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1362	158 - 03	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1363	158 - 03	2-A		第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1364	158 - 04	2-A		第2流上層以上	阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1365	158 - 04	2-B	石川74以西	第1流上層の下 (袋ト層併産トレンテ)	阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1366	158 - 04	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1367	158 - 04	2-B	SK51		阿部	片口	鉄池	紙 高灰種
1368	158 - 04	2-B		第1流上層下	阿部	片口	鉄池	紙 高灰種
1369	158 - 04	2-B	SK51		阿部	下河	鉄池	紙 高灰種
1370	159 - 05	2-A	2-3期		阿部	井	鉄池、鉄石種	紙 高灰種
1371	159 - 05	2-G	奥石川以西	第1流上層下 第2流上層	阿部	実付	鉄池、長石種、 緑石種	紙 高灰種
1372	159 - 05	2-B	SK51		阿部	実付	鉄池、長石種、 緑石種	紙 高灰種
1373	159 - 05	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1374	159 - 04	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1375	159 - 04	2-B	石川74以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1376	159 - 04	2-A		第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1377	159 - 04	2-A		第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1378	159 - 04	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1379	159 - 04	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1380	159 - 04	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1381	159 - 04	2-C	石川58以西(直下)	第2流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1382	159 - 04	2-C	石川58以西(直下)	第2流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1383	159 - 04	2-G	奥石川以西	第2流上層の下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1384	159 - 04	2-C	石川58以西(直下)	第2流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1385	159 - 04	2-A	湖北トレンテ	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1386	159 - 05	2-C	石川48以西	第2流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1387	159 - 04	2-A	石川58以西(直下) SK51北	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1388	159 - 04	2-B	SK51		阿部	紙	高灰種	紙 高灰種
1389	159 - 05	2-A	石川58以西	第1流上層下	阿部	竹物	竹物	紙 高灰種
1390	159 - 05	2-A	石川74以西	第1流上層下	阿部	竹物	竹物	紙 高灰種
1391	160 - 05	2-B	SK51		阿部	片口	鉄池	紙 高灰種
1392	160 - 05	2-A	石川58以西	第2流上層下	阿部	小紙	高灰種	紙 高灰種
1393	160 - 05	2-B	SK51	下河 第2流上層より	阿部	井	鉄池	紙 高灰種
1394	160 - 05	2-B	SK51		阿部	井	鉄池	紙 高灰種
1395	160 - 05	2-A	第2流上層下	阿部	紙	高灰種	高灰種(緑石種)	紙 高灰種
1396	160 - 05	2-B	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	高灰種	紙 高灰種
1397	160 - 05	2-B	第1流上層下	阿部	紙	高灰種	高灰種	紙 高灰種
1398	160 - 05	2-B	SK51		阿部	井	高灰種、高灰種、 高灰種、高灰種	紙 高灰種

発行	冊数	巻数	区分	出 版 点	種 別	著 者	作 者	備 考
1399	16	.06	2-A		陶器	壺	灰青、黒胎	黒漆、赤色
1400	16	.08	2-A		陶器	壺	上灰青	黒胎、高台に黒土層
1401	16	.06	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1402	16	.06	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1403	16	.06	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1404	16	.06	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1405	16	.05	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1406	16	.05	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
1407	162	.06	2-A		陶器	壺	赤	黒胎、裏面黒土層
1408	162	.06	2-A		陶器	壺	赤	黒胎、裏面黒土層
1409	165	.07	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
14.0	165	.06	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
14.1	165	.07	2-A	石1756以南	第1段1層中分北之切込	陶器	赤	黒胎、裏面黒土層
14.2	165	.06	2-B	SK31		陶器	鉢	鉄胎
14.3	165	.07	2-B	SK51		陶器	鉢	鉄胎
14.4	165	.06	2-B	SK31	下層	陶器	鉢	鉄胎
14.5	165	.06	2-B	SK51		陶器	鉢	鉄胎
14.6	165	.06	2-B	SK51		陶器	鉢	鉄胎
14.7	165	.06	2-B	SK51	上層	陶器	鉢	鉄胎
14.8	165	.07	2-B	SK51		陶器	鉢	鉄胎
14.9	165	.06	2-B	SK51		陶器	鉢	鉄胎
14.9	163	.07	2-A		陶器	壺	鉄胎	
14.12	163	.07	2-A	石1636・666附近	第2遺土層以上	土器	漆	
1422	164	.07	3-B	石1777以南	(マナ)1層内	磁器	碗	赤付
1423	164	.07	3-B	石17777777	(マナ)2層①	磁器	碗	赤付
1424	164	.07	3-C	石17777777	(マナ)2層②	磁器	碗	赤付
1425	164	.07	3-C	石17777777	遺土層③	磁器	碗	赤付
1426	164	.07	3-B	石17777777	遺土層④①②	磁器	碗	赤付
1427	164	.07	3-B	石17777777	2面以下層	磁器	小瓶	赤付
1428	164	.07	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	赤付
1429	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	赤付
1430	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	赤付
1431	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	赤付
1432	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	碗	白磁
1433	164	.08	3-D	石17777777	遺土層内	磁器	碗	白磁
1434	164	.08	3-C	石17777777	遺土層②	磁器	碗	白磁
1435	164	.08	3-C	石17777777	遺土層③	磁器	碗	白磁
1436	164	.08	3-C	石17777777	遺土層④	磁器	碗	白磁
1437	164	.08	3-C	石17777777	遺土層⑤	磁器	小瓶	白磁
1438	164	.08	3-C	石17777777	遺土層⑥	磁器	碗	白磁
1439	164	.08	3-B	石17777777	遺土層⑦	磁器	碗	白磁
1440	164	.08	3-C	石17777777	遺土層⑧	磁器	小瓶	白磁
144	164	.08	3-C	石17777777	遺土層⑨	磁器	小瓶	白磁
1442	164	.08	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1443	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1444	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1445	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1446	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1447	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1448	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1449	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1450	164	.07	3-D	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
145	164	.07	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1452	164	.08	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1453	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1454	164	.08	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1455	164	.08	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1456	164	.08	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1457	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1458	164	.07	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1459	164	.07	3-D	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1460	164	.07	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1461	164	.08	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1462	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1463	164	.08	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1464	164	.08	3-A	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1465	165	.09	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1466	165	.09	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1467	165	.09	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1468	165	.09	3-C	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁
1469	165	.09	3-B	石17777777	遺土層	磁器	小瓶	白磁

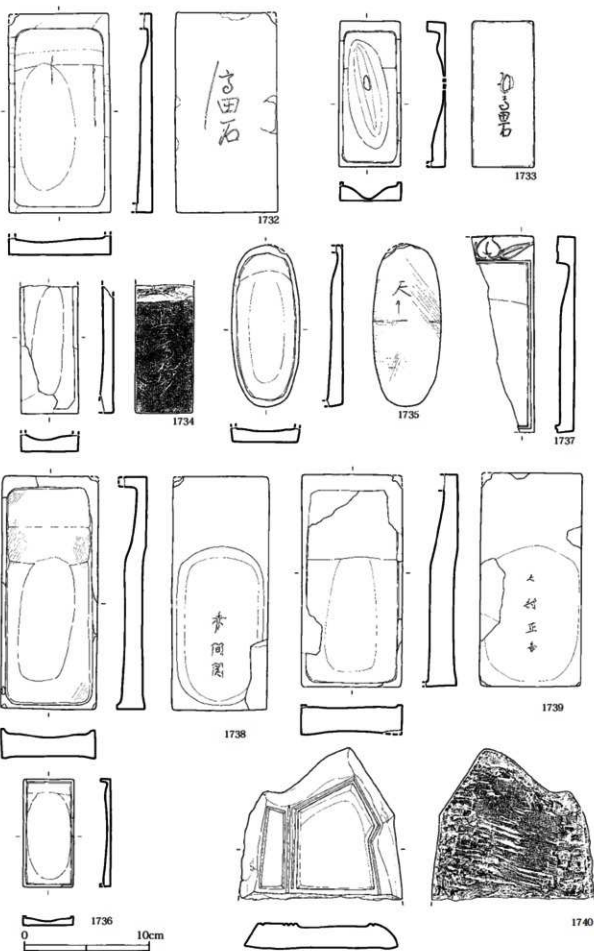
型別	種別	地区	出 発 点	種 別	種 類	特 徴	備 考
1658	177	1-2	1-2西	二飾器	柄杓	内耳、与鏡面並書「西書 鏡」(「コロコロ」)	陶器系
1659	177	1-2	F-6 石段付足	瓦葺	七脚		
1660	177	1-2	F-6 石段付足	瓦葺	七脚		
1661	178	1-2	3-C 石段付足	瓦葺	七脚		
1662	178	1-2	3-A A・B築地帯石段 付足	瓦葺	七脚		
1663	178	1-2	3-D A・B築地帯石段 付足	瓦葺	七脚		
1664	178	1-2	3-1 石段9段付足 付足	瓦葺	七脚		
1665	178	1-2	3-L 石段3段付足 付足	瓦葺	七脚		
1666	178	1-2	3-E 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1667	178	1-2	3-F 石段2段付足 付足	瓦葺	七脚		
1668	178	1-2	3-B 石段7段付足 付足	瓦葺	七脚		
1669	178	1-2	3-A 石段7段付足 付足	瓦葺	七脚		
1670	178	1-2	3 石段7段付足 付足	瓦葺	七脚		
1671	178	1-2	3-G 石段5段付足 付足	瓦葺	七脚		
1672	178	1-2	3-F 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1673	178	1-2	3-M 石段5段付足 付足	瓦葺	七脚		
1674	178	1-2	3-1 石段7段付足 付足	瓦葺	七脚		
1675	178	1-2	3-L 石段7段付足 付足	瓦葺	七脚		
1676	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1677	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1678	179	1-2	3-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1679	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1680	179	1-2	3-1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1681	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1682	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1683	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1684	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1685	179	1-2	3-A 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1686	180	1-2	1-D 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1687	180	1-2	1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1688	180	1-2	1-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1689	180	1-2	2 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1690	180	1-2	1-Z 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1691	180	1-2	1-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1692	180	1-2	1-Z 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1693	180	1-2	1-J 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1694	180	1-2	1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1695	180	1-2	1-H 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1696	180	1-2	1-Z 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1697	180	1-2	1-Y 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1698	180	1-2	1-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1699	180	1-2	1-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1700	180	1-2	1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1701	180	1-2	1-F 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1702	180	1-2	1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1703	180	1-2	1-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1704	180	1-2	1-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1705	180	1-2	1-H 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1706	182	1-2	1-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1707	182	1-2	2-G 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1708	182	1-2	2-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1709	182	1-2	2-H 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1710	182	1-2	2-D 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1711	182	1-2	2-F 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1712	182	1-2	2-E 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1713	182	1-2	2-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1714	182	1-2	2-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1715	182	1-2	2 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1716	182	1-2	2 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1717	182	1-2	2-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1718	182	1-2	2-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1719	183	1-2	3-1 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1720	183	1-2	3-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1721	183	1-2	3-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1722	183	1-2	3-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1723	183	1-2	3-D 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1724	183	1-2	3-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1725	183	1-2	3-C 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		
1726	183	1-2	3-B 石段4段付足 付足	瓦葺	七脚		

(2) 石製品 (第184～186図 図版124～125)

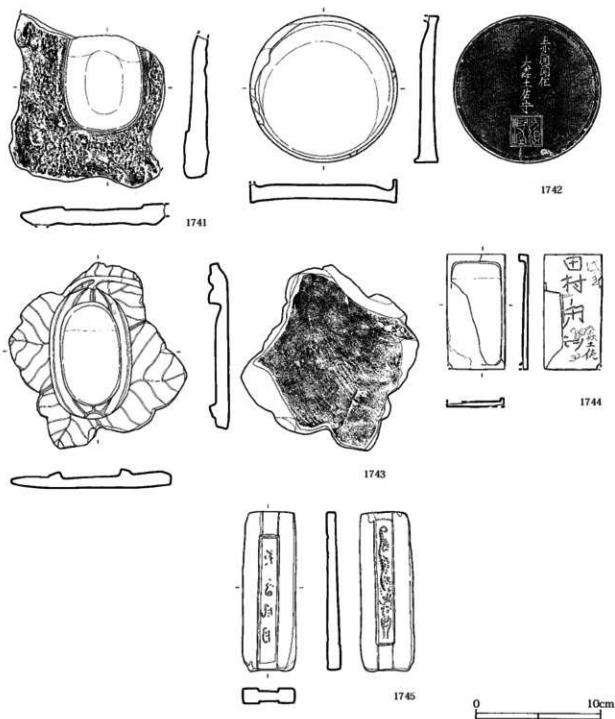
1～3地区の石製品を紹介する。1727から1731までは1地区の出土遺物である。1727は「赤間関住」銘のある赤色頁岩製赤間硯。角が面取りされている。1728は「赤間関住大村定古作」銘のある赤色頁岩製赤間硯。角は軽く面取りされており、墨堂から硯池への傾斜が急である。1729は釘書きで「村田」とある赤色頁岩製硯。角が面取りされている。1730は赤色頁岩製赤間硯。硯縁上部に波の文様を背景にして魚の意匠を刻む彫刻硯である。さらに墨堂と硯池の周囲を硯縁より高く囲む突帯がある。1731は釘書きで「中村主馬」とある黒色粘板岩製硯。繰り返し使用したため墨堂が深くえぐれている。1732



第184図 1地区石製品(1/3)



第185図 2地区石製品(1/3)



第186図 3地区石製品(1/3)

から1740までは2地区の出土遺物である。1732は釘書きで「高田石」とある黒色粘板岩製硯。繰り返し
 の使用により墨堂がえぐれている。1732は「上口高田石」とある粘板岩製硯。玉砥石に二次使用し
 たためか、墨堂から硯池にかけて深くえぐれ、ついには硯背にいたり穴があいている。1734は釘書き
 で「上々高（鳩？）石」とある硯。繰り返し使用により墨堂がえぐれている。角は軽く面取りされ
 ている。1735は釘書きで「天下第一」とある珪質頁岩製硯。楕円形である。1736は黒色粘板岩製硯。繰
 り返し使用により墨堂がえぐれている。1737は赤色頁岩製赤硯。硯縁上部に桃の意匠を刻む彫刻
 硯である。さらに墨堂と硯池の周囲を硯縁より高く囲む突帯がある。1738は覆手に「赤間関」銘のあ

る赤色頁岩製赤間硯。繰り返しの使用により墨堂がえぐれている。角が軽く面取りされている。1739は覆手に「大村正吉」銘のある赤色頁岩製赤間硯。1740は頁岩で赤間硯か。全体は五角形をしており、硯縁左側に小さい長方形の意匠を配し、外形に似た形の墨堂と硯池を彫る。硯背に彫痕がある。1741から1745までは3地区の出土遺物である。1741は赤色頁岩製赤間硯か。硯縁を広くとり高さ幅とも不均等である。硯縁表面には小さな凹凸が多数ある。硯背も凹凸がある。1742は赤色頁岩製で円形の赤間硯である。硯背全体が覆手のようになっており「赤間関住/大森土佐守」銘と二重角内に「頼澄」の判がある。技量に優れた硯師による高級品の一つとみてよいであろう。「頼澄」は赤間関の硯師である大森家の2代目であり、17世紀前半に活躍したと思われる人物である。ただし、この「頼澄」の判については「…2代頼澄亡き後も大森家では「頼澄」の判をあえて使用し続けたと考えるべきである。つまり、大森家は2代頼澄の名声を最大限に利用して赤間硯の付加価値向上を図ったのであり、消費者の側もこれを受け入れていたと考えられる。」¹⁾ ことから製品の製作年代についてはこの判からは確定することはできない。1743は硯背に墨書があり、釘書きで「大…」とある。頁岩製赤間硯か。瓜の意匠を施す。1744は頁岩製硯で硯背に釘書きで「此主/山村関口/大森土佐守」とある。1745は片面に「花鳥風月」とある柄袋の型。彫金の型か。

注

1) 岩崎仁志「近世赤間硯の跡について」『山口考古』第25号 2005

参考文献

江戸造硯研究会[編]『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001

表25 1～3地区石製品一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	国番号	図版番号	地区	出土地点	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考	
1727	184	124	1-H	石垣52以西	SE25西側	石製品	硯	17.8	8.6	2.0	赤色頁岩、赤間硯、「赤間関住」銘
1728	184	124	1	遺構検出		石製品	硯	*13.2	5.6	1.8	赤色頁岩、赤間硯、「赤間関住大村定吉作」銘
1729	184	124	1-C	石列41以东		石製品	硯	*13.0	7.4	1.85	赤色頁岩、釘書き「村田」
1730	184	124	1-Z	石列507以西	4面以下	石製品	硯	*8.0	6.5	1.5	赤色頁岩、赤間硯
1731	184	124	1-F	SE24以东		石製品	硯	13.6	*4.3	*1.1	黒色粘板岩、釘書き「中村土馬」
1732	185	124	2	遺構検出	(筆石内)	石製品	硯	15.7	8.0	*1.5	黒色粘板岩、釘書き「高山石」
1733	185	124	2-H	遺構検出		石製品	硯	11.5	4.9	1.4	粘板岩、「上口高川石」、王取石に二次使用
1734	185	124	2-C	遺構検出		石製品	硯	*10.2	4.6	*1.3	裏面に釘書き「ヒメ高(馬?)石」
1735	185	125	2	2面	遺構検出(南)	石製品	硯	12.7	5.4	*1.1	珪質頁岩、釘書き「天下」
1736	185	125	2-F	SK46以东	第2層上層	石製品	硯	8.5	4.0	*0.7	黒色粘板岩
1737	185	124	2-B	SK51		石製品	硯	15.5	*4.9	1.4	赤色頁岩、赤間硯
1738	185	125	2-1	1-2面	遺構検出(東側)	石製品	硯	18.2	7.5	2.3	赤色頁岩、赤間硯、「赤間関」銘
1739	185	125	2	1-2面	遺構検出	石製品	硯	16.7	8.0	2.2	赤色頁岩、赤間硯、「大村正吉」銘
1740	185	125	2-A	石垣13下	第1説1層以下	石製品	硯	*11.85	12.8	2.05	頁岩、赤間硯か、裏面彫痕
1741	186	125	3-C	石垣7以东 トレンチ	検上層 (石垣7東込)	石製品	硯	*13.7	*11.8	2.0	赤色頁岩、赤間硯か
1742	186	125	3-A	石垣7以西2 面直下層		石製品	硯	径11.5		1.85	円硯、赤間硯、赤色頁岩、「赤間関住/大森土佐守」銘、二重角内に「頼澄」銘
1743	186	125	3-A	石列140以西	3-4面	石製品	硯	14.6	14.0	1.5	頁岩、赤間硯か、裏面に墨書、釘書き「天・・・」
1744	186	125	3-B	石垣7以东	焼上層	石製品	硯	9.05	4.55	0.8	頁岩、裏面に釘書き「此主/田村関口/大森土佐」
1745	186	125	3-K	石垣55町当 ライン以西	2面より下	石製品	墨(柄袋)	12.5	4.1	1.2	彫金の型か、片面「花鳥風月」

(3) 金属製品

1746は刀子。刀身は鉄製、柄部は銅製である。

1747～1827は銅製品。1747は小柄の柄袋。1748は斧。1749は割幹で、線刻と鍍金により、装飾する。1750は切羽。1751は線頭の縁。1752は鐘。1753は目貫で、一部に鍍金が残る。1754は鈴。1755は灯明具。1756は銅板に「李家」「犬」と漆で書いたもの。名札か。1757・1758は耳かき。1759・1760は毛抜きである。1761は梵鐘形の風鈴。1762は雁首銭で、1761の舌として利用されたもの。1763は戸袋。1764・1765は銃弾であろう。1766～1770は棹桿用分銅である。1767～1770には刻印がみられるが、1770の刻印の一部が「天下一」と読める以外は判読できない。1771～1781は小柄。1771の文様は富士山に西行。1772は亀甲文。1773は魚子地に陽出文。1774は「口松」字文。1775は菊花文。1776は竹文。1782・1783は小柄の飾板。1782は竜文で、両目と玉を金象嵌する。1783は七宝繫文で、釘孔が見える。1784～1788は切羽。1789～1791は線頭の縁。1790は側面に菊花文。1792～1794は鐘。1795～1801は目貫。1795は菊、1796は馬、1797は団扇をかたどる。1800は蟠螂文がみえる。1801は獅子形の目貫。裏金が残る。1802は簪。1803は棹桿用分銅。4面の刻印のうち、2つは「天下一」「口太郎」と読める。1804は両替天秤の針口である。1805は扇形分銅。片面に「伍両」の線刻と桐文の刻印がみられ、背面にも文字がみえる。後藤家の花押か。1806・1808は飾金具。1807は飾釘。1809・1810は方形の水漬。1811は棒状で、線刻がみえる。眉作り道具か。1812・1813は蓋。1814・1815はおろし金。1814は表裏でおろし目の細さが異なる。1816は小柄の柄袋。1817～1819は目貫。1817は菊、1818は牛、1819は兎をかたどる。1820は糸印である。鍍は獅子をかたどり、印面は円形。1821は鈴。1822・1823は銅製部品にガラス板を嵌め込んだもので、用途は不明である。平面の形状は、1822が円形、1823がD字形である。1824・1825は戸袋。1826は柄鏡。菊文、南天文がみえる。「天下一藤原作」銘がある。1827は匙とみられる。

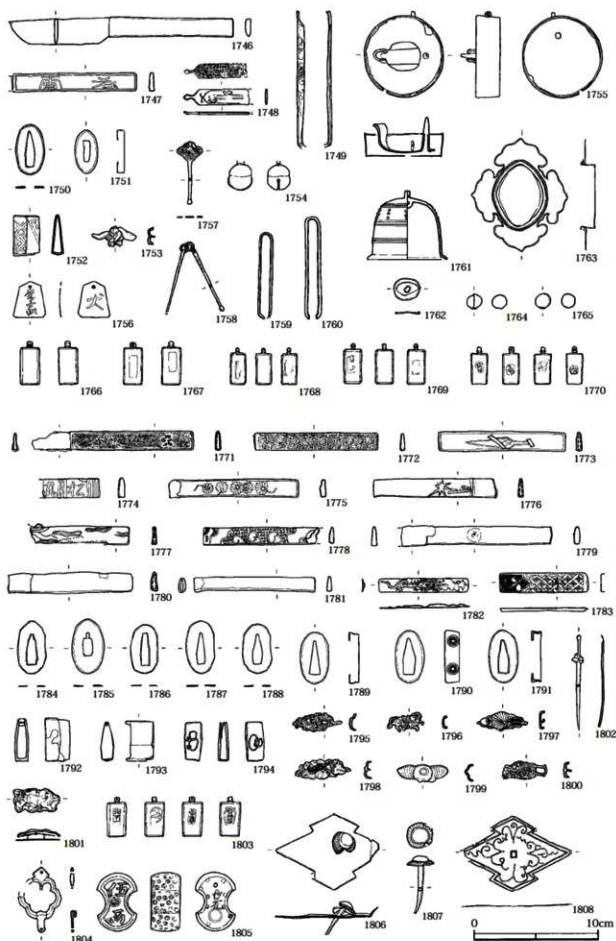
1828～1839は鉄製品。1828～1830は握り鉄。1831は手斧。1832は鑿。1833は左官鏡か。1834は錘。括れ部分に帯状の鉄板を巻きつける。1835は分銅。1836は甲冑の護部。1837は包丁。1838・1839は火打金で、中央部が摩滅している。

(4) 豆板銀

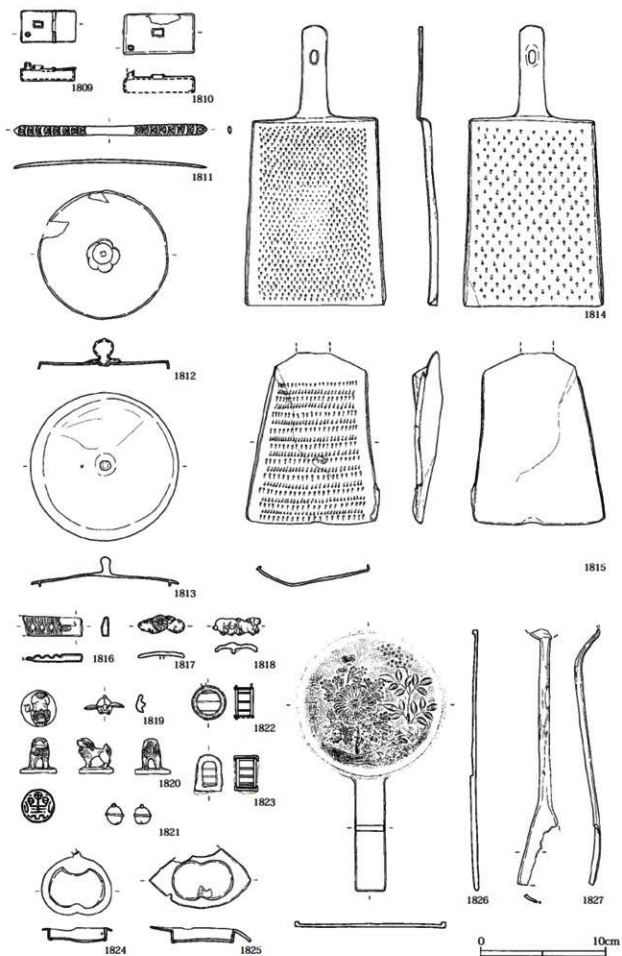
1～3地区では合計14点の豆板銀が検出された。表面の刻印と応用地質株式会社による成分分析の結果から、これらの豆板銀の時期を判定了。これについてはすでに論考¹⁾があるため、ここでは概略を述べる。1842～1844と1840・1847・1850・1851の7点は銀の含有率が80%以上であることから、慶長期あるいは正徳・享保期であろう。1841・1845・1846・1848は銀含有量が60%前後であり、元禄期と考えられる。1849は銀含有量が27%と天保期に近いが、一括出土した1848・1850・1851の通用が1738年には停止することから、宝永三ッ宝の可能性が高い。1852の銀含有量は28%であるが、「文」字の小刻印がみられることから文政期とみられ、1853は銀含有量が38%で、「宝」字の小刻印がみられることから宝永三ッ宝の可能性が高い。

注

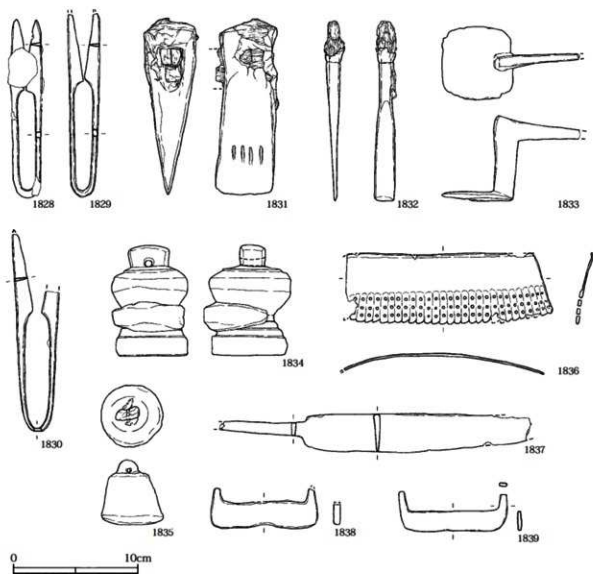
- 1) 谷口哲一 「萩城跡(外堀地区)出土の豆板銀」『陶城』第13号 財団法人山口県教育財団 山口県歴史文化財センター2000
- 2) 谷口哲一 「萩城跡(外堀地区)出土の豆板銀—平成12年度調査から—」『出土銭貨』第15号 出土銭貨研究会 2001



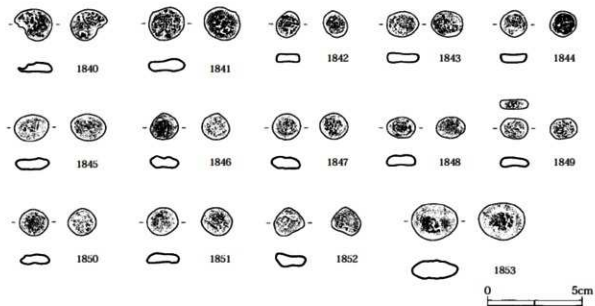
第187图 1~3地区金属製品①(1/3)



第188图 1~3地区金属制品②(1/3)



第189图 1~3地区金属制品③(1/3)



第190图 1~3地区豆板銀(1/2)

表27 1～3地区豆板銀一覧

単位: cm

遺物番号	押印番号	図版番号	地区	出土地点	種類	材質	長径	短径	厚さ	重さ(g)	重さ(匁) 1匁=3.75g	備考
1840	190	130	2-H	SK47	豆板銀	銀	1.95	1.05	0.48	8.2	2.2	慶長または正徳・享保
1841	190	130	2	遺構検出	豆板銀	銀	1.93	1.76	0.67	12.7	3.4	元禄
1842	190	130	1-Z	4面(焼1層上画)	豆板銀	銀	1.33	1.22	0.47	4.5	1.2	慶長・正徳
1843	190	130	1-A	2面	豆板銀	銀	1.73	1.4	0.48	6.9	1.8	慶長・正徳
1844	190	130	3-H	石垣74以东トレンチ炭層	豆板銀	銀	1.36	1.36	0.5	5.53	1.5	慶長・正徳
1845	190	130	3-A	かまど81完掘時	豆板銀	銀	1.8	1.4	0.61	8.8	2.3	元禄
1846	190	130	3-B	石垣7以西遺構検出(SK92直上)	豆板銀	銀	1.45	1.35	0.6	6.9	1.8	元禄
1847	190	130	3-B	2-4面(石垣7以西遺構検出)	豆板銀	銀	1.5	1.35	0.62	7.0	1.9	慶長・正徳
1848	190	130	3-B	2画より下4面削りまで(石垣7以西)	豆板銀	銀	1.5	1.12	0.62	5.22	1.4	慶長・正徳または元禄
1849	190	130	3-B	2画より下4面削りまで(石垣7以西)	豆板銀	銀	1.38	1.08	0.5	4.6	1.2	宝永3匁宝
1850	190	130	3-B	2画より下4面削りまで(石垣7以西)	豆板銀	銀	1.5	1.4	0.5	5.8	1.5	慶長・正徳
1851	190	130	3-B	2画より下4面削りまで(石垣7以西)	豆板銀	銀	1.65	1.45	0.5	7.3	1.9	慶長・正徳
1852	190	130	3-A	石垣8除去後清浄(石垣7以西)	豆板銀	銀	1.62	1.41	0.59	5.97	1.6	文政
1853	190	130	3-I	SE79	豆板銀	銀	2.4	1.9	0.95	21.0	5.6	宝永3匁宝

(5) 骨角・ガラス製品 (第191図 図版131)

1854から1875までは骨角製品。1854は文様が朱で一部朱の上に金彩がある髷。1855は金彩を施す髷。1856は髷。1857は櫛払。長さ5.0cm、幅2.7cm、厚さ0.3cm、フォーク状の櫛歯が12本ある。胴部には飾りを施す。1858から1861は櫛刷毛。1862、1863は屑作道具の中の「シン入」。1864は同じく「ヨコオシ」。1865、1866は拍板か。1867は茶入れの蓋で象牙製。1868は根付。1870、1871は双六の駒。1872、1873はボタン。1874は厘秤の棹。1875は1分刻みの5寸の折尺。1876から1879まではガラス製品。1876、1877は緒締。1878は壺か。緑色の鉛珪酸塩ガラス¹⁾である。1879は壺。紫色ガラスに金彩が施されている。鉛珪酸塩ガラス²⁾である。

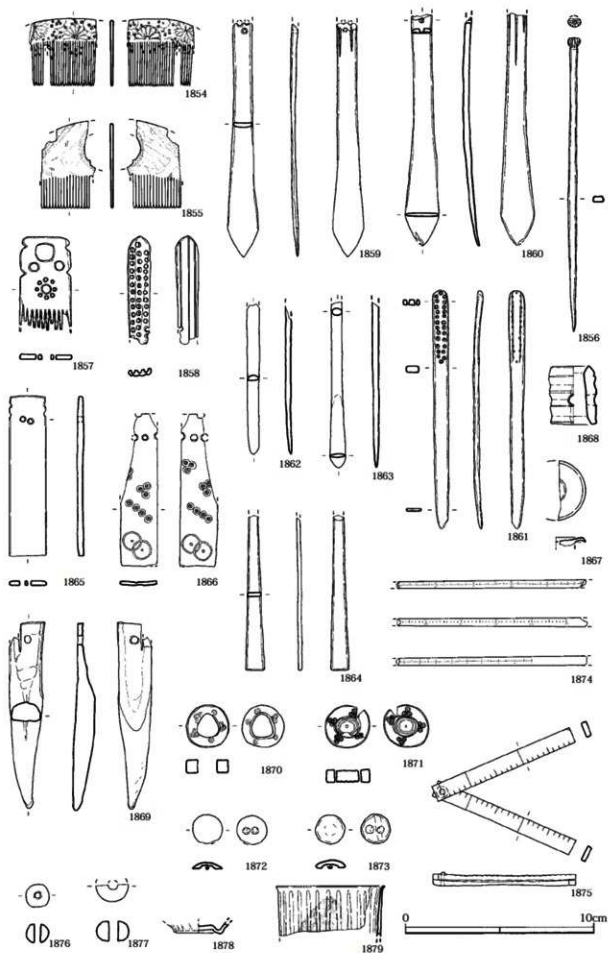
注

1) 2) 応用地質株式会社による。

表28 1～3地区 骨角・ガラス製品一覧

単位: cm * : 残存値

遺物番号	押印番号	図版番号	地区	出土地点	種類	材質	長径	幅	厚さ	備考
1854	191	131	1-C	石列41以东	右段脇	骨角製品	髷	3.6	0.1	文様は朱、朱の上に金彩
1855	191	131	1-G	石垣52以东	石垣7トレンチ内	骨角製品	髷	4.7	0.2	金彩
1856	191	131	1-D	石列47以东	第2段トレンチ	骨角製品	髷	15.5	0.5	0.3
1857	191	131	2-H	石垣39以东	第7段トレンチ	骨角製品	櫛払	5.0	2.7	0.3
1858	191	131	1-Z	石列567以西	3画一	骨角製品	櫛刷毛	*5.7	1.2	0.4
1859	191	131		1トレンチ北		骨角製品	櫛刷毛	*12.4	1.0-1.6	先端部1.1-0.2 刷毛部0.4
1860	191	131	2-G	東西トレンチ南面側	第1段トレンチ上	骨角製品	櫛刷毛	*12.3	1.0-1.8	0.2-0.3
1861	191	131	2		1-2画	骨角製品	櫛刷毛	12.6	8.0	3.0
1862	191	131	2-4		1-2画	骨角製品	屑作道具	*8.9	0.6	0.3
1863	191	131	2-G		第1段トレンチ下	骨角製品	屑作道具	*8.7	0.6-0.85	0.1-0.4
1864	191	131	1-H	石垣52以东	1画一	骨角製品	屑作道具	*8.2	0.5-1.0	0.15-0.2
1865	191	131	2-A	石垣13	第1段トレンチ上	骨角製品	拍板か	8.4	2.0	0.3
1866	191	131	1-Y	石垣525以东	2'-3画	骨角製品	拍板か	8.1	2.0	0.2
1867	191	131	3-A	石垣7-9間	2-3画	象牙製品	茶入れの蓋	残存値2.2		最大厚0.3
1868	191	131	2-B	石垣58以东	第1段トレンチ上	骨角製品	懸付	高2.4	3.1	0.7
1869	191	131	1-N		焼トレンチ上砂層	骨角製品	根付か	9.7	0.1-1.8	0.4-1.0
1870	191	131	2	南側		骨角製品	双六の駒	径2.2		0.7
1871	191	131	2-G		第1段トレンチ下	骨角製品	双六の駒	径2.3		0.7
1872	191	131	3-B	石垣7以东	焼トレンチ上	骨角製品	ボタン	径1.8		0.3
1873	191	131	2-1	東西トレンチ	第1段トレンチ	骨角製品	ボタン	径1.6		0.4
1874	191	131	2-A	石列588検出	第1段トレンチ下	骨角製品	厘秤の棹	*10.1	0.3-0.4	
1875	191	131	3-M	石垣55除去後の遺構検出	3画	骨角製品	折尺	7.9	幅0.9	0.3
1876	191	131	1	第1トレンチ南	表1-1砂層	ガラス製品	緒締	長径1.2	短径1.0	孔径0.3
1877	191	131	3-A	石垣7以西	2画以下	ガラス製品	緒締	径1.7	孔径	0.5
1878	191	131	2	遺構検出南側		ガラス製品	壺か	残存高0.6	底径1.4	0.2
1879	191	131	2-C	石垣36以西	2-3画	黒灰色細砂岩	壺	残存高2.6	復元径5.8	最大厚0.2



第191図 1～3地区骨角・ガラス製品(1/2)

V 総括

文献調査から堀幅に関して20間(約40m)から8間(約16m)にいたるまでに3つの時期があることがわかる。また、これまでの発掘調査結果からは遺構面に大きく3つの画割があることがいえる。既報告「1」「II」のまとめも踏まえながら、町屋の形成過程と外堀の変遷をまとめ、総括としたい。

堀幅20間

当初の外堀は、慶安5(1652)年絵図(第2図)に記されているように「堀幅二十間、深さ一丈五尺、内水深三尺」であった。また、惣門へ通じる道「釣道」に「土橋」の記述も見える。1、2、3地区や5-中区の調査などから基礎となる砂堆を袋状に掘り込み、法面の処理は土留めの石列程度で、緩やかに傾斜させて掘り込まれていたと思われる。また、堀は水を溝々と湛えてはおらず、堀底の東半分程度は空堀状態であったと思われる。当初の堀の東端は現側溝から西1.4~2.0mの範囲にあると見られるが、確実な遺構は検出できなかった。外堀は元和8(1622)年に完成するが、一方で、元和8(1622)年には「懸作り」という堀幅を狭めない工法で町屋を作り、「片河町」が成立することも文献に出てくる。調査で検出される古い遺物は、2地区第2焼土直下層をはじめとする各地区最下層の17世紀前半から半ばにかけてのものである。3地区では初期町屋に伴う遺物は17世紀前半から後半にかけてのものであることから、17世紀後半には確実に外堀全体を通して町屋が「懸作り」によって成立していたと見られる。調査区においては4面以下(2地区では、第2焼土直下層)がこの時期にあたる。

一方このような初期町屋に関連する遺構としては、3地区から5地区にいたる調査で、現道路に並行して外堀法面傾斜に沿って1列ないし2列の石垣があることが確認された。花崗岩主体の野面石を3段ぐらい積んだ簡単なもので、基底面や裏の整地土から17世紀中ごろの遺物が出土する。また、その石垣の堀側基部に並行して礎石が並ぶという共通点が見いだせる。すなわち、土留めの石垣東側の家屋の床面を堀側に張り出させ柱で支える「懸作り」構造で、堀東端から平均4~6m程度張り出した規模であったと見られる。5-中-E区のSKR6・集石101がこの時期の遺構として検出できた最西端遺構で、10m幅程度を生活面として占有していたことになる。

堀幅14間

藩は、元文4(1739)年に堀幅を8間に縮小し石垣を構築する大改修を行う(第2図)が、それまで堀幅は14間であったと文献にある。また、元禄8(1695)年、林[左衛門]なる人物が「懸作り」の差し図を持参して、惣門前の「釣道」に面して町屋を建てることを藩に願ひ出て許されたという記述もある。この時期は町屋が堀側に本格的に拡張され、「片河町」が完成された時期で、調査では3面(1部2面を含む)の時期、17世紀末から18世紀前半に相当する。それまでの敷地幅を踏襲しそれを堀側に延長する区画と、いくつかの敷地を統合して新たな区画とし、間口が広がる区画が現れる。また、道路に並行して石垣を構築して生活面の高上げが行われる。3地区ではこの石垣の裏込めに焼土が使われていた。焼土は各地区に見られ、遺構面を確定する鍵層になるとともに、この焼土からの一括遺物は、時期決定の良好な資料といえる。文献では、延宝6(1678)年、堀内の火災が外堀を越えて城下に延焼し、片河一帯が焼失する。」とある。火災後の焼土の処理と外堀緩斜面の平坦化を併せて行い、町屋の規模を拡大させたことは十分考えられる。また、区画には前述したように2種類認められ、統合された広い区画には長屋状の建物が推定できる場合もあることから、この改変はいわゆる「民活」

表29 敷地間口一覧

地区	区	間口(m)	間口(間)
1	O	5.4	2.7
	N	4.1	2.1
	M	7.8	3.9
	L	5.8	2.9
	K	6.1	3.1
	J	20.7	10.4
	I		
	H		
	G	16.1	8.1
	F		
	E	9.8	4.9
	D	6.3	3.2
	C	6.1	3.1
	B	5.9	3.0
	A	6.2	3.1
	Z	13.9	7.0
	Y		
	X		
2	I	—	—
	H	5.0	2.5
	G	6.0	3.0
	F	4.0	2.0
	E	4.3	2.2
	D	8.5~13.2	4.3~6.6
	C		
	B		
	A		
	3	M	5.1
L(北)		4.2	2.1
L(南)		8.1	4.1
K		7.9	4.0
J		6.1	3.1
I		5.0	2.5
H		4.9	2.5
G(北)		4.9	2.5
G(南)		6.0	3.0
F		5.9	3.0
E		6.1	3.1
D		5.8	2.9
C		6.0	3.0
B		8.0	4.0
A		8.1	4.1

地区	区	間口(m)	間口(間)
4	北東・北西(北)	—	—
	北東・北西(中)	5.0	2.5
	北東・北西(南)	6.0	3.0
	A	6.0	3.0
	B	8.0	4.0
	C	4.2	2.1
	D	6.4	3.2
	E	12.0	6.0
	F		
	5	Y(西)	9.0
Y(東)		16.0	8.0
Z		18.8	9.4
A			
B		10.4	5.2
C(北)		7.6	3.8
C(南)		5.0	2.5
D		6.2	3.1
E		10.0	5.0
F(北)		6.0	3.0
F(南)		4.4	2.2
G		6.4	3.2
H		12.0	6.0
I		10.0	5.0
J			
K			
L(北)		6.0	3.0
L(南)	4.9	2.5	
6	M	9.0	4.5
	A		
	B	6.6	3.3
	C	5.6	2.8
	D(北)	7.6	3.8
	D(中)	4.4	2.2
	D(南)	4.0	2.0
	E	14.6	7.3
	F	4.0	2.0
	G	7.0	3.5
H	6.4	3.2	
I	7.0	3.5	

※1間を2mとする。

※地区・区は北から順に並ぶ。

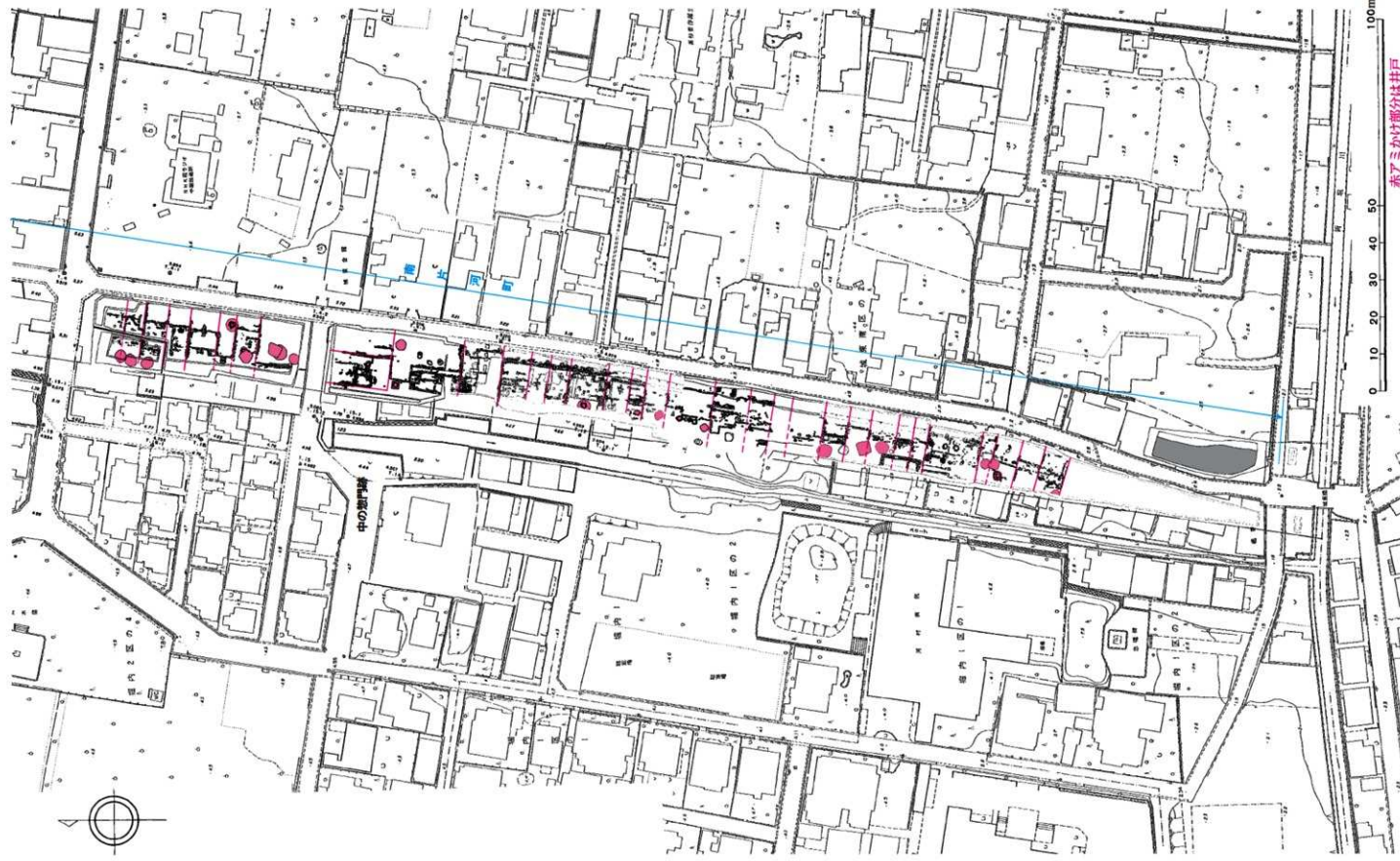
※Y(西)は北向きに間口が狭く。



赤アミ部分の住戸
赤○可遊指定庫



第192図 可能推定図①



赤でミかけ部分は并戸

赤で可動推定線

黒でミかけ部分は道路整地帯

第193図 可能推定図②

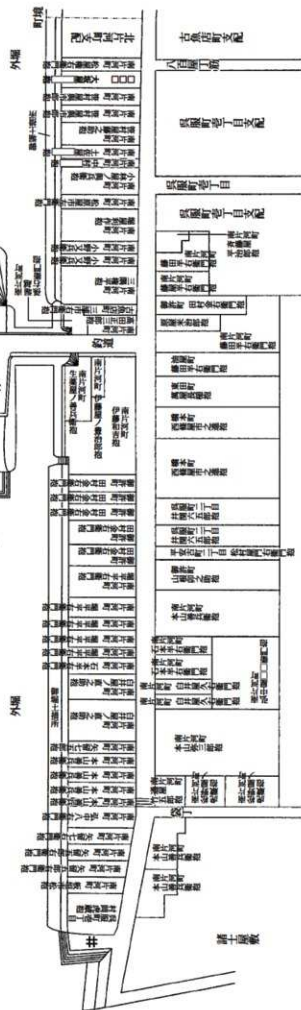
※安政年間(1854~1860)にえがかれた「南片河町絵図」(萩博物館に写真のみ現存)より復元。

※宝暦元年(1751)の「萩大絵図別冊」(山口県文書館蔵)によると南片河町には180蔵(蔵は世帯数を表す)の世帯数があった。「南片河町、180蔵。本料50蔵、店借107蔵、内貸屋23蔵、蔵18分所。(第194図および説明は根本朝子氏の文献調査による。)」



第195図 片河町屋復元想像図 (CG)

南片河町



第194図 南片河町地割図

で行われたことがわかる。「堀幅14間」という画期は、藩が命じて堀幅をせよめると言った「外堀」の画期と言うより、「町屋の進出」という視点でとらえた場合の画期と言うべきであろう。

14間ラインは、調査区の中央やや西側に位置するが、井戸や埋塞といった住居裏の生活遺構は認められるものの、石垣のような堀とを区画するものは認められない。法面を嵩上げた石垣基底部から平坦に伸びた遺構面がこの辺りから緩やかに堀へ傾斜していく様子が上層からわかるのみである。この時期の景観を推定する重要な遺構が5-北区、中区北半部分である。現道路から12mラインに傾斜面を嵩上げる石垣があり、その堀側の五郎太石が敷き詰められた集石の中に礎石が散在する。この集石の下層は、「井筒屋」名のある木筒が出した木器包含層となる。こういった所々にある大普請の石垣と家の堀側部分が「堀幅14間」の景観であったと思われる。5-北区の北向き区画は「釣道」に面する町屋の景観を示す唯一の遺構である。文献から寛保元（1741）年釣道町は解除され、上堀と枳形が作られたことになっているので、上限下限がわかる唯一の区画である。17世紀末から18世紀前半における住居を復元する上で非常に重要な遺構となった。

堀幅8間以後

元文4（1739）年から寛保元（1741）年にかけての堀幅8間ラインの石垣構築と周辺部分の改修は、町屋にとっても画期となる。調査区では1・2面の時期に相当し、18世紀後半から19世紀前半にあたる。今まで同様、前代の町屋構造を継承し最小の変更にとどまる場合と、堀側に石垣を構築して旧町屋面を嵩上げし、新たな町屋面を形成するほどの大きな変更を行う場合の2者があることはやはり町屋部分の変更が町役で行われたことを示している。前者は南片河町の5-中区から南、北片河町の1地区北半部や3地区北半部に多く見られる。後者は北の惣門周辺の2地区や1地区南半、中の惣門周辺の3地区南半や4地区、5-北区などに見られる。各区画の変更の相違は住人の経済力や家屋の使用目的の相違、例えて言えば、そこに自分が家を持って暮らすのか、店や工房としてのみ使うのか、他人に貸すのかといった相違と思われる。

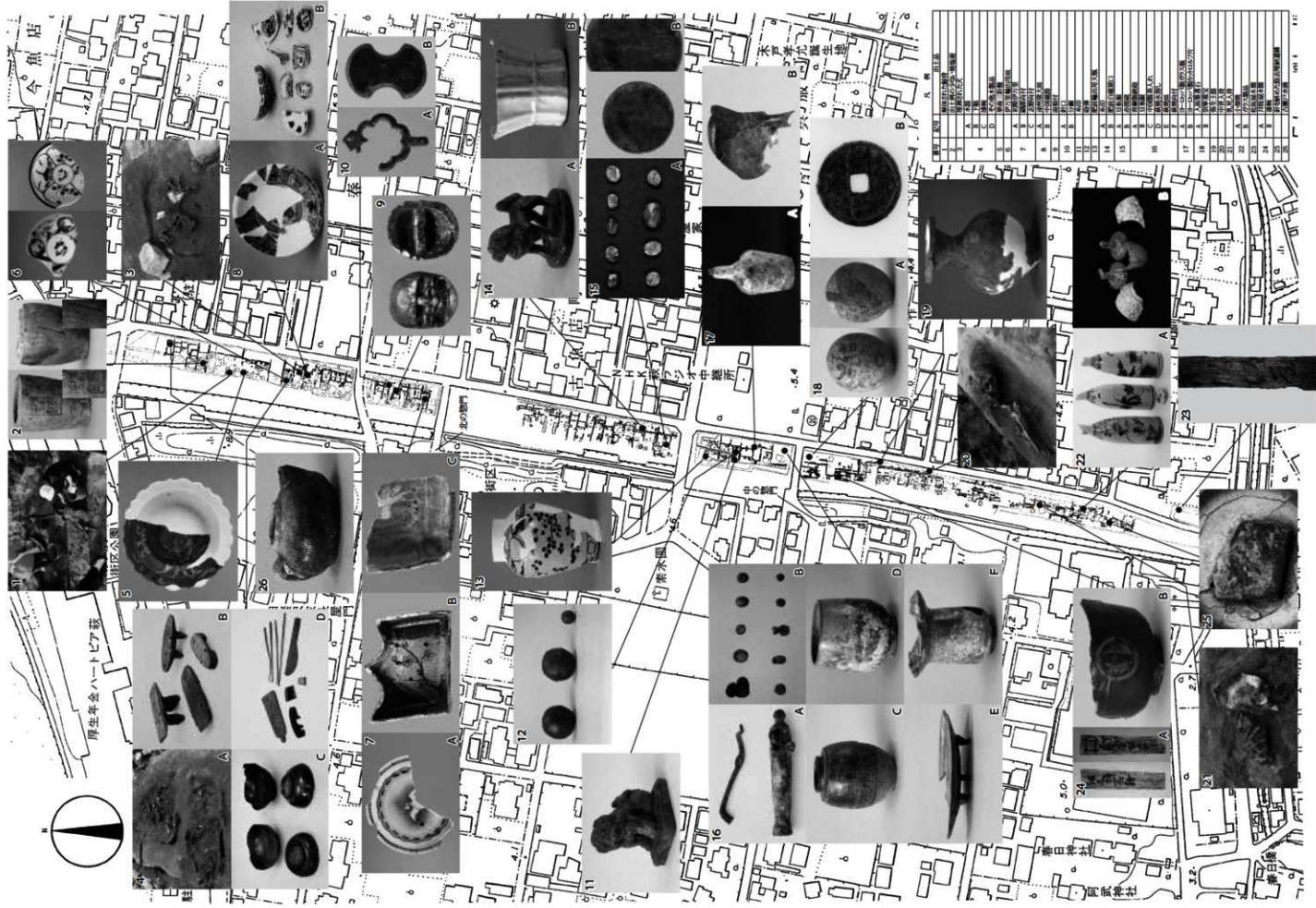
藩の許しを得て本格的に堀へ町屋が進出したこの時期の町屋の構造は、いままでの「懸作り」から当然変化するが、調査で検出した遺構からは堀の傾斜を利用した構造であることに変わりはないことがわかる。すなわち外堀の法面傾斜を石垣によって整えて石垣以东の上層の床面を堀側に張り出させ、以西の上層の天井とする。外堀の初期町屋構造と想定される「懸作り」の発展形態とも言うべき上層構造が想定できるのである。（第195図）。

発掘調査から検出したこの中心時期の町屋区画を示したのが表29と第192・193図である。計71区画（萩市教育委員会調査区と近代に新設した道路分はのぞく。）検出した。間口幅の最小は4.0m、最大は長扇状区画の20.7m、一軒の敷地としては18.8mが最大である。絵図をあてはめてみると惣門周辺および、東西方向の道が河内筋と交わる付近であったりといった部分に大普請の区画が集中する。藩の何らかの規制（城下町としての見栄えの意識など）がはたらいっているのであろうか。

この堀端にいつ頃どんな人々が暮らしたかは発掘調査からおぼろげに見えてはくる。第196図で示す遺物の内容から蔵を持ち、茶の湯をたしなむ豪商から店借の職人まであらゆる階層の町人が暮らしたことがわかる。そして、総じてかなり豊かな生活レベルであったことがわかった。

参考文献

- 1) 萩市史編纂委員会 『萩市史』1983
- 2) 萩市教育委員会 『萩城跡外堀調査報告書』1988



第1968図 遺物出土地点一覽(縮尺不定)

菽城跡(外堀地区)における寄生虫卵および花粉分析

応用地質株式会社

菽城跡外堀地区で発掘された埋蔵の用途を推定するための寄生虫卵分析、および7地区木器包含層の上層から当時の古環境(古植生)を推定するための花粉分析を実施した。

1. 自然科学分析試料

各試料の詳細を表52に示す。なお、試料番号は山口県埋蔵文化財センターによる識別番号に従った。

表52 分析試料一覧

地区名	試料名	寄生虫卵分析	花粉分析	土質
外堀6地区D区	埋蔵104	○	—	灰褐色砂礫混土
外堀6地区E区	埋蔵81	○	—	黄灰褐色土
外堀6地区E区	埋蔵157	○	—	灰褐色砂質土
外堀6地区F区	埋蔵106	○	—	灰オリーブ褐色砂質土
外堀7地区	7地区木器包含層 (木器出土地点)	—	○	黒灰色砂礫混土

2. 分析方法

2-1 寄生虫卵分析

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて搅拌
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25% フッ化水素酸を加えて30分間静置(2-3度混和)
- 5) 遠心分離(1500rpm、2分間)による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、その種類を同定・計数
- 9) 検出された種類とその個数の一覧表にまとめる

2-2 花粉分析

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）を基本に、以下のように行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で籾などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 7) 光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、その種類を同定・計数
- 8) 検出された種類とその個数の一覧表にまとめる

検鏡は、生物顕微鏡によって300-1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974,1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表面断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからまとめてイネ属型とした。

3. 分析結果

3-1 寄生虫卵分析

(1) 分類群

出現した分類群は1分類群であった。これらの学名と和名および較数を表53に示し、出現した分類群を第210図に示す。以下に寄生虫の特徴を記す。

表53 寄生虫卵分析結果

分類群		6 地区 D 区	6 地区 E 区	6 地区 E 区	6 地区 F 区
学名	和名	埋蓋104	埋蓋81	埋蓋157	埋蓋106
Helminth eggs	寄生虫卵	0	0	0	0
Ascaris	回虫卵	0	0	0	1
Total	計	0	0	0	1
Helminth eggs frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.7 ×10
	肉らかな消化残渣	()	()	()	()
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度	2.2 ×10 ⁷	1.1 ×10 ⁷	7.0 ×10	4.9 ×10

・回虫 *Ascaris (lumbricoides)*

回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。卵には受精卵と不受精卵があるが、遺跡等の堆積物の分析では、長期の堆積や炭素処理の影響をうけ、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり楕円形で外側に蛋白質膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

(2) 各試料の結果

1) 6地区D区埋燻104

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

2) 6地区E区埋燻81

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

3) 6地区E区埋燻157

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

4) 6地区F区埋燻106

回虫卵が 9.7×10 個/cm²検出された。一方、明らかな消化残査は検出されなかった。

3-2 花粉分析

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉15、シダ植物胞子2形態の計37である。これらの学名と和名および粒数を表54に示し、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第209図に示す。主要な分類群を第210図に示す。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

マキ属、モミ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシダ属-アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、ブドウ属、ツツジ科

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クリ科-イラクサ科、マメ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、キヌウリ属、タンポポ科、ヨモギ属、ペニバナ

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫卵

以下にこれらの特徴を示す。

・回虫 *Ascaris (lumbricoides)*

回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。卵には受精卵と不受精卵があるが、遺跡等の堆積物の分析では、長期の堆積や薬品処理の影響をうけ、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり楕円形で外側に蛋白質を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫 *Trichuris (trichiura)*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜ちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・異形吸虫類 *Metagonimus - Heterophyes*

日本各地でみられる横川吸虫は、とくにアユの豊富な河川や湖の周辺に濃厚である。国外では、台湾をはじめ中国、朝鮮半島、東南アジアなどに分布する。有害異形吸虫は、瀬戸内海沿岸をはじめ海に近い地域にかなり広く見られる。卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ で、短楕円形または卵形、一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。糞便とともに外界に出た横川吸虫卵は、水中で第1中間宿主のカワニナに食べられ、ミラシジウムとなりスポロシスト、レジア、セルカリアを経て水中に現れ、第2中間宿主のアユの鱗から侵入しメタセルカリアになり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理の影響などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

(2) 7地区木器包含層(木簡出土地点)(黒灰色土、砂レキ混)の花粉群集の特徴

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が優占し、ほかにカヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ミズアオイ属などが出現する。また低率ではあるがキュウリ属が検出された。樹木花粉では、マツ属複雑管束重直属、コナラ属アカガシ重直属が比較的多く出現する。寄生虫卵がわずかに検出される。

4. 考 察

4-1 寄生虫卵分析による埋蔵の用途の推定

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

萩城跡(外堀地区) 6地区の4試料(D区埋蔵104、E区埋蔵81、E区埋蔵157、F区埋蔵106)の

寄生虫卵分析を行った結果、いずれの試料も寄生虫卵は検出されなかつた、わずかに検出されたのみであった。同時に計数した花粉の密度も非常に低いため、寄生虫卵や花粉などの有機物遺体そのものの密度が極めて低い堆積物であることを示している。このことから、乾燥や乾湿を繰り返す堆積環境によって有機物遺体が分解されてしまったか、あるいは堆積時間が短かった可能性も考えられる。いずれにせよ埋壙の堆積物の分析結果からは、糞便そのものの堆積や糞便の混入などは認めることはできない。

4-2 花粉分析による古環境（古植生）の推定

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比や、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積層単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積層の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

7地区木器包含層（木簡出土地点）の花粉群集は、イネ属型を含むイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの草本が多い特徴を示す。他にミズアオイ属、アブラナ科がやや多く、キュウリ属が検出されている。これらの草本は水田雑草、耕地雑草、栽培植物である。周囲にイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などの草本が主に生育し、水田ないし畑が営まれていたものと推定される。畑作物としては、キュウリ属やアブラナ科が想定される。近隣には、マツ属複雑管束亜属やコナラ属アカガシ亜属を主要素として構成される林が分布し、生態的にアカマツやアラカシの二次林が想定される。なお、検出された寄生虫卵密度は低いため、生活域からの汚染か人糞施肥が考えられる。

以上より、周辺には水田雑草、耕地雑草の性格をもつ草本が生育し、水田やキュウリ属やアブラナ科の畑地の分布が示唆される。近隣にはアカマツ（マツ属複雑管束亜属）やアラカシ（コナラ属アカガシ亜属）の二次林が形成されていたと推定される。

参考文献

寄生虫卵分析

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1982) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils, *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.
- 金原正明・金原ま子 (1992) 花粉分析および寄生虫, 藤原京跡の使所遺構—藤原京7条1坊一, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金子清俊・谷山博一 (1987) 線形動物・扇形動物, 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.
- 金原正明 (1999) 寄生虫, 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.131-138.

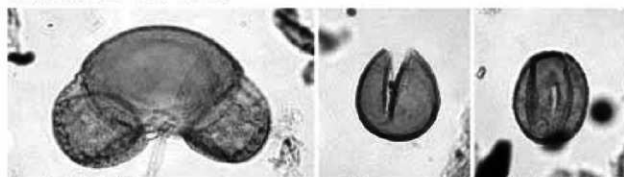
花粉分析

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

表54 花粉分析結果

学名	分類	和名	7地区木器包内屑 (木屑出土地点)
Arboreal pollen		樹木花粉	
<i>Podocarpus</i>		マキ属	1
<i>Abies</i>		ヒノキ属	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxydon</i>		マツ属強韌管束亜属	67
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	2
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3
<i>Myrica</i>		ヤマモモ属	1
<i>Betula</i>		カバノキ属	4
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシロコ属-アサダ	4
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2
<i>Castanopsis</i>		シイ属	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	43
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属 ケヤキ	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2
<i>Vitis</i>		ブドウ属	1
Ericaceae		ツツジ科	1
Arboreal * Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イヌクサ科	2
Leguminosae		マメ科	1
Nonarboreal pollen		草本花粉	
Gramineae		イネ科	125
<i>Oryza</i> type		イネ属型	45
Cyperaceae		カヤツリクサ科	29
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	11
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サエタデ節	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカサ科-ヒユ科	15
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1
<i>Ranunculus</i>		キンボウケ属	2
<i>Thalictrum</i>		カラムツソウ属	1
Cruciferae		アブラナ科	13
<i>Halenia-Myriophyllum</i>		アリトウゲサ属-フサヒ属	1
<i>Cucumis</i>		キュウリ属	1
Lactacideae		タンポポ科	2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	19
<i>Castanopsis tinctorius</i>		ヘニバナ	1
Fern spore		シダ植物胞子	
Monolate type spore		単葉溝胞子	3
Trilolate type spore		三葉溝胞子	6
Arboreal pollen		樹木花粉	144
Arboreal * Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	267
Total pollen		花粉総数	414
pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	1.3
			×10 ⁴
Unknown pollen		未同定花粉	5
Fern spore		シダ植物胞子	9
Helminth eggs		寄生虫卵	
<i>Ascaris(bombicoides)</i>		回虫卵	2
<i>Trichouris(trichinura)</i>		鞭虫卵	2
<i>Metagonimus-Heterophyes</i>		異形吸虫卵	2
Total		計	6
		試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	7.2
			×10
Digestion remains		消化残渣	()

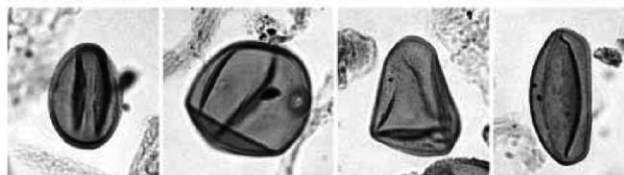
萩城跡（外堀地区）の花粉・寄生虫卵



1 マツ属複維管束型属

2 スギ

3 コナラ属コナラ亜属

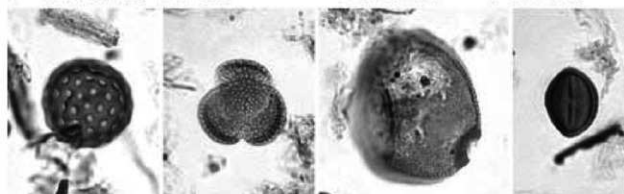


4 コナラ属アカガシ亜属

5 イネ属型

6 カヤツリグサ科

7 ミズアオイ属

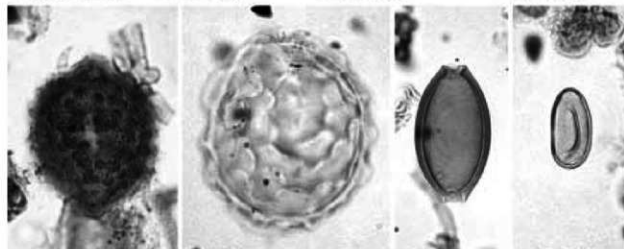


8 アカザ科-ヒユ科

9 アブラナ科

10 キュウリ属

11 コモギ属



12 ベニバナ

13 回虫卵

14 鞭虫卵

15 異形吸虫卵

— 10 μ m

第210図 顕微鏡写真（寄生虫卵および花粉）

萩城跡(外堀地区)出土ガラス製品の材質分析

応用地質株式会社

1. はじめに

萩城跡から出土したガラス製品の製作年代や製作地域等を明らかにするために、蛍光X線分析により化学組成の検討を行った。

2. 試料と分析方法

試料は次の表55に示す、萩城外堀跡より出土したガラス製品7点である。

表55 分析試料一覧

番号	遺物 No.	調査名	採取位置	採取口	用途
①	1141	99 萩城外堀	5地区遺構検出掘削	19990611	ガラス製 器片
②	1143	04 萩城外堀	6-E区 SB189直上整地層	20040707	切り容器
③	1142	04 萩城外堀	6-F区 SB189直上整地層	20040712	壓吹きガラス
④	1147	04 萩城外堀	6-F区 SB189直上整地層	20040715	ガラス靴部・台座部
⑤	1148	04 萩城外堀	6-E区 SB189直上整地層	20040720	ガラス靴部・台座部
⑥	1146	04 萩城外堀	6-F区 SB189直上整地層	20040720	カップ片
⑦	1144	04 萩城外堀	6-F区 SB189直上整地層	20040809	亀甲文カットガラス

各遺物とも分析前に肉眼および実体顕微鏡による観察を行った。各遺物についての特徴および分析箇所を以下に述べる。

① 遺物 No.1141

淡緑黄色透明の棒状で、ガラス棒が右ねじの方向に捻られている。断面は方形で、螺旋状に四本の稜線が明瞭に存在する。気泡も螺旋状に伸びている様子が実体顕微鏡でわずかながら観察できる。見た目は他の遺物より風化していない印象を受ける。しかし、よく観察すると表面がマット状になっており、欠損面も同様にマット状になっているため、これは風化によるものであると思われる。なお、欠損面の一部はマット状ではなく虹色光沢がある面もあった。捻ったガラス棒を使用している例としては、虫籠(岡田1969)や筆巻(岡田1969、出水・棚橋1977)、簪(棚橋1984)などがある。また、岡田1954には、「玻璃づくり絵詞」という絵巻の写しが紹介されており、ガラス素材を捻って引っ張っている様子が描かれている。

分析は端の極々微小な出土後にできた欠けの部分で測定した。

② 遺物 No.1143

表面は風化し淡黄白色乃至茶褐色の風化物が生成されているが、断面を見ると透明である。切り容器で、口吹きで成形した後、外面胴部に麻の葉文を施し、口縁部は平坦に研磨した後、外縁部を斜めに研磨して角を落としてある。底部は残存していない。

出土後に数片に割れており、破断面を分析ポイントとした。

③ 遺物 No.1142

全面的に風化が進んでいるが、もとは透明であったと思われる。内面にも凹凸があり、型吹きで作ったことを示している。口縁部は平坦で研磨による成形であることがわかる。底部は残存していない。形状から割り型で作られたと思われるが、残存部には外面の型の境目は特に見受けられなかった。

断面の一部に出土後にできた小さな欠けが見受けられたので、そこを分析ポイントとした。

④ 遺物 No.1147

ガラスの脚部および台座部である。透明やや緑がかっている。風化が進行している。ポンテ痕が底部に残り、ポンテ痕の研磨などの調整は特にされていない。平らな面に置くと、ポンテ痕が邪魔になって若干ぐらつく。表面装飾の稜線がやや丸く、台座の底部が輪郭に沿って緑取られているため、カット技法ではなく、鑄込みによる成型の後、ポンテ竿を用いて胴部に溶着していたと思われる。胴部の底と脚部の付け根の割れ口を実体顕微鏡でよく観察すると、わずかながら溶着痕らしきものも見受けられる。類例としては、標橋1988において菊形台として数例見ることができる。

分析ポイントは、特に良好な箇所が見つからなかったため、予め底部全面について元素マッピング分析を行い、比較的風化の進行程度がましな箇所を選び分析ポイントとした。

⑤ 遺物 No.1148

ガラスの脚部および台座部である。④とほぼ同形であるが、こちらの方が風化の進行程度がやや良好である。⑤と同じ工程を経て成形されていると思われる。台座部の厚みや、脚部の高さ、径などは④と若干異なるが、これらは型からの離脱、胴部への溶着時に変形することが十分考えられ、一方、台座部の形状、径はよく揃っていることから、同型の可能性もあると思われる。なお、こちらの底部はポンテが根元から切り取られており、また、輪郭の緑取りの一端に削磨された跡があって、安定が良い。

台座部側面に出土後のものと思われる割れ口があり、そこを分析ポイントとした。

⑥ 遺物 No.1146

カップである。風化がかなり進行している。宙吹きによる成形である。底部、口縁部とも残っていないためよくわからないが、形状・大きさから見てちょうど④や⑤と同形の脚が付いていた可能性も考えられよう。螺旋状に一条の沈線が入っており、風化が進んでいることから埋蔵前のものであることがわかり、ただの傷であるように見えるが、装飾である可能性も否定できない。

残存部端の出土後にできた微小な欠けを分析ポイントとした。

⑦ 遺物 No.1144

外面に亀甲文の配されたカットガラスである。全面的に風化が進行している。もとは透明であったと思われる。上段から5、4、3面残存しているが、最上段5面の両端の面同士でもまだ平行に向かい合わせになっておらず、おそらく全周を10面にカットしているように見受けられる。亀甲文の容器は江戸後期～明治期のガラス問屋加賀屋の引札にも見ることができる。加賀屋の引札は標橋1981で紹介されている。

外面端の出土後にできた欠けを分析ポイントとした。

分析装置は浜堀場製作所製 XGT 5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1

mA の Rh ターゲット、X 線ビーム径が100 μm か10 μm 、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、試料室の大きさは350×400×40mm である。検出可能元素は Na ーしだが、Na、Mg といった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上検出感度が悪いので、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。また、B (硼素) は検出不能である。本分析での測定条件は、50kV、0.16~0.22mA、ビーム径100 μm 、測定時間1500s、パルス処理時間 P 4 に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、分析結果はどんな元素が含まれているか、あるいはどの元素が多いか少ないかといった程度に捉えるべきであることに注意する必要がある。

分析は原則非破壊で行い、測定可能な箇所の中から、各遺物最も風化の少ないであろうポイントを選んだ。特に遺物検出時等にやむを得ず出来てしまったと思われる新しい割れ、微小な欠け・研削等の破断面が遺物に見受けられた場合は、そこを測定箇所とした。なお、新たに露出させた完全な新鮮面が無い限り、一見透明で風化が見えないように見える箇所でも、実際分析してみると風化は進んでおり化学組成には変化があるため (肥塚1997)、本分析結果には、新鮮面に比較的近い面のものと、そうでない面のものがあることに注意しなければならない。

3. 分析結果

各遺物の検出元素と半定量分析結果一覧を表56に示す。

また、各試料の分析データ (マイクロスコープ画像、代表的な元素のマッピング画像、スペクトル図、半定量分析値) を、第211図~第217図に示す。

各試料の分析結果を以下にまとめる。

各試料は、いずれも、SiO₂、PbO、K₂O を主成分とするカリウム鉛柱酸塩ガラスに分類される。

その他、Al₂O₃、P₂O₅、CaO、MnO₂、Fe₂O₃、CuO、ZnO、Sb₂O₃を検出することができた。

表56 分析結果一覧 (質量比)

番号		Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Sb ₂ O ₃	PbO
①	ガラス棒	0.3	46.6	—	6.2	—	—	0.23	0.07	—	0.43	46.1
②	切子容器	—	45.4	—	10.2	1.2	0.04	0.06	0.02	0.23	0.15	42.7
③	型吹きガラス	—	48.7	—	11.2	1.5	0.06	0.09	0.02	*	0.14	38.3
④	ガラス胸部・台座部	*	49.4	2.5	1.2	1.2	*	0.09	0.04	*	0.15	45.3
⑤	ガラス胸部・台座部	—	43.4	—	9.5	—	0.07	0.08	0.04	*	0.15	46.8
⑥	カップ片	—	43.4	—	8.5	—	0.08	0.08	0.03	*	0.22	47.7
⑦	亀甲文カットガラス	—	47.7	—	10.4	1.3	*	0.06	*	0.22	0.22	40.1

— : 検出限界以下 * : 定量限界以下

4. 考 察

測定面については、④を除いて比較的新鮮面に近い箇所を分析することができた。淡黄白色風化物生成面と、一見透明な表面、出土後の欠け等により露出した破断面を分析・比較してみたところ、いずれも以下の傾向が見られた。まず、一例として⑤の結果を示す (表57)。

表57 風化面・破断面分析結果の一例(⑤) 遺物 No.1148)

番号		Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Sb ₂ O ₃	PbO
⑤	淡黄白色風化物生成面	0.4	18.2	17.8	0.1	10.4	*	0.09	0.03	*	0.18	52.8
	透明な表面	0.3	57.3	—	—	3.6	0.1	0.07	0.03	*	0.10	39.5
	新しい破断面	—	43.4	—	9.5	—	0.07	0.08	0.04	*	0.15	46.8

—：検出限界以下 *：定量限界以下

すなわち、風化物生成面においては新しい破断面より P₂O₅ と CaO が極端に多くなり、逆に K₂O は著しく減少する。そして、SiO₂ の比率も減少する。この傾向は、肥塚1997において報告されている傾向とは SiO₂ が減少傾向にある点が異なるものの、よく似ているといえる。淡黄白色風化物は、過去の分析事例(肥塚1997) からリン酸鉛 Pb₃(PO₄)₂ や塩化トリス(リン酸)五鉛 Pb₅Cl(PO₄)₃、炭酸鉛 PbCO₃ 等の存在が予想され、また、P₂O₅ と同様に CaO も特徴的に検出されていることから、同様にカルシウムの化合物も生成しているものと思われる。これらは埋蔵環境の影響で生成されたと考えられる。

一方、一見風化の見られない透明な表面においても、P₂O₅ や CaO はほとんど検出されていないが K₂O は減少傾向を示し、例えば表面が風化していない様に見えても組成は変化していた。今回、新しい破断面などがなくマッピングにより P₂O₅ や CaO が少ない箇所分析ポイントを設定した④の分析結果は、このケースに当たり、K₂O は本来もっと多いと考えられよう。

また、新しく割れた破断面でも今回の分析はあくまでも非破壊分析であり、測定面の風化層を十分に除去して新鮮面を新たに露出させたわけではない。出土後の割れの破断面であっても、埋蔵中にすでに発生していた微細なひびの影響により、水分が浸透して風化が進行していたと考えられる事例も報告されている(肥塚1997)。この事例はアルカリ珪酸塩ガラスの一種であるカリガラスにおける報告だが、風化傾向としては K₂O が減少するという同じ傾向を示しており、本分析においても出土後にできた新しい割れといえども、風化の影響がまだ残っている可能性もあり得る事を十分に考慮する必要がある。

カリウム鉛珪酸塩ガラスについては、現代の鉛クリスタルガラスと呼ばれる物もこれに分類され、重量感があり、屈折率が高く、反射率が高いことから光沢に優れ、叩くと澄んだ金属音を奏するといった特徴がある。蛍光 X 線分析を行った結果、いずれもカリウム鉛珪酸塩ガラスであろうという結果を得たが、個々を見てみるとそれぞれの組成に若干の違いが見受けられる。

①は、Fe₂O₃、CuO が他の遺物より多く、また主に鉄によるガラスへの着色の消色剤として作用する MnO₂ が検出できなかったことが、淡緑黄色の着色に影響していると思われる。また、Sb₂O₃ がやや多めに検出されていることもひとつの特徴であるといえよう。Sb₂O₃ については、江戸時代の鉛塊の分析例で Sb が検出されており(後藤他1998、原他2001)、ガラス中の鉛に含まれる微量成分であると考えられる。なお、これら鉛塊の分析報告で検出されている As や Sn 等は、Pb の影響等の関係で、本報告における分析法ではごく微量では検出し難い。

また、⑤と⑥は組成が非常に良く似ている結果となった。このことは上述した同形品である可能性を否定しない結果といえる。

本分析において最も興味深いのは、遺物により ZnO の有無が見られることであろう。②と③では、

ZnOが多く検出された。棚橋1974・1975・1979では、鉛ガラスに使用される原料の鉛について、文献からのアプローチにより検討している。その中で江戸時代の鉛ガラスの原材料の鉛は、鉛丹などの鉛化合物を使用するよりも、主として金属鉛が使用されてきたことを指摘している。金属鉛は、粉末化して石粉と混ぜ合わせる事が困難であり、加熱して熔解させて石粉を混ぜるという方法が採られる。その際、鉛を熔解させてまず最初に亜鉛を加えるという記録が残っている。文献によって、亜鉛を加える工程がある場合とない場合があり、今回の分析結果はまさにこれらの記録を反映したものである。ZnOが多く検出された場合は、金属鉛を使用してガラスが作られており、鉛の熔解後、亜鉛が加えられた。逆にZnOがほとんど検出されなかった場合は、金属鉛を使用しているにもかかわらず、亜鉛を加える工程が無い、或いは金属鉛ではなく鉛化合物が使用されている可能性を示唆する。すなわち、ZnOが多く検出されたものとほとんど検出されなかったものとは、明らかにガラス製作法の系統が異なるという事がいえる。そのように考えたとき、これは偶然に過ぎないかもしれないが、今回分析した出土品の中でZnOを多く含む遺物はいずれもカットガラスであったことも、また興味深く感じられる。

5. おわりに

江戸時代のガラスには、船載品、長崎ガラス、大阪ガラス、江戸ガラス、薩摩ガラス、その他美濃、福岡、佐賀、京都、水戸などある程度は限られている(由水・棚橋1992)。今回の分析対象遺物の出土地である萩においても、幕末のごく短期間ガラスの生産があったことが記録に残る。今回試みたような分析結果と文献に残る記録との照らし合わせを行うことは、江戸時代ガラスの原料、各地のガラス窯の製作法の系統などの解明という観点から非常に有効であると思われる。本報では亜鉛について述べたが、亜鉛ひとつに着目するだけでも有効な情報が得られよう。近世のガラスの元素分析例は、山崎らの分析例(小田他1983、山崎1984、井上他1989)や、富沢らによる分析例(西田他1989、西田他1990、富沢他1990)などがあるものの、そう多くはない。今後の分析例の増加が待たれる。また、鉛同位対比法の近世の鉛ガラスへの適用例も同様である。

最後に、今回はエネルギー分散型蛍光X線分析法による非破壊分析であることから、残念ながら検討対象とは成り得なかったが、 B_2O_3 の存在についても考慮に入れておく必要がある。 B_2O_3 と SiO_2 を含むガラスは珪酸塩ガラスと呼ばれるが、少なくとも江戸時代後期には硼砂 $Na_2B_4O_7$ を使用されている例が存在する可能性が高く(棚橋1975)、今後の課題である。

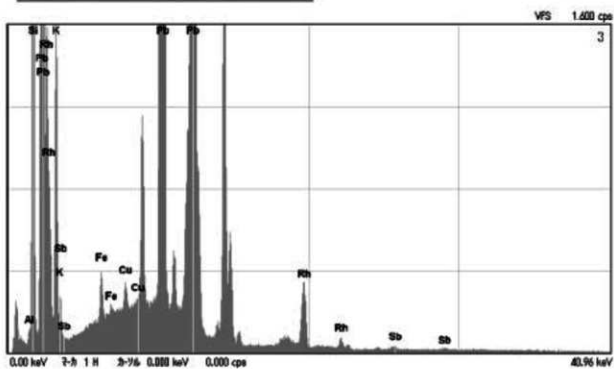
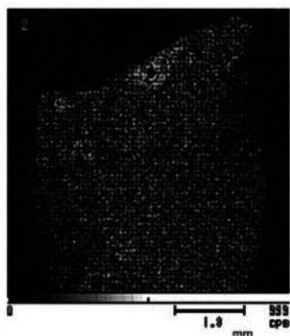
<引用・参考文献>

十橋正二(1972)ガラスの化学。講談社。

後藤佐吉・薬賀七三男・今井典子・内田俊秀・村上隆・永井巖・今井貞美(1998)佐友御吹所跡御務録関連遺物分析報告。佐友御吹所跡発掘調査報告。第Ⅺ号。393-523。(財)大阪市文化財協会。

原祐一・大成可乃・堀内秀樹・寺島孝一・伊藤博之・小泉好延(2001)東京大学医科学研究所(旧大村善下屋敷)から出土した鉛塊について。日本文化財科学会第18回大会研究発表要覧集。134-135。

- 井上咲子・小田幸子・佐藤潤四郎・張澤達夫・榎橋淳二・上野良雄・山崎 崇 (1989) 藤原切子の復元のための技術的研究 (一). GLASS, No. 26, 1-14, ガラス工芸研究会.
- 肥塚隆保 (1997) 日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究. 東京芸術大学博士学位論文.
- 西田泰民・小泉好延・富沢威・小林敏一・山下海 (1989) 理学部7号館地点出土のガラスの化学分析. 東京大学本郷構内の遺跡調査室発掘調査報告書, 1, 435-460, 東京大学理学部遺跡調査室.
- 西田泰民・小泉好延・富沢威 (1990) ガラス製品の研究. 東京大学本郷構内の遺跡山上会館・御殿下記念館地点. 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書, 4, 第3分冊 考察編, 229-237, 東京大学埋蔵文化財調査室.
- 小田幸子・榎橋淳二・山崎一雄 (1983) 武庫市役所所蔵のガラス壺の材質について. GLASS, No.15, 2-6, ガラス工芸研究会.
- 岡田謙編 (1954) ガラスの世界. アサヒ写真ブック, 4.
- 岡田謙編 (1969) ガラス, 日本の美術. No. 37, 8-9, 至文堂.
- 榎橋淳二 (1974) 鉛丹ガラスと金属鉛ガラス (一). 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第16号, (紙書) 1-75, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 榎橋淳二 (1975) 鉛丹ガラスと金属鉛ガラス (二). 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第17号, (紙書) 1-29, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 榎橋淳二 (1979) 鉛丹ガラスと金属鉛ガラス (四). 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第21号, (紙書) 1-92, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 榎橋淳二 (1981) ガラス岡屋加賀屋兵衛. 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第23号, (紙書) 47-52, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 榎橋淳二 (1984) 江戸時代のガラス壺の比重 (一). 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第26号, (紙書) 72-73, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 榎橋淳二 (1988) 江戸時代後期より明治時代前期にいたるボンテ筆の利用. 研究紀要 (人文科学・自然科学論), 第30号, (紙書) 44-46, 松莖女子学院大学 松莖女子学院短期大学学術研究会.
- 富沢威・富永健・小泉好延 (1990) 近世ガラス製品の化学組成. 東叡山寛永寺護国院 I. 都立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書, 375-390, 都立学校遺跡調査会.
- 出崎一雄 (1984) 長崎奈鈴ガラスの材質—昭和三十年の所見—. GLASS, No. 17, 18-19, ガラス工芸研究会
- 山本常雄・榎橋淳二 (1977) 東洋のガラス—中国・朝鮮・日本. 152, 三彩社.
- 山本常雄・榎橋淳二 (1992) 日本. 山本常雄編 世界ガラス美術全集, 5, 153-166, 求龍堂.

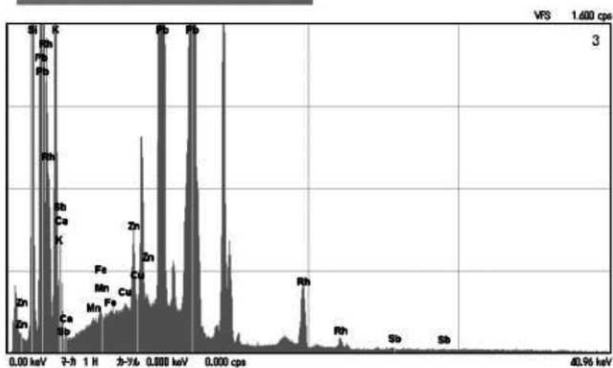
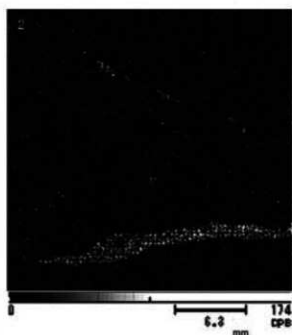
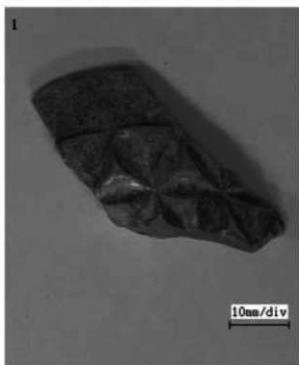


4

元素	+Zr	質量濃度[%]	Zの[%]	強度(cps/mA)	化学式	質量濃度[%]
13 Al	K	0.17	0.14	1.04	Al ₂ O ₃	0.33
14 Si	K	21.78	0.18	332.84	SiO ₂	46.59
19 K	K	5.16	0.11	125.62	K ₂ O	6.22
26 Fe	K	0.16	0.02	18.66	Fe ₂ O ₃	0.23
29 Cu	K	0.06	0.01	10.24	Cu ₂ O	0.07
51 Sb	K	0.36	0.11	2.60	Sb ₂ O ₃	0.43
82 Pb	L	42.83	0.33	1964.75	PbO	46.13

1. マイクロスコープ像
2. 鉛のマッピング像
3. ●位置のスペクトル図
4. ●位置の半定量分析値

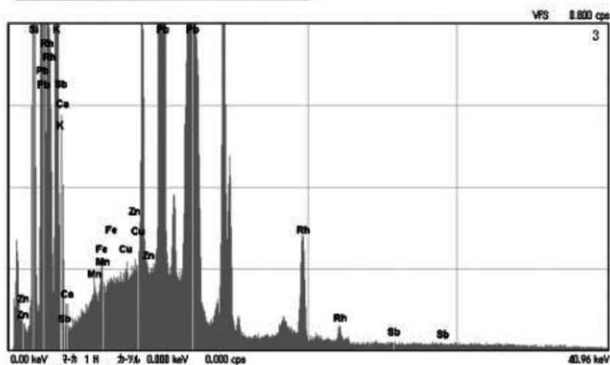
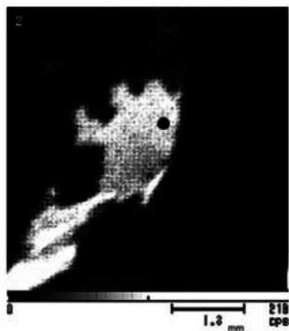
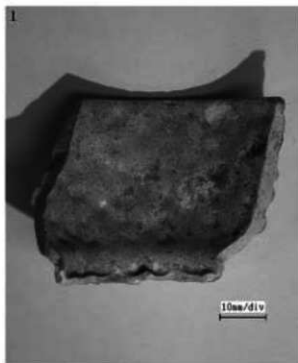
第211図 ①遺物 No. 1141のガラス



4

元素	Z	質量濃度[%]	σ _r [b]	強度[cpm/mA]	化学式	質量濃度[%]
14 Si	K	21.22	0.19	267.81	SiO ₂	45.4
19 K	K	8.45	0.15	172.33	K ₂ O	10.18
20 Ca	K	0.88	0.06	21.69	CaO	1.24
25 Mn	K	0.03	0.02	1.99	MnO	0.04
26 Fe	K	0.04	0.02	3.87	Fe ₂ O ₃	0.06
29 Cu	K	0.02	0.02	2.79	Cu ₂ O	0.02
30 Zn	K	0.19	0.02	28.41	ZnO	0.22
51 Sb	K	0.13	0.10	0.77	Sb ₂ O ₃	0.15
82 Pb	L	38.62	0.31	1500.42	PbO	42.67

1. マイクロスコブ像
2. カリウムのマッピング像
3. ●位置のスペクトル図
4. ●位置の半定量分析値

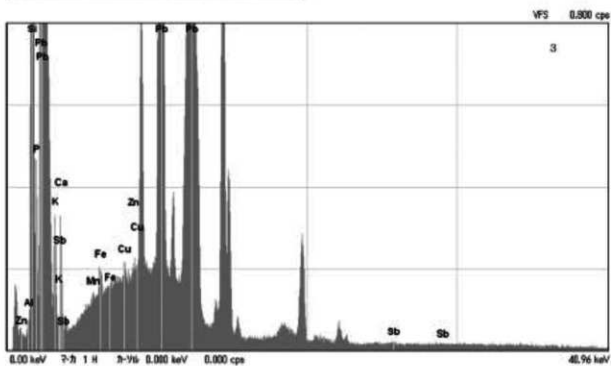
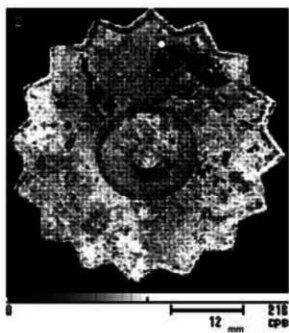
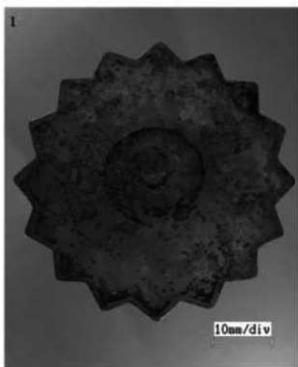


4

元素	%C	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/nA]	化学式	質量濃度[%]
14 Si	K	22.75	0.20	28710	SiO ₂	48.66
19 K	K	8.28	0.16	192.47	K ₂ O	11.18
20 Ca	K	1.08	0.08	26.53	CaO	1.51
25 Mn	K	0.04	0.02	2.77	MnO ₂	0.06
26 Fe	K	0.06	0.01	4.03	Fe ₂ O ₃	0.08
29 Cu	K	0.02	0.01	2.81	Cu ₂ O	0.02
51 Sb	K	0.12	0.10	0.77	Sb ₂ O ₃	0.14
82 Pb	L	35.59	0.31	1400.45	PbO	38.34

1. マイクロスコブ像
2. カリウムのマッピング像
3. ●位置のスペクトル図
4. ●位置の半定量分析値

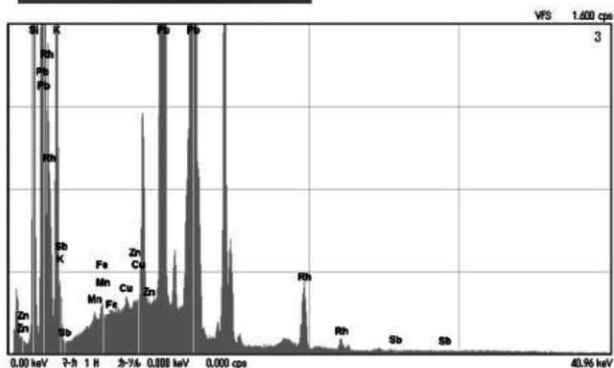
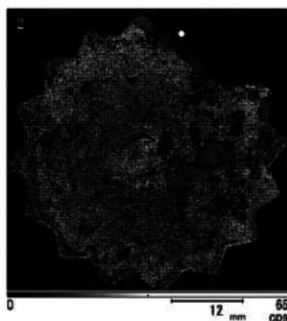
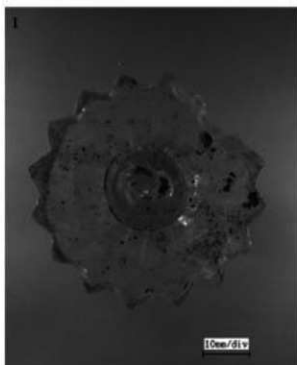
第213図 ③遺物 No. 1142のガラス



4

元素	Zr	質量濃度[%]	2σ[%]	強度(cps/nA)	化学式	質量濃度[%]
14 Si	K	23.11	0.22	262.31	SiO ₂	49.43
15 P	K	1.11	0.09	19.79	P ₂ O ₅	2.54
19 K	K	1.02	0.07	18.49	K ₂ O	1.24
20 Ca	K	0.85	0.06	20.09	CaO	1.20
28 Fe	K	0.06	0.02	5.73	Fe ₂ O ₃	0.08
29 Cu	K	0.03	0.01	3.77	Cu ₂ O	0.04
51 Sb	L	0.19	0.12	0.69	Sb ₂ O ₃	0.15
82 Pb	L	42.07	0.40	1471.00	PbO	45.32

1. マイクロスコープ像
2. リンのマッピング像
3. ○位置のスペクトル図
4. ○位置の半定量分析値

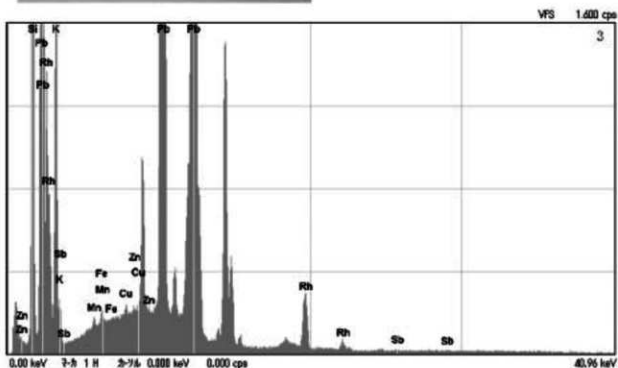
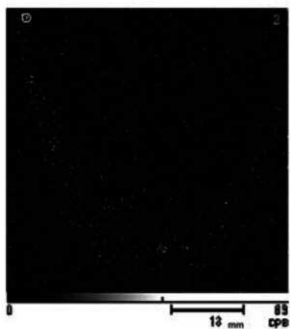


4

元素	9(°)	質量濃度(%)	±σ(%)	強度(cps/mA)	化学式	質量濃度(%)
14 Si	K	20.29	0.20	288.01	SiO ₂	43.41
19 K	K	7.84	0.14	124.70	P ₂ O ₅	9.45
25 Mn	K	0.06	0.02	3.92	MnO ₂	0.07
26 Fe	K	0.06	0.01	6.06	Fe ₂ O ₃	0.08
29 Cu	K	0.03	0.01	4.46	CuO	0.04
51 Sb	K	0.12	0.10	0.80	Sb ₂ O ₃	0.15
82 Pb	L	43.45	0.33	1794.72	PbO	46.81

1. マイクロスコープ像
2. 珪素のマッピング像
3. ○位置のスペクトル図
4. ○位置の半定量分析値

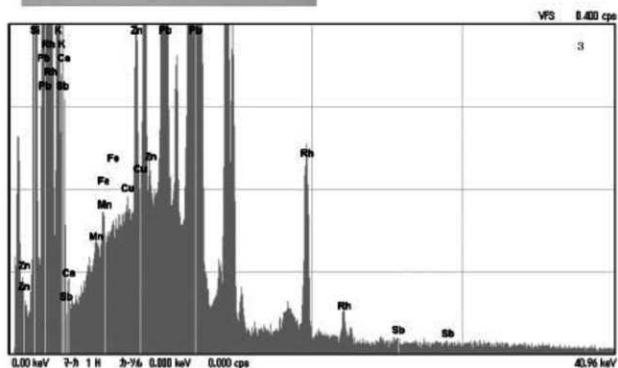
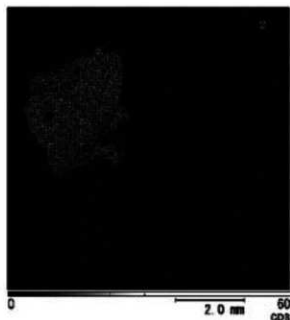
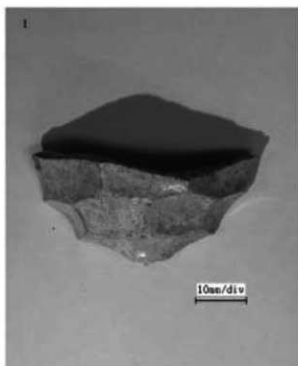
第215図 ⑤遺物 No. 1148のガラス



4

元素	γ	質量濃度 (%)	σ (%)	強度 (cps/mA)	化学式	質量濃度 (%)
14 Si	K	20.30	0.21	239.06	SiO ₂	43.42
19 K	K	7.06	0.15	131.04	K ₂ O	8.51
25 Mn	K	0.05	0.02	3.30	Mn ₂ O ₃	0.08
26 Fe	K	0.05	0.01	4.68	Fe ₂ O ₃	0.08
29 Cu	K	0.03	0.01	3.62	Cu ₂ O	0.03
51 Sb	K	0.18	0.12	0.98	Sb ₂ O ₃	0.22
82 Pb	L	44.25	0.37	1523.18	PbO	47.67

1. マイクロスコブ像
2. カリウムのマッピング像
3. ○位置のスペクトル図
4. ○位置の半定量分析値



4

元素	Z/A	質量濃度[%]	Zσ[%]	強度[cps/mA]	化学式	質量濃度[%]
14 Si	K	22.29	0.21	320.90	SiO ₂	47.69
19 K	K	8.60	0.16	202.02	K ₂ O	10.25
20 Ca	K	0.95	0.06	26.93	CaO	1.34
26 Fe	K	0.04	0.01	4.23	Fe ₂ O ₃	0.09
30 Zn	K	0.18	0.01	31.83	ZnO	0.32
51 Sb	K	0.19	0.10	1.36	Sb ₂ O ₃	0.22
82 Pb	L	37.24	0.33	1648.51	PbO	40.12

1. マイクロスコープ像
2. カリウムのマッピング像
3. ●位置のスペクトル図
4. ●位置の半定量分析値

萩城跡(外堀地区)出土赤色物質の調査

徳吉田生物研究所

1. はじめに

萩城跡外堀地区から出土した磁器2点には、内面に赤色物質が付着していた。この赤色物質について磁器の器形がいわゆる「紅皿」、「小型段重」であることから、化粧に用いる「紅」と仮定し、断面観察ならびに機械分析を行い、現代の紅および紅花との比較を含めて成分の調査を行った。

また、うち1点には赤色物質の上に黒色物質が付着していた。この物質についても、単に炭化物が付着したものなのか、あるいはいわゆる「笹紅」の代用として用いるために意図的に容器に取められたものなのか明らかにするため、成分の面から検討を行った。

2. 調査試料

調査した試料は、表58に示す近世の磁器2点である。

表58 調査試料

No.	品名	遺物No.	概要
1	白磁皿	335	内面に赤色塗?のような物質が付着している。赤色物のパレット(「紅皿」として使用された。
2	磁器小皿	840	内面に赤色物質が少量付着して、その上に黒色の煤のような物質が被っている。No. 1と同じく「紅皿」として使用された。

3. 調査方法

①断面観察

表58の試料に付着した物質から、数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

②機器分析

表58の両赤色物質について、機器分析を行った。No. 1の蛍光X線分析結果と、No. 2の赤外分光分析のデータを付してその結果を記す。赤外分光分析については、比較試料として、現代の紅と紅花も分析してみた。

蛍光X線分析は、理学電機工業製の全自動蛍光X線分析装置3270E(検出元素範囲B~U)を用いて、赤外分光分析は、パーキンエルマーFTIRフーリエ変換赤外分光分析装置の型式System2000にSpecac社のGolden Gate Single Reflection ATR System P/N 10500装着を用いて、それぞれ行った。

4. 結果

①断面観察結果

薄片の観察結果を記す。

- No. 1：赤色物質を含む土壌のような様子を示す。赤色物質は明褐色から赤色で、透明度の高い粒子状のものも観察された。
- No. 2：赤色物質の上に黒色物質が重なる様子が観察された。赤色部分は、膠着剤に赤色物質が混和されたような、塗料の様相は示していない。赤色物質が凝集したような様子である。その上の黒色部分には木材組織などの大きな組織は観察されず、比較的細かな黒色粒子が観察された。これは油塵粒子の可能性が高い。

②機器分析結果

- No. 1：付着赤色物質について、蛍光X線分析を行った。参考試料として、分析結果のデータを表に示す。PbとFeの質量率が非常に高い。Pbの割合が非常に高く、赤色物質は鉛丹の可能性もある。
- No. 2：付着赤色物質について、赤外線分光分析を行った。得られたデータは、明らかに有機物のスペクトルであった。そして表面が赤色であったことから、現代の紅(第218回写真3、第222回)、現生の紅花(第218回写真4、第223回)の成分と比較してみたところ、ほぼ類似したスペクトルが得られた。

表59 No. 1の蛍光X線分析結果

元素	含有率(重量%)
Al	2.0
Si	5.0
P	4.4
Cl	1.7
K	1.1
Ca	12.0
Fe	23.0
As	2.1
Pb	47.0
Ra	1.6
Cu	0.35
Zn	0.60

5. 摘 要

山口県萩城跡から出土した磁器に付着した赤色物質について、断面観察ならびに機器分析を行った。白磁皿に残存した赤色物質は、鉛丹を含む可能性が高い。

磁器皿に残存した赤色物質は、紅花由来であろうと判断される。その上に見られた黒色物質は単なる汚れではなく油塵粒子が観察され、意図的に重ねられた可能性が高い。



写真1 試料 No. 1



写真2 試料 No. 2



写真3 比較試料 No. 3



写真4 比較試料 No. 4

第218図 試料と比較試料

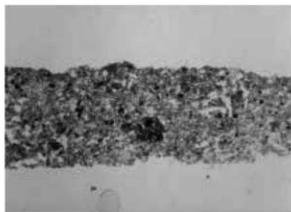


写真1 No. 1 赤色物質の断面写真 (×80)

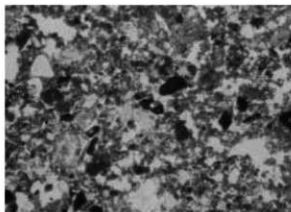


写真2 No. 1 赤色物質の断面写真 (×400)

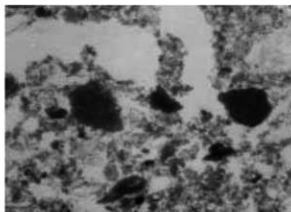


写真3 No. 1 赤色物質拡大写真 (×800)

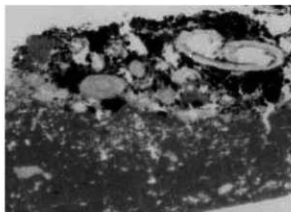


写真4 No. 2 赤色・黒色物質の断面写真 (×200)

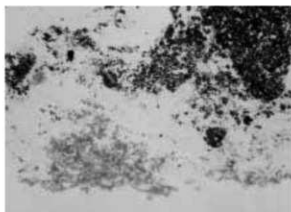


写真5 No. 2 赤色・黒色物質の断面写真 (×400)

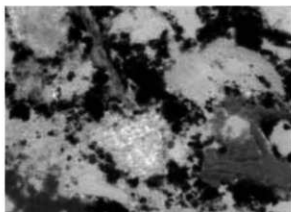
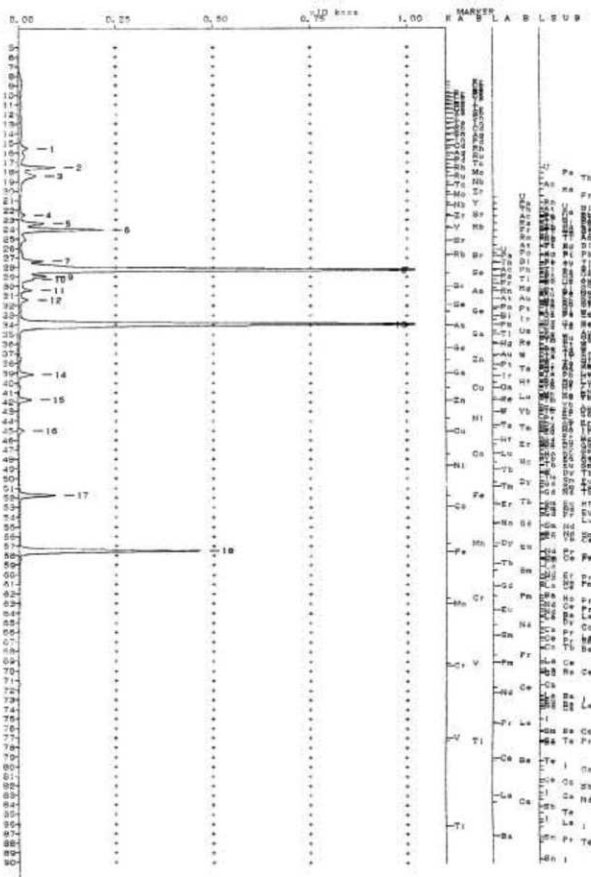
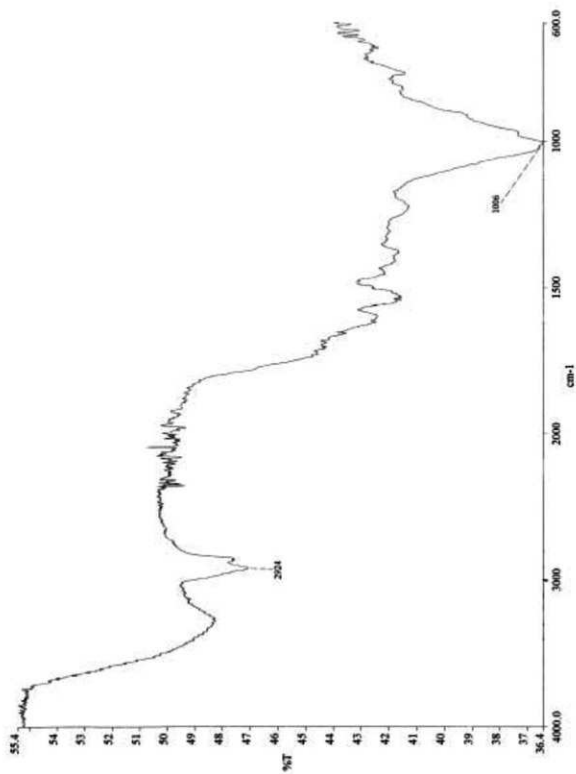


写真6 No. 2 黒色物質拡大写真 (×800)

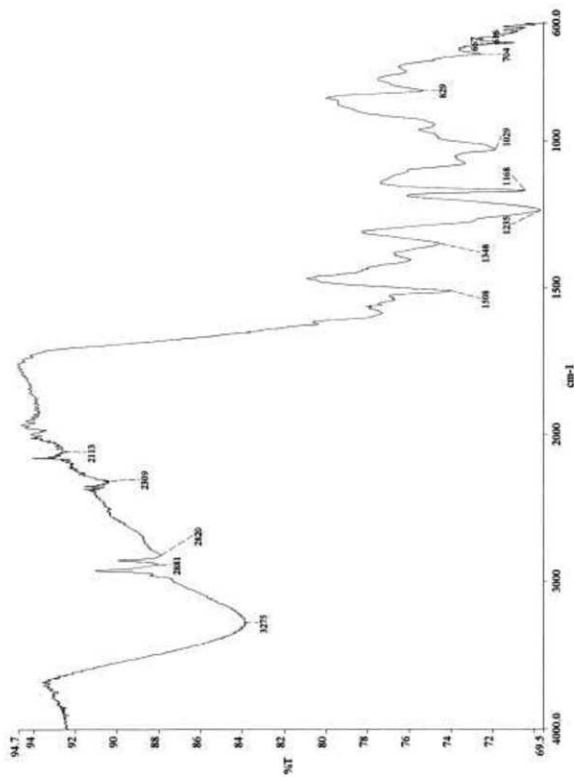
第219図 試料の断面および拡大写真



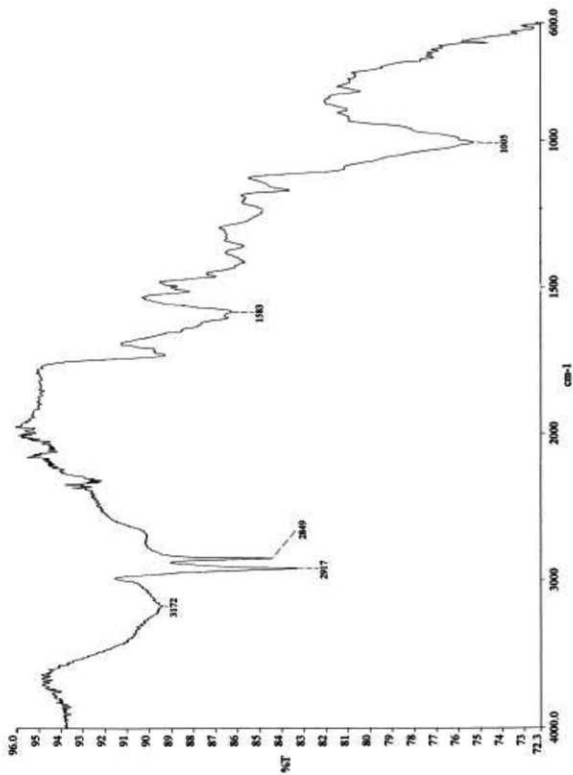
第220図 試料 No. 1 の元素サイクル



第221図 試料 No. 2 の吸収スペクトル



第222図 精製紅の吸収スペクトル



第223図 紅花乾燥物の吸収スペクトル

赤間硯の原料石材分析

山口大学理学部地球科学教室 今岡照喜

1. はじめに

赤色を呈する堆積岩は世界各地のさまざまな地質時代の地層中に産し、その特徴的な色調から注目を引きやすい。赤色岩の成因については、赤色風化土からの再堆積とする考え (Jones, 1965など) があり、そのために古気候など古環境を推定する手段として使われてきた。国内では、九州大学の三木孝による一連の研究 (Miki et al., 1990; Miki, 1992など) が知られている。

このような赤色岩は硯にも使用されてきた。山口県産の赤間硯は有名で、紫雲石や紫金石とよばれる関門層群の赤色岩を加工して製作されたものである。その生産開始時期については諸説があり、確定していないが、12世紀に遡る可能性もあり、多くの遺跡から出土している (岩崎, 2005)。

各地の消費遺跡から出土する硯や、原材料を提供した産地の岩石の化学組成などの特性が科学的に分析され、対応が検討されるようになると、中国硯と日本硯との区別、産地の同定、その成立時期、さらには生産と流通の問題などに貢献できるであろう (水野, 1985)。

この度、山口県産出土赤間硯に関する検討資料を得るため、石材産地から採取された硯石原材料25試料について化学分析を行ったので報告する。

2. 分析試料

山口県宇部市岩滝、山陽小野田市森広、下関市吉見、竜工山、福岡県北九州市大橋、宮崎県北川町八戸から採取された。試料一覧を表6に、採取位置を第224、225図に示す。試料採取はすべて岩崎仁志氏によって行われた。採取された試料の一部については、岩石薄片を作成し、顕微鏡観察を行った。このうち、粒度が細く、硯に使用されないと考えられる試料については分析を行わなかった。

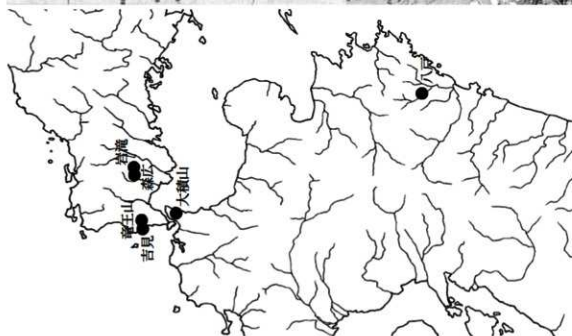
採取された試料のうち、山口県内および北九州市大橋の試料は関門層群中のもので、宮崎県八戸のものは大野川層群中のものである。関門層群の試料は、赤紫色のものや赤色部と緑色部が美しい縞模様をなすものが一般的である。緑色味を帯びたものは、紫金石と呼ばれる。宮崎県八戸の試料は、彩度の高い鮮やかな紅色で、関門層群の赤色岩とは肉眼で容易に識別できる。

3. 分析方法

岩石試料を岩石カッターで数ミリの厚さにスライスし、両面をグラインダーで研削した。次にタンガロイ製の鉢で1 mm程度に粗砕し、メノウ乳鉢のボールミルで数ミクロン大にまで粉砕した。粉末試料に融剤 (Merk社製の四ほう酸リチウム A12) を混ぜてビードサンプラーで溶融し、ガラスベレットを作成した。分析には山口大学総合科学実験センター機器分析実験施設の全自動蛍光 X 線分析装置 (理学電気工業社製 RIX3000) を使用した。分析方法の詳細や精度は梅本ほか (2000) に記述されている。H₂O (±) は重量法によって定量した。

表60 分析試料一覧

NO.	サンプル名	産地	産出した地層名	備考
1	IW-01a	山口県宇部市岩流	関門層群	上品
2	IW-01b	山口県宇部市岩流	関門層群	上品
3	IW-02a	山口県宇部市岩流	関門層群	二級結
4	IW-02b	山口県宇部市岩流	関門層群	二級結
5	IW-03	山口県宇部市岩流	関門層群	青石
6	IW-04a	山口県山陽小野田市森広	関門層群	紫金石
7	IW-04b	山口県山陽小野田市森広	関門層群	紫金石
8	IW-07a	山口県下関市吉見	関門層群	
9	IW-07b	山口県下関市吉見	関門層群	
10	IW-07c	山口県下関市吉見	関門層群	紫金石か
11	IW-07d	山口県下関市吉見	関門層群	青石
12	Ra	山口県下関市竜土山	関門層群	
13	Rb	山口県下関市竜土山	関門層群	
14	Rd	山口県下関市竜土山	関門層群	
15	Rc	山口県下関市竜土山	関門層群	
16	Re	山口県下関市竜土山	関門層群	
17	IW-06c	福岡県北九州市大橋	関門層群	青石
18	Of	福岡県北九州市大橋	関門層群	
19	Oc	福岡県北九州市大橋	関門層群	
20	Ob	福岡県北九州市大橋	関門層群	
21	IW-06a	福岡県北九州市大橋	関門層群	
22	Oe	福岡県北九州市大橋	関門層群	
23	IW-06b	福岡県北九州市大橋	関門層群	
24	IW-10a	宮崎県北川町八戸	大野川層群	
25	IW-10b	宮崎県北川町八戸	大野川層群	



第224図 石材採集地点



第225図 石材採集地点 (山口・福岡県部分)

4. 分析結果

表61に分析結果を示す。分析結果は、各産地の岩石の特徴を明らかにするために生データの他に各種元素比も示した。さらにH₂O(±)を除き、無水で100%に換算した値も示した。

主成分元素について見ると、山口県岩滝の試料は、他の試料に比較し、TiO₂(1.1~1.2%)、Al₂O₃(19.2~19.8%)に富み、CaO/Al₂O₃比が低い(0.01~0.06)ことが特徴である。また、吉見の試料は比較的MgO(3.7~4.9%)に富み、Na₂O+K₂O(1.6~4.0)に乏しく、FeO/MgO比(0.4~1.4)が小さい。一部に著しくCaOに富む(16.25%)ものがあるが、鏡下観察も併せて考えると、多量の方解石が生成していることを反映している。また、八戸の試料もCaO/Al₂O₃比が低い(0.03)ことが特徴である。この点は岩滝の試料と類似するが、岩滝の試料は、SiO₂が55.5~59.4%なのに対して、八戸の試料は、それが65.7, 73.5%と高いので区別できる。

微量元素について見ると、岩滝の試料は、Nb(27~32ppm)、K/Rb比(202~215)、Ba/Ca比(862~3300)が高いのが特徴である。森広の試料はBa(418, 421ppm)に富む。吉見の試料はV(49~120ppm)、Y(16~25ppm)に乏しく、Zr/Y比(6~11)が高い。宮崎県八戸の試料は、Cr(7.19ppm)、Zn(17.22ppm)、Sr(95, 117ppm)に乏しく、Rb/Sr比(1.5)、Ba/Ca比(1662, 1973)、Sr/Ca比(371, 417)が高い。

5. おわりに

この度は硯の原材料となると考えられる岩石試料について化学組成を検討した。その結果、上記のように産地によっていくつかの相違があることが分かった。今回の検討試料は山口県から九州地方にかけての試料に限られているが、福井県には風尾石として知られる輝緑凝灰岩の産出が知られている。今後、それについても検討を加えるとともに、各地の消費遺跡から出土する硯の化学組成についても分析を進め、硯石原材料との対応関係を検討していきたいと考えている。

引用文献

- 岩崎仁志, 2005, 五世赤間硯の産地について, 山口考古, no. 25, 41-56.
- Jones, G. P., 1965, Red beds in northeastern Nigeria. *Sedimentology*, 5, 235-247.
- Miki, T., 1992, Sedimentologic and paleoclimatic classification of Cretaceous red beds in East Asia: a general view. *Jour. Southeast Earth Sciences*, 7, 179-184.
- Miki, T., Matsueda, H. and Yim, W. W.-S., 1990, Petrography and geochemistry of Cretaceous (?) red beds in Hong Kong. *Jour. Southeast Earth Sciences*, 4, 99-106.
- 水野和雄, 1985, 日本硯考-出土品を中心として-, 考古学雑誌, 70, 449-479.
- Pei-Ji, C., 1987, Cretaceous paleogeography in China. *Paleogeography, Paleoclimatology, Paleontology*, 59, 49-56.
- 梅本研五・今岡照喜・山崎 徹・大和田正明, 2000, 混合溶剤(A12)を使用した岩石の蛍光X線分析, 山口大学機器分析センター報告, 第8号, 16-23.